

成果報告書 vol.16

専門学校の学修成果と IR

— 高等職業教育タスクフォースによる卒業生調査再分析 —

平成 29 年度 文部科学省委託事業

専修学校による地域産業中核的人材養成事業



平成 30 年 2 月

国立大学法人 九州大学

(事業責任者 吉本 圭一)

はじめに

本書は、筆者ら九州大学「高等教育と学位・資格研究会」が開発した短期大学・専門学校の卒業生を対象とした17分野55機関の Web 卒業生調査システムを用いて、相互 IR 分析に賛同した専門学校17機関による「専門学校 IR 研究会」での共同 IR 研究をまとめたものである。

IRをタイトルに掲げているように、卒業直後から卒後10年目までの初期キャリアの実態把握だけでなく、専門学校のステークホルダーでありサポーターでもある卒業生からみた在校時の教育・学習経験に対する点検・評価を尋ね、そこで得られたエビデンスを各校や専門分野の自己理解と教育の充実・向上に結びつける試みを行っている。そのため、九州大学第三段階教育研究センターが主体となって、調査の企画、調査票設計、ウェブ調査システムの開発を担当し、調査実施後は、それらの結果をもとに参加機関の担当者が協力し、共同 IR・協働 IR として検討を行ってきた。この参加機関担当者相互の共同 IR 研究会は、実査の終了後の1年間集中的に開催されている。各校の教育内容を分析データの結果とともに総合的に検討する研究会は、担当者相互の FD としても有意義な取組となったことが参加者から報告されている。

「専門学校 IR 研究会」の開催・運営においては、世話人として古賀稔邦氏（日本電子専門学校・校長）に尽力してもらった。九州大学第三段階教育研究センターの志田秀史准教授、事務補佐員の小森真理氏には事務局として今回の報告書の編集を担当いただいた。

末筆ではあるが、本調査にご協力いただいた卒業生のみなさん、参加機関担当者の皆様にこの場を借りて御礼申し上げたい。本報告書が契機となり、調査研究から教育改善へと共同 IR が展開し、IR 研究がさらに次のステージへと発展していくことを願っている。

2018年2月

九州大学 第三段階教育研究センター

研究センター長 吉 本 圭 一

平成29年度「専修学校による地域産業中核的人材養成」事業
平成29年度 報告書 Vol.16
「専門学校の学修成果と IR ―高等職業教育タスクフォースによる卒業生調査再分析―」

目 次

はじめに

第1章 専門学校 IR の課題と可能性 吉本 圭一 … 1

第2章 滋慶学園における医療・健康・福祉系卒業生のキャリア形成と学校教育評価に関する実態調査・分析
.....志田 秀史, 老田 義人 … 9

第3章 専門学校卒業生調査に基づくインスティテューショナル・リサーチ (IR)
―敬心学園および医療・健康・福祉系他法人専門学校の集計分析結果より―
..... 菊地 克彦 … 19

第4章 卒業生調査による専門学校教育の検証
―専門学校教育の質の向上とは何かを考える― 前鼻 英蔵 … 31

第5章 専門学校の卒業生調査による IR 活動
―九州大学「高等教育と学位・資格研究会」短期大学・専門学校卒業生調査 (2012年)
工業・デザイン系分野 学校の集計分析結果より―..... 古賀 稔邦 … 49

第6章 工業系・デザイン系分野専門学校卒業生調査に関する考察
..... 金森 吉弘, 勝田 雅人, 小林 福寿, 古賀 稔邦, 杉浦 敦司, 田口 一子, 海野 晴博 … 81

資 料

「卒業生のキャリアと学校評価に関する調査プロジェクト」調査項目 119

第1章 | 専門学校 IR の課題と可能性

吉 本 圭 一 (九州大学)

1. 「卒業生のキャリアと学校評価に関する調査プロジェクト」と「専門学校 IR 研究会」

本成果報告書は、2012年に九州大学「高等教育と学位・資格研究会」(研究代表・吉本圭一、以下 EQ 研と略称)が開発したウェブ調査システム(調査名「卒業生のキャリアと学校評価に関する調査プロジェクト」、以下「EQ 研卒業生調査」と略)を利用して、2012年から2013年に卒業生調査を実施した専門学校の関係者が当該卒業生調査の再分析をしたものである。なお、この EQ 研卒業生調査は短期大学も対象としており、17専門分野55機関全体の報告書は吉本編(2018)として刊行されている。

この調査を完了した2013年度には、九州大学「高等教育と学位・資格研究会」は、調査結果をもとにした共同での IR (Institutional Research)¹⁾を発案・提唱した。そして2014年度から、九州大学第三段階教育研究センターが指導し、調査に参加した専門学校34校の中から、相互 IR 分析に賛同した専門学校17校による「専門学校 IR 研究会」を組織することとなった。この研究会では、比較的規模が大きい専門分野として、医療・健康・福祉系分野の12校と、工業・デザイン系分野の5校とが、それぞれ同一分野内での比較分析を行うものであり、研究会は、2015年6月から2016年4月まで6回の会合を開催し、データ分析結果を持ち寄って検討を行った。

研究会は、卒業生調査実施校および EQ 研の関係者から構成され、EQ 研卒業生調査には参加していないが、今後の卒業生調査の企画準備のためのメンバー参加も認め、最終的に以下のメンバーで運営された。

吉本圭一(九州大学第三段階教育研究センター・研究センター長)－指導・助言－

稲永由紀(筑波大学大学研究センター・講師)－指導・助言－

古賀稔邦(日本電子専門学校・校長)－世話人－

志田秀史(九州大学第三段階教育研究センター・准教授)

前鼻英蔵(西野学園・理事長)

菊地克彦(敬心学園・理事長補佐)

金森吉弘(トライデントデザイン専門学校・校長)

勝田雅人(トライデントコンピュータ専門学校・校長：2015年9月から)

杉本昭二(トライデントコンピュータ専門学校・前校長：2015年9月まで)

小林福寿(中央工学校・教務部課長)

三上孝明(専門学校東京テクニカルカレッジ・校長：2015年3月まで)

海野晴博(日本電子専門学校・産学連携教育企画室)

杉浦敦司(日本電子専門学校・教育部長)

平田真一(中国デザイン専門学校・理事長)

田口一子(中国デザイン専門学校・校長)

老田義人（滋慶教育科学研究所・主任研究員）

勝原修吾（福岡ベルエポック美容専門学校・教務部長）

「専門学校 IR 研究会」では、各機関のデータを相互に交換、共有しながら共同して IR のための分析を行う「共同 IR」のモデルが提示されている。

「共同 IR」とは、教育にかかるエビデンスを元にした各機関の IR 活動を、ベンチマーキングの手法を用いて自校の教育活動やその成果を適切に把握する方法論である。この研究会においては、参加者が各自の所属する学校法人・専門学校の教育とその学修成果、そして進路とコンピテンシー形成の特徴、総合的な評価についてデータから分析するために、同分野の他の学校法人・専門学校をベンチマーキング対象として設定して比較分析を行っている。こうした比較分析の結果を相互に持ち寄って検討する過程で、自校の強み弱みが明らかになり、さらに得られた知見を自校内の教育・運営関係者と共有し、自校の教育・運営の改善・改革へ結びつけていくプロセスが展開された。このような研究会の活動の各機関への波及と、各機関から研究会への更なるフィードバックという相互循環的なプロセスが、この「共同 IR」の鍵となっている。

なお、本成果報告書で用いる「EQ 研卒業生調査」の調査項目は、以下の通りである。

「卒業生のキャリアと学校評価に関する調査プロジェクト」（「EQ 研卒業生調査」）調査項目

- A：出身校の機関属性・専攻と個人属性
- B：在学時の学習、教育設備・環境、学生生活の取組
- C：卒業後の進路、初職と専門分野との関連、職業経歴
- D：現在の仕事と専門分野との関連、職業各側面の満足度
- E：資格取得と卒業後の継続学習の経験
- F：仕事や生活に必要な能力とその習得、能力形成の TPO、能力の活用
- G：高校生活などこれまでの生活や家族
- H：母校の教育の多元的な効用感、総合的な満足度

2. 専門学校の質保証における学修成果をもとにした IR の重要性

1) 日本の第三段階教育における質保証への要請の展開と専門学校制度

第三段階教育の質保証政策の登場は、1992（平成4）年の大学設置基準等の大綱化まで遡る。大綱化とともに、教育プログラム編成にかかる自由度が飛躍的に増大し、その質保証として自己点検・評価が課されることになった。この質保証は、周知の通り「自己点検と自己評価」とどまることはなく、さらに実質的な手順の強化が進められ、その後に外部評価の試み、そして第三者評価の義務化という展開をたどっている。いま認証評価の第3サイクルに入り、卒業生調査等を通じた学修成果活用とコンピテンシーの把握による質保証が重要な課題となっている。

これに対して、専門学校は、制度としては一般課程・高等課程・専門課程を設置する専修学校の一形態であるため、専修学校の質保証のルール、すなわち学校教育法において、小学校をはじめ他の初

等教育、中等教育の諸学校と同様の質保証の要請がなされている。2004（平成16）年の私立学校法の一部改正により、学校法人については財務諸表等の利害関係者への閲覧に関する義務が課され、2007（平成19）年には学校教育法の小学校の自己評価に関する規定の第42条、第43条の一部改正、および第133条により専修学校にこの規定が適用される原則、また関係する学校教育法施行規則の一部改正により、自己評価の実施・結果の公表に関する義務、及び②学校関係者評価の実施・結果の公表に関する努力義務が課されているにとどまっている。その後、2011（平成23）年の中央教育審議会「学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方（答申）」を経て、2013（平成25）年に「専修学校における学校評価ガイドライン」（以下「ガイドライン」と略称）が策定され、ここで自己評価、学校関係者評価、第三者評価という学校評価の大枠が示されている。

「ガイドライン」の制定は、小学校の「学校評価ガイドライン」の延長上になされた国の制度としての整合性の問題も指摘できるところである。すなわち、小学校等においては「第三者評価」は、「学校教育法に規定されている学校評価の一環として、学校とその設置者が実施者となり、学校運営に関する外部の専門家を中心とした評価者により、教育活動その他の学校運営の状況について、専門的視点から行う評価」とされており、大学等で義務づけられている認証評価における「第三者評価」が関係者を排除していることと整合性を欠いている。専修学校が、中等教育相当の高等課程を設置する高等専修学校と、専門課程を設置する専門学校などを包含する制度であるが故の制度的位置づけの難しさを象徴する問題である。そこで「ガイドライン」では、小学校等で用いられている「第三者評価」を「学校関係者評価」の用語で置きかえ、新たに規定し、専修学校においては高等教育段階での「第三者評価」の考え方を導入しながら、「学校関係者評価」とは区別して規定することとしたのである。

この専修学校における質保証モデルの確立を経て、翌2014（平成26）年度には、後述の文部科学大臣認定による職業実践専門課程が制度化されている。

2）専門学校における「職業の」「職業による」「職業のための」教育の質保証

ところで、第三段階教育の質保証において、質の高い職業教育とはどのような要件を満たすものなのだろうか。吉本（2009）で論じているように、「職業の」「職業による」「職業のための」教育としての質を保有しているかどうかという観点が重要である。

すなわち、第一に「職業のための教育」として、職業教育の目的・目標の適切性が問われる。人材養成の目的に応じて、教育訓練と学位資格の目標を、国家学位資格枠組（National Qualifications Framework: NQF）²⁾のレベル説明指標設定のように、いかにして職業教育として共通に、また個々の分野ごとに適切に、教育の学修成果（知識・技能・態度・応用）を表現し、適用していくことができるかという点が重要である。こうした設定とともに、それがどのように達成されているのか、卒業時点で期待される学修成果ではあるが、それが適切に職業生活におけるコンピテンシーとして活用されているかどうか、これこそ卒業生調査によって把握するほかない課題なのである。

第二には、「職業による教育」として、職業教育の方法・手段の質が問われる。それは、一方では職業教育として共通なコンセプトであり、他方では分野ごとに適切に、（1）実際の職業世界と適切に関連した教育訓練プログラムを、（2）適切な教育訓練スタッフによって提供し、運用することができるのかという点である。

第三には、「職業の教育」としての職業教育のガバナンスの観点がある。ここでも、一方で職業教育

として共通の、また他方で分野ごとに適切に、(1) 教育訓練事業者の関心や政府政策などの供給側とともに、(2) 雇用主・経済界と職能団体・職業関係者などの需要側の関心・参画によって職業教育を方向づけ、運営していくのかという点が重要である。

3) 「職業実践専門課程」と職業教育の質保証

上述の観点からいえば2014（平成26）年度発足の文部科学大臣認定の「職業実践専門課程」では、職業教育の質保証が制度として担保されたことになる。職業実践専門課程では、特に「方法」と「ガバナンス」にかかる認定要件が提示されている。すなわち、教育の方法・教育課程として、「企業と密接かつ組織的な連携体制を確保して、授業科目の開設その他の教育課程の編成（改善・工夫を含む）を行っていること」、そして「企業等と密接かつ組織的な連携体制を確保して、実習、実技、実験又は演習（「実習・演習等」）を行っていること」が要件となっている。

また、これも教育の方法にかかる教員について、「教員に必要な専攻分野における実務に関する知識、技術及び技能並びに、指導力の修得・向上を目的として、企業等との連携の下、研修を組織的にやっていること」が求められ、そしてガバナンスと統制に関して、「学校の自己評価に加え、企業等が委員として参加する学校関係者評価を実施し、公表していること」、「教育経営等の外部への情報公開」が要件として指定されている。

このように、「方法」、「ガバナンス」が明確に規定された認定要件を満たす職業実践専門課程は、職業教育としての質が保証されている課程である。2017（平成29）年度現在では、学校数902校（32.0%）、2,773学科（修業年限2年以上の認定対象となる課程のうち39.5%）がこの質保証に関する文部科学大臣認定を受けている。

4) 残された課題としての「職業のための教育」——「学修成果」と「コンピテンシー」——

こうした取り組みにもかかわらず、この認定制度の発足後にまとめられた2014（平成26）年の教育再生実行会議第5次提言においては、「専修学校専門課程（専門学校）は、教育の質が制度上担保されていないこともあり、必ずしも適切な社会的評価を得られていない、などの課題が指摘されています」との「社会的評価」に言及している。その後の政策展開においてもこの判断をもとに政策議論が展開し、中央教育審議会（2016）「個人の能力と可能性を開花させ、全員参加による課題解決社会を実現するための教育の多様化と質保証の在り方について（答申）」につながり、2017（平成29）年の学校教育法の一部改正等、2019（平成31）年からの専門職大学、専門職短期大学の設置に至っている。

この「社会的評価」についての判断の是非を考えるのは難しいところであるが、職業実践専門課程においても残されている課題があろう。教育の目的・目標について適切な設定がなされているのかどうかという「職業のための教育」の次元である。この次元では、学修成果の検証として「卒業率」や「就職率」などがもっともシンプルな指標であるが、問題となるのはその内容であろう。国家資格系人材養成の分野では資格取得率とともに適切な分野に就職しているのかどうか、また一定の望ましい初期キャリアを形成しているのかどうかといったようなことをどのように説明するのか。その説明を通して専門学校が制度としての社会的信頼を得るためには、お互いに目標設定において他の学校との差別化を図るという競争モデルではなく、分野としての「学修成果」を知識・技能・態度・応用などの説明指標を用いて共通に設定する共同・協働モデルが必要となる。分野としての「学修成果」を示す

説明指標は、学術の世界、なかんずく大学においては、「分野別参照基準」（日本学術会議）などと呼ばれているものに相当する。これは分野ごとに適切な表現がなされるとともに、分野横断的に共通言語が形成されることが重要である。そのことによって、教育・訓練プログラム・学位・資格の国際通用性拡充に向けて国際的に展開する国家学位資格枠組（NQF）の基盤形成へとつながるのである。

5) 共同 IR による教育改善への PDCA とその複眼的なパースペクティブ

共同、協働モデルが必要なもう一つの理由は、自校の特徴を相対化して眺めるためである。社会学など、少数の対象を調査・分析する質的研究においては、その対象の適切な位置づけ把握のために、三角法（triangulation）の方法論が用いられる。測量における三点測量においては、3点間の相対的な関係（一辺との距離と相互の角度）を把握することで、各点の絶対的な位置を特定できる。この質的研究における三角法の考え方を適用すれば、特定の機関がIR活動としていかに詳細な機関内部のデータを集めても、それだけでは自機関の特色の十分な理解には情報が不足する。他の機関をベンチマーキングすることで相対的な強み・弱みが明らかになる。また、2機関が相互に比較するだけでは相対的な強み・弱みは見えてくるが、一方が強みを持っているのか、他方が弱みを持っているのか、まだ適切に評価できない。その意味で、第三の参照情報が必要となっている。それ故、少なくとも3機関以上で適切な相互比較が可能となると考えられる。

もちろん、卒業生調査が広範に実施され、その成果についての理解が一定範囲で定まっていけば、それが第三の参照情報となり、あるいはそれが参照基準となるであろう。

本成果報告書における専門学校の共同IRの試みはそうした、分野別参照基準形成のための先導的・試行的な試みとなっていくことが期待されるのである。

3. 各章の分析と概要

本編は、各校の理事長、学校長、そして学校を牽引するリーダーたちが自校の現状把握に取組み、その教育改善の必要性に強い想いを寄せるレポートとなっている。

以下、各章の要約を示しておくことにする。

まず、第2章から第4章では、医療・健康・福祉分野に焦点をあてて12校のデータをそれぞれの観点から分析している。

第2章「滋慶学園における医療・健康・福祉系卒業生のキャリア形成と学校教育評価に関する実態調査・分析」では、吉本（2007）の重回帰分析におけるベンチマークの方法論を用いて自法人6校の卒業生の学校評価を他法人と比較し、「海外研修」と「卒業論文指導」において特筆すべき充実度であり、総合的な満足度も高いことが明らかになっている。教育方法としては、小テストなどで学習成果を段階的にチェックする授業が多い反面で、「参加型授業」が少ない傾向が見られ、教育改善のための学園全体の教育研究活動の場において問題提起がなされていることが報告されている。

第3章「専門学校卒業生調査に基づくインスティテューショナル・リサーチ（IR）」では、自法人2校と他の法人の専門学校とを比較し、大卒者や社会人が多いという学生プロファイルの特色と関連するが、資格取得への目的意識が強く、学習へのコミットメントが強いという特色が浮かび上がっている。ここから、一層の社会人学び直しへの特色探究として、自律的学習に基礎を置く成人学習学

(Andragogy) モデルによる教育改善の検討が行われることになったことも、研究会において報告されている。

第4章「卒業生調査による専門学校教育の検証」では、自法人4校のデータを読み込みながら、専門学校制度・政策の全般におよぶ課題を検討している。この法人のデータからは、同じ国家資格系ながら、より正規雇用で高年収の安定したキャリアを辿っている卒業生が多いことが特色となっており、就職支援等の充実度の高さもこれに関連しているとみられる。他方で、学校満足度は相対的に低く、仮定の18歳での再選択をたずねてみると、他の専門学校や大学を希望する卒業生が多い。このため同法人では、専門の授業の質を上げていくことを通して満足度の高い教育への改善の途が模索されていることが報告されている。

次に、第5章と第6章は、工業・デザイン分野の4法人5校が共同IRで相互のデータを交換して分析を進めた。

第5章「専門学校の卒業生調査によるIR活動」では、自法人1校、他法人1校を抽出して、吉本(2007)におけるインプットプロセス・アウトプット・アウトカムの古典的な重回帰モデルに基づいて成果の検証を行っている。この学校の卒業生の仕事で獲得される能力として「コミュニケーション能力」の必要は高いものの、その獲得状況は相対的に低く、他にも必要と獲得とのギャップが大きい。実際の労働市場での評価は年収等でみても見劣りするものではないが、総合的な満足度も低いレベルとなっている。要求水準の高い優良企業等に就職しているとみられるが、教育の有用性については卒業年を経過するほど低下しており、教育上の課題が多く認識されている。この分析結果を踏まえて、各学科単位でも教育課程編成・実施方針の見直しが行われていることが報告されている。さらに同校では、IR活動としての卒業生調査の標準化に向けて、九州大学「EQ研卒業生調査」を利用して、自校による改訂版の卒業生調査の開発・実施に取り組んでいる。

第6章「工業・デザイン系専門学校卒業生調査に関する考察」は、5校の横断的なデータ分析を行い、5校の関係者の共同執筆による考察をとりまとめている。工業系とデザイン系に大別してみると、工業系では「資格取得」にむけた教育が軸となっているのに対して、デザイン系ではキャップストーンプロジェクトとでもいうべき「卒業論文、卒業制作、卒業発表」が充実し、また卒業生も熱心に取り組んでいたことが明らかになった。その他、各校固有の特徴などを読みとり、各校の教育改革課題をまとめたレポートが集まっている。

4. 専門学校の共同IRモデル確立への可能性

専門学校は質保証されていない存在なのか。本報告書が明らかにしていることは、根拠の示せない「社会的評価」ではなく、学修成果という観点によって自主的自律的なIR活動に取り組んでいる事実であり、学修成果による質保証のエビデンスの提示である、この研究会での検討を経て、研究会参加関係専門学校の中から、EQ研卒業生調査参加校1校と、不参加校1校が新たに卒業生調査に取り組んでいる。さらに、九州大学第三段階教育研究センターと共同研究を行い、EQ研卒業生調査をモデルとして標準卒業生調査システムの開発をすすめている学校法人グループも登場している。

繰り返しになるが、本成果報告書は、専門学校当事者・関係者が自助努力として、自律的な自己点検・評価、学校関係者評価を運営し、むしろ大学で実質化が困難な学修成果にもとづく質保証に先導

的に取り組んでいるという事実を明らかにしている。

今後卒業生調査システムの標準化を進め、またその比較可能な調査結果をもちよって相互にベンチマーキングすることによって自校の特色把握を行うという、共同 IR のモデルの確立へ向けた、専門学校のポテンシャルを確認することができるであろう。

【注】

- 1) 大学支援・学位授与機構（2016）の用語集によれば「IR（インスティテューショナル・リサーチ）」とは、高等教育機関において、機関に関する情報の調査及び分析を実施する機能又は部門。機関情報を一元的に収集、分析する事で、機関が計画立案、政策形成、意思決定を円滑に行うことを可能とさせる。また、必要に応じて内外に対し機関情報の提供を行う。」として組織の説明をしている。しかし、本報告書は組織ではなく、そうした組織が推敲すべき活動・機能に焦点を当てて IR を理解する。ともあれ、ここでの IR 活動の要点は、「教育機関内」という場合の、自らの機関自身やその教育プログラム等を調査研究や情報収集の対象としているということにある。すなわち、第三段階教育の機関やプログラムの単位で、その教育・研究・ガバナンス等の質を保証し向上させていくために、自分自身に係るデータを収集し、そのエビデンスをもとに自己の特長を解明する調査研究活動であり、各機関が自らのアイデンティティを探るための調査活動という理解も加えておくことが適切であろう。
- 2) 国家学位資格枠組（National Qualifications Framework: NQF）は、1990年代以後に旧英連邦諸国から開発が始まり、今日世界150カ国以上が開発を始め、導入・運用されている。多くの NQF は、国内のあらゆる学位や資格等の Qualifications を、主にその取得のための教育訓練プログラムの学修成果によって国家的に整序した制度となっている。ここでは、教育プログラムの学修成果にかかるレベル説明指標（level descriptors）が各レベルで共通のコンセプトをもとに設定され、それは教育における学修成果と職業で求められる職務能力（コンピテンシー）とを結びつけるためのツールとなり、教育の世界と職業の世界の対話を可能にする言語となるものである（Yoshimoto（2017）参照）。このレベル説明指標については、国際的にさまざまな分類（タキソノミー）が用いられているが、本事業の中では、日本の文脈での適切性を考慮し、「知識」「技能」「態度」「応用」という4次元の説明指標を検討している。

〈参考文献〉

- 教育再生実行会議（2014）『今後の学制等の在り方について（第五次提言）』（https://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaiei/pdf/dai5_1.pdf）
- 大学支援・学位授与機構（2016）『高等教育に関する質保証関係用語集・第4版』（http://www.niad.ac.jp/n_kokusai/publish/no17_glossary_4th_edition.pdf, 2018年2月10日最終検索）
- 中央教育審議会（2011）「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」（答申）（http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1301877.htm）
- 文部科学省生涯学習政策局（2013）『専修学校における学校評価ガイドライン』（http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/senshuu/1332632.htm）
- 吉本圭一（2007）「卒業生を通した「教育の成果」の点検・評価方法の研究」, 独立行政法人大学評価・学位授与機構『大学評価・学位研究』第5号, 77-107頁
- 吉本圭一（2009）「専門学校と高等職業教育の体系化」『大学論集』第40集, 広島大学高等教育研究開発センター, 199-215頁
- 吉本圭一編（2018）『卒業生調査を通した学修成果とコンピテンシー——短期大学・専門学校17分野55機関による IR モデルへの試み——』, 九州大学第三段階教育研究センター「高等教育と学位・資格研究会」ワーキングペーパーシリーズ No.4

Keiichi Yoshimoto (2017) 'Feasibility and Challenges on a National Qualifications Framework and Permeability in Education and Training System in Japan', Latiner Raby R. and Valeau E. eds, "Handbook of Comparative Studies on Community Colleges and Global Counterparts. Springer International Handbooks of Education", Springer, Cham, DOI https://doi.org/10.1007/978-3-319-38909-7_32-1, Online ISBN 978-3-319-38909-7

第2章 滋慶学園における医療・健康・福祉系卒業生の キャリア形成と学校教育評価に関する実態調査・分析

志 田 秀 史 (九州大学) 老 田 義 人 (滋慶学園)

滋慶学園では、2015年度より、①教育の質の改善、②社会に対する説明責任、③学校評価を通じたガバナンス改善に向けた自主的な取り組みを推進するために研究を推進することにした。本稿は、それに先駆けて、2012年度九州大学「高等教育と学位・資格研究会」において開発・実施した Web アンケート調査の結果をもとにして、同グループに所属する医療・健康・福祉分野の6校と、同分野他法人優良校6校とを比較することで、滋慶学園6校の特徴と課題を扱うことを試みた。その結果、特に海外研修、卒業研究、専門授業が際立って充実しているものの、一方で学生参加型授業の不足が指摘され課題となった。また、学生満足度等は、相対的に高いことがわかった。さらに、教育プロセス（説明変数）と卒業後の教育満足度及び獲得能力（目的変数）との重回帰分析から、アウトカムの向上に影響を与える在学中の教育活動を抽出した。すると、これらのことから、学生満足度向上と仕事に必要な基礎を身に着けるために、学生の「生活への相談」がしやすい環境づくりに向けて学生カウンセリング構造を充実させること、同業界内で働き続けやすくするために「専門の授業」と就職先である「初職」の厳選を行い、マッチングを向上させること等が、効果的であるとの結果を抽出することができた。インプットからアウトプットまでのステップ分析から、「総合的に振り返って本学に対する満足度」に対しては、「専門の授業」「就職支援」「授業外での教員との交流」が規定因子として大きな影響を与えることが明らかになり、教育事業計画に活用できるものとなった。

1. 目的

本調査¹⁾の目的は、滋慶学園における卒業生のキャリアパスと学校評価を明らかにし、同分野の他学校法人6校と比較しながら滋慶学園の教育の特徴と課題を扱うものである。このことを他法人と比較し捉えることは、本学園教育を深く総合的に検討する上で必要であり今後の教育システムの新展開につながる可能性があると考ええる。

なお、卒業生調査システムは九州大学「高等教育と学位の資格研究会」（代表・吉本圭一）により開発された Web アンケート調査システム（調査名「卒業生のキャリアと学校調査に関する調査プロジェクト」）を利用した。

2. 背景と課題

2013（平成25）年3月、専修学校のさらなる質保証・向上に向けた学校評価への取り組みに関する具体的な指針として「専修学校における学校評価ガイドライン」が公表された。

以降、滋慶学園では、①教育の質の改善、②社会に対する説明責任、③学校評価を通じたガバナンス

ス改善に向けた自主的な取り組みを推進するために、アンケート調査体制の整備を実施している。山田（2012）は、教育成果を測定するためには、直接評価（成績（科目試験、レポート、卒業試験）と関節評価（授業の出欠、学生アンケート調査、卒業生調査）という2つの方法があることを指摘しているが、これらの評価の中で、特に卒業生調査の内容にばらつきがあり、課題としていたところである。今回の九州大学（吉本研究室）が開発した卒業生調査を、あらたに従来の滋慶学園 IR 手段に加えることを検討するため、手始めに6校の卒業生のキャリアと学校評価について調査分析することにした。

3. 調査方法の概要

本研究のデータ源は、九州大学「高等教育と学位・資格研究会」（研究代表：吉本圭一・九州大学人間環境学研究院主幹教授）によって開発された Web アンケート調査の結果である。

調査対象：2001年度から2011年度までの卒業生とし、調査方法は、郵送により通知、Web 上でアンケート形式にて回答した。

調査期間：2012年10月15日～2013年3月までである。

本研究のために、その中から、滋慶学園グループの1.大阪医療技術学園専門学校（68/824）2.大阪保健福祉専門学校（90/980）3.大阪医療福祉専門学校（89/589）4.大阪ハイテクノロジー専門学校（88/400）5.東京スポーツ・レクリエーション専門学校（29/49）6.東京福祉専門学校（15/335）7.他法人同分野（医療・保健・福祉）優良校6校（483/5096）を抽出した。12校の送付数は8,273、サンプル数は862、回収率は10.4%であった。

表1. 卒業年度別回答状況

卒業年度	滋慶学園			他法人全体		
	有効回収数			有効回収数		
	(全体)	(男)	(女)	(全体)	(男)	(女)
2001	0	0	0	1	0	1
2002	3	1	2	3	1	2
2003	17	3	14	30	14	16
2004	30	9	21	55	27	28
2005	40	10	30	37	18	19
2006	29	9	20	39	21	18
2007	28	8	20	45	24	21
2008	26	11	15	45	20	25
2009	45	10	35	59	30	29
2010	45	8	37	44	22	22
2011	49	20	29	59	21	38
2012	67	26	41	66	34	32
合計	379	115	264	483	232	251

4. 結果と考察

4-1. 卒業生のキャリアパスの実態

まず、目指す業界との接続について把握するために、初職について調査を行った。すると、滋慶学園の卒業生の初職は、95%が専攻した分野と関連があった。他法人の専門学校は96%であり、同様に高い率を示した（図1）。また、その初職を続けているかについては、滋慶学園は65%、他法人専門学校は、66%であり、同程度の割合を示した（図2）。現在の職場での地位は、役職者について、滋慶学園は15%、他法人では、17%であった（図3）。

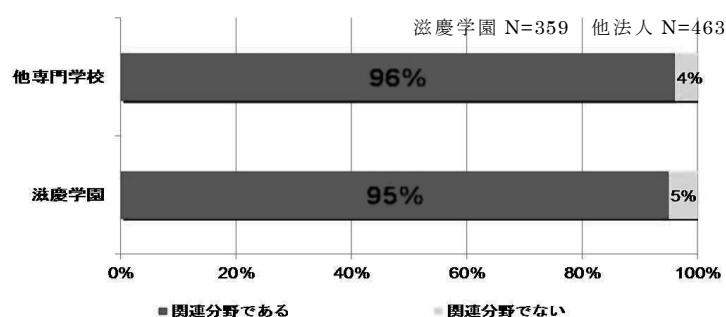


図1. 初職は本校で専攻した分野と関連がありますか？

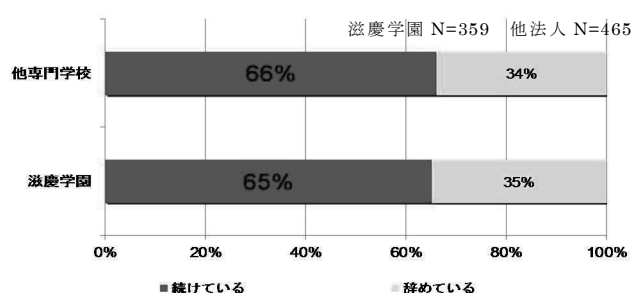


図2. 初職は続けていますか？

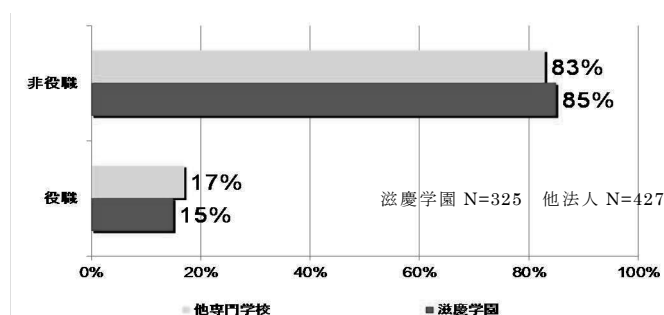


図3. 現在の職場での地位

次に、特徴として明らかになったことは、初職を辞めた理由において、「結婚・出産・育児・介護」や「勤務先都合」で辞めた者が多く、「仕事にやりがいを感じられない」や「新たなステップアップを図りたかった」の理由で辞めた者は少なかったこと（図4）。現在の職場において必要とされる知識・技術・能力においては、卒業生たちは、「マナー・倫理」「コミュニケーション」「仕事の段取り」「学び続ける力」「チームワーク」「リーダーシップ」の必要性を特に感じているが、現在の自分はそれに追いついていないと感じていることがわかった（図5, 6）。そのことに対して支援が必要であり、これは我々の視角から捉えると、ビジネスチャンスともいえる。卒業生に向けた生涯教育のニーズが明らかになった。それはさらに、広く若年社会人に向けた社会人基礎力モジュールの提供につながるができる。社会人が、いつでもどこでも学べる環境を求めている。これに対応できれば、滋慶学園のミッションである職業人教育を通じて社会に貢献することにつながる。専門学校の設置場所は、一般的に駅前周辺が多く、通学には便が良い。本学園も同様に駅前に位置している学校が多い。そのことに加えて、今まで講義形態で行ってきた理論部分は、e-learning で対応し、実習部分だけ通学する等、フレキシブルに教育形態をすることで学びやすくなる。

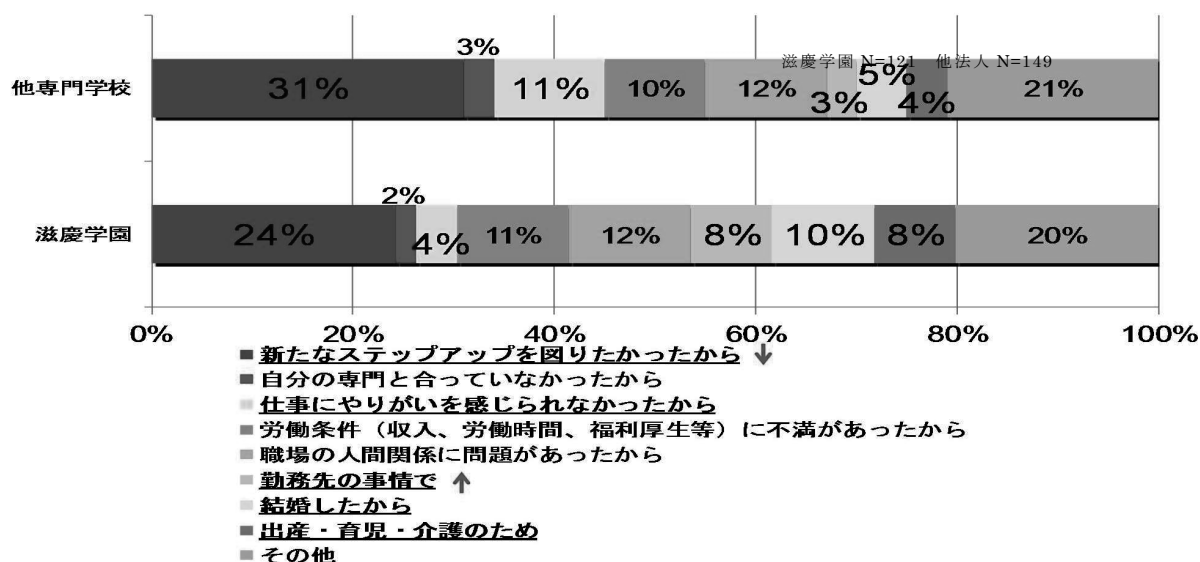


図4. 初職を辞めた理由は何ですか？

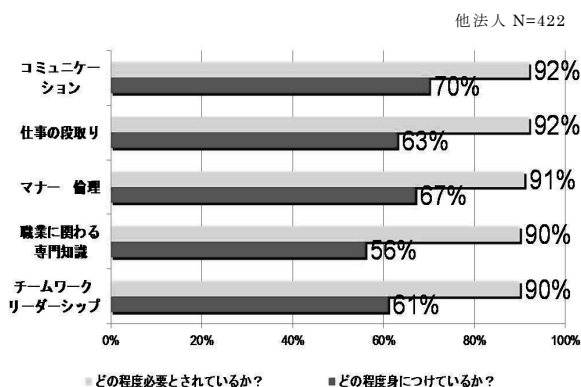


図5. あなたの現在の仕事で、どの程度必要とされているか？（上段）
どの程度身につけているか？（下段）

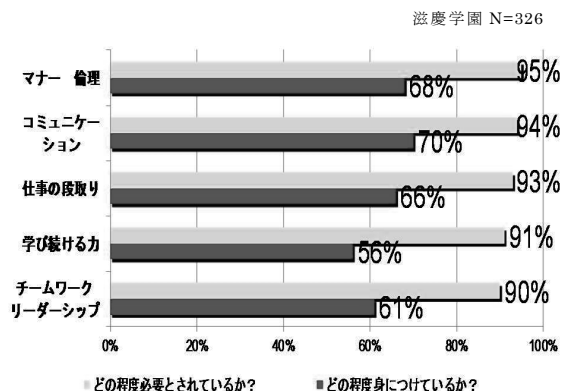


図6. あなたの現在の仕事で、どの程度必要とされているか？（上段）
どの程度身につけているか？（下段）

4-2. 学校に対する評価

教育指導の充実度については、「海外研修」と「卒業論文指導」について、充実していたと答えた卒業生の割合が、他法人より高く、本学園の際立った特徴といえる（図7）。熱心に取り組んだものも、卒業研究、海外研修が1、2位を占めた（図8）。授業の特徴については、「小テスト等により到達度チェックを行う授業」と、「理解度を配慮した授業」が多い。一方で、「参加型授業」は、他法人を下回り、今後の課題となった（図9）。このことは、講義科目への指摘であると考えられる。本校での在学中の経験は、どのように重要だったかについては、「仕事に必要な学習を経験する上で」「一人前に仕事を行う上で」「将来のキャリア展望をする上で」「人格形成する上で」の4つすべての項目で、他法人を上回った（図10）。満足度等は、仮に高校卒業後、学校進路選択をやり直した場合、再び本学を選ぶと返答した率と、総合的学校満足度の「とても満足」は相対的に高いことがわかった（図11、12）。

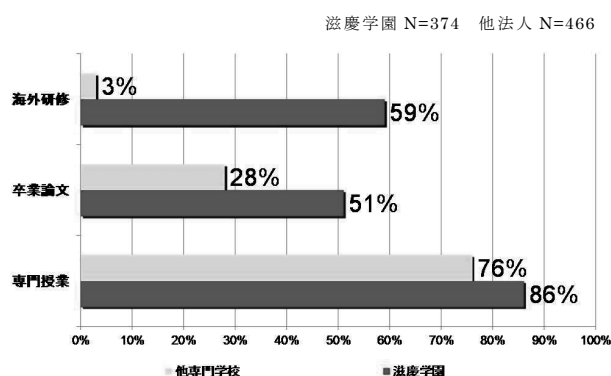


図7. 本校の教育・指導は充実していたか？ 上位3つ

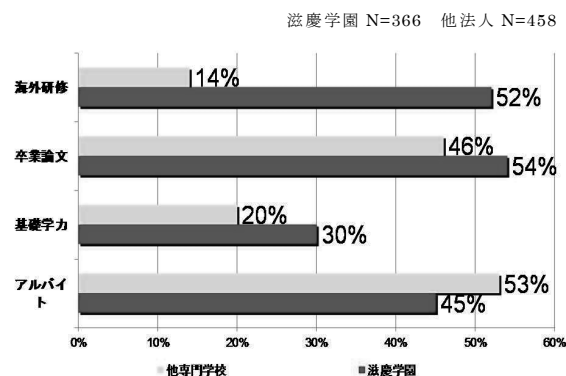


図8. 本校の教育・指導に対して熱心に取り組んだか？

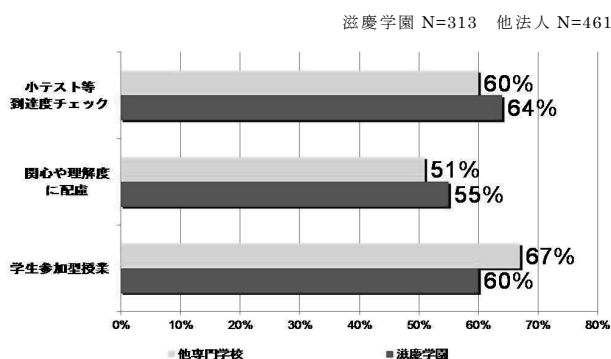


図9. 本校での授業の特徴

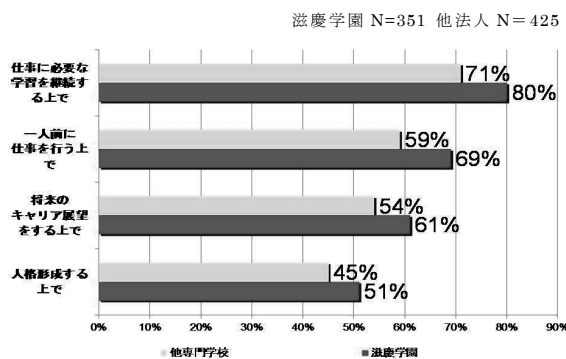


図10. 本校での経験は、どのように重要だったか？



図11. もし入学をやり直せるならどの進路を選ぶか？（同分野他法人：左 N=300 滋慶学園：右 N=300）

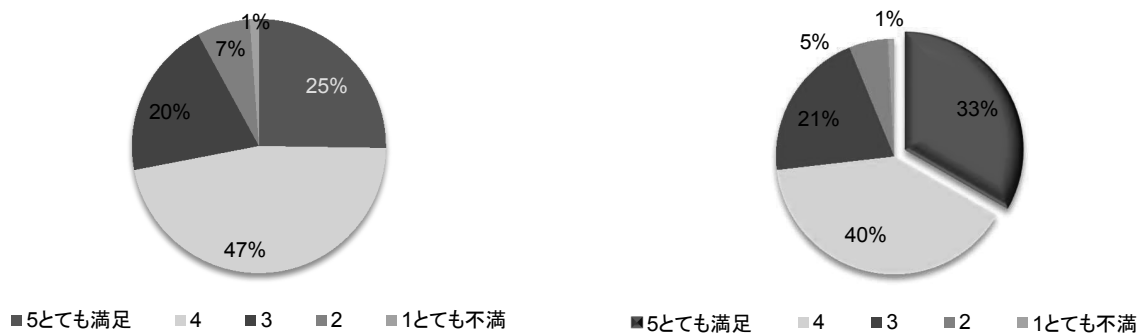


図12. 総合的な満足度（同分野他法人：左 N=300 滋慶学園：右 N=300）

5. 教育プロセスと満足度・獲得能力との関連性

今後の教育戦略立案のため、「本学園卒業生の満足度」や「獲得能力」に資する「在学中の教育プロセス」は何かを探るため、重回帰分析を行った。目的変数は、満足度及び獲得能力6項目で設定し、説明変数は教育プロセス17項目とした。重回帰分析を行うにあたっては増減法を用いて、変数選択を行った。解析の結果、他6校との比較から読み取れる滋慶学園の特長として（1）総合的に振り返っての満足度には、他6校よりも「生活について相談」が及ぼす影響が大きいといえる。（2）就職先を見つける上で重要な影響を及ぼすものは、他6校よりも在学中の「専門の授業」と「初職」であるといえる。（3）仕事に必要な基礎を身につける上で重要なことは、「生活についての相談」であるといえる。（4）仕事で一人前になる上で重要なことは、「仕事現場や地域での実習や就業経験」、であるといえる。（5）将来のキャリアを展望する上で重要なことに関しては、「専門の授業」及び、「実験器具などの施設設備」が強い影響因子としてあげられる。（6）仕事に必要な学習を続けてゆく上で重要なことに関しては、「在学中の成績」や「実験器具などの施設設備」が強い影響因子である。（7）人格の形成する上で重要なことは、「海外研修」や「専門の授業（講義、演習）」での教育があげられる。の以上7つが明らかになった。（表2）

表2. 在学中の教育指導の充実度と満足度・アウトカムに関する関係

学業	授業以外の学習時間（授業期間中） 在学中の成績	総合的に振り返って 本学に対する満足度		アウトカム											
		他法人(N=33)		滋慶(N=27)		他法人		滋慶		他法人		滋慶		他法人	
		他法人(N=33)		滋慶(N=27)		他法人		滋慶		他法人		滋慶		他法人	
						0.098*		0.085*		0.093*	0.137*	0.105*	0.118*	0.078*	0.107*
学習指導 の充実度	高校までの基礎学力を学び直す授業や指導	0.095*		-0.124*								-0.157*	0.197**		
	知識を広げ教養を身につける授業	0.358**	0.367**			0.195*	0.223**	0.354**	0.221**	0.276**	0.185*	0.302**	0.169*	0.239*	0.276**
	専門の授業（講義や演習）			0.116*								0.115*	0.164*		
	仕事現場や地域での実習や就業経験			0.163*		0.192**								0.173**	
	資格取得に関わる準備・指導								0.127*				0.130*	0.147*	
	卒業論文、卒業制作、卒業発表														0.111*
	海外研修や留学のための機会や指導											0.136*			
就業状況	部活やサークル、学校の行事														
	図書室、情報機器、実験器具などの施設設備	0.102*								0.158*		0.173*		0.182**	0.131*
	学習支援（学習の仕方や理解度についての相談・支援）	0.151*													
	就職支援（就職活動についての相談・支援）	0.122*	0.234**	0.346**	0.266**	0.144**	0.194**	0.240**	0.132*	0.197**			0.278**		0.142*
	生活についての相談		0.145*											0.222**	0.232**
	就業形態（初職）				0.483**										
	現職（直近の1年以内を含む）の就業形態														
	現職（直近1年以内を含む）の年収														
	補正済み R2 ²	0.408	0.344	0.240	0.172	0.258	0.210	0.204	0.238	0.144	0.170	0.234	0.197	0.206	0.302

*: p < 0.05 **: p < 0.01 ***: p < 0.001

次に、吉本圭一（2015）の分析方法を活用し、同分野他法人6校と滋慶学園6校における在学中の教育指導の充実度と満足度・アウトカムの比較を行なった。

ステップ1：N学校グループがマイナスの値となっており、満足の点で劣っていることを示しているこのステップでの補正済み R2 は0.017で入学時点の1つの変数で1.7%説明していることを示している。

ステップ2：プロセスとして教育充実度の教育課程、「専門の授業（講義や演習）」は0.357と最も大きな値を示している。専門学校教育の中心をなす変数であることが定量的に裏づけられた。また、「K学校グループ」の他の2グループと比較して「満足度」の点で優れていることを示し、この有意は本ステップ以降に共通している。

補正済み R2 の値は0.017から0.341急激に上昇し「満足度」の34.1%を説明していることを示している。

ステップ3：教育充実度（その他）の変数を含め分析を行った。「学習支援」、「就職支援」、「生活についての相談」の変数が有意となり、補正済み R2 の値も0.341から0.409と説明力は、6.8%上昇した。

ステップ4：ステップ3に学生個々が在学中に熱心に取り組んだ項目を変数に加え分析をした所、「友達との交流」「授業外での教員との交流」「アルバイト」の変数が有意となり、中でも「アルバイト」がマイナスとなり、「満足度」の点で劣っていることを示している。

また、「卒業後年数」がプラスの値を示し、この有意は、本ステップ以降に共通している。補正済み R2 の値も0.409から0.449と説明力は、4%上昇した。

ステップ5：卒業時のアウトプットの3項目は、「満足度」の規定因子となっていない。

従って、説明力は変化が認められなかった。

ステップ6：現在のキャリアに関する変数に加え分析を行った結果、「現職は最終学歴で選考した分野と関係がある」の規定因子が加わり、説明力は0.4%上昇した。

ステップ7：専門学校教育の有用性に関する変数に加え分析を行った結果、「仕事に必要な基礎を身につける上で」「将来のキャリアを展望する上で」「人格を形成していく上で」の規定因子が加わり、また「資格取得に関わる準備・指導」「アルバイト」の規定因子がなくなり、「学習支援」「就職活動」が加わり、補正済み R2 の値も0.453から0.493と説明力は、4%上昇した。

このモデルでは、49.3%の説明力があり、その規定因子は、「専門の授業」「就職支援」「授業外での教員との交流」が大きな規定因子となり、続いて「仕事に必要な基礎を身につける上で」「人格を形成

していく上で」「学習支援」となっている。

有用性を含めた7ステップの分析から、12の規定因子が得られた。

補正済み R^2 は0.493となり12の規定因子で約50%満足度を説明していることになる。推計値は3.950となっており、実測値3.951より、0.001低い値となっており、満足度の実測値が過大評価されているか、また評価を高める未知の規定因子を探索する必要がある。(表3)

表3. 同分野他法人6校と滋慶学園6校における在学中の教育指導の充実度と満足度・アウトカムの比較(ステップ別)

「総合的に振り返って本学に対する満足度」のステップ別の重回帰結果（標準偏回帰係数）の変化（滋慶）									N=630
説明変数			総合的に振り返って本学に対する満足度						
			①入学時	②：①+教育充実度（教育課程）	③：②+教育充実度（その他）	④：③+在学中熱心に取り組んだこと	⑤：④+卒業時の到達度	⑥：⑤+現在のキャリア	⑦：⑥+専門学校教育の有用性
インプット	入学時	a_3_1 性別							
		a_1_3 卒業後年数			0.06 *	0.06 *	0.063 *	0.059 *	
		N 学校グループ	-0.135 ***						
		K 学校グループ		0.103 **	0.097 **	0.097 **	0.099 **	0.088 **	
		g_1_5_1 本学が第一志望							
プロセス	教育充実度（教育課程）	b_3_1 高校までの基礎学力を学び直す授業や指導		0.192 ***	0.106 **	0.089 **	0.089 **	0.088 **	0.09 **
		b_3_2 知識を広げ教養を身につける授業							
		b_3_3 専門の授業（講義や演習）		0.357 ***	0.282 ***	0.281 ***	0.281 ***	0.279 ***	0.246 ***
		b_3_4 仕事現場や地域での実習や就業経験							
		b_3_5 資格取得に関わる準備・指導		0.222 ***	0.111 **	0.128 ***	0.128 ***	0.121 **	
		b_3_6 卒業論文、卒業制作、卒業発表							
	教育充実度（その他）	b_3_9 図書室、情報機器、実験器具などの施設設備							
		b_3_10 学習支援（学習の仕方や理解度についての相談・支援）		0.109 *					0.106 **
		b_3_11 就職支援（就職活動についての相談・支援）		0.176 ***	0.187 ***	0.187 ***	0.186 ***		0.136 ***
		b_3_12 生活についての相談		0.108 **	0.093 *	0.093 *	0.096 *		
	学生生活熱心に取り組んだ	b_4_1_8 部活やサークル、学校の行事							
		b_4_1_9 友だちとの交流				0.133 ***	0.133 ***	0.129 ***	0.097 **
		b_4_1_10 授業外での教員との交流				0.136 ***	0.136 ***	0.14 ***	0.13 ***
		b_4_1_11 アルバイト				-0.76 *	-0.76 *	-0.76 *	
		b_4_1_12 就職活動							-0.088 **
		b_1_2 授業以外での学習時間（授業期間中）							
	アウト	卒業時の到達度	b_2_1 在学中の成績						
c_2_1_1 就業形態（初職）									
c_2_4 初職は本学で専攻した分野と関連がありますか									
アウトカム	現在のキャリア	d_2_1_1 現職（直近の1年以内を含む）の就業形態							
		d_2_2_3 企業等全体の従業員数（現職の企業規模）							
		d_2_3 現職（直近1年以内を含む）は最終学歴で専攻した分野と関連がありますか						0.069 *	
		d_2_4 現職（直近1年以内を含む）の年収							
		d_2_5_1 昇進や昇格							
		d_2_5_2 賃金水準							
		d_2_5_3 責任の重さ							
		専門学校教育の有用性	h_1_1 就職先を見つける上で						
	h_1_2 仕事に必要な基礎を身につける上で								0.109 **
	h_1_3 仕事で一人前になる上で								
	h_1_4 将来のキャリアを展望する上で								0.076 *
	h_1_5 仕事に必要な学習を続けていく上で								
			h_1_6 人格を形成していく上で						0.106 **
補正済み R2			0.017	0.341	0.409	0.449	0.449	0.453	0.493
推計値			3.95	3.95	3.95	3.95	3.95	3.95	3.95

*: $p < 0.05$ ** : $p < 0.01$ *** : $p < 0.001$

図13は、滋慶学園のアウトカム「専門学校教育の有用性」について「総合的に振り返って本学に対する満足」の項目からのステップ別推計値を図示したものである。

滋慶学園のステップ1の推計値4.04からステップ7の4.01からインプットからアウトカムまでの推計値では、特徴的な変化は認められなかった。(図13) すべての指標の5段階評定が、4.00以上示していることを考えると満足度は高いと考えられるが、翻って教育の卓越した特徴が不足しているという見方もできる。今後も研究の継続が必要である。

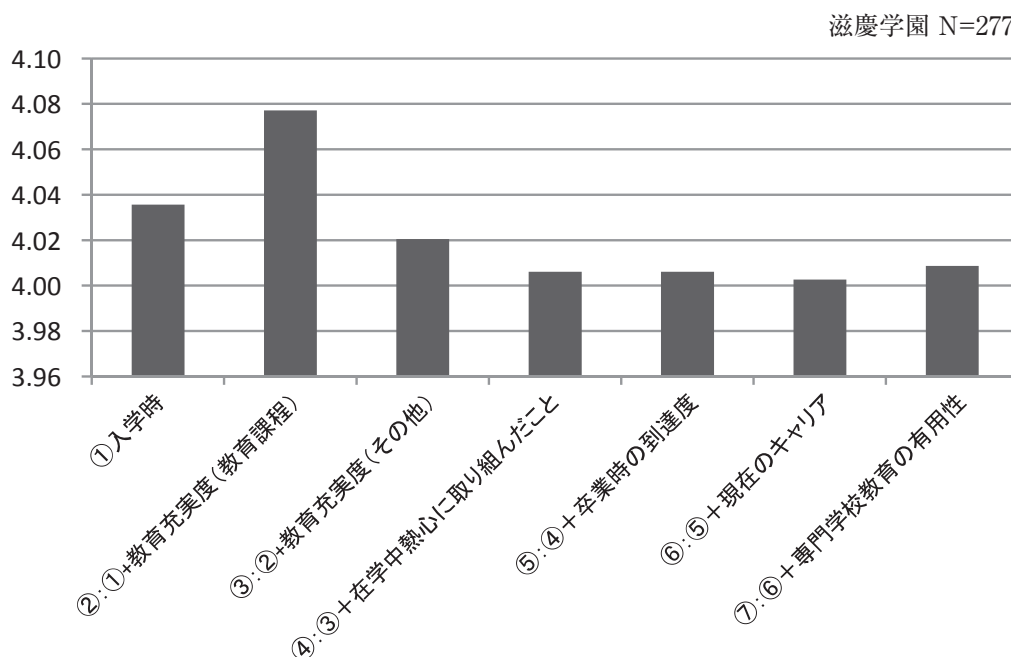


図13.「総合的に振り返って本学に対する満足度」ステップ別推計

6. まとめ

(1) 今回の実施評価

本卒業生調査は、滋慶学園における卒業生のキャリアパスと学校評価から、教育の特徴と課題を明らかにすることができた。また今回、初の試みとして同分野他法人と比較できたことは、自学園内だけで行うよりの確に学園・学校の特徴や課題を特定できると考えられる。

(2) 今後の卒業生調査の取り組み

今後の取り組みとしては、九州大学「高等教育と学位・資格研究会」(研究代表・吉本圭一)と申し合わせを取り交わしたうえで、卒業生調査を活用し、今後、全校調査実施計画中である。実施できればグループ内70校の中で同分野同士や分野ごとの比較ができる。

渋井ほか(2012)によれば、国立大学では、PDCAサイクルの確立や経営学的な視点から、SWOT分析やバランスド・スコアカード等のツールを活用し、組織の戦略策定が行われているが、自ら設定した自己評価の指標が適切かどうかは確信が持てないまま行われていることと、外部から評価する場合、標準化がなされていないと比較可能性は低く、透明性も下がるために、外部者が判断しにくいという問題があることを指摘しているところである。

(3) 卒業生アンケート結果から本学園の教育改善に向けて

最後に、表4に教育計画作成に向けて卒業生アンケート結果から教育改善方針として扱うべきものを一覧に示した。1は、学校評価調査から、2は、キャリアパス調査の単純集計から、3・4・5は、教育プロセスと満足度・獲得能力との関連性分析からのものである。すべて本学園において従来から教育改善の議論に上がっていたものであるが、本調査のようにすべて数値で捉えたものではなかった。

今回のように課題を数値で捉える事ができたことは大きな成果といえるだろう。

表4. 卒業生アンケート結果から扱う教育改善方針

NO	卒業生アンケートから見えたもの	対策方針
1	教育の特徴として学生参加型授業をあげたものは60%で他法人の67%を下回ったこと。	各科目における「学生参加型の能動的学習」を推進すること。
2	現在の職場において必要とされる知識・技術・能力においては、卒業生たちは、「マナー・倫理」「コミュニケーション」「仕事の段取り」「学び続ける力」「チームワーク」「リーダーシップ」の必要性を特に感じているが、現在の自分はそれに追いついていないと感じていたこと。	卒業生を中心に社会人一般に向けて、以下5つの社会人基礎力モジュールの開発と展開を行うこと。 ①マナーと倫理②コミュニケーション技法③仕事の段取りスキル④チームワーク⑤学び続ける力の育成
3	総合的に振り返っての満足度には、他6校よりも「生活について相談」が及ぼす影響が大きいといえること。	学生満足向上のため、学生の「生活への相談」が、しやすいように学生カウンセリング、メンタリング構造の充実を図ること。
4	就職先を見つける上で重要な影響を及ぼすものは、他6校よりも在学中の「専門の授業」と「初職」であるといえること。	将来を展望しながら、仕事に必要な学習を継続できるように「専門の授業」と「実習機器などの施設設備」を充実させること。
5	仕事に必要な学習を継続する上で重要なことは、他6校よりも「在学中の成績」や「実験器具などの施設設備」が強い影響因子であること。	目指す業界で働き続けられるよう、就職先である「初職」の厳選を行い、学生と職場のマッチングを向上させること。

〈注〉

- 1) 卒業生調査にあたっては、九州大学「高等教育と学位・資格研究会」が開発・実施した Web アンケート調査システムを利用した。調査参加機関の中から、相互 IR 分析に賛同した専門学校17校が参加する「専門学校 IR 研究会」が発足し、同一分野内での比較検討を行う共同 IR の合意が得られたデータをもとに分析を行った。その研究会において、参加者が各自の学園・専門学校の分析を行い、吉本圭一研究代表（九州大学）の指導・助言を得た。

〈参考文献〉

- 文部科学省生涯学習政策局, 2013, 「専修学校における学校評価ガイドライン」
(http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/___icsFiles/afieldfile/2014/05/26/1348103_01_1.pdf 2016.4.11)
- 洪井進ほか, 2012, 「学習成果に係る標準指標の設定へ向けた検討：国立大学法人評価結果報告書の分析から」『大学評価・学位研究』第13号：3-4.
- 山田礼子, 2012, 「学びの質保証戦略」玉川大学出版部：156.
- 吉本圭一ほか, 2011, 「専門学校卒業生のキャリア形成と専門学校教育に対する評価に関する実態調査・分析報告書」みずほ情報総研株式会社
- 吉本圭一, 2015, 「職業統合的学習と学習成果 短期大学・専門学校卒業生調査より」『短期大学コンソーシアム九州紀要』, 2015, Vol.5：5-14.
- 吉本圭一編, 2018, 『卒業生調査を通じた学修成果とコンピテンシー——短期大学・専門学校17分野55機関による IR モデルへの試み——』, 九州大学第三段階教育研究センター「高等教育と学位・資格研究会」ワーキングペーパーシリーズ No.4.

第3章

専門学校卒業生調査に基づく

インスティテューショナル・リサーチ (IR)

—— 敬心学園および医療・健康・福祉系他法人専門学校の集計分析結果より ——

菊 地 克 彦 (学校法人 敬心学園 職業教育研究開発センター)

1. 研究目的

専門学校は、時代や社会の変化、ニーズに合致した職業実践専門教育を行い、産業界に貢献する人材を養成することが目的であり、他の高等教育機関以上に明確なラーニングアウトカムが求められている。しかしながら、自校で養成した人材が、産業現場でどのように貢献しているのか、現場での業務実践の中で、専門学校時代の教育がどの程度有効であるか等につき、定量的に把握・分析する取り組みはほとんど行われていない。

本研究における卒業生調査¹⁾に基づくIR活動は、自校で教育を受けた卒業生を対象に、「初期キャリア形成状況の把握」と就業経験を経た後の「在学期間中の教育プロセスと獲得能力の関連性」をエビデンスベースで分析し、教育改善や経営戦略策定等に活用することを目的としている。

なお、本調査は、九州大学「高等教育と学位・資格研究会」(研究代表・吉本圭一)が開発・実施したweb調査システム(調査名「卒業生のキャリアと学校評価に関する調査プロジェクト」)を利用し、本学園(本学)が参加機関として卒業生調査を実施したものである。

現代の経営戦略論には、市場におけるポジショニングに軸足を置いたポジショニング論とRBV(Resource Based View/ 内部資源論)に代表される希少で模倣できない内部資源に競争優位の源泉を見出すケイパビリティ論の2つの大きな潮流があるが、IRは後者の考え方に基づく取り組みであろう。学校経営におけるRBVの活用は、有形資源としての教職員や施設・設備、並びに無形資産としての教育のコンテンツ・プロセス・方法、学生支援サービス等のケイパビリティ(能力)を分析し、他校との競争優位性を確認し、選択・集中すべき経営戦略を明確化することに有効と考える。

専門学校は、産業界で活躍する職業実践専門人材を育成する使命を担っているが、その真の評価は、卒業時の学習修得度や資格取得結果等によるものではないと考える。それは産業界に入職してから、専門学校時代の学習によって習得した知識、スキル、コンピテンシー等に基づき、職務上の成果をあげ、組織貢献できているか、それを通じて望ましいキャリアを形成しているか等によって判断すべきものである。

そこで、本研究においては、卒業後に就業経験をしていることを前提に、出身専門学校の教育に関する「満足度」「獲得能力」と在学時の教育プロセスとの関係性を分析し、その規定要因を探ることとした。また、これを自校の調査結果だけから判断するのではなく、同分野における他の複数の専門学校との比較検討を行うことにより、自校の競争優位となる個別性・独自性や他校との共通性・類似性等を見出すこととした。

2. 調査方法

(1) 本稿の研究対象

本稿研究においては、全体調査の中から、本調査に敬心学園から参加した日本福祉教育専門学校、日本リハビリテーション専門学校の2校のデータ、および医療・保健・福祉系の他法人専門学校10校のデータを抽出し、比較検討を行った。対象とした計12校のサンプル総数は862で、敬心学園の2校は215、他法人専門学校（10校）は647である。

3. 調査結果と考察

(1) 入学者属性

1) 学歴

大学・大学院卒比率は敬心学園74%、他法人専門学校16%、高卒比率は敬心学園15%、他法人専門学校72%。敬心学園は「大卒・院卒」比率が圧倒的に高いことが特徴である。

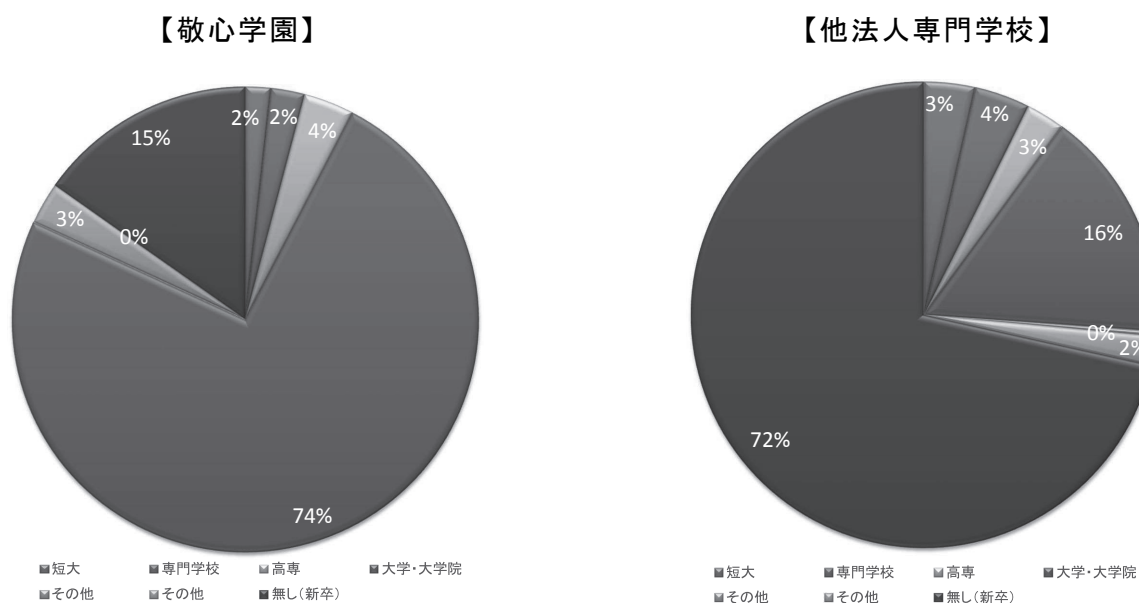


図1 入学前の他の高等教育機関での学習経験

2) 就業経験

敬心学園は就業経験ありが63%，他法人専門学校は20%。敬心学園は「就業⇒学び直し」の学生が中心的存在であることがわかる。

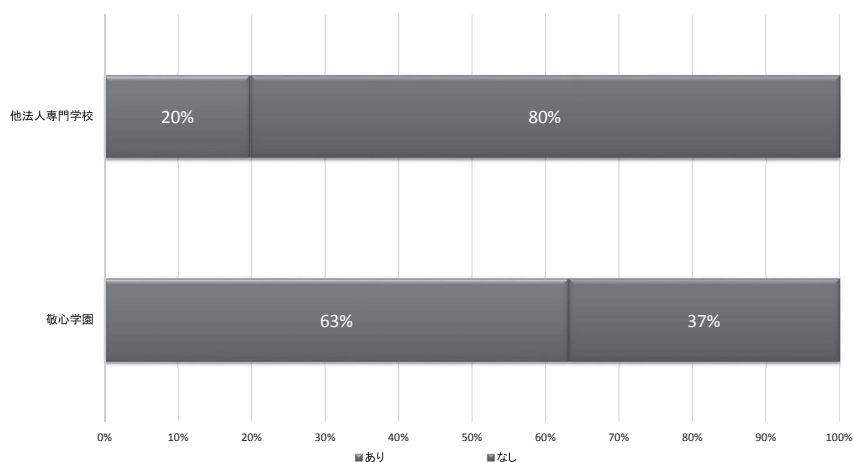


図2 入学前就業経験の有無

3) 就業期間

就業期間5年以上が敬心学園は70%，他法人専門学校は48%。敬心学園は、前述の1) 2) と合わせると、大卒後5年以上就業し、20歳代後半以降に入学している学生が主要な層と判断できる。他法人専門学校は、就業経験ありの学生でも、就業5年以内が多い。

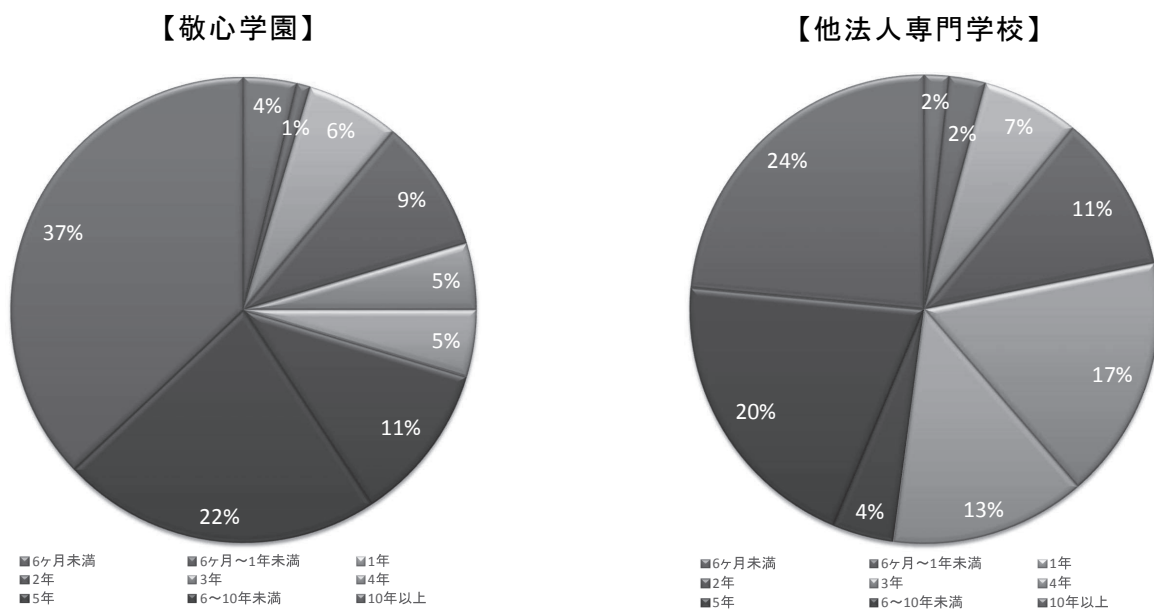


図3 就業期間

4) 入学者属性の総括

「大卒⇒就業5年以上⇒学び直し」が、敬心学園の核となる学生像である。よって、本調査における敬心学園データの分析・考察においては、この点を踏まえなければならない。ここから推察される学

生特性は以下である。

- ① 大卒・院卒学生は、高卒学生よりも教育への要望レベル、学習成果への期待値が高い（学費の自己負担率が高いことも含め）
- ② 要望・期待値が高いがゆえに授業内容、授業方法、教材、教員等に対する評価が厳しい
- ③ 資格取得・専門職就業に対する目的意識がより明確である
- ④ 学習成果への自らのコミットメントが強い

(2) 在学時の学習・学校生活

1) 本校の教育指導の何が、どこが充実していたか

〔評点5と4の回答合計比率〕では、敬心学園が資格取得83%，専門授業85%で、他法人専門学校の75%，80%よりも、高い数値を示している。

これは、敬心学園が、資格取得のための専門授業に力点を置いた教育を行っていることの現れであり、専門学校の第一義的目的を果たしていることが確認できる結果である。

それ以外は、ほとんどの項目で、他法人専門学校より下回っているが、その中で注目すべきは、生活指導、就職支援、学習支援と考える。生活指導は、大卒・就業経験者という大人の学生中心であることを考慮すれば、改善課題として採りあげるには至らないと判断する。また就職支援は、本学園が設置している学科領域の就職状況が概ね好調であること、並びに就業経験者＝就職活動経験者が多いことに鑑み、〔評点5と4と3の合計比率〕80%は他法人専門学校より低いものの許容できる値と考える。尚、学習支援に関しては、学生の属性にかかわらず、今後、強化・向上に取り組むべき課題である。

高卒学生中心の学校の場合は、生活指導や学校行事、海外研修等の人間形成的教育にも力を注ぐ必要があると思われるが、大卒、社会人学生中心の敬心学園では、専門職業人育成のための専門教育に重きを置くことは経営戦略上、望ましい方向性であろう。

よって、今後も生活指導や就職支援のほか、人間形成的教育を改善、強化するよりも、資格取得、専門授業という強みに集中し、この強みを一層強化することが、他校との競争優位を獲得することに繋がると考える。

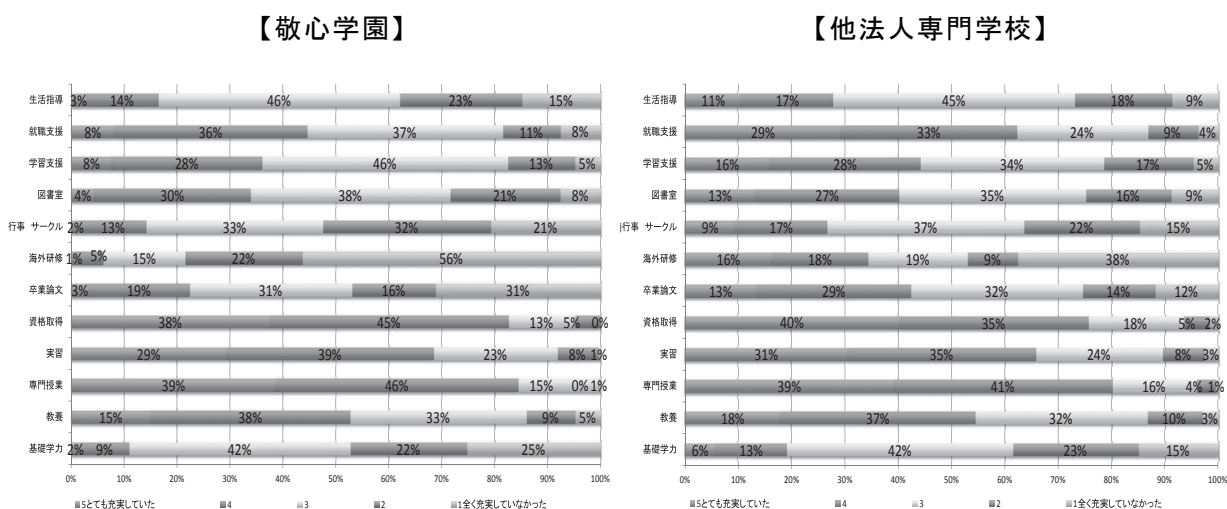


図4 在学時の教育指導の充実度

2) 学生として何にどの程度、熱心に取り組んだか

敬心学園の特徴としては、前項とも関連して、[評点5と4の回答合計比率]が資格取得85%，専門授業85%で、他法人専門学校の77%，76%よりも高い点が挙げられる。前述の通り、大卒・就業経験ありという学生の目的意識の高さ、学習成果へのコミットメントの強さ、モチベーションの高さの現れと推察する。

加えて、アルバイトの59%も他法人専門学校48%より高いが、これは学びながら自らの生計を立てるため、あるいは自ら学費負担を行うための活動と考えられる。

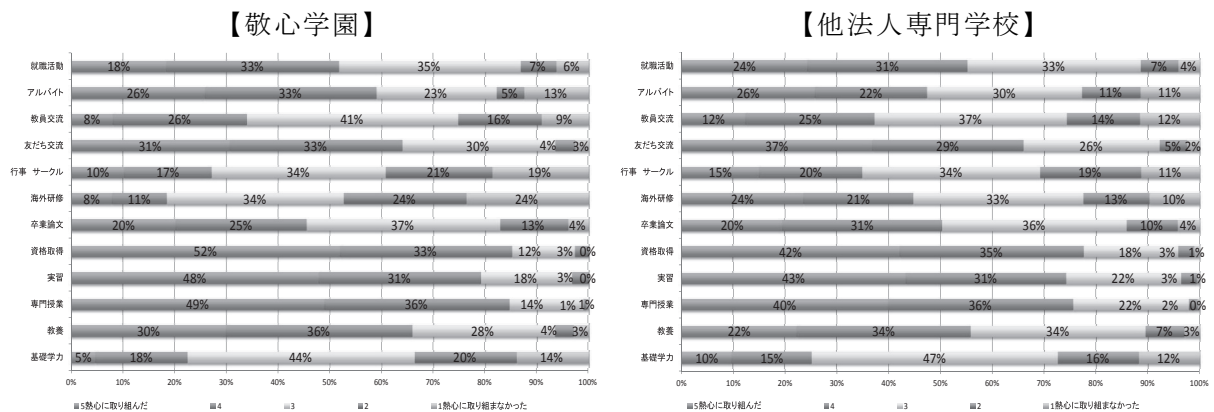


図5 在学時の学習・各種活動への取り組み

3) 授業における指導、対応等の状況

敬心学園の特徴は、学生参加型授業の[評点5と4の回答合計比率]84%が、他法人専門学校の58%を大きく上回っている点である。さらに、学生に意見や考えを求める授業も65%で、他法人専門学校の47%を上回る比率となっている。

これは、学園としてアクティブラーニング型授業を志向していることが一定程度、実践されていることの証左と思われるが、大卒で就業経験のある自立した主体性のある学生が多いことにより、アクティブラーニング型授業が展開されやすい環境であることも関係していると考えられる。

一方で、到達度チェックは[評点5と4の回答合計比率]が59%で、他法人専門学校の63%よりもやや低い比率となっていることから、学習成果の確認と未到達部分のフォロー等に向けて強化すべき課題と考える。

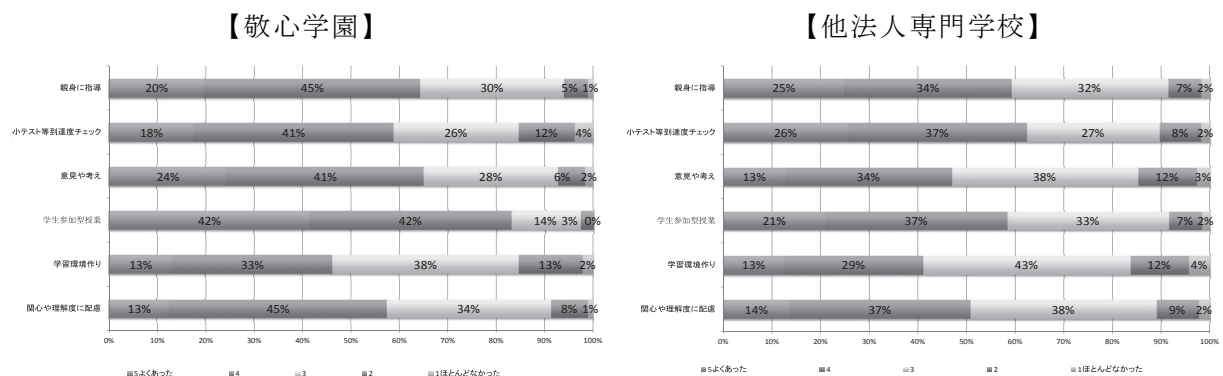


図6 授業における教員の指導、対応の状況

(3) 卒後の進路

1) 就業形態

専門学校新卒者の正規社員率は2013年において64.3%（厚生労働省 2013）であることから、敬心学園78%，他法人専門学校86%はともに、高い正規社員率である。

これは医療・福祉領域の人材マーケットにおいて求職者優位の需給バランスとなっていることが影響しているものとする。

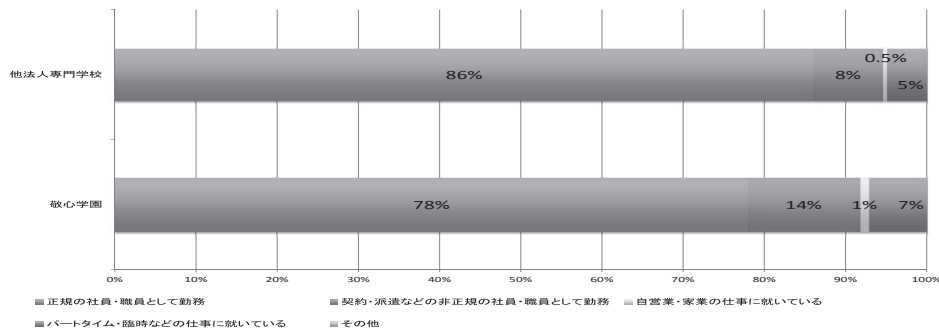


図7 就業形態

2) 初職の継続

2003年度～2012年度入職までの10年間の合計離職率が30%程度であるのは、非常に高い定着率と言える。理由として推察されるのは、自らのキャリアプラン・キャリア目標に基づく職業選択であったこと、仕事に社会的意義・価値を感じていること、学校の就職支援により、マネジメント体制や処遇条件、労働環境、人間関係等の比較的良好な事業所、勤務先を選択できたこと等である。尚、敬心学園と他法人専門学校との間には有意な差異はない。

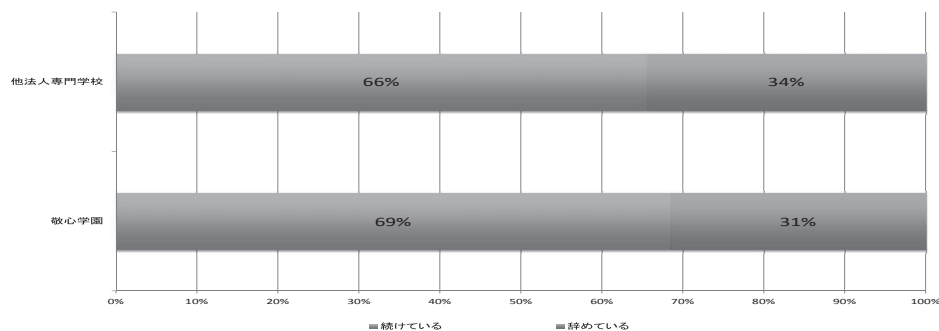


図8 初職の継続状況

3) 離職の理由

敬心学園の特徴として「ステップアップ」「やりがい」を理由とした離職が多い点が挙げられる。敬心学園の学生は大卒の就業経験者が多いが、これらの学生は専門学校を卒業して初職を得る他法人専門学校の学生よりも、年齢が高いこと、過去の就業体験もあること等から、よりやりがいや自身のステップアップを求める傾向が強いのではないかと推察される。

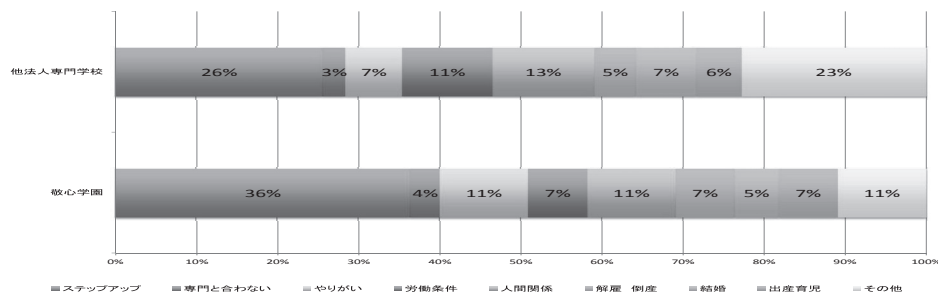


図9 離職の理由

(4) 現在の仕事

1) 就業形態

卒後の就業形態と大きな差異はない。正規社員比率は敬心学園79%，他法人専門学校82%と両者の比較においても，有意な差異は見られない。（図は割愛）

2) 職場での現在の地位

役職体系，役職昇進時期は，各組織によってまちまちであるが，2012年の本調査においては，2003年卒業・入職者が10年を経過したタイミングで，敬心学園，他法人専門学校ともに15%前後の係長昇進となっている。労務行政研究所（2010）「最新調査－昇進・昇格と降格（2009，昇進・昇格，降格に関する調査の報告）」によれば，新卒入社大学卒社員の係長職への昇進年齢は，制度上の標準で32.7歳（勤続10年程度），実在者の年齢平均で39.6歳である。敬心学園の入学者は「大卒で5年以上の就業経験」が中心層であることから，卒業時の年齢は30歳前後が多く，2012年時点の年齢は40歳前後の者が多いと推定される。これは勤続年次から見れば10年で，上記調査の制度標準に近く，40歳前後という年齢から見れば実在者平均に近い。

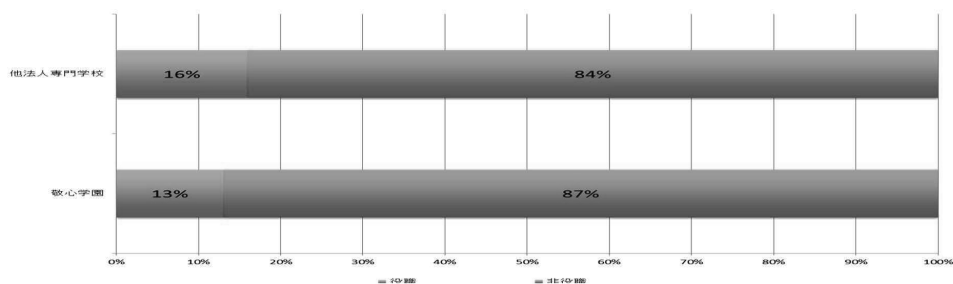


図10 役職，非役職の状況

3) 現在の仕事と専攻分野との関係

初職の継続者が多いこと，離職しても同職種への転職が多いことが，在学時の専攻分野と現在の仕事に関連している比率で敬心学園91%，他法人専門学校93%という高い値となっている理由と推察される。（図は割愛）

(5) 仕事や生活に必要な能力

1) 現在の仕事で必要とされる知識・技術・能力

〔評点5と4の回答合計比率〕の高い上位3項目は，敬心学園，他法人専門学校ともに，「コミュニ

ケーション（敬心86％，他75％）」「マナー 倫理（敬心74％，他69％）」「仕事の段取り（敬心73％，他70％）」である。

また，敬心学園の特徴としては，「課題発見し問題解決する能力（敬心67％，他52％）」「チームワーク リーダーシップ（敬心67％，他61％）」も高い比率である点が挙げられる。

現在の専門学校教育においては，「仕事の段取り」「課題発見し問題解決する能力」「チームワーク リーダーシップ」といったビジネススキル系の科目や授業はあまり行われていないと思われるが，今後の教育改善の取り組みの中で，これらのスキルや知識を身につけさせる教育も検討すべきと考える。

敬心学園においては，今回の調査対象とはなっていないが，保育士養成を行う学校で，「保育マネジメント」というオープン科目を2016年度より設置しているが，このような職業実践色の濃い授業を更に充実させる必要があるだろう。

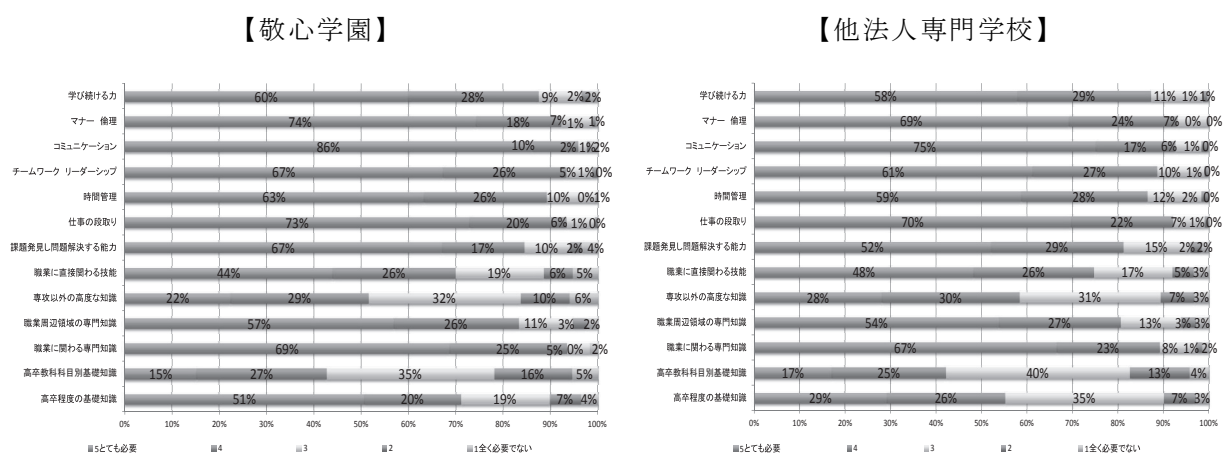


図11 現在の仕事で必要とされる知識・技術・能力

2) 仕事や生活で必要な知識・技術・能力をどの程度身につけているか

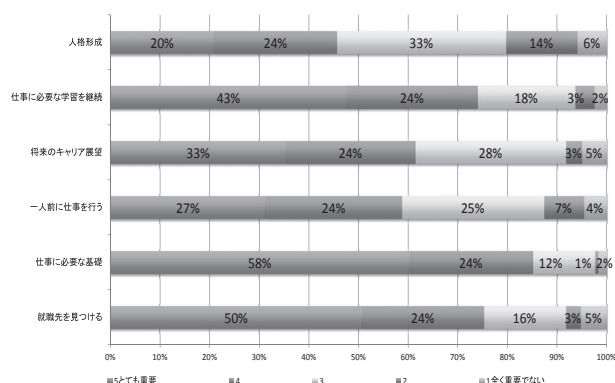
〔評点5と4と3〕まで含めると，求められる項目の上位項目である「コミュニケーション」「マナー 倫理」「仕事の段取り」は，概ね70%前後の比率となっているが，「十分身につけている」と自信をもって回答した比率は25%前後に留まっている。（図は割愛）

(6) 在学時の経験を総合的に振り返って

1) 在学中の経験の重要度

〔評点5と4の回答合計比率〕の上位3項目が，敬心学園，他法人専門学校ともに，「仕事に必要な基礎（敬心82％，他82％）」「仕事に必要な学習を継続（敬心77％，他74％）」「就職先を見つける（敬心74％，他76％）」であることは妥当な結果と思われるが，仕事に必要とされる知識・技術・能力との関係でいえば，「一人前に仕事を行う能力（敬心51％，他63％）」の比率が低い点が，敬心学園における今後の教育改善ポイントと考える。

【敬心学園】



【他法人専門学校】

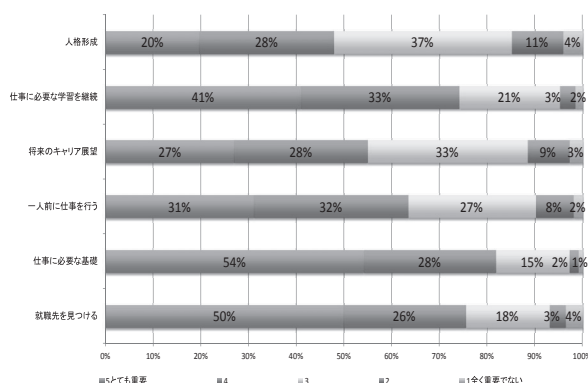


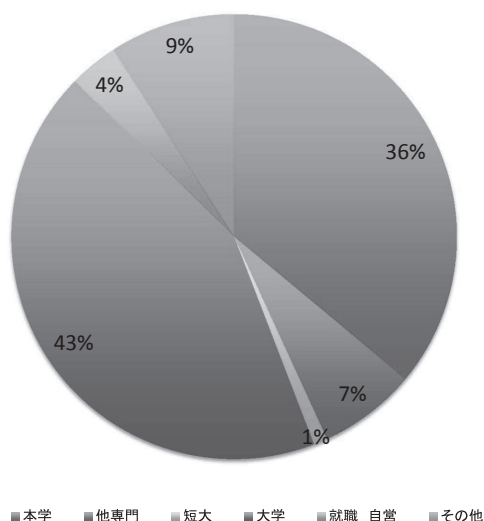
図12 在学中の経験の重要度

2) 進路再選択の回顧的評価

敬心学園、他法人専門学校ともに「大学」が約4割を占めていることは専門学校経営上、課題認識すべき結果である。敬心学園では大卒・大学院卒が約7割であるが、その回答者たちが、やり直すとしても再び「大学」を選択し、主に高卒者中心の他法人専門学校でも、やり直す場合は「大学」を選択する比率が高い。

今後、職業教育の高度化に向け、新たな学校種（専門職大学）が設置されるが、このことも含めて、専門学校を中心とした職業教育機関が徹底して産業界ニーズに基づき、企業と密接に連携し、職業実践度の高い、質保証体制を整えた職業教育を実施しなければ、これまでの大学に対する競争優位性を獲得することはできないと考える。

【敬心学園】



【他法人専門学校】

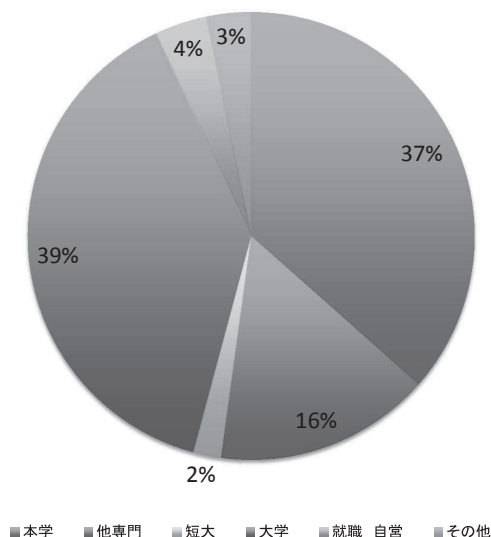


図13 高校卒業後の進路選択をやり直す場合の進路

4. 教育プロセスと満足度・獲得能力との関連性

表1 在学中の教育指導の充実度・満足度とアウトカムの関係（敬心学園と他法人の比較）

	学業 授業以外での学習時間(授業期間中) 在学中の成績	総合的に振り返って 本学に対する満足度		アウトカム									
		就職先を見つける上で		仕事に必要な基礎を身につける上で		仕事で一人前になる上で		将来のキャリアを展望する上で		仕事に必要な学習を続けていく上で		人格を形成していく上で	
		他法人専門学校	敬心学園	他法人専門学校	敬心学園	他法人専門学校	敬心学園	他法人専門学校	敬心学園	他法人専門学校	敬心学園	他法人専門学校	敬心学園
学業					0.172 *			0.152 ***		0.103 *	0.160 *	0.082 *	
学習指導 の充実度	高校までの基礎学力を学び直す授業や指導	0.104 *	0.157 *										
	知識を広げ教養を身につける授業			-0.104 *									
	専門の授業(講義や演習)	0.214 ***	0.488 ***	0.151 **		0.246 ***	0.335 ***	0.192 ***	0.226 *	0.140 **		0.148 **	0.152 **
	仕事現場や地域での実習や就業経験				0.358 ***								
	資格取得に関わる準備・指導	0.106 *		0.173 **		0.200 ***		0.122 *		0.143 **	0.320 ***	0.179 **	0.216 *
	卒業論文、卒業制作、卒業発表												0.145 **
	海外研修や留学のための機会や指導												0.248 **
	部活やサークル、学校の行事												
就業状況	図書室、情報機器、実験器具などの施設設備	0.109 *										0.203 ***	
	学習支援(学習の仕方や理解度についての相談・支援)		0.197 *					0.212 *					0.179 *
	就職支援(就職活動についての相談・支援)	0.247 ***		0.375 ***		0.236 ***		0.280 ***		0.240 ***		0.271 ***	0.258 **
	生活についての相談	0.165 ***										0.217 ***	0.191 *
	就業形態(初職)			-0.105 *									
	現職(直近の1年以内を含む)の就業形態												
	現職(直近1年以内を含む)の年収												
補正済みR ²		0.448	0.401	0.302	0.142	0.305	0.106	0.280	0.124	0.176	0.112	0.243	0.152
													0.257
													0.189

*:p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

専門学校における教育プロセスと獲得した能力を調べるために、目的変数を満足度および獲得能力の6項目とし、説明変数を教育プロセス17項目とした重回帰分析を行った。

重回帰分析を行うにあたっては増減法を用いて変数選択を行ったところ、表1の結果が得られた。この結果から、他法人専門学校と比較しての敬心学園の特徴について考察・分析する。

(1) 項目毎の分析

1) 本学に対する総合的な満足度

総合的満足度に関する規定因子として、敬心学園において最も有意なのは、「専門の授業」であり、他法人専門学校との比較においても高い有意性が見られる。その他では、「学習支援」「高校までの基礎学力を学び直す授業や指導」が有意性を示している。他法人専門学校でも「専門の授業」「高校までの基礎学力を学び直す授業や指導」は敬心学園同様、有意となっているが、本学園とは異なる点として「就職支援」「生活相談」が高い有意性を示していることが挙げられる。

2) 就職先を見つける能力(就職活動能力)の獲得

敬心学園においては、「仕事現場や地域での実習や就業経験」が高い有意性を示す因子となっている。一方、他法人専門学校では、「就職支援」「資格取得に関わる準備・指導」「専門の授業」が有意な因子となっている。

3) 仕事を行う上で必要な基礎的能力(基礎的職業能力)の獲得

敬心学園においては、「専門の授業」が高い有意性を示す因子となっている。一方、他法人専門学校では、「専門の授業」は共通しているが、その他として「就職支援」「資格取得に関わる準備・指導」が有意な因子となっている。

4) 一人前に仕事を行う能力（実践的職業能力）の獲得

敬心学園においては、「専門の授業」と「学習支援」が有意性を示す因子となっている。一方、他法人専門学校では、「就職支援」「専門の授業」「資格取得に関わる準備・指導」が有意な因子となっている。

5) 将来のキャリアを展望する能力（キャリアデザイン力）の獲得

敬心学園においては、「仕事現場や地域での実習や就業経験」が高い有意性を示す因子となっている。一方、他法人専門学校では、「就職支援」「資格取得に関わる準備・指導」「知識を広げ教養を身につける授業」が有意な因子となっている。

6) 仕事に必要な学習を続ける能力（学習継続力）の獲得

敬心学園においては、「就職支援」「仕事現場や地域での実習や就業経験」が有意性を示す因子となっている。一方、他法人専門学校では、「就職支援」の有意性が最も高く、「資格取得に関わる準備・指導」「専門の授業」がそれに続く有意な因子となっている。

7) 人格の形成（人格陶冶力）の獲得

敬心学園においては、「仕事現場や地域での実習や就業経験」「学習支援」「生活相談」が有意性を示す因子となっている。一方、他法人専門学校では、「生活相談」「図書室、情報機器、実験器具などの施設設備」が高い有意性を示し、「資格取得に関わる準備・指導」「知識を広げ教養を身につける授業」がそれに続く有意な因子となっている。

(2) 上記7項目に関する全体的特徴

1) 本学園、他法人専門学校に共通する特徴

「専門の授業」が総合的満足度、基礎的職業能力、実践的職業能力の獲得に有意であること。

2) 本学園の特徴

「仕事現場や地域での実習や就業経験」が就職活動能力、キャリアデザイン力、学習継続力、人格陶冶力に有意な因子であること。

3) 他法人専門学校の特徴

「就職支援」が人格陶冶力を除き、全ての能力獲得において高い有意性を示していること。「資格取得に関わる準備・指導」が全ての能力獲得において有意な因子となっていること。

5. まとめ

(1) IR 調査分析の意義

- ①卒業生の評価に基づいていること
- ②就業後の業務実践の中で、在学時の教育の有効性を振り返っていること
- ③エビデンスベース（定量数値）で、教育評価の実態を明らかにしていること
- ④同分野他法人専門学校との比較検討を行っていること

(2) 調査結果に基づく敬心学園の教育の特徴と改善に向けての考察

NO	調査結果から確認された特徴	対策方針，備考等
1)	学生の属性として、「大卒⇒就業経験5年以上⇒学び直し層」が非常に多い。	専門性獲得における目的意識が明確で、資格取得志向の強い大人の社会人が中心的な学生像。これにより学生の学校、教育、教員への期待値が高いことが推察されることから、これを前提とした教育のあり方、レベル設定等が求められる。
2)	他法人専門学校の学生と比較し、本学園の学生が評価している教育は、資格取得に繋がる教育や専門授業である。就職や生活相談等の指導・支援は低い評価に留まっている。	強みである資格取得や専門授業を徹底して磨く戦略をとるべきで、就職支援や生活指導に対応を広げて、力を分散すべきではない。戦略は「集中と選択」に基づかなければならない。
3)	授業のあり方に関しては、学生参加型授業、学生に意見や考えを求める授業が、他法人専門学校と比較して、非常に高い数値となっている。	上記2)と同様、本学園の競争優位となる重要点であり、今後、徹底した強化、深掘りをすべき。
4)	現在の仕事上で必要とされている知識、スキル、能力は、業務実践に求められる「仕事の段取り」「課題発見・問題解決力」「チームワーク、リーダーシップ」等のビジネススキルである。	本学園においては、これまで十分に組みができていない教育領域であることから、今後、強化が必要。産業現場における専門実践人材の養成上、非常に重要な教育である。
5)	高校卒業後の高等教育をやり直す場合に、大学を選択する比率が高い。	「高校⇒大学⇒専門学校」が「高校⇒専門学校」というステップとなるよう大学に対する競争優位性を獲得しなければならない。専門学校間の募集競争に勝つ戦略だけでは不十分。徹底して産業界と連動、連携し、産業現場の変化に的確かつタイムリーに対応した職業実践度の高い高度な職業人を養成する教育を推進すべき。教育プログラム、カリキュラム、方法論の改善、教員力の向上が必要。

(3) 本学園のとりべき戦略

上記に基づき、敬心学園としては、社会人（大人）の学び直し層をメインターゲットに置き、「専門授業強化」「資格取得支援」「アクティブラーニング推進」「産業界との徹底連携」「現場実践コンピテンシー修得」を重点方針とした本格的な『プロフェッショナルスクール』を目指す経営戦略をとるべきと考える。

【注】

- 1) 卒業生調査にあたっては、九州大学「高等教育と学位・資格研究会」が開発・実施したwebアンケート調査システムを利用した。調査参加機関の中から、相互IR分析に賛同した専門学校17校が参加する「専門学校IR研究会」が発足し、同一分野内での比較検討を行う共同IRの合意が得られたデータをもとに分析を行った。その研究会において、参加者が各自の学園・専門学校の分析を行い、吉本圭一研究代表（九州大学）の指導・助言を得た。

【参考文献】

- 厚生労働省，2013，「平成25年若年者雇用実態調査」(<http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/4-21c-jyakunenkyouyou-h25.html>，2016.5.25)
- 労務行政研究所，2010，「最新調査——昇進・昇格と降格」『労政時報』第3771号：18.
- 吉本圭一編，2018，『卒業生調査を通じた学修成果とコンピテンシー——短期大学・専門学校17分野55機関によるIRモデルへの試み——』，九州大学第三段階教育研究センター「高等教育と学位・資格研究会」ワーキングペーパーシリーズNo.4.

第4章 卒業生調査結果による専門学校教育の検証 —— 専門学校教育の質の向上とは何かを考える ——

前 鼻 英 蔵（学校法人西野学園）

はじめに

専修学校専門課程（以下「専門学校」という）の教育の質をどう計るか。現在大学・短期大学（以下「大学等」という）には7年に一度、第三者による大学認証機関のチェックを受けなければならないが、専門学校のそれはない。また、教員の資質向上の取り組みであるFDへの取り組みに関して専門学校には義務付けられていない。進学する高校生、その保護者、そしてその生徒に進路指導する高校教員が大学と専門学校とを進路先の教育内容を比較する指標は、大学なのか専門学校なのか、という言葉でしかない。専門学校は、これら質的なことに関する指標も教育内容も含めた情報開示は努力義務でしかない。今回2012年に行われた九州大学「高等教育と学位・資格研究会」（研究代表・吉本圭一）が開発・実施したweb調査（調査名「卒業生のキャリアと学校評価に関する調査プロジェクト」）¹⁾に参加することが出来たため、その結果から自学園の卒業生は専門学校教育がどうなのか、自学園の教育の特徴とは何か、それらは他学園とどう違うのか、などの結果を踏まえ検証した。更にその結果から専門学校教育の質保証に対して今後取り組むべき課題を提言していく。

1. 専門学校卒業生調査実施の背景

「専門学校の質が大学と比較して分からない」という高校の進路指導教員から発せられた言葉は、およそ20年前に筆者が訪問先の高校で直接言われたことである。昭和50年専修学校法が制定された後、まもなく専門学校は位置づけが曖昧な中にあった。法律上学校で無い学校ではあったが、1990年代初頭までは専門学校は大学不合格者の受け皿として位置づけられていた。一方で、当時専門学校在籍者が多い分野として工業分野があったが、特に1980年代半ば以降のSE技術者養成不足という時代背景により、素早く対応したのが専門学校であった。この頃から、そういった需要側供給側両面の要因により、学校新設、学科の増設があり、今日に至るまでその時々時代の時代背景による栄枯盛衰を繰り返し続けている。

このように時代の即応性に対応できる職業人育成機関としての特性は、産業界に必要な人材を供給する機関として、世間は専門学校を位置づけ、我が国にとっての職業人教育として必要な高等教育機関と同等のポジションを確立し始めた。しかし、それが求められている人物像として全国一定のレベルで輩出されてきたのかは誰も確かめていない。ただし、国家資格を取得する学科においては、国家試験という全国同一テストの合格により、学力の面では一定レベルに到達度がわかる。それ以外の部分、技術・技能の部分や学生生活の部分などは全く検証されてこなかった。それ故、同業他校もさることながら、同様な学科を持った大学との比較もされてこなかったのである。

今回、2012年に九州大学吉本教授のもと、複数の学園学校とともに定性的にアンケートを実施し、

その結果を考察することにより、自学園の強み弱みや現状の満足度、また学生の不満などを理解することが出来、それを今後の学習環境の改善や教員研修の視点にもなる。経営改善にも重要な示唆を表すものとして参加した。

2. 養成学科の増加の要因は何か

新設学科が増える要因を考える上で、バートン・B・クラーク（1994）による「高等教育システム」による大学設置の影響要因から鑑みると、①国の働きかけ、②供給不足による社会ニーズ、③学校存続のため、の三つの方向から考えることが出来る。高等教育機関における設置の可否は、長く文部科学省の意向が決定づけられてきた。日本において医師・歯科医師・獣医師・教員及び船舶職員の養成に関しては先の三つの点に関わらず、定員増規制がされている（文部科学省 2003）。それ以外の学科に関して規制はない事になっている。

総務省から発表されている平成22年国勢調査において、全産業分類における医療福祉系就業者の割合は、平成7年の5.6%から10.3%と1.8倍の増加しており、それ以前の増加率と比較しても大幅に急増している。また、平成22年までの他産業就業者割合が減っている中で、そこだけ顕著に増加していることがわかっている（総務省統計局 2010）。医療従事者を養成する機関は、専門学校と一部の短期大学であった。その理由として、養成課程が3年以上という年限であった、平成10年判決²⁾ 以前まで学科の新設は行政によりきつく制限されていたが撤廃されたから、という2点がある。また、昭和の終わり頃から平成にかけて新たな医療技術者の国家資格が生まれ、それを背景に医療系の学科が増設された学校の増加があったが、近年そこに大学も参入してきた。

そこで、その背景に関して、規定撤廃における学科増設という点と、新規資格による増設、更に新規参入というものがあつたと考え、この3点について下記に述べる。

(1) 養成校の設置規制から規制撤廃による増加

平成10年以前は、認可計画書において地域の需給状況を申請者が独自に調査しそれを行政が判断する形で行われていた。その協議に於いて行政側は、需給バランスが取れている、ないしは過剰であると判断されれば認可申請書を提出することが不可能であった。例えば筆者の学園が養成していた臨床工学技士養成は、全国を7ブロックに分け、関東圏関西圏は2校ずつ、その他のブロックごとには1校と割り当てが決まっており、それ以上の開設は認められていなかった。当時の厚生省が窓口になり、このように全国をブロックに分け養成を制限していたものとして、ほかに鍼灸・柔整・あんまマッサージ師の養成校も同様であった。ブロック制を敷いていない学科は地域の実状を需給バランスで勘案して規制していた。

しかしながら、平成10年判決²⁾ 後の翌年度からこれまで制限をかけられて開設できなくなった学科が申請条件を満たしてさえいれば設置可能になったため、全国的に専門学校の開設、学科の増設が急増した。なかでも美容師、鍼灸師、柔道整復師、看護師、理学療法士、作業療法士などの厚生労働省所管の学科設置が急増した。特に、看護師、理学療法士、作業療法士は大学の新規設置学科に多大なる影響があり、文系大学でもこれらの学科設置するまでに至った。

これを養成数の統計数字が正確に発表されている理学療法士養成に限ってしてみる。公益社団法人

日本理学療法士協会（2013）によれば、平成25年3月現在の養成校や有資格者の推移をみると、過去20年間で養成校は3.8倍に増加している。この養成校増加に伴い有資格者を年齢別にみると、30歳未満が全体の48.3%を占めており、いかに近年の養成校の増加により特にここ10年での増加が著しい事がわかる。

養成校別にみると、専門学校が46校から148校へ3.2倍増で、大学が3校から95校へ約32倍も増加している。先述したように、歴史的にみても当初の養成校は短期大学ないし3年制の専門学校が主体であった。近年短期大学の4年制化と既存大学の新規参入により大学での養成が急増したため、専門学校に比べると大学の方が増加で顕著であった。その理由として、法律上では3年制以上での養成でいいが、業界内部から業務の高度化によりカリキュラムの増加に対応するため、4年制により研究職への高度人材育成への流れ、入学生が集まる新たな学科を探していた、という3点に集約され则认为る。

（2）新規資格制度創設による増加

医療系では、昭和62年臨床工学技士法・義肢装具士法、平成3年救急救命士法、平成9年言語聴覚士法が制定された。福祉系では、昭和62年に社会福祉士及び介護福祉士法、平成9年精神保健福祉士法が制定され、特に介護福祉士養成はこの後の高齢者福祉施設の増加による求人増に伴い、養成校が急激に増加した。このような背景により、また病院形態の変化・改編により医療従事者の業務が高度化し、その業務に対応する需要が伸び、結果として供給側である養成校を増加させた。例えば、リハビリ系でいうと、平成12年医療費改定により回復期リハビリテーション病棟という新たなカテゴリーが新設され、そこで従事する理学療法士・作業療法士が全国で大量に求人が伸びたため、それに呼応するかのように養成校が増加し、それらを含め15年間で1.8倍増加していったと理由が考えられるのである。

（3）学校存続による増加

先に述べたB・クラーク（1994）の分類でいけば、上記2点は相互に要因の①、②と密接に絡んでいる。新規資格の創設は国の動きによるものであるし、その創設に関しては社会ニーズの高まりや業界団体からの働きかけがあった。しかし、③の要因である事とは相容れない。大学と専門学校とでは、その存続のための新規開設は開設までのスピードにより開設する学科が異なっていたからだ。急増の要因が先述した医療系は必要度があったが、他職種の養成校が対応する業種・産業界からの強いニーズによるものであったかは断言出来ない。それを分類するともう二つの方向性が見えてくる。

①媒体や流行による職業ブーム

例えば、昭和60年代のSEブームの終焉後は調理師ブームがあったが、これは平成5年から始まったTV番組による影響があった。この頃の専門学校進学ブームは、その時代にヒットしたTVドラマや映画の主人公の職業が注目される事により志望者数が増減し、専門学校のそれは特に影響を受ける事が多かった³⁾。また、その時代でブームなる職業に対しても専門学校の動きは速く、その結果として募集が集まるという現象が起きた。

②少子化による生き残りをかけた新設ブーム

団塊ジュニアの層がピークになった平成4年の18歳人口は205万人であった。平成27年の18歳人口は

120万人と40%以上減っている。専門学校入学者数は36万人から27万人へと25%減少したが、大学入学者数は54万人から62万人へと約15%増加している。要因として新設大学が増加している事が原因である。例えば看護学科を新設している大学は、20年で約20倍以上増加しているが、もともと医療系でない大学の看護学科新設する例もある。先述した理学療法士のように医療系の学科設置のブームが要因である。また、短期大学の進学者が25万人から6万人に75%以上大幅に減少しているが、これは短期大学部として学部編入したケースと大学化したケースとがあるが、どちらにせよ大学化した事による減少である。大学も学生確保の観点から、特に専門学校で学生募集が集まっている医療系を中心に新設してきたことが大学進学者の増加の要因の一つである。

以上の事から、バートンの3つの分類における要因それぞれが学科開設の要因であり、相互に密接に絡んでいることが理解できる。また、その時代のニーズに即応した人材育成という専門学校が主体的に取り組んできた学科に大学がなりふり構わず存続のために新規に増設してきた。しかし、人材の移動は都市部に向かうことが予測され地方都市における人材供給として成り立っているかは、ここでは議論できないが、重要な要素である。専門学校進学者が卒業後地方都市への人材供給をしていたが、大学進学者が増加するようになって地方都市への、いわばUターン組が減っている現象が起き始めている。このような要因も含めて今後の議論に期待したい。

3. 専門学校教育の質向上への過程

ここまで、専門学校と大学の養成学科の設置について様々な角度から検証してきた。ある分野で供給不足という要因での学科増設が専門学校だけでなく大学に広がっている現在、学生が集まるという観点からも、専門学校の独占場であった学科に大学が多く参入している現状である。そのような状況の中、専門学校と大学を選択する上で比較になるものは何であろうか。

企業経営であれば、同じような製品があった場合、消費者の比較選択肢は、「ブランド」「価格」「価値」などで、製品はその消費者の嗜好に合わせた開発を経て世の中に出ていく。製品が市場に出た後も、モニタリング調査などで製品の満足度を測り、さらなるいい製品を開発していく。このように製品開発のPDCAサイクルを経るわけだが、製造品に関しては工場に於いて品質管理が徹底的になされ、その作業工程に於いても作業の効率化を図るための日々の努力を集約しながらコスト管理意識を醸成している。このような開発から製品化、その後の改良に至るプロセスは一般企業に於いて様々な研究成果があり、実践化されていることは言及するまでもない。

高等教育機関に於いて、このプロセスをそのまま導入することには違和感があり、「学生はモノか」という批判も免れない。しかしながら、教育機関におけるアウトカムは何であるかと問われ、そのアウトカムにおける質の保証を問われれば、こうであるという指標と共にある程度の基準を満たすものを出せるのかということ、これまでの所、指標となるような事は、国家資格の合格率やどんな資格をどれだけ取れたかなど位しかない。ましてや、専門学校と大学の同学科同士を比較するときは、「大学か、専門学校か」という単純な図式以外での比較がない。

専門学校側も大学に遅れること平成14年に「情報の積極的提供の義務化」、平成16年に「財務情報の公開の義務化」、平成19年に「自己評価の義務化等」と行ってきたが、大学側の平成23年から施行された「学校教育法施行規則等の一部を改正する省令（文部科学省 2011）」により、情報公開内容がより

細分化され、進学雑誌でも載っていない大学の本質的な指標を公開されることにより、他大学との比較化が一気に進んだ。この大学側の動きは専門学校側の情報公開の動きを上回っており、「専門学校か大学か」という論議に共通項がないため進まなかった。

そこで、専門学校側は平成25年創設された、文部科学省から認定を受ける「職業実践専門課程（文部科学省 2013）」がある。同課程は、「専修学校の専門課程であって、職業に必要な実践的かつ専門的な能力を育成することを目的として専攻分野における実務に関する知識、技術及び技能について組織的な教育を行うものを、職業実践専門課程として文部科学大臣が認定して奨励することにより、専修学校の専門課程における職業教育の水準の維持向上を図ることを目的とするものです。」と定義づけられており、職業教育の質の保証・向上を目的に創設されたものである。この規程中には専門学校として初めて情報公開が義務づけられた事は画期的な事であり、先述しているように様々な情報が透明化したことにより、大学との比較もし易くなった。特に財務諸表は多くの学校法人が公開したくない部分でもあったため、積極な対応は即法人の真摯な態度として評価されている所でもある。情報量としては大学側と専門学校側との差はなくなり、今後の議論が待たれる。

4. IR としての卒業生調査

既存校と新設校、もしくは医療系専門学校と新規参入してきた医療系学科を増設した大学と、その教育力などに差はあったであろうか。然るに、卒業後の方向性として研究職という高度人材養成という部分以外に、アウトプットに対する差は何であろうか。だからこそ、その教育的水準としての質の担保保証がされており、産業界のニーズに即応出来る人材を供給出来る教育機関である事かどうかが、本来の学校選択をする基準ではないかと考える。では、職業人養成校として社会の付度に答えるためにも、高等教育機関としての質の保証・向上は何を目指すべきなのか。

設置主体が専門学校であるか大学であるかの差はあれ、例えば両校とも国家試験合格率100%であった場合、ここに「どういう差があるか」を言えるものはほとんどいない。最近の高校の進路指導の主流の言い方として「とりあえず大学へ」という進路指導には、専門学校と大学の差のない所を考慮せず、大学というブランドのみに頼った、指導とはほど遠い概念で学生を誘導している。このような状況の中、専門学校の質は大学の質とどの程度差があるのか、きちんと分析をし、学生、高校、就職先と関連する所へ知ってもらう事が我々専門学校業界にとって重要である。

いわゆる資格を沢山取れば就職出来るというキャッチフレーズを持った専門学校があるが、資格を取ることが目的であり、社会人として何をするのかという命題には一切答えていない。確かに一時期資格も無いのに、という事で就職するには資格が必要である事が喧伝されて、多くの資格が取れる専門学校に学生が集まったのは事実である。筆者はそのような学校を「資格取得予備校的専門学校（以下、予備校専門学校）」と呼んでいる。一方で、取得は確かに重要な事であるが、取得後どのような知識・技術・技能を持ちながら、社会人としてどう仕事と向かうかを学ぶ方向にある学校を本来の職業人養成専門学校と呼びたい。なぜなら、社会ではその業務を担える人材を要求しているのであって、必要な事は「その資格を取得して、何が出来るのか」ではないかと考えるからだ。それが社会の付度に答えることが出来るのではないかと考える。

しかしながら、この職業実践専門課程は内部的な自分たちの姿、つまり経営者と教職員との取り組

みが第3者等を通してどうだったのか、という点で述べられているものであって、最大の利害者である学生本人の声がそのまま反映されているわけではない。学生の声が反映されるものとしては「授業アンケート」があり、在学中の結果を元に授業のPDCAサイクルとして活用法はある。職業人養成校として、果たしてその業界に必要であった知識・技術・技能が身について、その業界で活躍しているのか、在学中に学び足りなかったものは無かったか、もっと学びたかったものはないのか、など卒業して初めて分かることに関してのフィードバックは全くなかった。もちろん、科目課程編成委員や学校関係者評価委員には就職先である産業界からの委員が存在しており、その委員から出来上がり像に対する評価を受けることになっているため、職業実践専門課程認定の学科は必ずしも自己満足に終えてはいない。

この事により、卒業生調査を実施し、自学園の満足度はどうであったのかを知ることは、得てして教員の自己満足で終わる授業内容に適切なブレーキをかける格好の材料になると考える。教育を物差しで測れないのではなく、的確に計れる物差しさえあれば、教育者で無い経営者が教育者に対する指導にも合理的な理由も出来るものと考えるのである。その教育機関を一方的で見ただけで無く、多方面から評価することにより、自分たちの希望と結果に対して必要な評価になっていくものと考えるのである。そのような事から、今調査分析は今後の専門学校の質保証・向上にも多大なる影響と示唆を示してくれるものとして、本学園は調査協力をし、分析することにより自学園の強さや足り無さに対して真摯に向き合うことが出来るものと考え実施した。

5. 目的

2012年に九州大学「高等教育と学位・資格研究会」(研究代表・吉本圭一)が開発・実施したweb調査システム(調査名「卒業生のキャリアと学校評価に関する調査プロジェクト」)を利用し、本学園にある4校の2001年～2012年にかけて卒業した卒業生296名からの有効回答を得た。本学園は医療・福祉系の学校が系列であり、卒業後もそれぞれの資格を取得した後、ほぼ全員その資格を活かしてその業界で活躍している。医療・福祉系の場合、卒業後患者や入所者を対象に仕事をするが、人は多様性に富んでいるため誰一人として同じ症状・状態では無い。そのため、学校での基礎知識・技術・技能は最もベーシックなタイプにのみ対応出来るが、そこから外れる場合は、アレンジないしはさらなる研鑽を積んだ上での対応となっていく。いずれにしろ、所属先での研修や自勉強を繰り返さないと出来ない仕事ではあるので、就職時におけるレベルは一定以上必要になる。それを図るものとしては国家試験があるが、あくまでも知識レベルのものであって、技術・技能がどうかというのは、その養成校ごとの違いはあることは本学園の就職先インタビューを行って初めてわかるという程度である。故に、何が出来て、何が出来ていないのかは、非常に大きな問題であり、養成校の資質が問われている部分である。だからこそ、卒業生自身が自校での学生生活を振り返った場合、その満足度というのは、ひとえに成果として出来る力がどの程度であったのか、という資質の指標になり得ると考える。

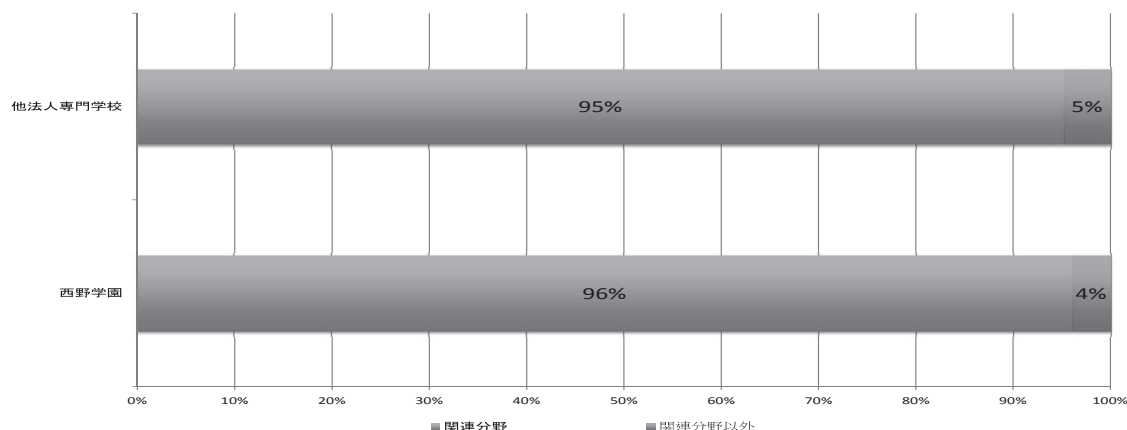
今調査は、本学園以外にも同じ医療・福祉系の二法人とも比較検討した。それぞれに特徴があり、今後の参考になる所もあった。今回の調査で、在学中の環境や取り組み、結果として満足度がどうだったのかを検討し、今後の学校教育に生かしていく方向性を見いだしてみた。

6. 結果・考察

(1) 卒業生のキャリアパス

C.卒業後の進路・職業経歴について

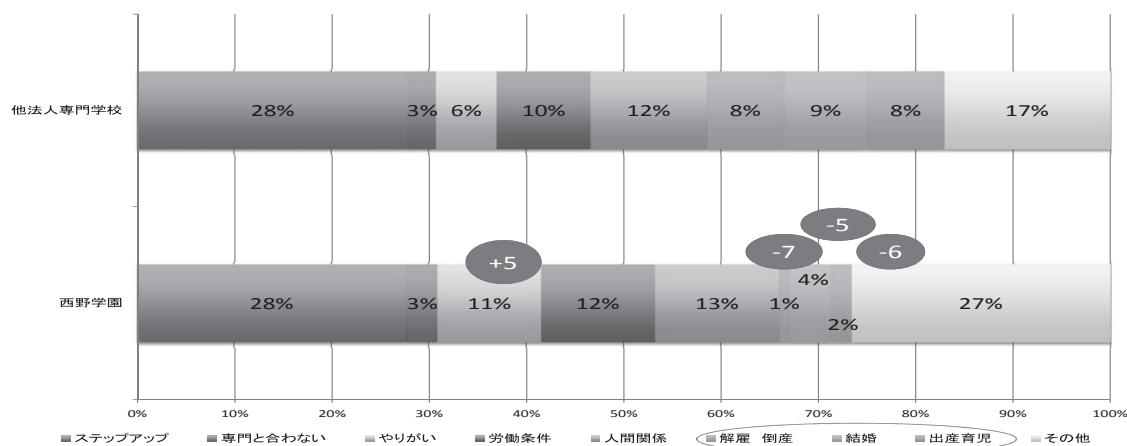
その仕事（初職）は本校で、専攻した分野と関連がありますか？



傾向は他法人も同じであり、ほとんどの卒業生が関わりある分野に就職していることが分かる。

C.卒業後の進路・職業経歴について

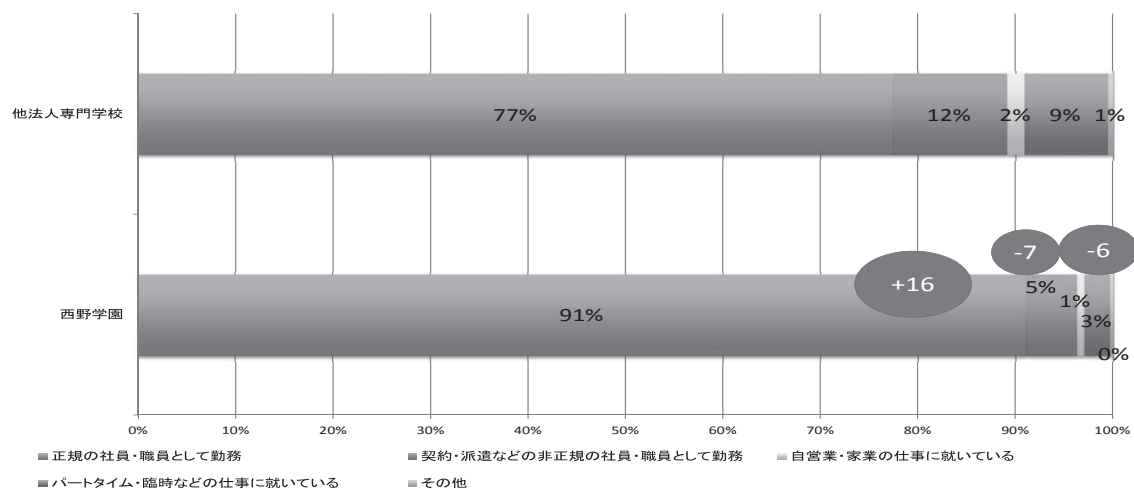
その仕事（初職）を辞めた理由は何ですか？



本学園の卒業生は、他法人と比べやりがいを求めて転職するケースが5ポイント高かった。この中には非正規から正規への変更が多くある。また、倒産は他法人とは7ポイントも差があり、比較的経営が安定した職場に勤務していることがわかる。また、結婚・出産育児も他法人より5ポイント、6ポイント低いことから、多くの者が結婚後も勤務し、出産育児休暇が比較取りやすいのか、子育てしながら勤務している実像が見える。背景としては、それなりな勤続年数により戦力として職場から期待されていると考えられることと、反面ベテランが辞められると質が維持できないため休暇後も勤務を切望されていると考える。

D.現在の仕事について

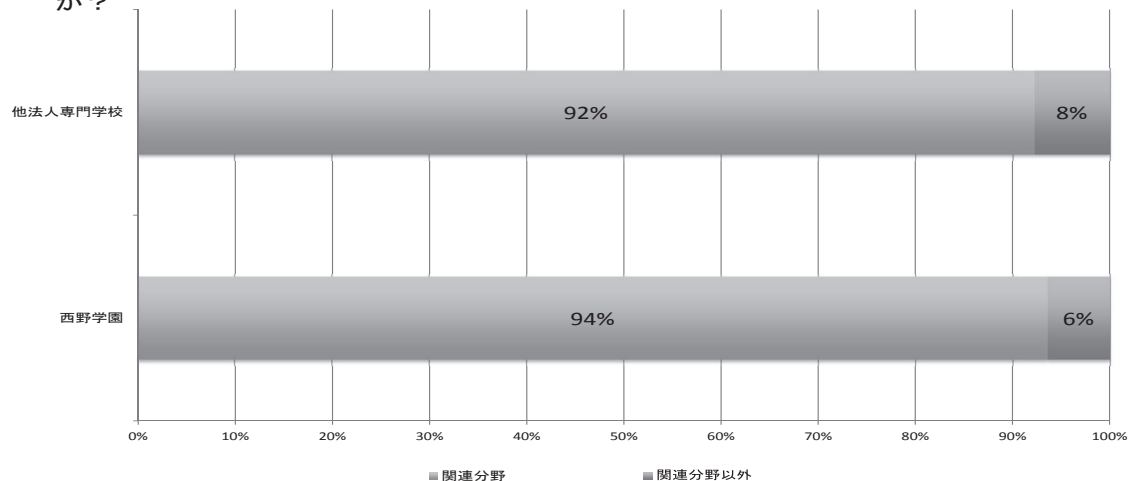
現在の仕事（直近の1年以内を含む）の就業形態について



本学園は、正規職員としての雇用がほとんどであり、他法人に比べ高い水準である。都市部と地方部の差はあるかもしれないが、ここでは読み切れない。

D.現在の仕事について

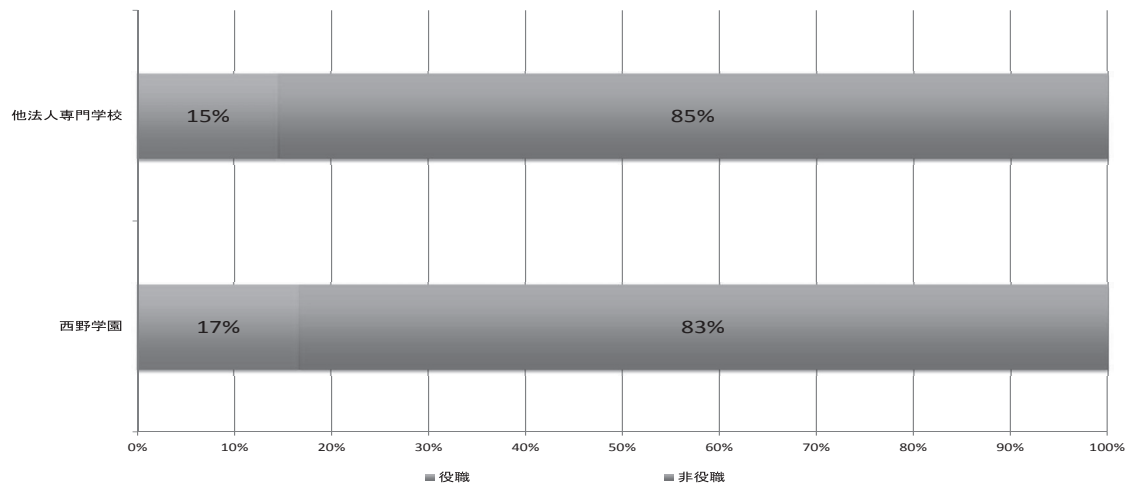
現在の仕事（直近1年以内を含む）は最終学歴で専攻した分野と関連がありますか？



他法人と同水準であるが、前の質問と勘案すると、学校で学んだ内容を仕事に生かして、そして安定的に就職しているという姿が浮き彫りになった。

D.現在の仕事について

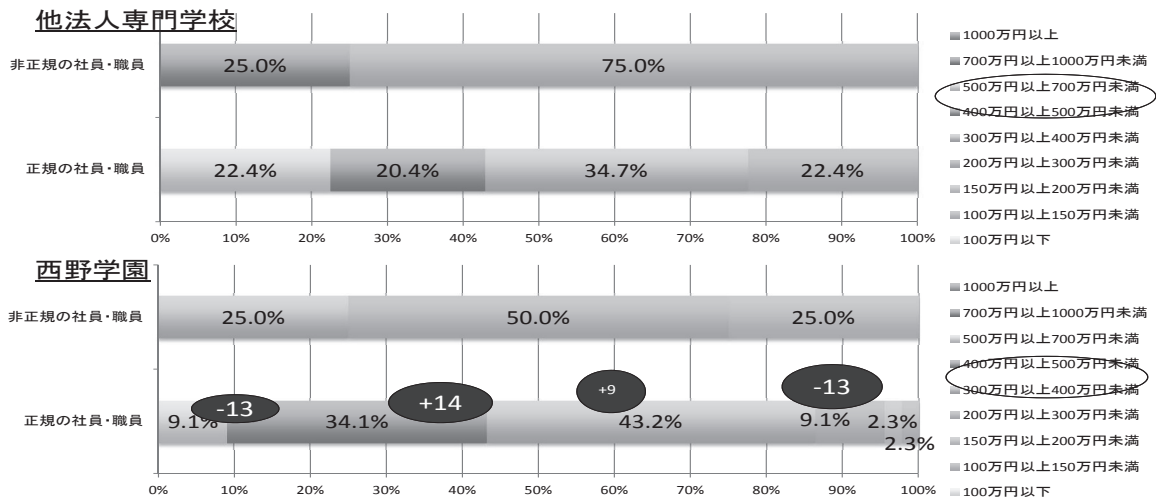
現在の職場での地位



これは他法人同様の比率であった。大体15%程度が役職者になっている。

D.現在の仕事について

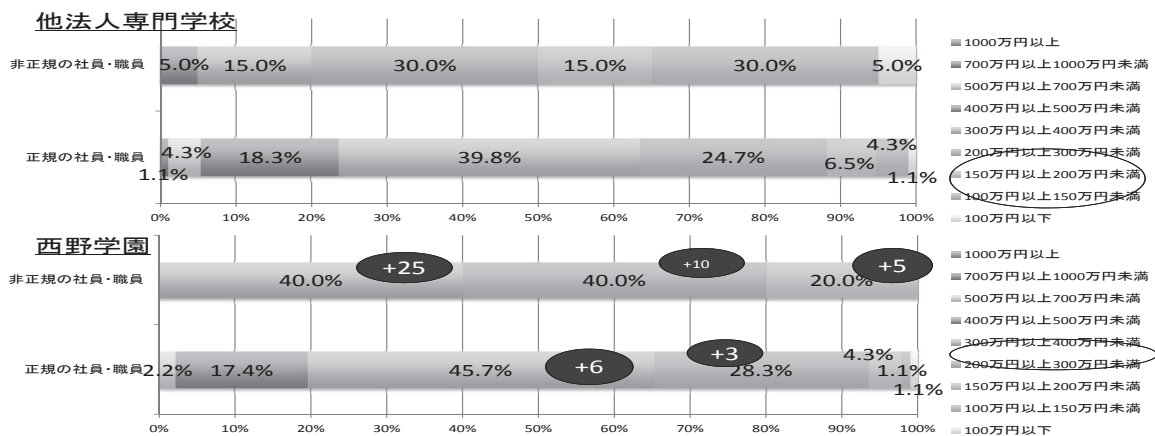
現在の仕事（直近1年以内を含む）の年収はどれくらいですか？【2001～2004】
※卒業年度、就業形態別



年収についての結果はやはり地域特性が表れていると考える。他法人と比べ300万円から500万円の層が厚い。他法人では500万円以上の層が本法人より13ポイントも高い。役職者の割合が同じであるところから、勤続年数が同じではあるため北海道の給与水準が低いことがわかる。近年は医療従事者の人手不足により、初任給がやや上がっている感じがあったが、ある程度の年齢層になると給与の伸びが抑えられているのか、または当初の初任給水準からいくと勤続年数に合わせてほどほどになっているのか、細かく分析する必要はある。

D.現在の仕事について

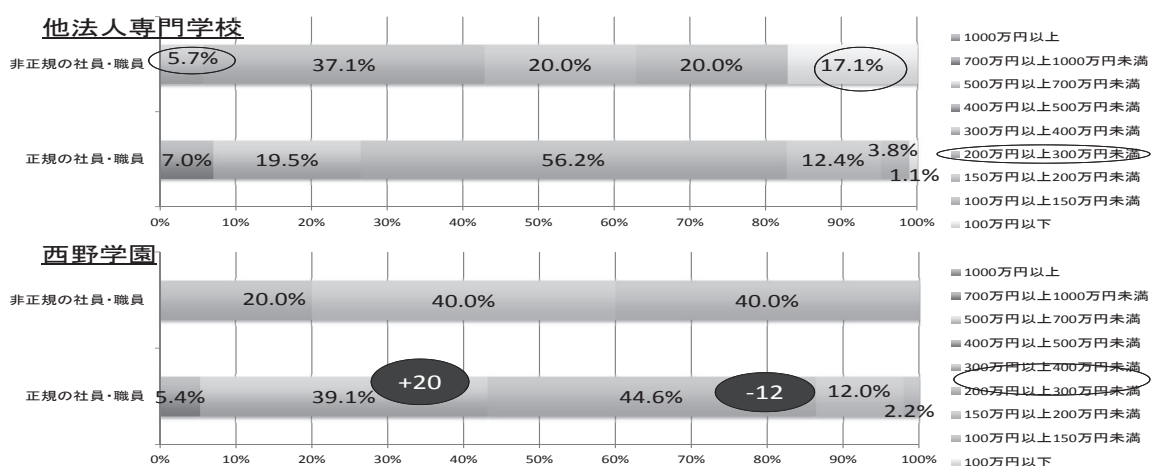
現在の仕事（直近１年以内を含む）の年収はどれくらいですか？【2005～2008】
※卒業年度、就業形態別



比較的卒業年次が若い卒業生は、年功が若いいため高収入層は少ないが、他法人に比べ北海道特有の賃金水準が低いため、どちらかという中位層が多く存在している。また、非正規の賃金層が他法人よりも低いと言わざるを得ない。本法人の卒業生は全て300万円以下で、100万円以上300万円以内が8割占めている。賃金形態が三形態しかなく、特に200万円以上300万円以下が他法人より25ポイントも高い理由は勤務形態が時給パートで労働時間の長短だけでなく、月給は正規職員と同じであるが賞与がないという労働形態である可能性が高い。一方他法人は収入層が多岐にわたっているため、単純時給パートだけでなく、派遣も含めた勤務形態に多様性を持たしているのではないかと推察する。

D.現在の仕事について

現在の仕事（直近１年以内を含む）の年収はどれくらいですか？【2009～2012】
※卒業年度、就業形態別



就職して3年未満の場合、先の2つの卒業層と少し違う。初任給が300万円以上400万円未満の人は他の法人より20ポイントも高い。これまでの場合、北海道特有の賃金水準により他法人より年収が少ないのではないかと考えたわけであるが、概ね直近の卒業生では他法人より賃金水準が高いことがわかった。

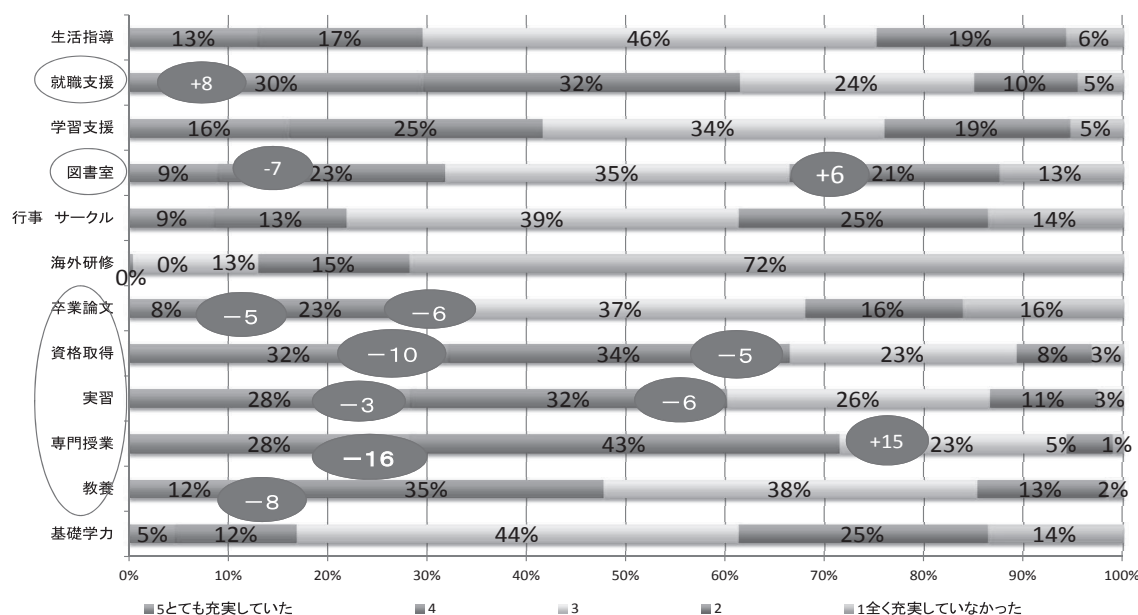
(2) 学校に対する評価

この項目に関しては3つの設問を比較していきたい。全般的に他法人から比較すると、多くの部分で低い数字が出ている事がわかる。今後の充実に向けた課題として取り上げていきたい。

これ以降、本法人についての現状分析として結果を述べていきたい。

B.在学時の学習・学校生活について

次のような点で、本校の教育指導は充実していましたか？【西野学園】

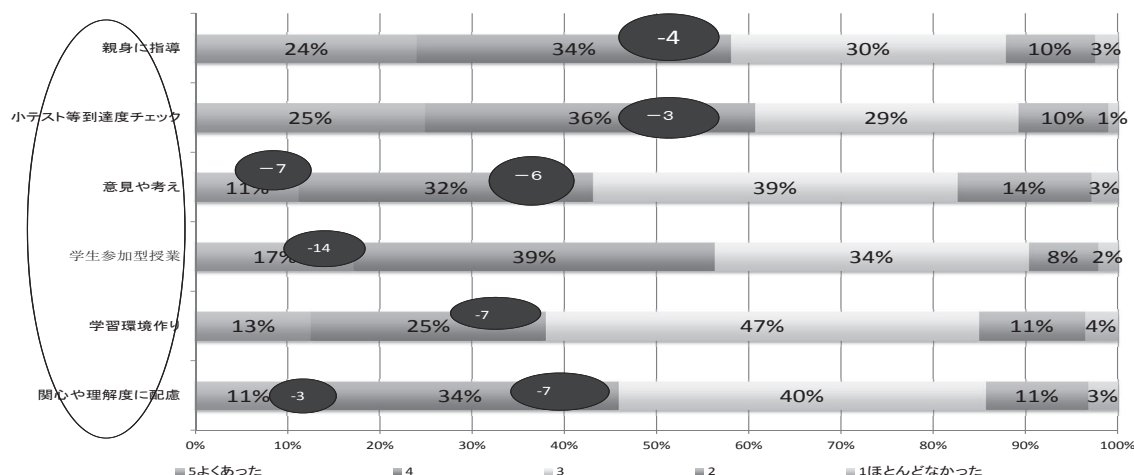


充実度でいくと、就職支援、資格取得、実習、専門授業が半数以上満足度が高い結果であった。普通の評価も含めて満足度が7割を超えている項目が多いのも特徴である。特に専門教育に関しては9割以上の満足度である。また、7割以上高い項目としては、生活指導、学習支援、教育の項目も含まれてくる。一方で3割以上充実していないという回答は、行事・サークル、卒業論文、基礎学力という3点であった。卒業論文は作成を義務付けている学科と、そうでない学科があるので、単純比較が難しい。しかし、基礎学力は年々低下しているという話題があるが、本学園でもその状況はあるため、この回答に関しては大変重要な事柄と捉えている。

なお、海外研修は本学園ではどの学科でも実施していないので、評価の論評は省く。

B.在学時の学習・学校生活について

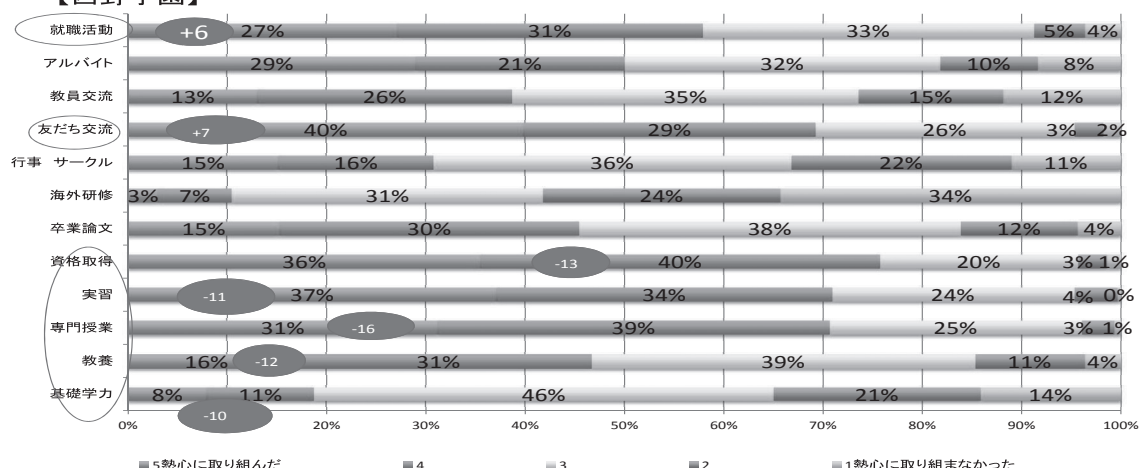
本校で経験した授業では、次のことがどの程度ありましたか？【西野学園】



実施に関して、全て取り組んでいるはずではあったが、1割強の卒業生からあまりないという評価を得た。また、よくあったという評価も全体の3割もない事から、実施に関しての印象度が低いのではないかと感じている。

B.在学時の学習・学校生活について

本校の提供する教育・指導や各種の活動に対してどの程度熱心に取り組みましたか？【西野学園】

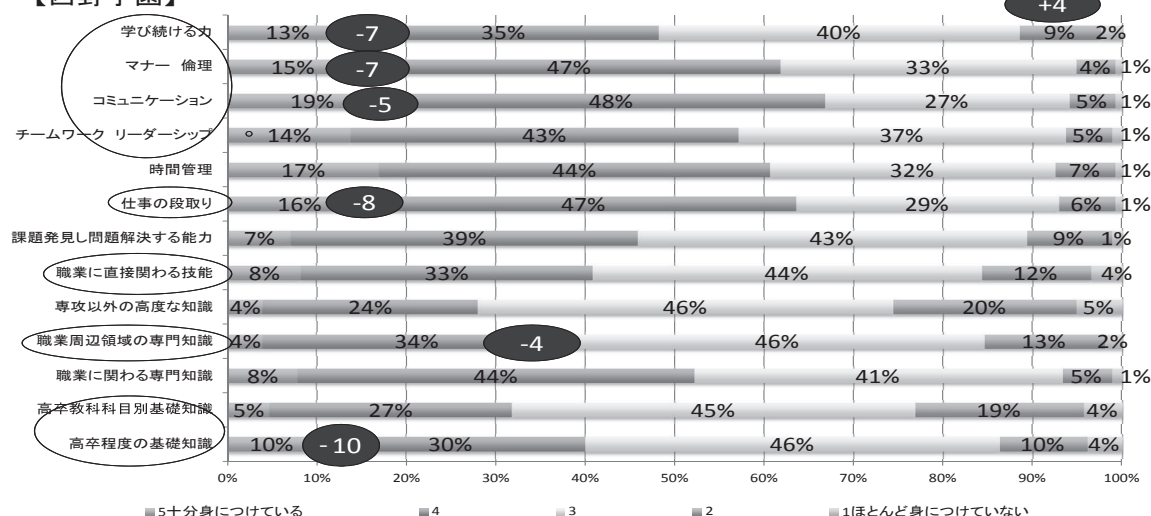


学生の参加度合いであるが、9割を超えているのが、就職活動、友だち交流、資格取得、実習、専門授業という項目である。更に7割以上となると、これにアルバイト、教員交流、卒業論文、教養となる。総じて、学生がそれなりに取り組んでいるという印象を受ける。また、就職活動、友だち交流に関しては、他法人より熱心に取り組んだ学生が多いのが特徴であった。論文指導が充実していないと感じているのが多かったが、取り組みにはそれなりにしたという所から、自分なりに熱心にしたという事ではないかと推察する。

F.仕事や生活で必要な能力について

あなたは現在そのような知識・技術・能力をどの程度身につけていますか？

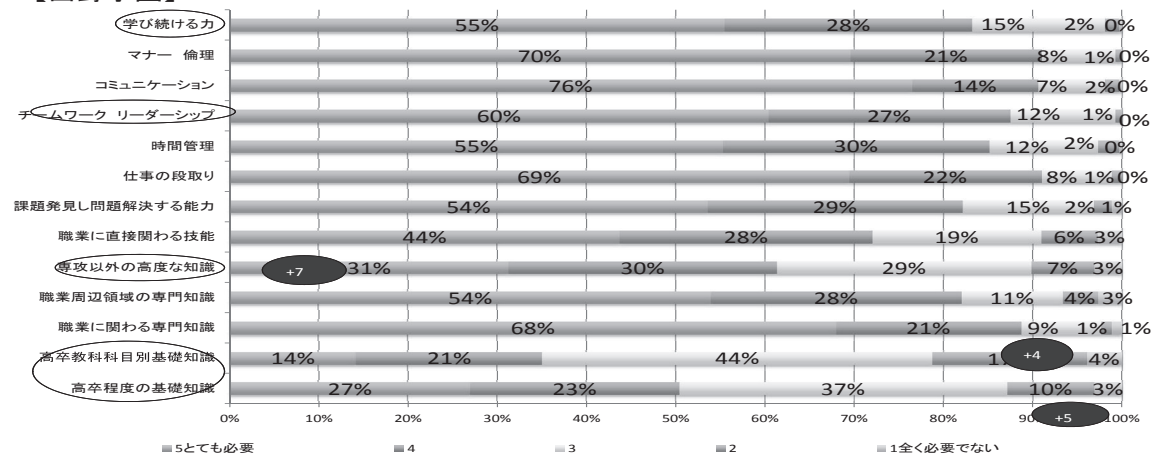
【西野学園】



F.仕事や生活で必要な能力について

あなたの現在の仕事では、次のような知識・技術・能力をどの程度必要とされていますか？

【西野学園】

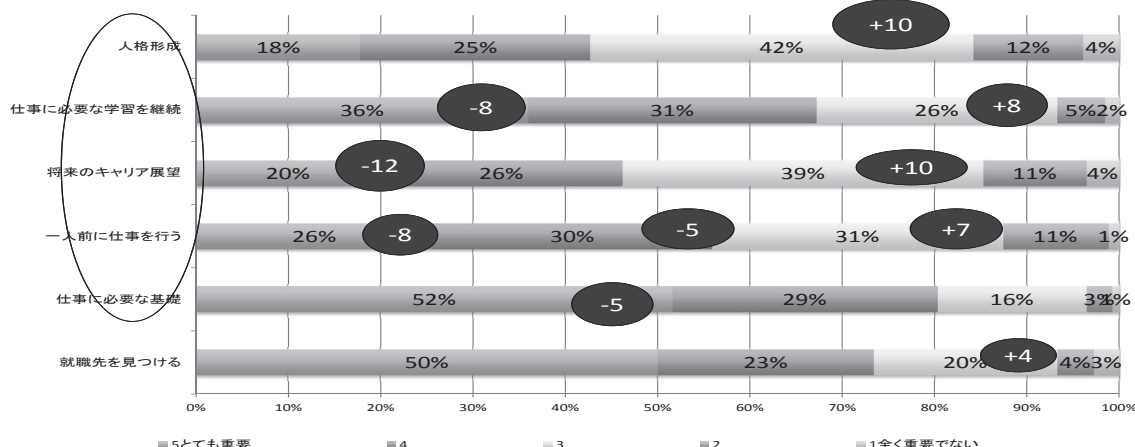


自分自身どの程度能力があり、それらがどの程度必要かという事を問われているのであるが、5割以上がある程度身につけている項目として、マナー・倫理、コミュニケーション、リーダーシップ、時間管理、専門知識である。一方で、必要度とすると、学び続ける力、マナー・倫理、コミュニケーション、リーダーシップ、時間管理、仕事の段取り、問題解決力、職業に関する技能、職業周辺領域の専門知識、職業に関わる専門知識が上げられた。この2つとも上位である項目は、マナー・倫理、コミュニケーション、リーダーシップ、時間管理である。

これらの事から、医療系の学校とはいえ、専門領域の学びは必要であるが、一般的な企業人でも重要である項目が高かった事には改めて、職業人教育が単なる専門領域の学びに限定する事への警鐘の所もあると考える。

H.これまでの経験を総合的に振り返って

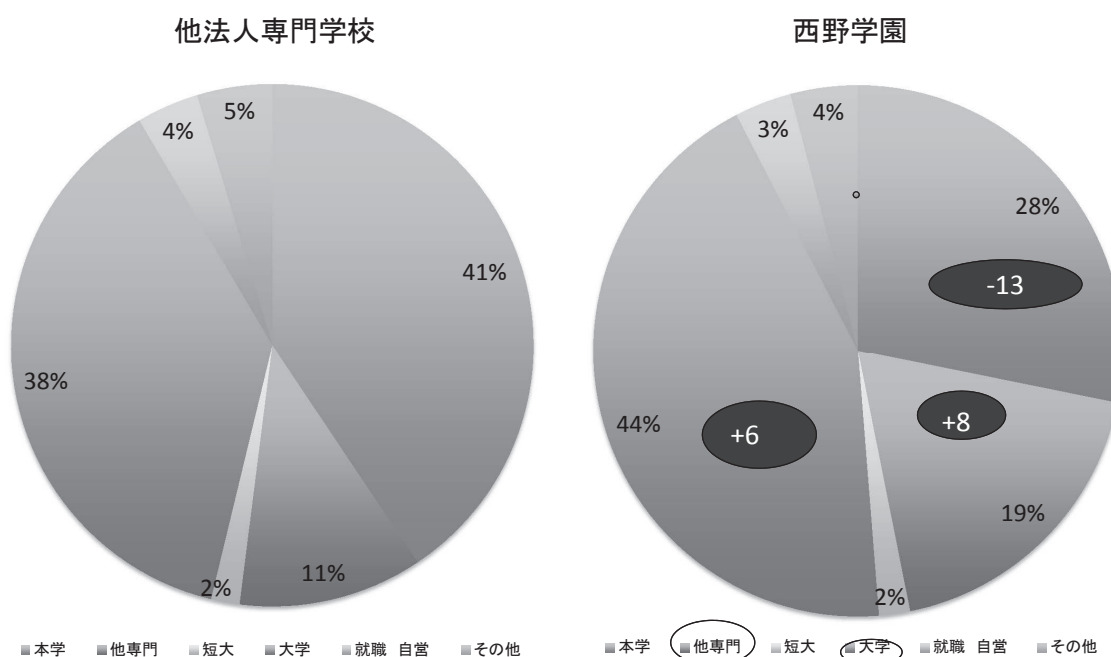
本校での在学中の経験は、どれくらい重要でしたか？【西野学園】



学校での学びが社会人として振り返ったときにどの程度重要であるかを計る項目は全ての項目に於いて、8割以上の人が重要であると回答した。就職先を見つけることが重要であることはもっともであるが、仕事に必要な学習を継続、仕事に必要な基礎の項目で9割以上の人が重要であると回答したことは、今後の示唆に重要な項目である。日進月歩の医療の世界に於いて、常に最先端の知識、技術、技能を学び続けることは、自分の業務を高める上でも重要である。また、それによって患者さんや入所者の生活の質（QOL）を維持する事にもつながる。お互いにとって重要な事であるという事がこの回答で理解できる。

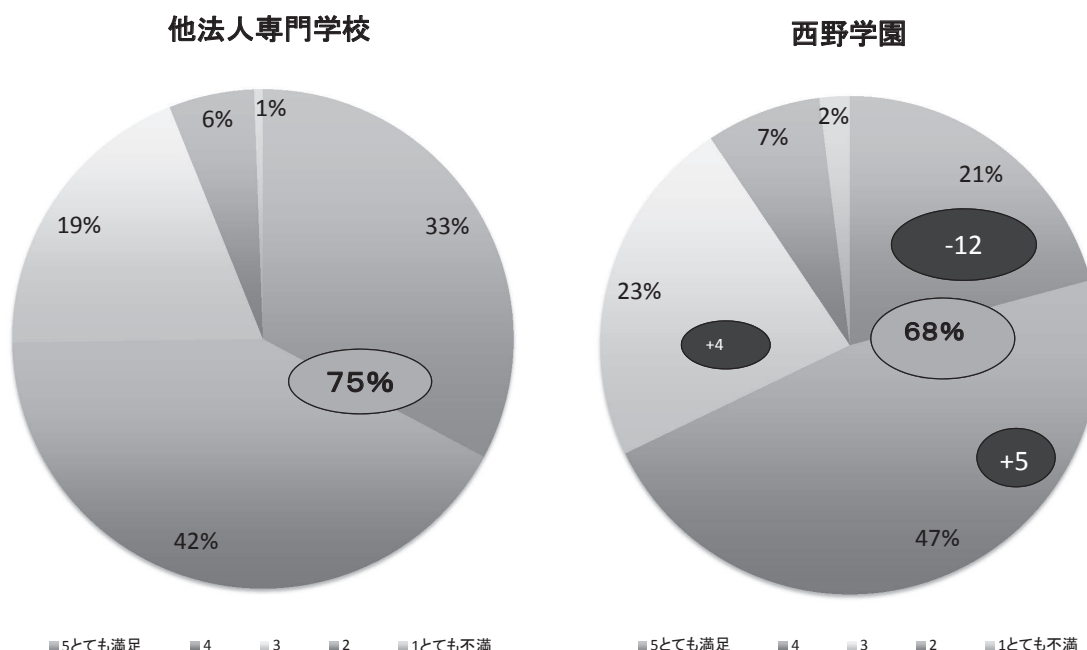
H.これまでの経験を総合的に振り返って

もし仮に高校卒業後の進路選択をやり直せるとすれば、どのような進路を選びますか？



H.これまでの経験を総合的に振り返って

総合的に振り返ってみて、本校に対する満足度はどうでしたか？



ここまで、卒業生の現状と今後を見直してきたが、この設問は学園への満足度である。翻って高校時に戻って再選択するなら他専門学校へ8ポイント、大学へ6ポイントと、回答が他法人より高かった。また、学園への満足度を見ても、まあまあ満足が本学園は全体の68%に比べ、他法人は75%と7ポイントの差が出た。特に、とても満足は12ポイントも低いところからも、まだ学園として取り組むべき事が多くあると考える。

全般的に見ても、やはり大学へ行くべきだったと回答した人が、本学園の44%、他法人でも38%の人が回答している。ここに先述している問題点があると考ええる。

7. まとめ

卒業生調査からわかったことの一つに、大学か専門学校かという選択は、入学時だけでなく、卒業後の中にも生じているということである。全ての新生が高校卒業後の18歳ではなく、大学卒業後に専門学校に再度進学するものもある。反対に、ごく少数ではあるが、自校の教育内容を更に高度化するために大学や大学院への進学者もいる。それを進路のミスマッチとして片付けるには乱暴ではあるが、多様な進学先を自分の学びたい考えと合わせるかという事に、日本の中で指標となるものがないと言える。それを今回の卒業生調査で足りない部分が明らかになったと考える。学生の要望と現場の乖離をどう埋めていくのか、学生の満足度をどう捉え、学習環境への充実や学力水準の向上、教員の教育力向上に結びつけていくのか。学校経営者として自校をどのような環境に仕上げなければならぬか、大変参考になった。

専門学校と大学の医療系学科は、国家試験を経るものであれば、カリキュラム内容はほぼ同じである。差と言えば、大学にある一般教養と呼ばれる科目があるかないか、程度となっている。教科書も大体どこも同じか、ないしは2～3社という選択肢の少ない数の出版社から採用している。教員の資格要件も最低限は同じである。非常勤講師に至っては、複数校同じ科目を教えている大学教員もいる。以上からも、教育内容の差というものは大きくはない。

今後の取り組みとしては、情報公開されているデータは少なくとも同様に提示し、どこに優劣があるのかを知ってもらう事である。更には、学校としての取り組み、学生の主体性や教員の教育力といった学校の存在として正しく行っていることを指し示す必要がある。

専門学校は教員全員を同じ方向に向かわせるのは大学以上に簡単である。専門学校は経営者の進む方向に全員が邁進する組織体になっており、良しにつけ悪しにつけ理事長のリーダーシップが絶対的に機能するようになっている。一方大学は私立大学に理事長は存在するが、教学に関しては学長の裁量となっている事が多く、また教員のパーソナリティーや思想が多様性に満ち、その存在や方向性は大学の方向性に合わせるようにしているが、授業の仕方一つでも各自のやり方が尊重されており、大変いいことをしていても、大学内全ての教員にそれが浸透することは希である。そのような取り組みの違いから教員個々人のレベルは、専門学校より大学にバラツキがある。筆者は、ここに専門学校の活路があると考えている。上位レベルの学生は大学進学するが、中位下位層は専門学校と競合する。その層の底上げがどの程度できるかが教育力だと考え、またそこが大学よりも優れている点として誇れる部分ではないかと考える。

8. 本学園の今後の教育事業計画作成に向けて

本学園は、毎年1月に本部にて全教職員を集め経営会議を行い、その場で次年度の方針等を伝達することをしている。経営者方針を直接伝える場として重要な会議でもある。そこでここ数年言い続けていることは、「教育の質を向上させることへの取り組み」として、「わかる授業」「できる授業」「担える人材の育成」に励むことを推奨している。

大学教員は教員になるために教職に就くが、教育力を上げる研修は各大学のFDの取り組みと個々人の裁量になっている。専門学校は、教員になるためにその分野の資格を取得したわけでないが、全員が同じ方向に向けて取り組むことが大学より可能である。そのため、集合研修を通して満遍なく教員としての技術を磨く事が出来る。本学園でも、全学的取り組みとして平成19年度から3年をかけて「わかる授業」という教員の授業力を上げるためのマニュアルを作成し、実行した。同時に、公開授業を年1回義務づけて担当部署のものが授業を評価するシステムを取り、その結果を本人にフィードバックするシステムにした。その「わかる授業」を確立した最中に卒業したのが今回の調査で回答をした卒業生であった。

しかし、結果からは十分でないと判断した。また、途中から確立した「できる授業」の取り組みも増え、システム上の問題点・改善点が出てきたため、この論文作成より前の平成27年4月より、「わかる授業」「できる授業」の改良をするための学園内プロジェクトを立ち上げ、今後全面改定するための準備を始めた。その議論中にこの調査結果も出てきたので、本プロジェクトではそれも踏まえて、学生の満足度を上げるために改良を加えることとした。

【注】

- 1) 卒業生調査にあたっては、九州大学「高等教育と学位・資格研究会」が開発・実施した web アンケート調査システムを利用した。調査参加機関の中から、相互 IR 分析に賛同した専門学校17校が参加する「専門学校 IR 研究会」が発足し、同一分野内での比較検討を行う共同 IR の合意が得られたデータをもとに分析を行った。その研究会において、参加者が各自の学園・専門学校の分析を行い、吉本圭一研究代表（九州大学）の指導・助言を得た。
- 2) 平成10年判決 (http://www.courts.go.jp/app/files/hanrei_jp/172/016172_hanrei.pdf)
平成9年4月に福岡柔道整復専門学校設置許可申請書を当時の厚生大臣宛てに提出したが、同年10月12日に厚生大臣より、「指定を行わない」と答申があった。これを不服として同年11月7日に「柔道整復師養成施設不指定処分取消請求事件」を福岡地方裁判所に提訴した。
この背景にあるのは、厚生大臣指定学科の申請において地域の当該人材需給状況を調査し提出することになっているが、その調査結果による申請認可の可否は全て当時の厚生省独自の判断であった。その根拠は提示されることなく内部指導という名目の元、申請者側と厚生省側の思惑が合致した場合において指定されていたのが当時の現状であった。そのため、本件における柔道整復師の養成校は全国にブロックごとに1校という時代が続き、新規参入が妨げられていた。
厚生省が一定程度の定員数を満たしたと判断した場合はそれ以上の開設を認めない事になっていたため、例え事前協議に行っても「申請しても指定しない」の1点張りになり、ほとんどの場合開設できなかったのである。本件も同様の事例である。
しかし、平成10年8月27日に本件が勝訴になり、申請すれば指定認可が取れることになった。判決を要約すると、先述していた需給状況などによる指定を可否する事は法律上明記していない。法律上で求めているものを提出して問題がなければ認可すべし、というこれまでの前提を覆す大変画期的なものであった。これにより同校は、平成11年4月に開校することができた。
この判決は同校だけの問題でなく全国の問題であるため、厚生省ではこれ以降、申請書類が法律で求めているものを満たしているのであれば全て認める事となり、翌年以降全国的に申請が下りなくて断念していた学科が一斉に申請をする事になった。
- 3) 例えば、シザーハンズという映画により上映後美容師養成校の進学数が伸びた。「碧いうさぎ」というドラマにより言語聴覚士の希望が増えた。また、スイーツのブームでパティシエ科や製菓科が、結婚式場の広盛でブライダル科、エステブームでエステション科などの例がある。

【参考文献】

- クラーク・バートン R (有本章訳)『高等教育システム』東信堂。
- 公益社団法人日本理学療法士協会, 2013,「理学療法士養成校一覧(平成25年度)」『理学療法士協会ホームページ』(<http://www.japanpt.or.jp/general/aim/training/>, 2016.4.11)
(<http://www.japanpt.or.jp/about/data/>, 2016.5.16.)
- 総務省統計局, 2010,「平成22年国勢調査ユーザーガイド」
(<http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2010/users-g/wakatta.htm#jump6>, 2016.5.16.)
- 文部科学省, 2003,「告示第四十五号 大学、短期大学、高等専門学校等の設置の際の入学定員の取扱い等に係る基準」
(http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/k20030331006/k20030331006.html, 2016.5.16.)
- 文部科学省高等教育局大学振興課, 2011,「学校教育法施行規則等の一部を改正する省令の施行について(通知)」
(http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/1294750.htm, 2016.5.16.)
- 文部科学省生涯学習政策局生涯学習推進課, 2013,「職業実践専門課程」について
(http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/senshuu/1339270.htm, 2016.5.16.)
- 吉本圭一編, 2018,『卒業生調査を通した学修成果とコンピテンシー——短期大学・専門学校17分野55機関による IR モデルへの試み——』,九州大学第三段階教育研究センター「高等教育と学位・資格研究会」ワーキングペーパーシリーズ No. 4.

第5章 専門学校の卒業生調査による IR 活動

——九州大学「高等教育と学位・資格研究会」短期大学・専門学校卒業生調査（2012年）
工業・デザイン系分野 学校の集計分析結果より——

古 賀 稔 邦（日本電子専門学校）

1. はじめに

1.1 卒業生調査と IR

卒業生調査は、吉本（2007）が示すように、研究対象としての「学術的」取組みと、自己評価やステークホルダーへの「説明責任」などへの取組みに大別される。大学・短大などではどちらの立場でも多数報告がなされており、特に後者は、自校の教育改善を目的とした Institutional Research（以下 IR）活動の一環としても行われている。

専門学校における卒業生調査は、広島大学高等教育研究センターと東京都専修学校各種学校協会によって、2009年首都圏12の専門学校を対象に行われたものがよく知られている。小方（2009）によって調査結果の集計・分析が行われ、学術的色彩の濃い報告がなされている。専門学校に従事している者が、IR 活動の一環として卒業生調査を行った報告はあまり見受けられない。

IR は米国では1960年代より発展してきたものであるが、我が国では近年になって、高等教育機関の質保証システムの構築などにより関心が高まっている。多くの大学関係者や研究者が IR に取り組んでいるが、IR に関する一定の定義や共通認識があるわけではない。小林の『大学における IR の現状と在り方に関する調査研究』（2014）では、IR の仮の定義として、「大学のミッションとその実現のための手段とりわけ情報収集と分析」としている。「情報収集と分析」という広い範囲の活動を示す定義であり、これまで IR として意識されていなかった多くの活動がこのなかに含まれるとしている。

小林等は、IR とみなされる項目として「入学志願者の調査（マーケティング）」「就職状況調査」「成績分布や GPA などの分析」「休学、留年、退学などの要因分析」「学生調査（生活調査、生活実態調査）」「卒業生に対する調査」「学生による授業評価の分析」など20項目を挙げて、全国の国公立大学を対象に調査を行った。

いうまでもなく、IR は大学固有のものではない。先の定義の“大学”を“高等教育機関”または、単に“教育機関”と置き換えることも可能であろう。そうした意味では、専門学校においても「学生による授業評価」や「就職状況調査」は実施されており、局所的ではあっても多くの学校で IR 活動が既に行われていることになる。

1.2 専門学校評価の現状

専門学校は、2014年度より新たに設けられた職業実践専門課程の認定要件である学校関係者評価の実施により、自己評価や外部評価に関する関心が高まっている。文部科学省でも『専修学校における学校評価ガイドライン』（2013）や『学校評価を活かした専修学校の質保証・向上に向けて ～専修学校における学校評価実践の手引き～』（2015）を発行するなど、専門学校における学校評価の普及を促

している。

現在、高等教育段階における「質の保証」とは、第三者評価の実施によって図られるといった考え方が国内外において一般的である。2014年度行われた「実践的な職業教育を行う新たな高等教育機関の制度化に関する有識者会議」の審議まとめにおいて、専門学校は「,.., (前略) 第三者評価が制度化されておらず、その柔軟な制度的特徴から、教育の質が必ずしも保証されたものとはなっていない。」と指摘されている。

こうした背景もあって、2015年度専修学校関係委託事業「職業実践専門課程等を通じた専修学校の質保証・向上の推進」では、11分野に亘り第三者評価システム構築に関する事業が採択された。

第三者評価は、評価対象教育機関そのものを評価する「機関評価」と、その教育機関で教育を受けた学生の仕上り状況を評価する「成果評価」に大別される。「成果評価」に取り組む場合、学習成果（ラーニングアウトカム）の定義と、それを何と比較して評価するのかが重要な観点である。

高等教育の学習成果は、金子（2014）が示すように、①専門的な知識・技能、②汎用能力（コンピテンシー）、③自己認識（人格的成熟）、3つのカテゴリーからなると考えられている。

大学学士課程においては、学習成果の共通認識として、中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて」答申（2008）のなかで、「学士力 ～学士課程共通の「学習成果」に関する参考指針～」に、①知識・理解、②汎用的能力、③態度・志向性、④総合的な学習経験と創造的思考力、と示されている。

専門学校における学習成果については、大学学士課程のような共通の参考指針はなく、各専門学校やその関係者毎にそれぞれ異なった認識を持っているのが現状である。特に学習成果という言葉の印象から、専門学校教育の中心である特定の職業に特化した「専門知識・技能」のみがその対象であると、狭義の意味で捉えられがちである。

職業に特化した専門知識・技能に関して、諸外国ではEQF（European Qualification Framework for Lifelong Learning）やAQF（Australian Qualification Framework）などの「学位・資格枠組み」との対比によって評価すべきものであるとされている。

専門学校の教育分野である医療系や自動車整備、建築士、電気工事士などといった国家資格系の分野であれば、その取得状況によって「専門知識・技能」を評価することがある程度可能である。職業に対する免許資格が必要でない分野でも、ITの分野では情報処理推進機構によって定められたITスキル標準（IT skill standard：ITSS）や共通キャリア・スキルフレームワーク（Common Career Skill Framework：CCSF）を評価の尺度として使用することも考えられる。

しかし、専門学校が教育を行っている様々な分野の全てにそうした職業の資格枠組みや標準が存在している状況ではなく、それらの分野における「専門知識・技能」の評価の在り方は課題である。

また、「汎用的能力（コンピテンシー）」や「自己認識（人格的成熟）」といった学習成果の評価には、対象となる分野毎の目安となる標準的な評価指標（ベンチマーク）の設定が必要である。これには、同分野複数の専門学校の連携による大規模な卒業生調査等の実施が必要である。

大学における卒業生調査の事例としては、日欧12か国の大卒者を対象に行われた日欧大卒調査（CHEERS 調査1998～1999年）、「短期大学の将来構想に関する研究会」が2004年に行った8短期大学によるものなどが知られている。

学習成果に関する調査としては、OECD 高等教育における学習成果調査 AHELO（Assessment of Higher Education Learning Outcomes）が2009～2012年に、17か国が参加して行われている。また、ベンチマー

キングを行う上での学生調査の事例としては、米国では UCLA の高等教育研究所（HERI）が開発した新入生向けの CIRP（Cooperative Institution Research Program）は、半世紀近い歴史があり膨大なデータの蓄積がある。上級生向けの調査として CSS（College Senior Survey）も開発されている。我が国でも山田（2011）によって、HERI の CIRP 及び CSS の日本版として、2005年から JCSS（日本版大学生調査）、2008年から JFS（日本版新入生調査）が行われている。JCSS の短期大学生向けの調査として、2008年から JJCSS も行われている。既に数万人のデータの蓄積により、ベンチマーキングによる自己評価とそれをもとにした教育改善への環境が整いつつある。

大学・短大はこうした状況であるが、専門学校に関しては、在学生調査にしても卒業生調査にしても、全国レベルの大規模な調査が十分なされているとは言い難い。

先に示した通り、教育の質保証の観点から第三者が行う成果評価への関心が高まってはいるが、「専門学校卒業生の学習成果（ラーニングアウトカム）に対する共通認識」「資格枠組みや標準が未整備な産業分野の「専門知識・技能」の評価の在り方」「専門学校卒業生の実態把握による評価指標（ベンチマーク）の策定」など、信頼性のある成果評価を行うには課題が多い。

学校関係者評価にしても第三者評価にしても、その基本は自己評価である。2007年度から専門学校も自己評価とその公開が義務化されているが、『私立高等学校等実態調査』によると、平成26年5月1日現在「自己評価の実施：69.8%」「その公表：35.6%」とその実施・公表割合は低い。自己評価から学校関係者評価へ、更には第三者評価の実施へと、急ピッチに進む取組みが行われているが、そうした制度的な検討と並行して、各専門学校では教育の質の保証に向けて、義務化されている自己評価に真摯に取り組むべきである。

1.3 本稿の目的と研究方法

『専修学校における学校評価ガイドライン』（2013）では自己評価の実施にあたり、卒業生調査の活用を以下のような観点で促している。

- 専修学校の卒業生のキャリア形成の効果把握等を通じ、学校から職業生活への移行後も見据えた教育指導等に係る評価の結果を活用し、自校の学校運営の改善につなげることが期待される。
- 各学校においては、卒業生に対する調査（就業・キャリアアップ等の状況、満足度、学校に対する要望、職場で求められる能力等）を通じて、例えば、関係業界で求められている最新の知識・技術・技能のカリキュラムへの反映・改善、教員の資質向上に向けた研修、人事交流等の取組や、それらの取組促進に向けた効果的な組織マネジメント、就職支援等へ積極的に活用することが期待される
- 卒業後のキャリア形成への効果把握（入学から在学中の能力育成、学習行動などのプロセス評価、卒後評価まで）と卒業生等の評価を踏まえた教育課程の編成・改善など
- 複数の学校間の連携によるベンチマーク（目安となる指標例など）を活用した評価を通じた教育活動の改善（各学校の機能や特色の明確化、成果や課題の共有など）
- 学校間での相互評価など効果的な評価を通じた教育活動の改善

（『専修学校における学校評価ガイドライン』（2013）の抜粋）

専門学校は、卒業後多くが在学中に学んだことが活かせる業界への就職を果たしている。このため、他の高等教育機関と比較して、卒業生の業界における初期キャリアの状況やそこで求められている能力の把握が、教育改善には特に重要である。また、単独の専門学校による卒業生の状況の把握のみならず、同分野の複数の専門学校が連携して調査を行い、ベンチマークとなる標準的な指標を設定し、その指標との比較による評価と改善を図るといったことが、先のガイドラインからも求められている。そうした活動が卒業生調査による IR 活動であろう。

2012年に九州大学「高等教育と学位・資格研究会」(研究代表・吉本圭一)が開発・実施した web 調査(調査名「卒業生のキャリアと学校評価に関する調査プロジェクト」)¹⁾に参加した工業(情報)・デザイン(グラフィック・コンテンツ)分野2校の専門学校(2校をA専門学校、B専門学校として以下示す。)の調査データをもとに、IR活動の一環として「初期キャリア形成の把握」と、就業経験を経た上での「在学期間中の教育プロセスと獲得能力(アウトカム)の関連性」を分析し、A専門学校の改善に活かすことを目的としている。

初期キャリア形成については、「就業状況」「職場における待遇」「職場に対する評価」といった表面的な項目から、「就業後に獲得した能力」「就業経験を経た上での専門学校教育の有用性・満足度」など卒業生個々の内面的な項目まで、A、B専門学校の類似性と個別性を網羅的に把握した。

初期キャリアの形成は、卒業後から約10年程度までであるため、本調査の対象者は卒業後1年目、5年目、9年目の3コーホートとしている。本来、卒業後10年間の状況を把握するためには、10年の歳月をかけた卒業生の追跡調査が必要である。3つのコーホートは、それぞれ別の「世代」「時代」「年齢」特有の影響を受けている。吉本(2007)がいうように「時代・世代・年代のアイデンティフィケーション」の影響を拭えない。しかし、「職場で求められる能力」「職場における責任」などは、就業後の経験年数に応じて3つのコーホートに共通して変化して行くものと考えられることから、本稿では3コーホートの比較を卒業生の経年変化と捉えて示した。

高等教育機関の学習成果は、卒業時点における学習内容の習得度によって評価するより、卒業後数年経過した時点で卒業生がどのような初期キャリアを形成し、学習内容を活かしてどのような活躍をしているかによって評価することが本質的である。特に職業教育機関であれば、卒業生の職場における活躍の状況によって評価することが最も適切な評価といえよう。在学時の教育プロセスの各種の取組みの内、どの項目が卒業後の就業状況に影響を与えるものかといったことを明らかにすることが、教育改善を図るには重要である。そうした意味で、本稿では就業経験を踏まえた上での自校に対する「満足度」や「獲得能力」と在学時の教育プロセスとの関係性を分析し、その規定因子を見出す試みを行った。

IRは教育機関研究であるが、吉本(2015)がいうように、それぞれの教育機関のアイデンティティ研究ともいえる。同分野2専門学校の卒業生調査結果を用いて、同じ業界に従事していることの類似性と、それぞれの教育プロセスの違いに起因する個別性を見出し、IR活動として今後のA専門学校の教育改善の方向性を示した。

2. 調査対象校概要と回答状況

図2-1は、今回の卒業生調査のA～Hの各調査群が、専門学校への入学から卒業、就業に至る課程のどこに該当するのかをA専門学校を例に示したものである。

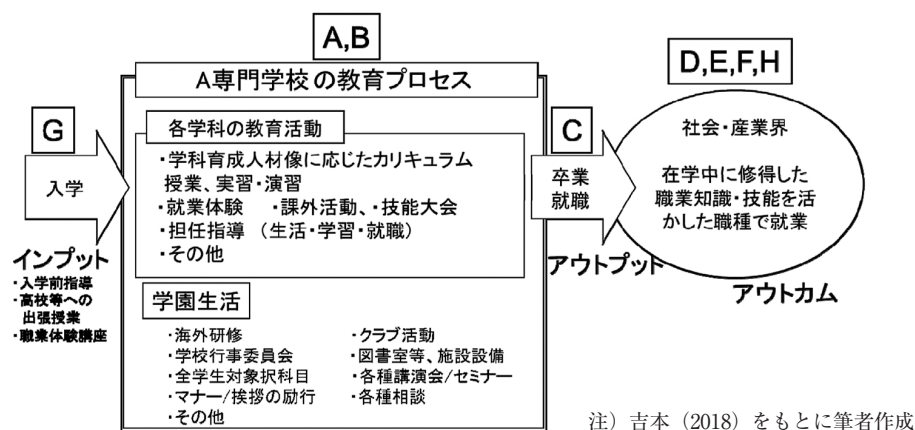


図2-1 専門学校への入学から就業に至る過程と調査群

本稿で取り扱う2校の専門学校は、大都市（異なる地域）に所在する専門学校で、学科構成がほぼ等しく、1000名以上が在籍する所謂大規模校である。本調査の分類上では、工業（情報含む）分野とデザイン（グラフィック・コンテンツ）分野に分類される。それぞれの調査回答状況は表2-1の通りである。

表2-1 調査回答状況

学校名（対象分野）	発送数	有効回収数			有効回収率
		有効回収総数	卒業年	回収数	
A 専門学校 (IT, 情報処理, 電気・電子, CG, ゲーム, デザイン)	2093	300	2012	111	14.3%
			2008	100	
			2004	89	
B 専門学校 (IT, 情報処理, CAD, CG, ゲーム, デザイン)	1589	187	2011・2012	71	11.8%
			2007・2008	66	
			2003・2004	49	

両専門学校とも、調査対象の学科を限定して調査を行ったため、各卒業年の卒業生数全員を対象としていない。特に、B 専門学校では、学科を絞った上である程度の回収数を確保するために、推奨コーホートの卒業後1年目を1年目（2012年）と2年目（2011年）、卒業後5年目を5年目（2008年）と6年目（2007年）、卒業後9年目を9年目（2004年）と10年目（2003年）と、複数年を対象としている。

3. 初期キャリア形成状況

専門学校卒業後、社会人としてどのような「初期キャリア」が築かれているかを確認する。

先ず卒業生全体をひとまとめ（年代別に分けない。）として、専門学校毎に集計した結果を示す。卒業後から約10年までの間の卒業生がどのような状況であるかを俯瞰的に把握する。

次に、卒業後1年、5年、9年の3コーホートに分けて経年の変化を確認し、卒業後の就業経験を通じて、卒業生がどのように変容していくかを確認する。

確認していく項目は、「就業形態」「企業規模」「所得」といった表面的なものから、「職場における責任」や「四大卒短大卒との比較」「就業後の能力の獲得状況」といった、普段表に現れにくい内面に至るものも含まれる。

3.1 回答全体の集計

A, B 両専門学校の卒業生からの回答を、それぞれの専門学校毎に集計した結果を示す。また、卒業生調査に参加した34専門学校全体の調査結果が示されている項目については、「調査全体」として合わせて表示した。

(1) 就業状況

図3-1は、現在の就業形態を示すものである。

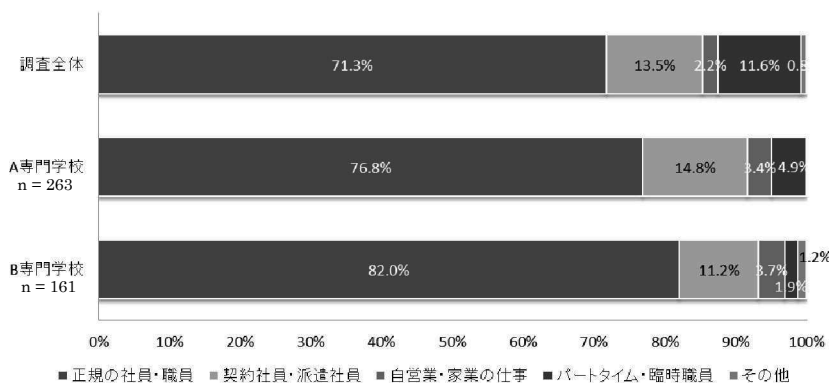


図3-1 現在の仕事（1年以内）の就業形態

「調査全体」は、参加した専門学校（17分類）全ての集計である。A, B 専門学校ともに、正規雇用の割合が最も高く、調査全体と比較しても高い水準になっている。契約社員・派遣社員が次に多い割合となっているが、調査全体との大きな違いはない。パートタイム・臨時職員といった不定期雇用の者は、調査全体では、10%以上であるのに対して、A, B 両校とも5%未満と低い割合となっている。

図3-2は、卒業生の現在の仕事と在学中の専攻分野との関連性を示すグラフである。A, B 専門学校とも、7割以上が在学中の専攻分野と関連する仕事に就いていることが確認できる。この項目について、吉本（2015）の報告によると、2校を含む調査全体では77.4%、工業（情報含む）では69.2%、デザインでは69.9%といった割合となっている。現在の仕事と専攻分野との関連性は、医療系国家資格の分野が9割以上と高く、ビジネス・観光といった分野が5割程度と低い。工業（情報含む）とデザイン分野はその中間的な値となっている。

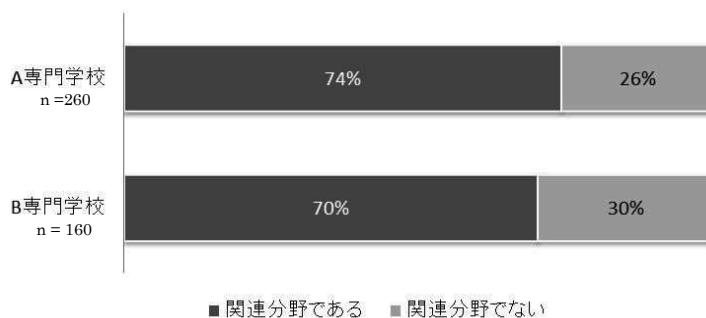


図3-2 現在の仕事と専攻分野との関連性

図3-3は、現在働いている企業の従業員数を示すものである。調査全体との比較では、A、B両専門学校とも働いている企業の従業員数は、20名以下の割合が少なく、300名以上の割合が多い。

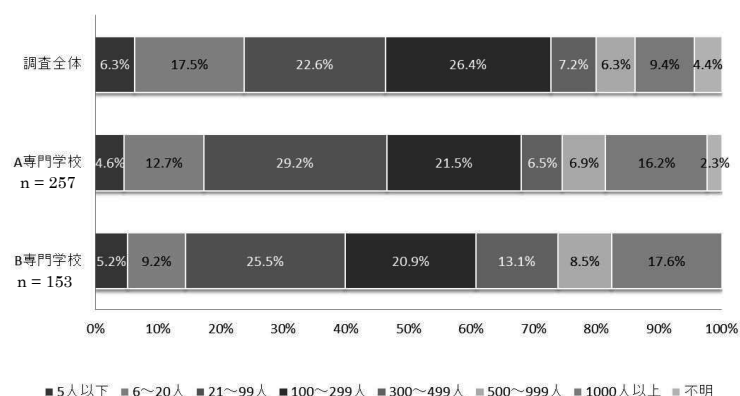


図3-3 現在働いている企業の従業員数

図3-4は、現在の年収を示すものである。調査全体との比較では、A、B両校ともに150万円未満の割合が少なく、300万円以上の割合が多い。

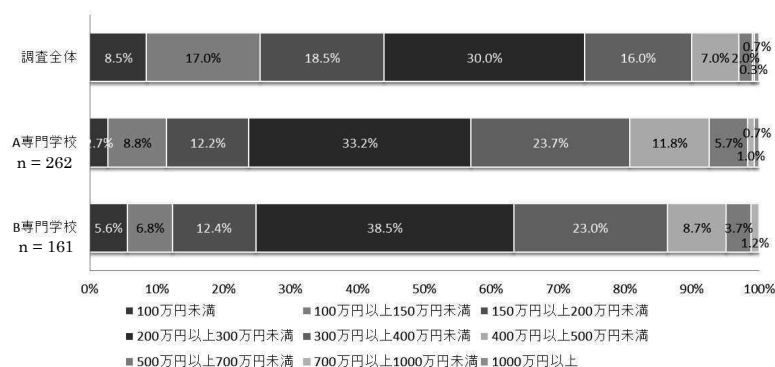


図3-4 現在の年収

雇用形態、従業員数、年収などの点において、調査全体と比較して高い水準にあることが分かる。これは、2校の多くの卒業生が従事している情報産業の特性によるものとも考えられる。

主に情報産業に人材を輩出している両校は、卒業後（約10年間経過した者も含め）、7割以上の卒業生が専攻分野と関連する仕事に就いている。調査全体の集計結果と比較して、従業員数の多い企業に従事し、高い所得を得ている点を鑑みると、職業教育機関としての一定の役割を果たしていると考えられる。

(2) 専門学校卒業生の職場における待遇と職場に対する評価

図3-5は、「責任の重さ」「賃金水準」「昇給や昇格」の項目について、現在の職場で専門学校卒業という学歴に相応しい評価を受けているかを、5「評価されている」から1「評価されていない」の5段階で、回答を求めている。

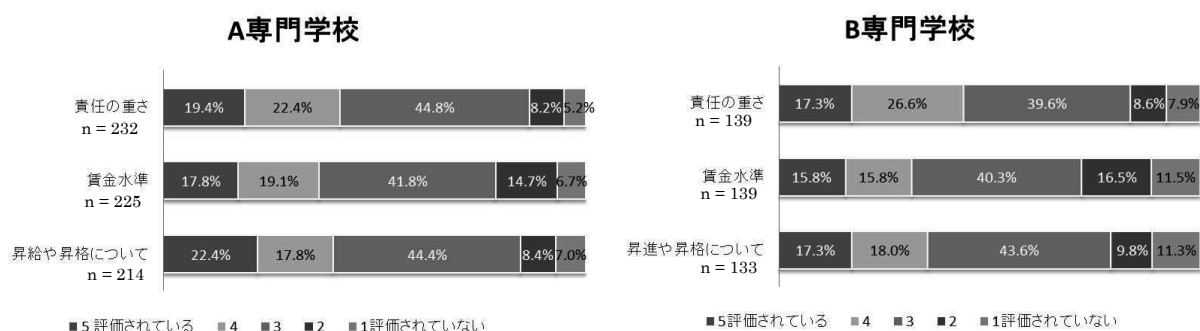


図3-5 現在の職場で自分の学歴に相応しい処遇か

何れの項目においてA、B両専門学校とも3「どちらでもない」の割合が最も多い。また、4以上の「評価されている」側の割合が、2以下の「評価されていない」側の割合よりも上回っている。A、B専門学校を比較すると、賃金水準についてA専門学校では4以上の割合と2以下の割合の差が、15.5ポイントあるのに対して、B専門学校では3.6ポイントしかないことが確認できる。

図3-3と図3-4で示した通り、従業員数ではA専門学校よりB専門学校の方が上回っているのに対して、年収ではA専門学校の方が上回っているという結果となっている。

図3-6は、四年制大学と短期大学の卒業生と比較して、同等に評価されているかの調査結果である。

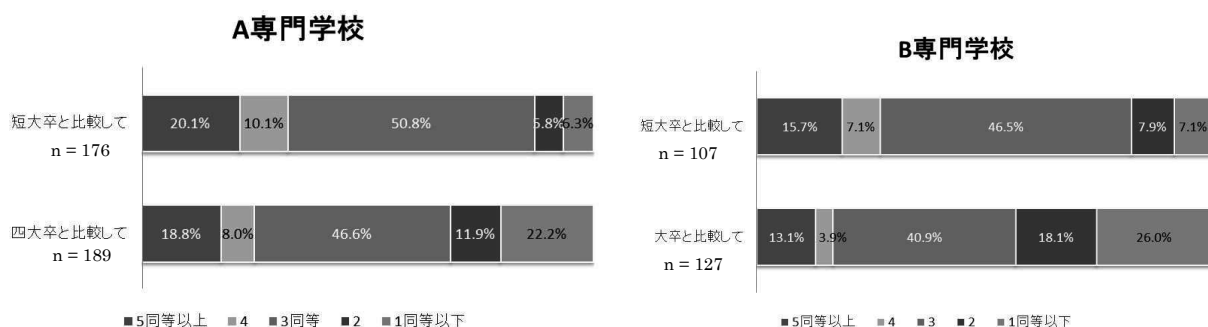


図3-6 四大短大と同等に評価されているか

四年制大学と短期大学の卒業生と比較して、両専門学校とも同等に評価されていると回答した人の割合が最も多い。

短期大学との比較では、4以上（同等以上）の割合が2以下（同等以下）の割合より、A専門学校では18.1ポイント、B専門学校では7.8ポイント高い。修学年限がほぼ等しい短期大学より、職場で評価されていると感じる人の割合が多い。

同様に四年制大学との比較では、両専門学校ともに4以上（同等以上）の割合より2以下（同等以下）と回答する人の割合が多くなっている。

A、B専門学校とも今回の卒業生調査では、2年制学科の卒業生が主な対象であったため、修業年数の差による違いが表れていると考えられる。A、B専門学校の比較では、四年制大学・短期大学の学歴に対して同等以上に評価されていると回答する人の割合は、A専門学校の方が多い。

図3-7は、職場に対する満足度を、「学校で修得した知識・技能を活用する場として」や「職場の

雰囲気によさ」「収入や福利厚生」など多様な観点から調査したものである。

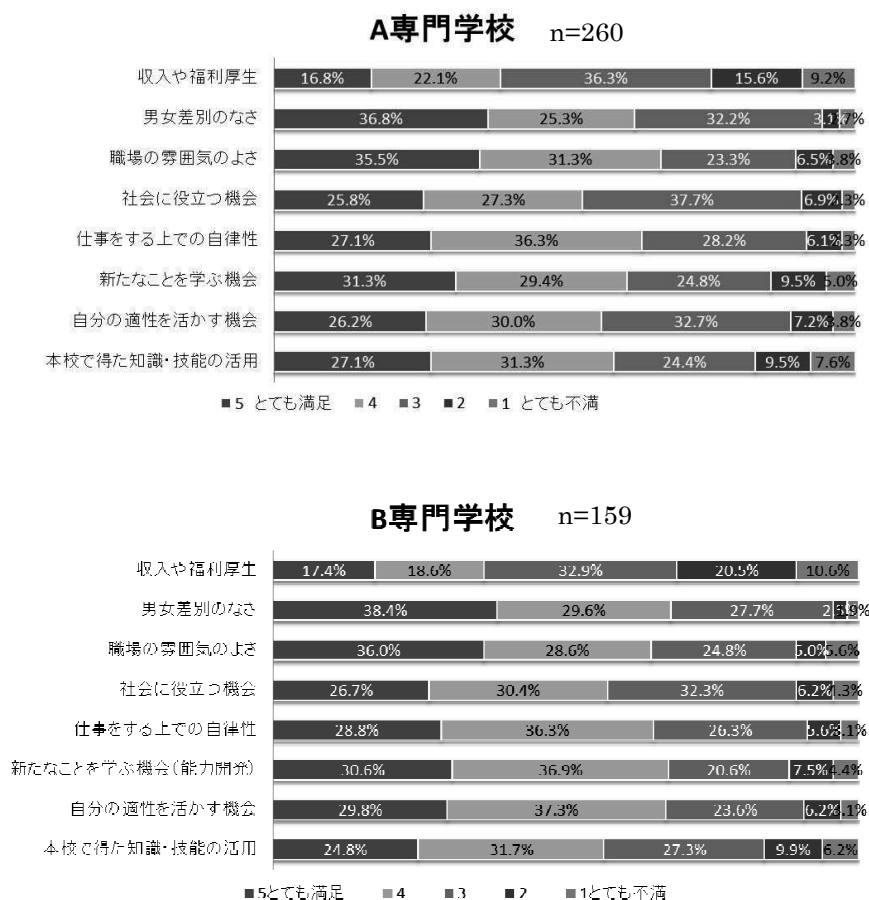


図3-7 職場に対する満足度

A, B 専門学校とも、何れの項目も4以上と回答した人の割合は、2以下と回答した人の割合を上回り、現在の職場に対する満足度は高い結果となっている。「学校で得た知識・技能を活用する場として」現在の職場に4以上の満足している人の割合が5割以上となっており、在学中の学修内容と現在の職場との適合性が高いことが確認できる。また、「仕事をする上での自律性」「新たなことを学ぶ機会」は、6割以上の人が4以上の回答をしている点などから、学校で学んだことを活かし、職場で自律的に業務をこなしながら成長している様子が窺える。

A, B 専門学校を比較すると、「社会に役立つ機会」「仕事をする上での自律性」「新たなことを学ぶ機会」「自分の適性を活かす機会」の何れの項目も、A 専門学校より B 専門学校の方が高い満足度となっている。特に「自分の適性を活かす機会」について、A 専門学校では4以上と回答した人の割合が56.2%であるのに対して、B 専門学校では67.1%と10ポイント以上も高い結果となっている。この理由については、更に調査が必要である。

(3) 仕事に必要な能力の必要性と獲得状況

表3-1・表3-2は、工業（情報を含む）分野・デザイン（グラフィック・コンテンツ）分野の「現在の仕事に必要な能力」の必要性と獲得状況に関する調査結果である。

能力項目のNo.1, 5, 8, 10, 13は、分野共通の項目である。その他の項目は、調査の元となる以下の項目から、各分野の適性に応じた質問項目に変更している。

No. 2：高校卒業までの教科・科目別の基礎知識

No. 3：専攻分野に直接関わる専門知識

No. 4：専攻分野の周辺領域の専門知識

No. 6：専攻分野に直接関わる技能

No. 7：担当業務の課題を発見し解決する技能

No. 9：時間を管理する技能

No.11：顧客や外部とのコミュニケーション能力

No.12：仕事をする上で必要なマナー

それぞれの項目について必要性では、5「とても必要である」～1「全く必要ない」の5段階で、獲得状況では、5「十分身につけている」～1「ほとんど身につけていない」の5段階で回答を求めた。回答結果を集計し、「平均値」平均値の高い「順位」「標準偏差」A 専門学校と B 専門学校の平均値の差をまとめた。

項目の1.「高校卒業程度の基礎的な知識」から6.「仕様に沿った製品作りができる技能」(工業分野)・「既存のデザインの理解と、オリジナルな作品制作の技能」(デザイン分野)までは、基礎知識または専門的な知識・技能であるのに対して、7.「ニーズを捉えて業務の課題を提案する能力」(工業分野)・「担当業務の課題を発見し、解決策を提案する能力」(デザイン分野)から13.「生涯学び続ける力」までは、職業人としての基礎的・社会的技能に関するものである。

全体を俯瞰した傾向として、分野、専門学校を問わず、No.7～13（職業人としての基礎的・社会的技能）の必要性および獲得状況が高く、No.1～6（基礎知識または専門的な知識・技能）の必要性および獲得状況が低い結果となっている。

表3-1 工業分野では、A, B 専門学校ともに、8.「優先順位をつけて仕事の段取りをする能力」の必要性が最も高く、その能力の獲得状況も同様である。以降の必要性、獲得能力の順位も A, B 専門学校間で大きな違いはなく概ね同様の傾向を示しており、同分野の類似性が確認できる。特筆すべき点としては、11.「クライアントに対するコミュニケーション能力」の必要性は、A 専門学校2位・B 専門学校4位と上位であるのに対して、獲得状況は、A 専門学校9位・B 専門学校6位と中位から下位の順位となっている。また、3.「機械、建築、コンピュータなどの専門的知識」の必要性は、A 専門学校6位・B 専門学校5位と中位であるのに対して、獲得状況は、両専門学校ともに2位となっている。1.「高校卒業程度の基礎的な知識」の必要性は、A 専門学校10位・B 専門学校8位と下位であるのに対して、獲得状況は、A 専門学校4位・B 専門学校3位と上位となっている。

A・B 専門学校間の違いでは、6.「仕様に沿った製品作りができる技能」の獲得状況で、B 専門学校では4位と高い順位であるのに対して、A 専門学校では10位と下位の順位となっている。

表3-2 デザイン分野では、8.「優先順位をつけて仕事の段取りをする能力」と9.「仕事を期限内に仕上げる能力」が同程度に高い必要性と獲得状況となっている。各項目の必要性と獲得状況を比較すると、A 専門学校の1.「高校卒業程度の基礎的な知識」の必要性が8位と下位であるのに対して、獲得状況は4位と上位であることが確認できる程度で、その他の項目は概ね同様の傾向である。

A, B 専門学校間では大きな違いはなく、概ね同様の傾向を示しており同分野の類似性が確認できる。

表3-1 工業分野 仕事に必要な能力の必要性と獲得状況

仕事に必要な能力の必要性								
No.	仕事に必要な能力 (工業分野)	A専門学校 n=130			B専門学校 n=65			平均値 の差(a-b)
		平均値(a)	順位	標準偏差	平均値(b)	順位	標準偏差	
1	高校卒業程度の基礎的な知識	3.77	10	1.11	3.78	8	1.06	-0.02
2	数学、物理、技術、工業・家庭科の知識	3.39	13	1.13	3.32	12	1.18	0.07
3	機械、建築、コンピュータなどの専門的知識	4.03	6	1.04	4.20	5	0.90	-0.17
4	専攻分野に隣接する領域の専門的知識	4.01	7	0.98	3.69	10	1.31	0.32
5	専攻分野以外の高度な知識	3.41	12	1.09	3.20	13	1.29	0.21
6	仕様に沿った製品作りができる技能	3.61	11	1.23	3.78	8	1.28	-0.18
7	ニーズを捉えて業務の課題を提案する能力	3.88	8	1.04	3.91	7	1.19	-0.02
8	優先順位をつけて、仕事の段取りをする能力	4.41	1	0.78	4.69	1	0.58	-0.28
9	納期から逆算し、スケジュール管理ができる能力	4.12	4	1.02	4.34	3	0.96	-0.22
10	組織における自分の役割を認識し、職場に貢献できる能力	4.15	3	0.84	4.42	2	0.82	-0.26
11	クライアントに対するコミュニケーション能力	4.18	2	0.97	4.32	4	0.98	-0.14
12	技術者としての倫理観	3.83	9	1.03	3.65	11	1.13	0.18
13	生涯学び続ける力	4.08	5	0.99	4.18	6	0.84	-0.11

仕事に必要な能力の獲得状況								
No.	仕事に必要な能力 (工業分野)	A専門学校 n=137			B専門学校 n=66			平均値 の差(a-b)
		平均値(a)	順位	標準偏差	平均値(b)	順位	標準偏差	
1	高校卒業程度の基礎的な知識	3.36	4	1.00	3.39	3	1.01	-0.04
2	数学、物理、技術、工業・家庭科の知識	3.11	12	0.92	3.14	10	1.04	-0.03
3	機械、建築、コンピュータなどの専門的知識	3.43	2	0.91	3.47	2	0.91	-0.04
4	専攻分野に隣接する領域の専門的知識	3.27	6	0.89	3.15	9	1.02	0.12
5	専攻分野以外の高度な知識	2.86	13	0.99	2.62	13	1.12	0.24
6	仕様に沿った製品作りができる技能	3.15	10	1.03	3.30	4	1.10	-0.16
7	ニーズを捉えて業務の課題を提案する能力	3.12	11	0.94	3.12	11	1.11	0.00
8	優先順位をつけて、仕事の段取りをする能力	3.58	1	0.95	3.56	1	0.76	0.02
9	納期から逆算し、スケジュール管理ができる能力	3.31	5	1.01	3.23	6	0.95	0.08
10	組織における自分の役割を認識し、職場に貢献できる能力	3.40	3	0.93	3.30	4	0.95	0.10
11	クライアントに対するコミュニケーション能力	3.17	9	1.06	3.23	6	1.07	-0.06
12	技術者としての倫理観	3.22	8	0.99	3.09	12	1.00	0.13
13	生涯学び続ける力	3.25	7	1.07	3.17	8	0.98	0.08

表3-2 デザイン分野 仕事に必要な能力の必要性と獲得状況

仕事に必要な能力の必要性

No.	仕事に必要な能力 (デザイン分野)	A専門学校 n=117			B専門学校 n=87			平均値 の差(a-b)
		平均値(a)	順位	標準偏差	平均値(b)	順位	標準偏差	
1	高校卒業程度の基礎的な知識	3.68	8	1.08	3.44	8	1.23	0.25
2	美術、情報、工業の知識	3.69	7	1.17	3.67	7	1.27	0.03
3	グラフィックやデジタル・コンテンツに関する知識	3.61	9	1.36	3.23	9	1.57	0.38
4	デザインの動向や業界に関する知識	3.32	10	1.36	3.14	13	1.58	0.18
5	専攻分野以外の高度な知識	3.30	11	1.20	3.17	11	1.23	0.13
6	既存のデザインの理解と、オリジナルな作品制作の技能	3.29	12	1.35	3.20	10	1.55	0.10
7	担当業務の課題を発見し、解決策を提案する能力	4.15	4	1.06	4.11	5	1.13	0.04
8	優先順位をつけて、仕事の段取りをする能力	4.45	2	0.89	4.63	1	0.73	-0.18
9	仕事を期限内に仕上げる能力	4.52	1	0.84	4.63	1	0.79	-0.11
10	組織における自分の役割を認識し、職場に貢献できる能力	4.28	3	0.93	4.26	3	1.00	0.02
11	取引先や顧客などに対するコミュニケーション能力	3.90	6	1.22	3.93	6	1.20	-0.03
12	オリジナリティを尊重する倫理観	3.28	13	1.23	3.17	11	1.31	0.11
13	生涯学び続ける力	4.10	5	1.14	4.14	4	1.05	-0.04

仕事に必要な能力の獲得状況

No.	仕事に必要な能力 (デザイン分野)	A専門学校 n=124			B専門学校 n=92			平均値 の差(a-b)
		平均値(a)	順位	標準偏差	平均値(b)	順位	標準偏差	
1	高校卒業程度の基礎的な知識	3.38	4	0.93	3.26	6	1.02	0.12
2	美術、情報、工業の知識	3.15	8	0.91	3.25	7	0.88	-0.10
3	グラフィックやデジタル・コンテンツに関する知識	3.10	10	1.06	2.85	11	1.14	0.26
4	デザインの動向や業界に関する知識	2.96	11	1.10	2.68	13	1.20	0.27
5	専攻分野以外の高度な知識	2.72	13	0.99	2.76	12	1.11	-0.04
6	既存のデザインの理解と、オリジナルな作品制作の技能	2.83	12	0.96	2.96	10	1.10	-0.13
7	担当業務の課題を発見し、解決策を提案する能力	3.31	5	0.98	3.40	5	1.05	-0.10
8	優先順位をつけて、仕事の段取りをする能力	3.48	1	1.00	3.77	2	0.91	-0.30
9	仕事を期限内に仕上げる能力	3.45	2	0.99	3.85	1	0.88	-0.40
10	組織における自分の役割を認識し、職場に貢献できる能力	3.40	3	0.93	3.65	3	0.91	-0.25
11	取引先や顧客などに対するコミュニケーション能力	3.19	7	1.10	3.16	8	1.18	0.03
12	オリジナリティを尊重する倫理観	3.13	9	0.93	3.14	9	1.05	-0.01
13	生涯学び続ける力	3.27	6	0.99	3.46	4	0.98	-0.19

(4) 専門学校教育の有用性と満足度

表3-3は、卒業後就業経験を経た上での専門学校教育に対する有用性の調査結果である。

専門学校教育の有用性について、

No.1：就職先を見つける上で

No.2：仕事を行う上での基礎的な能力を身につける上で

No.3：一人前に仕事を行うための能力を身につける上で

No.4：将来のキャリアを展望する上で

No.5：卒業後、仕事に必要な学習を続けていく上で

No.6：人間性（人格）を形成する上で

といった項目について、5「とても重要である」から1「全く重要でない」で、回答を求めている。

表3-3 専門学校教育の有用性

No	専門学校教育の有用性	A 専門学校 n=284			B 専門学校 n=169			平均値の差 (a-b)
		平均値 (a)	順位	標準 偏差	平均値 (b)	順位	標準 偏差	
1	就職先を見つける上で	4.14	1	1.11	4.14	1	1.01	0.00
2	仕事を行う上での基礎的な能力を身につける上で	4.02	2	1.04	3.95	2	1.06	0.07
3	一人前に仕事を行うための能力を身につける上で	3.48	4	1.12	3.32	5	1.14	0.16
4	将来のキャリアを展望する上で	3.41	5	1.12	3.38	4	1.12	0.03
5	卒業後、仕事に必要な学習を続けていく上で	3.78	3	1.01	3.71	3	1.03	0.07
6	人間性（人格）を形成する上で	3.13	6	1.22	3.23	6	1.15	-0.10

A, B 専門学校のような、工業系（情報含む）・デザイン（グラフィック・コンテンツ）分野の専門学校では、卒業時点に専攻分野と関連する企業への就職を第一義的な目標としているため、有用性に関する調査でも、1.「就職先を見つける上で」重要であったと回答する人の割合がもっとも多い。

両専門学校ともに、2.「仕事を行う上での基礎的な能力を身につける上で」、5.「卒業後、仕事に必要な学習を続けていく上で」の順となっている。職業実務の卓越性を表す3.「一人前に仕事を行うための能力を身につける上で」はA 専門学校4位・B 専門学校5位の値となっている。大学短大などを含めた高等教育機関共通の学修成果でもある、6.「人間性（人格）を形成する上で」（人格陶冶）の項目は最も低い値となっている。

A, B 専門学校の比較では、1～5までの項目は、A 専門学校の平均値がB 専門学校の値以上となっている。6.「人間性（人格）を形成する上で」は、B 専門学校が高い値となっている。

図3-8は、総合的に振返った自校に対する満足度を5「とても満足」から1「とても不満」で調査した結果である。

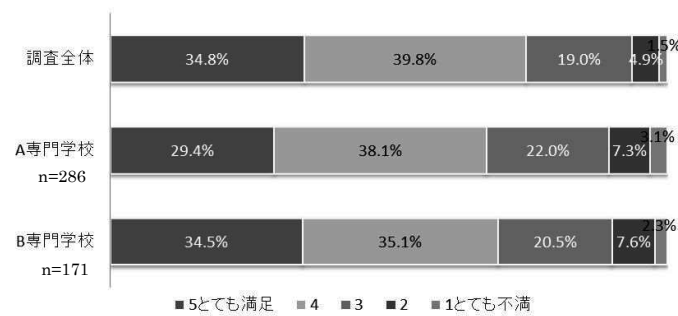


図3-8 総合的に振返った自校に対する満足度

専門学校教育の有用性に関する調査では、A 専門学校の平均値が高い傾向にあったが、総合的に振返った満足度では、5「とても満足」と回答する人の割合はB 専門学校の方が5ポイント以上高くなっている。調査全体の満足度は更に高く、4「満足」以上の割合が約75%であるのに対して、A、B 専門学校ともに70%未満である。

3.2 卒業年コーホート別集計

ここでは、卒業生のデータを卒業後1年目、5年目、9年目のコーホートに分けて集計した結果を示す。

3つのコーホートは「時代・世代・年代」の異なるものではあるが、職場における経年変化として、卒業後の経過年数の差が初期キャリアの形成にどの様に影響しているかを把握する。

(1) 就業状況の経年変化

図3-9は、就職先企業の従業員数を卒業年毎に集計したものである。従業員300名以上の割合が、卒業からの経過年数が増すに従って増加してことが確認できる。

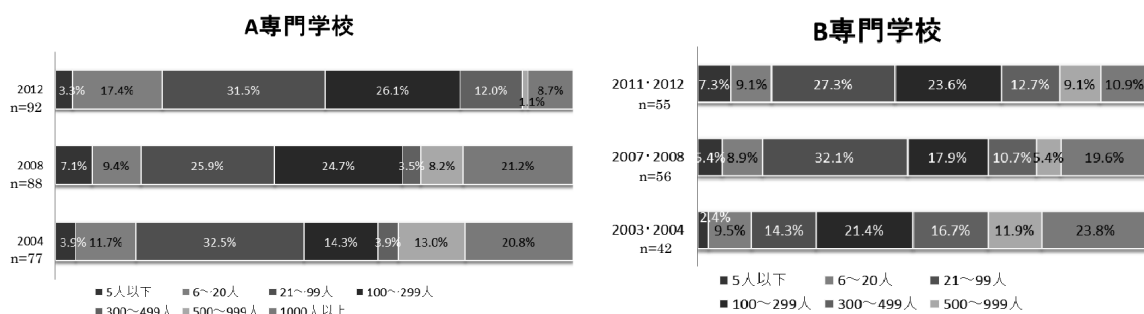


図3-9 就職先企業の従業員数

図3-10は、卒業年毎に集計した年収のグラフである。A、B両校ともに卒業後の経過年数が増すにつれて、年収が増加していく傾向にあることが分かる。IT産業では一般的な企業の賃金と同様、就業年限が増すにつれて賃金が増していく傾向があるため、それを反映した結果となっている。

図3-11は、『IT人材白書2015』（独立行政法人情報処理推進機構編）に示されている20代IT技術者（2013年）の年収分布である。四年制大学など専門学校以外の学歴者も含まれる。300万未満の内訳は不明であるが、A専門学校の2004年卒の年収分布と近い分布となっている。

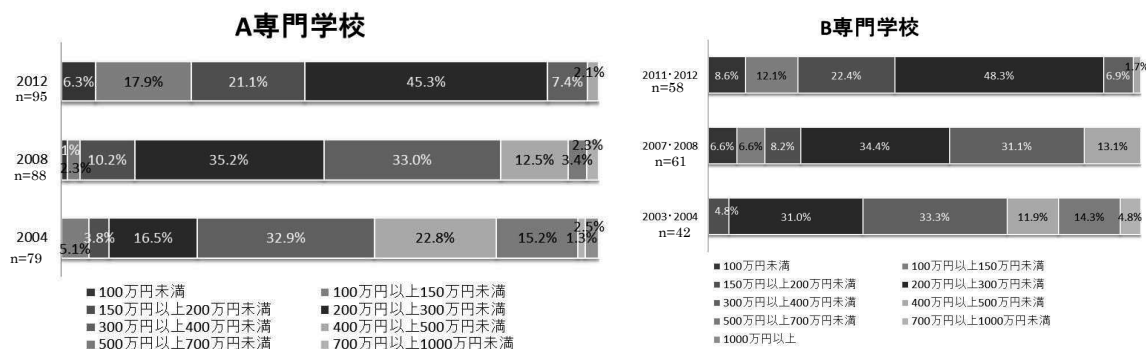


図3-10 年収の推移

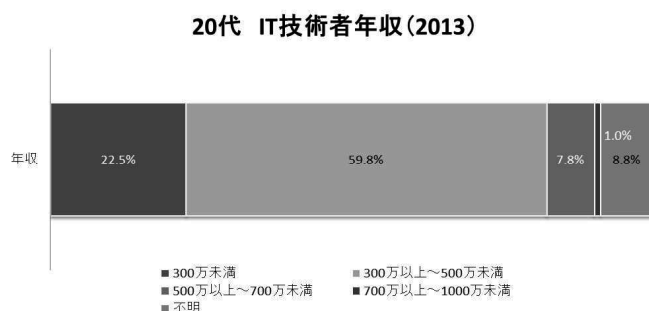


図3-11 IT技術者年収『IT人材白書2015』独) 情報処理推進機構編

A、B 専門学校を比較すると、所得の増加する傾向に大きな違いはないが、300万以上の所得の割合は、
 卒業後1年（2012卒）A 専門学校： 9.5% > B 専門学校： 8.6%
 卒業後5年（2008卒）A 専門学校： 51.2% > B 専門学校： 44.2%
 卒業後9年（2004卒）A 専門学校： 74.7% > B 専門学校： 64.3%

と何れの年代も A 専門学校の方が大きくなっている。これは、地域による所得格差の影響とも考えられる。

（２）四大卒と比較した評価の経年変化

図３－１２は、図３－６「四大短大と同等に評価されているか」の四年制大学との比較を卒業年毎の３つのコーホート別に示したものである。

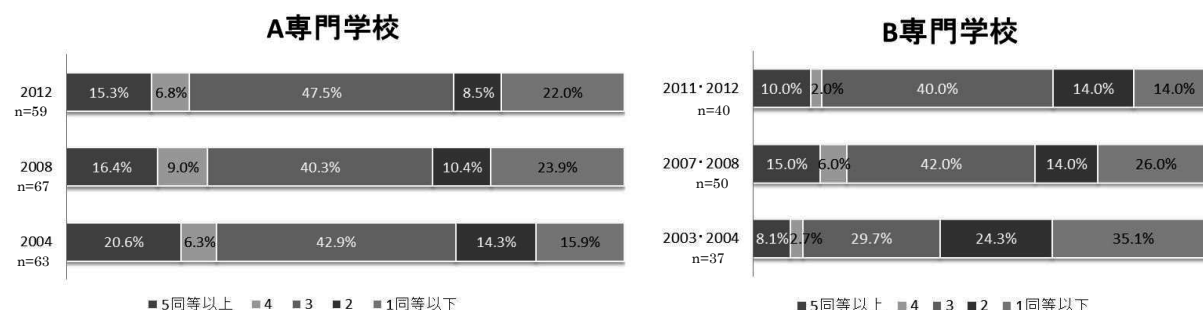


図３－１２ 四大卒と比較した評価の経年変化

各年代に共通して A, B 専門学校ともに、４以上の割合より、２以下の割合の方が多くなっている。A 専門学校では４以上（同等以上に評価）の占める割合が卒業後の経過年数と共に増加傾向になっている。一方 B 専門学校では２以下（同等以下に評価）の割合が、2011・2012年卒に対して2003・2004年卒の方が増加している。四年制大学と比較した職場における評価については、A 専門学校は経験年数が増すにつれて四年制大学より評価されていると回答する人の割合が増加するのに対して、B 専門学校では評価されていない（同等以下の評価）と回答する人の割合が増すといった、異なった傾向を示している。

職場における学歴別の評価は、その職場における昇給や昇進、仕事における責任の重さなど様々な局面を通して自覚が形成されるものと考えられる。専門学校卒業という学歴が四年制大学と比較して「同等以上」または「同等以下」と評価がされているのなら、その傾向は職場における経験年数が長い程、強く表れるものと思われる。

（３）仕事に求められる能力の必要性和その獲得状況の経年変化

仕事に求められる能力の項目のなかで、工業分野・デザイン分野共に上位となっていた８．「優先順位をつけて仕事の段取りをする能力」について、卒業年度毎に集計し、グラフ化して経年変化を確認した。

図３－１３は、必要性に関する経年変化である。A, B 専門学校とも卒業時点より必要性が増している。特に B 専門学校では必要性は着実に増加している。

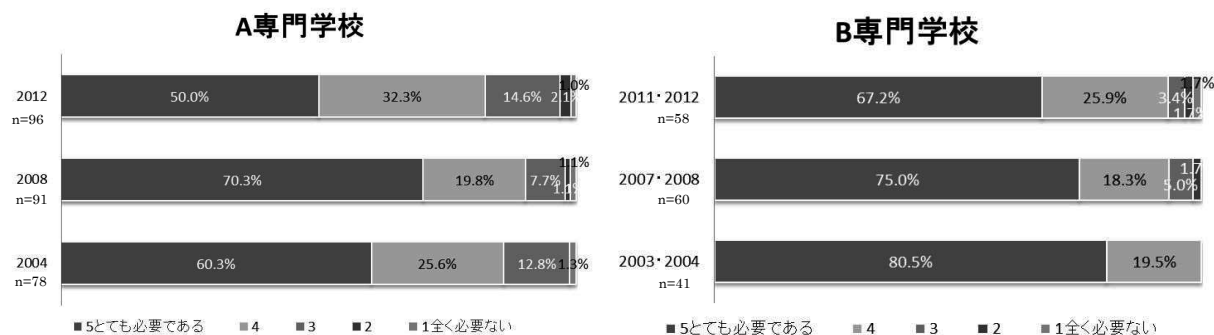


図3-13 優先順位をつけて仕事の段取りをする能力の必要性の経年変化

図3-14は、同能力の獲得状況に関するものである。必要性と同様に獲得状況も卒業後の経過年数に応じて、増加していることが確認できる。

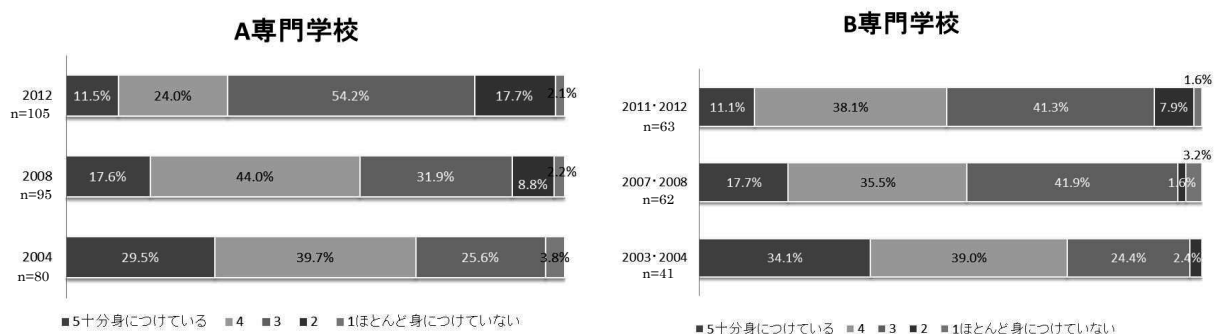


図3-14 優先順位をつけて仕事の段取りをする能力の獲得状況の経年変化

卒業後間もない時点では、職場の上司や同僚らに言われた通りに仕事を進めればよいが、業務経験が増すに連れて、進め方も含め仕事を任されるといった様子が窺える結果となっている。

(4) 専門学校教育の有用性に関する経年変化

次に、表3-3 専門学校教育の有用性に関する項目の経年変化を示す。

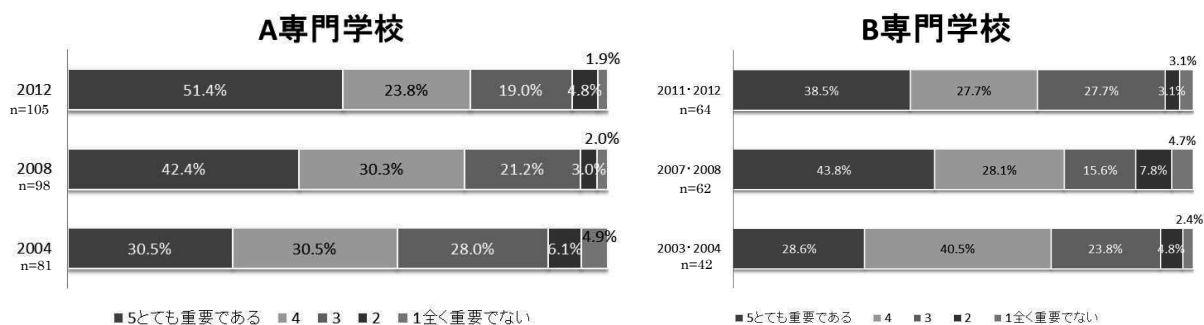


図3-15 仕事を行う上での基礎的な能力を身につける上で

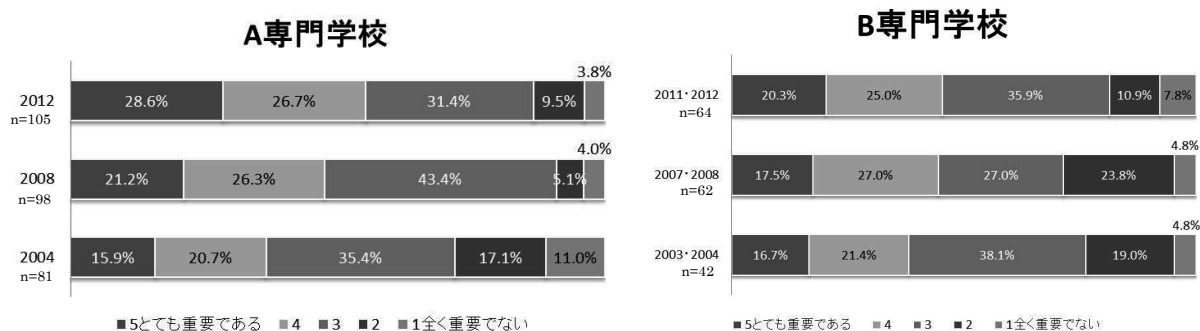


図3-16 一人前に仕事を行うための能力を身につける上で

A, B 専門学校ともに、卒業後の経過年数に応じて専門学校教育の中心ともいえる「仕事を行うための基礎力」や「一人前に仕事を行うための能力」の修得に関する有用性が薄れて行くことが確認できる。

A, B 専門学校の比較では、A 専門学校の方が「仕事を行うための基礎力」「一人前に仕事を行うための能力」共に、多くの年代でB 専門学校より、5「とても重要である」と回答した人の割合が多いことが確認できる。

4. 在学期間中の教育に対する充実度と取組み度合

4.1 学校が提供した教育に関する充実度

卒業生が専攻分野に関連する企業に就職し、就業経験をした後に行う教育に対する評価は、最も適切な教育改善に繋がる有益な情報である。

表4-1は、在学中に提供された教育についての充実度を5「充実していた」～1「充実していなかった」で回答を求め、その「平均値」「平均値の順位」「標準偏差」「データ数」をまとめたものである。

A, B 専門学校ともに、「専門の授業（講義や実習）」と「就職支援（就職活動についての相談・支援）」が高い水準にあり、専門学校の特性をよく示している。今後更に充実が期待されているインターンシップやサービス・ラーニングに象徴される「仕事現場や地域での実習や就業経験」については、低い水準である。

表4-1 在学中に提供された教育についての充実度

No	提供した教育に関する項目	A 専門学校 n=287			B 専門学校 n=174			平均値の差 (a-b)
		平均値 (a)	順位	標準偏差	平均値 (b)	順位	標準偏差	
1	高校までの基礎学力を学び直す授業や指導	2.68	10	1.22	2.71	10	1.11	-0.03
2	知識を広げ教養を身につける授業	3.64	3	1.01	3.55	3	1.00	0.09
3	専門の授業（講義や実習）	4.24	1	0.83	4.19	1	0.86	0.05
4	仕事現場や地域での実習や就業経験	2.67	11	1.24	2.66	11	1.22	0.01
5	資格取得に関わる準備・指導	3.45	6	1.19	3.50	6	1.21	-0.05
6	卒業論文、卒業制作、卒業発表	3.48	4	1.11	3.24	4	1.05	0.24
7	部活やサークル、学校の行事	2.86	9	1.06	2.79	9	1.20	0.07
8	図書室、情報機器、実験器具などの施設設備	3.37	7	1.09	3.24	7	1.11	0.13
9	学習支援（学習の仕方や理解度についての相談・支援）	3.46	5	1.01	3.50	5	1.07	-0.04
10	就職支援（就職活動についての相談・支援）	3.91	2	1.02	3.91	2	1.04	0
11	生活についての相談	3.01	8	1.01	2.93	8	1.10	0.08

11項目の平均値の「順位」はA、B専門学校で等しく、同分野の専門学校であることの類似性が確認できる。B専門学校に対して、A専門学校が優っている項目は「専門の授業（講義や実習）」「知識を広げ教養を身につける授業」「卒業論文、卒業制作、卒業発表」といった教育課程（カリキュラム）上の項目である。B専門学校が優っている項目は「学習支援（学習の仕方や理解度についての相談・支援）」「資格取得に関わる準備・指導」といった教育課程以外での教員の指導である。こうした点からそれぞれの専門学校の個性が確認できる。

4.2 在学期間中熱心に取り組んだ事柄

表4-2は、卒業生自身が在学期間中に熱心に取り組んだ事柄について、5「熱心に取り組んだ」から1「熱心に取り組まなかった」および0「経験なし」で回答を求め、その「平均値」平均値の「順位」「標準偏差」「データ数」をまとめたものである。

A、B専門学校ともに最も熱心に取り組んだ項目は、3.「専門の従業（講義や実習）」であり、次は8.「友人との交流」であるが、それ以降の序列は異なる項目が多い。

A、B専門学校の平均値を比較して、A専門学校の学生が熱心に取り組んだ事柄は「高校までの基礎学力を学び直す授業」「知識を広げ教養を身につける授業」「仕事現場や地域での実習や就業経験」「資格取得に関わる準備・指導」といった教育課程上の項目が多い。逆にB専門学校の学生が熱心に取り組んだ事柄は「部活やサークル、学校の行事」「アルバイト」「友人との交流」といった教育課程以外の事柄である。先の学校側が提供した教育に対する充実度と同様に、それぞれの専門学校の個性が確認できる。

表4-2 在学中熱心に取り組んだこと

No.	在学中熱心に取り組んだ事柄	A 専門学校 n=283			B 専門学校 n=169			平均値の差 (a-b)
		平均値 (a)	順位	標準 偏差	平均値 (b)	順位	標準 偏差	
1	高校までの基礎学力を学び直す授業や指導	2.35	10	1.63	2.43	9	1.49	-0.08
2	知識を広げ教養を身につける授業	3.63	3	1.21	3.55	4	1.07	0.08
3	専門の授業（講義や実習）	4.15	1	1.01	4.11	1	0.97	0.04
4	仕事現場や地域での実習や就業経験	2.11	11	1.84	2.09	11	1.81	0.02
5	資格取得に関わる準備・指導	3.17	6	1.57	3.01	6	1.51	0.16
6	卒業論文、卒業制作、卒業発表	3.46	5	1.40	3.17	5	1.57	0.29
7	部活やサークル、学校の行事	2.52	9	1.58	2.34	10	1.83	0.18
8	友人との交流	3.90	2	1.14	3.72	3	1.34	0.18
9	授業外での教員との交流	2.83	7	1.50	2.85	7	1.52	-0.02
10	アルバイト	2.54	8	1.86	2.76	8	1.90	-0.22
11	就職活動	3.58	4	1.29	3.73	2	1.26	-0.15

*卒業生調査の質問項目としては「海外研修や留学のための機会や指導」の項目もあったが、0「経験なし」の回答が過半数以上のため本集計からは除外した。

5. 教育プロセスと満足度・獲得能力（アウトカム）との関係

在学中の教育プロセスと現在の就業に関する状況との関係性を見出すために、調査項目 B（在学時の学習・学校生活について）を説明変数に、調査項目 H（これまでの経験を総合的に振り返って）を目的変数として、重回帰分析を行った。

調査項目 H の「総合的に振り返った自校に対する満足度」と、「専門学校教育の有用性」を示す質問項目（表 3 - 3）を次の①～⑥のようにそこから獲得が期待される能力（アウトカム）として設定した。

- ① 就職先を見つける上で
=> 就職先を見つける能力（就職活動能力）
- ② 仕事を行う上での基礎的な能力を身につける上で
=> 仕事を行う上での基礎的な能力（基礎的職業能力）
- ③ 一人前に仕事を行うための能力を身につける上で
=> 一人前に仕事を行うための能力（実践的職業能力）
- ④ 将来のキャリアを展望する上で
=> 将来のキャリアを展望する能力（キャリアデザイン力）
- ⑤ 卒業後、仕事に必要な学習を続けていく上で
=> 卒業後、仕事に必要な学習を続ける能力（学習継続能力）
- ⑥ 人間性を形成する上で
=> 人間性の形成（人格陶冶）

説明変数は、B カテゴリーの「在学中に提供された教育についての充実度」（表 4 - 1）を中心とするものと、「在学中熱心に取り組んだこと」（表 4 - 2）を中心とするものとの 2 通りの組合せとした。それぞれに、卒業年度、性別、学業状況（授業以外での学習時間、成績）、現在の就業状況の変数も加えた。

また、説明変数の選択に、多重共線性に影響を軽減し説明力（補正済み R^2 ）を向上させるために変数増減法を用いた。

5.1 学校側が提供した教育の充実度と満足度・獲得能力との関係

「在学中に提供された教育についての充実度」を中心とする分析結果として、表 5 - 1 A 専門学校、表 5 - 2 B 専門学校を示す。

満足度の規定因子として、A 専門学校では「専門の授業（講義や実習）」が最も高く、次いで「就職支援（就職活動についての相談・支援）」「卒業論文、卒業制作、卒業発表」となっている。これに対して、B 専門学校では「就職支援（就職活動についての相談・支援）」が最も高く次いで「専門の授業（講義や実習）」「部活やサークル、学校の行事」の順となっており、A 専門学校とは異なる結果となっている。

表5-1 A専門学校

A専門学校 在学中の教育指導の充実度合いと満足度・獲得能力(アウトカム)の関係 重回帰分析(変数増減法) n=218

説明変数名		満足度	獲得能力					
			就職先を見つ ける能力	仕事を行う上 での基礎的な 能力	一人前に仕事 を行うための 能力	将来のキャリ アを展望する 能力	卒業後、仕事 に必要な学習 を続ける能力	人間性の形成
卒業年度	2003年度:1 他:0							
	2007年度:1 他:0							0.132 *
性別	女:1 男:0							
学業	授業以外での学習時間		0.151 *	0.160 **	0.282 ***	0.192 **	0.231 ***	
	在学中の成績	0.114 *		0.193 **				
教育指導の 充実度合い	高校までの基礎学力を 学び直す授業や指導	0.122 *						
	知識を広げ教養を 身につける授業			0.180 **	0.178 **		0.166 **	0.300 ***
	専門の授業(講義や実習)	0.338 ***	0.151 *	0.240 ***			0.279 ***	
	仕事現場や地域での 実習や就業経験				0.178 **		0.140 *	
	資格取得に関わる準備・指導			0.113 *	0.147 *	0.299 ***	0.140 *	
	卒業論文、卒業制作、卒業発表	0.197 **		0.145 *		0.119	0.141 *	
	部活やサークル、学校の行事							0.168 *
	図書室、情報機器、実験器具など の施設設備							
	学習支援(学習の仕方や理解度につ いての相談・支援)				0.206 **	0.154 *		
	就職支援(就職活動についての相 談・支援)	0.219 ***	0.345 ***	0.138 *				
	生活についての相談							0.209 **
就業状況	卒業直後の就業形態 正規:1 非正規、他:0							
	現在の就業形態 正規:1 非正規、他:0							
	働いている企業の従業員数 5人以下:1 ~ 1000人以上:7			0.101				
	現在の年収 100万円未満:1~ 1000万円以上:9							
補正済みR ²		0.422	0.211	0.444	0.287	0.203	0.387	0.26

* p<0. 05 ** p<0. 01 *** p<0. 001

<設問項目の尺度>

授業以外での学習時間:授業以外でもほぼ毎日勉強した 5 ~ 授業以外はほとんど勉強しない 1

在学中の成績:上のほう 5 ~ 下のほう 1

教育指導の充実度合い:充実していた 5 ~ 充実していなかった 1

働いている企業の従業員数:以下:1 ~ 1000人以上:7

現在の年収 100万円未満:1 ~ 1000万円以上:9

表5-2 B専門学校

B専門学校 在学中の教育指導の充実度合いと満足度・獲得能力(アウトカム)の関係 重回帰分析(変数増減法) n=143

説明変数名		満足度	獲得能力					
			就職先を見つける能力	仕事を行う上での基礎的な能力	一人前に仕事を行うための能力	将来のキャリアを展望する能力	卒業後、仕事に必要な学習を続ける能力	人間性の形成
卒業年度	2003年度:1 他:0							
	2007年度:1 他:0							
性別	女:1 男:0							
学業	授業以外での学習時間			0.257 ***	0.218 **	0.189 *	0.266 ***	0.174 *
	在学中の成績		0.194 **					
教育指導の充実度合い	高校までの基礎学力を学び直す授業や指導					0.328 ***		
	知識を広げ教養を身につける授業			0.191 *	0.408 ***		0.349 ***	0.247 **
	専門の授業(講義や実習)	0.275 ***						
	仕事現場や地域での実習や就業経験							0.179 *
	資格取得に関わる準備・指導		0.143 *			0.164 *		
	卒業論文、卒業制作、卒業発表							
	部活やサークル、学校の行事	0.266 **					0.227 **	
	図書室、情報機器、実験器具などの施設設備							
	学習支援(学習の仕方や理解度についての相談・支援)	0.341 ***			0.229 **	0.208 *	0.192 *	
	就職支援(就職活動についての相談・支援)		0.542 ***	0.426 ***				
	生活についての相談							
就業状況	卒業直後の就業形態 正規:1 非正規、他:0							
	現在の就業形態 正規:1 非正規、他:0							
	働いている企業の従業員数 5人以下:1 ~ 1000人以上:7							
	現在の年収 100万円未満:1 ~ 1000万円以上:9						0.137 *	
補正済みR ²		0.465	0.439	0.357	0.355	0.283	0.416	0.150

*p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

<設問項目の尺度>

授業以外での学習時間:授業以外でもほぼ毎日勉強した 5 ~ 授業以外はほとんど勉強しない 1

在学中の成績:上のほう 5 ~ 下のほう 1

教育指導の充実度合い:充実していた 5 ~ 充実していなかった 1

働いている企業の従業員数:5人以下:1 ~ 1000人以上:7

現在の年収 100万円未満:1 ~ 1000万円以上:9

それぞれの獲得能力に関する規定因子については、次の通りである。

①就職先を見つける能力（就職活動能力）

A, B 両校ともに「就職相談・支援」が最も高い規定因子となっている。その他に A 専門学校では「専門の授業」が、B 専門学校では「資格取得に関わる準備・指導」が有意となっている。

②仕事を行う上で基礎的な能力（基礎的職業能力）

A 専門学校では「専門の授業」「知識を広げ教養を学び直す授業」「卒業論文、卒業制作、卒業発表」「就職相談・支援」「資格取得に関わる準備・指導」と多くの項目が有意な水準となっている。B 専門学校では「就職支援・相談」「知識を広げ教養を学び直す授業」が有意な規定因子となっている。

③一人前に仕事を行うための能力（実践的職業能力）

A 専門学校では「学習支援」「仕事現場や地域での実習や就業経験」「知識を広げ教養を学び直す授業」「資格取得に関わる準備・指導」の項目が有意な水準となっている。B 専門学校では「知識を広げ教養を学び直す授業」「学習支援」となっている。

④将来のキャリアを展望する能力（キャリアデザイン力）

両校ともに「資格取得に関わる準備・指導」が有意な水準となっている。A 専門学校では加えて「学習支援」が、B 専門学校では「高校までの基礎学力を学び直す授業や指導」「学習支援」が有意な水準となっている。

⑤卒業後、仕事に必要な学習を続ける能力（学習継続能力）

両校ともに「知識を広げ教養を学び直す授業」が有意な水準となっている。加えて A 専門学校では「専門の授業」「卒業論文、卒業制作、卒業発表」「仕事現場や地域での実習や就業経験」「資格取得に関わる準備・指導」が、B 専門学校では「部活やサークル、学校の行事」「学習支援」が有意な水準となっている。

⑥人間性の形成（人格陶冶）

A, B 専門学校ともに、「知識を広げ教養を学び直す授業」が有意な水準となっている。これに加えて A 専門学校では、「生活についての相談」「部活やサークル、学校行事」が有意な水準となっている。B 専門学校では「仕事現場や地域での実習や就業経験」が有意となっている。

専門学校側から提供する教育指導に関するものは以上であるが、その他の項目（説明変数）として、在学中の学習状況で、「授業以外での学習時間」が両校ともに多くの獲得能力（アウトカム）の項目で有意な水準となっていることが確認できる。

5.2 在学中熱心に取り組んだことと満足度・獲得能力との関係

「在学中熱心に取り組んだこと」を中心とする分析結果として、表 5-3 A 専門学校、表 5-4 B 専門学校を示す。

表5-3 A専門学校

A専門学校 在学中熱心に取り組んだことと満足度・獲得能力(アウトカム)の関係 重回帰分析(変数増減法) n=226

説明変数名		満足度	獲得能力					
			就職先を見つ ける能力	仕事を行う上 での基礎的な 能力	一人前に仕事 を行うための 能力	将来のキャリ アを展望する 能力	卒業後、仕事 に必要な学習 を続ける能力	人間性の形成
卒業年度	2003年度:1 他:0	-0.159 **	-0.161 *				-0.152 **	
	2007年度:1 他:0							
性別	女:1 男:0							
学業	授業以外での学習時間			0.171 **	0.194 **	0.154 *	0.200 **	
	在学中の成績							
在学中熱心 に取り組んだ こと	高校までの基礎学力を学び直す授業や指導							
	知識を広げ教養を身につける授業	0.160 *		0.341 ***	0.158 *	0.150 *	0.307 ***	0.242 ***
	専門の授業(講義や実習)	0.187 **	0.166 *	0.233 **	0.164 *			
	仕事現場や地域での 実習や就業経験				0.151 *			
	資格取得に関わる準備・指導				0.149 **	0.278 ***		
	卒業論文、卒業制作、卒業発表			0.117 *				0.218 **
	部活やサークル、学校の行事							0.228 ***
	友達との交流	0.299 ***				0.146 *	0.181 **	
	授業外での教員との交流							
	アルバイト							
	就職活動		0.208 **					
就職状況	卒業直後の就業形態 正規:1 非正規、他:0							
	現在の就業形態 正規:1 非正規、他:0						0.126 *	
	働いている企業の従業員数 5人以下:1 ~ 1000人以上:7			0.116 *				
	現在の年収 100万円未満:1 ~ 1000万円以上:9							
補正済みR ²		0.275	0.119	0.338	0.216	0.177	0.283	0.178

* p<0.05 ** p<0.01 *** p<0.001

<設問項目の尺度>

授業以外での学習時間:授業以外でもほぼ毎日勉強した 5 ~ 授業以外はほとんど勉強しない 1

在学中の成績:上のほう 5 ~ 下のほう 1

在学中に経験した教育・指導にどの程度熱心に取り組んだか:熱心に取り組んだ 5 ~ 熱心に取り組まなかった 1、経験なし 0

表5-4 B専門学校

B専門学校 在学中熱心に取り組んだことと満足度・獲得能力(アウトカム)の関係 重回帰分析(変数増減法) n=141

説明変数名		獲得能力	獲得能力					
			就職先を見つける能力	仕事を行う上での基礎的な能力	一人前に仕事を行うための能力	将来のキャリアを展望する能力	卒業後、仕事に必要な学習を続ける能力	人間性の形成
卒業年度	2003年度:1 他:0	-0.155						
	2007年度:1 他:0							
性別	女:1 男:0							
学業	授業以外での学習時間						0.216 **	
	在学中の成績							
在学中熱心に取り組んだこと	高校までの基礎学力を学び直す授業や指導					0.189 *	0.209 **	
	知識を広げ教養を身につける授業				0.290 ***			0.217 **
	専門の授業(講義や実習)	0.339 ***	0.368 ***	0.409 ***		0.313 ***	0.293 ***	
	仕事現場や地域での実習や就業経験							
	資格取得に関わる準備・指導		0.166 *					
	卒業論文、卒業制作、卒業発表							
	部活やサークル、学校の行事		0.275 **					
	友達との交流		-0.215 *					
	授業外での教員との交流	0.271 **			0.246 **			0.355 ***
	アルバイト					0.161 *		
就職状況	卒業直後の就業形態 正規:1 非正規、他:0							
	現在の就業形態 正規:1 非正規、他:0							
	働いている企業の従業員数 5人以下:1 ~ 1000人以上:7							
	現在の年収 100万円未満:1 ~ 1000万円以上:9							
補正済みR ²		0.294	0.288	0.250	0.171	0.184	0.234	0.214

* p<0.05 ** p<0.01 *** p<0.001

<設問項目の尺度>

授業以外での学習時間:授業以外でもほぼ毎日勉強した 5 ~ 授業以外ほとんど勉強しない 1

在学中の成績:上のほう 5 ~ 下のほう 1

在学中に経験した教育・指導にどの程度熱心に取り組んだか:熱心に取り組んだ 5 ~ 熱心に取り組まなかった 1、経験なし 0

満足度の規定因子として、A 専門学校では「友人との交流」が最も高く次いで「専門の授業」「知識を広げ教養を学び直す授業」の順となっている。これに対して、B 専門学校では「専門の授業」が最も高く次いで「授業外での教員との交流」と両校で異なる結果となっている。

それぞれの獲得能力に関する規定因子については、次の通りである。

①就職先を見つける能力（就職活動能力）

A 専門学校では「就職活動」「専門の授業」が有意な水準となっている。B 専門学校では「専門の授業」「部活やサークル、学校の行事」「資格取得に関わる準備・指導」「就職活動」が正の規定因子として、「友人との交流」が負の規定因子として有意な水準となっている。

②仕事を行う上で基礎的な能力（基礎的職業能力）

A 専門学校では「知識を広げ教養を身につける授業」「専門の授業」「卒業論文、卒業制作、卒業発表」が有意な水準となっている。B 専門学校では「専門の授業」「就職活動」が有意な水準となっている。

③一人前に仕事を行うための能力（実践的職業能力）

A 専門学校では「専門の授業」「知識を広げ教養を身につける授業」「仕事現場や地域での実習や就業経験」「資格取得に関わる準備・指導」の項目が有意な水準となっている。B 専門学校では「知識を広げ教養を身につける授業」「授業外での教員との交流」となっている。

④将来のキャリアを展望する能力（キャリアデザイン力）

A 専門学校では「資格取得に関わる準備・指導」「知識を広げ教養を身につける授業」「友人との交流」が有意な水準となっている。B 専門学校では「専門の授業」「高校までの基礎学力を学び直す授業や指導」「アルバイト」が有意な水準となっている。

⑤卒業後、仕事に必要な学習を続ける能力（学習継続能力）

A 専門学校では「知識を広げ教養を身につける授業」「友人との交流」が有意な水準となっている。B 専門学校では「専門の授業」「高校までの基礎学力を学び直す授業や指導」が有意な水準となっている。

⑥人間性の形成（人格陶冶）

A 専門学校では、「知識を広げ教養を身につける授業」「部活やサークル、学校の行事」「卒業論文、卒業制作、卒業発表」が有意な水準となっている。B 専門学校では、「授業外での教員との交流」「知識を広げ教養を身につける授業」が有意な水準となっている。

在学中熱心に取組んだ項目以外に、説明変数「授業以外での学習時間」がA 専門学校では4つの獲得能力の規定因子に、B 専門学校でも「卒業後、仕事に必要な学習を続ける能力」の規定因子となっている。

説明変数「卒業年度」の2003年度について、A 専門学校では「満足度」と2つの獲得能力がマイナスの値となっている。同様にB 専門学校では、「満足度」が、マイナスの値となっている。これは、卒業後の経過年数が増すにつれて、熱心に取組んだ事柄と目的変数との関係が薄まっていることを示しているものと考えられる。

6. まとめ

6.1 A, B専門学校の類似性と個別性

A, B 専門学校は、教育環境（教育課程、教員、教育施設・設備）や地域の違いはあるものの卒業生が主に従事している産業が等しいため、今回の調査結果より、次のような類似点が見出せる。

- 就業形態、勤め先企業の年収と従業員数の分布の傾向
- 勤め先での処遇（学歴への評価）

責任の重さ > 昇給・昇格 > 賃金水準

- 学歴別の評価の割合

四大以上の評価 < 四大以下の評価

短大以上の評価 > 短大以下の評価

- 仕事に必要な能力の必要性和獲得状況

基礎的・社会的技能 > 専門の知識・技能

- 専門学校教育の有用性の序列

就職先 > 仕事を行う上での基礎的能力 > 学習継続能力

人間性（人格）形成は、最下位

- 卒業後の経過年数の増加に応じて、従業員数、年収が増加する傾向
- 卒業後の経過年数の増加に応じて、仕事に必要な能力の「優先順位をつけて仕事の段取りをする能力」の必要性は高まっており、その獲得状況も増加傾向が見られる。
- 在学中に提供された教育についての充実度の序列は

専門の授業 > 就職支援 > 知識を広げ教養を身につける授業 > 卒業論文、卒業制作、卒業発表、の順で以下全て一致する。

- 卒業後の「満足度」や「獲得能力（専門学校教育の有用性）」には、「授業以外での学習時間」「知識を広げ教養を身につける授業」「専門の授業」が多くの項目の規定因子となっている。

一方それぞれの専門学校間の違い（個別性）は、複数の調査項目間の傾向により見出すことができる。例えば、「仕事に必要な能力の獲得状況」では、工業分野卒業生では多くの項目でA専門学校の獲得状況（表3-1）が高く、逆にデザイン分野卒業生では多くの項目でB専門学校の獲得状況（表3-2）が高いことが分かる。また、表4-1「在学中に提供された教育についての充実度」では、A専門学校では「専門の授業（講義や実習）」「知識を広げ教養を身につける授業」「卒業論文、卒業制作、卒業発表」といった教育課程（カリキュラム）上の項目が高い充実度を示している。B専門学校では「学習支援（学習の仕方や理解度についての相談・支援）」「資格取得に関わる準備・指導」といった教育課程以外での教員の指導が高い充実度を示している。

就業経験を経た上での「満足度」や「獲得能力（専門学校教育の有用性）」は、「在学中に提供した教育」と「在学中に熱心に取組んだこと」など教育プロセスの何が規定因子となっているかを先に示した。表6-1は、表5-1～表5-4の各説明変数が「満足度」と「獲得能力（専門学校教育の有用性）」の幾つの規定因子になっているかを、A, B 専門学校毎に集計したものである。

表6－1 「満足度」「獲得能力」の規定因子数

No.	説明変数	A 専門学校	B 専門学校	No.	説明変数	A 専門学校	B 専門学校
1	授業以外での学習時間	9	6	9	部活やサークル、学校の行事	2	3
2	在学中の成績	2	1	10	学習支援（学習の仕方や理解度についての相談・支援）	2	4
3	高校までの基礎学力を学び直す授業や指導	1	3	11	就職支援（就職活動についての相談・支援）	3	2
4	知識を広げ教養を身につける授業	10	6	12	生活についての相談	1	0
5	専門の授業（講義や実習）	8	6	13	友達との交流	3	1
6	仕事現場や地域での実習や就業経験	3	1	14	授業外での教員との交流	0	3
7	資格取得に関わる準備・指導	6	3	15	アルバイト	0	1
8	卒業論文、卒業制作、卒業発表	5	0	16	就職活動	1	2

- 1) 表5－1～表5－4の有意な水準の標準偏回帰係数（規定因子）の数を説明変数毎に集計した。
 2) 説明変数 No.1～No.9は、教育の充実度合（表5－1、表5－2）取組みの熱心度合（表5－3、表5－4）と共通の項目。
 No.10～No.12は教育の充実度合の項目、No.13～No.16は取組みの熱心度合の項目。

表6－1の集計結果より、規定因子の傾向にはA、B専門学校間で、次のような違いが確認できる。

A 専門学校：「卒業論文、卒業制作、卒業発表」「知識を広げ教養を身につける授業」「資格取得に関わる準備・指導」「専門の授業（講義や実習）」など、主に教育課程（カリキュラム）上の項目

B 専門学校：「授業外での教員との交流」「学習支援」「就職活動」「部活やサークル、学校行事」「アルバイト」など、主に教育課程外の項目

こうした違いは、それぞれの専門学校の教育プロセスの違いによるものであるのか、更に多くのデータを集めた分析が必要であろう。

6.2 教育改善に向けて

卒業生調査の結果により、卒業生の初期キャリアの状況がある程度把握できた。卒業生が在学中に得た知識・技能を使って、職場で活躍することが専門学校にとって最も望ましい姿である。職場で求められる能力は、その職場毎に異なり多様であり一概ではない。また、今回の対象分野は工業・デザイン分野であり、技術革新が特に激しい分野である。調査結果を俯瞰すると、職場で求められる能力として、「専門の知識・技能」より「基礎的・社会的技能」の方が高い傾向を示している。

また、在学中に修得できる専門の「知識・技能」には限界があり、それを補う上でも「生涯学び続ける能力」のような「基礎的・社会的技能」を養うことが求められている。

こうした汎用的能力の獲得には、「学校側が提供する各種の教育」と「学生が授業以外に自ら学習する時間」が規定因子となっていることが確認できた。学校側が提供する教育により、学生の主体的学びを誘発させるような構造的な教育システムの必要性が想像できる。これは、昨今話題となっている能動的学習（アクティブラーニング）と関連するものとも考えられる。

今回の各種の分析結果は、数多く存在する工業・デザイン分野専門学校のなかの2校の（しかも一部の）卒業生のデータによるものであり、それぞれの専門学校の自己評価には有効であるが、この分野の標準的な評価指標（ベンチマーク）とするためには更に多くのデータが必要である。

専門学校制度においては、2014年度より「職業実践専門課程」が新たに創設された。この課程の認定要件として、企業および業界団体の委員によって構成される教育課程編成委員の実施が義務付けられている。今回の卒業生調査の集計分析結果やそこから得られた教育改善の方向性などを、教育課程編成委員会の資料として、根拠（エビデンス）に基づく教育課程の編成を検討することが、確実な教育改善に繋がるものと考えられる。

最後に、これまでの卒業生調査の集計・分析結果を受けて、A 専門学校の教育改善に向けた方向性と、改善の一環として既に着手している教育課程編成・実施方針（カリキュラムポリシー）改訂への取組みを示す。

(1) A 専門学校の教育改善に向けた方向性

今回の卒業生調査全体を通して、A 専門学校の教育改善の方向性を示す。

- ・現在の仕事の就業形態（図3-1）より、B 専門学校と比較して契約社員・派遣社員の割合が高い。正規雇用としての就職させる指導の徹底が必要である。
- ・仕事の必要な能力として、表3-1のNo.11「コミュニケーション能力」の必要性の順位は高いが、その獲得状況の順位は低い。コミュニケーション能力を養う教育課程の検討が必要である。
- ・仕事に求められる能力として、工業分野（表3-1）ではB 専門学校と比較して、No.6「仕様に沿った製品作りができる技能」の獲得状況が低い。その原因の調査と対策を検討すべきである。
- ・専門学校教育の有用性の集計結果（表3-3）より、6.「人間性（人格）の形成」の評価が低い。その原因の調査・検討と対策が必要である。
- ・総合的に振返った「満足度」（図3-8）が低い点から、その原因の検討と対策。
- ・専門学校教育の有用性に関する経年変化より、「基礎的職業能力」（図3-15）「実践的職業能力」（図3-16）の有用性が低下して行くことから、その原因の検討と対策が必要である。
- ・学校が提供した教育の充実度の集計結果（表4-1）や獲得能力との関係（表5-1～表5-4）より、「授業外での教員との交流」「学習支援」「就職活動」「部活やサークル、学校行事」など、教育課程以外の充実が求められる。
- ・各種獲得能力の規定因子より、「知識を広げ教養を身につける授業」の更なる充実と、授業以外の時間に学生自らが進んで学習するシステムの構築が必要である。

(2) A 専門学校の教育課程編成・実施方針改訂への取組み

A 専門学校では、2013年度から2015年度にかけて、職業実践専門課程への申請に向けた各種の取組みを年度の重点事項として取組んできた。その結果、申請可能な課程（学科）は、全て職業実践専門課程の認定を受けるに至った。

今後は、その充実に向けた取組みを行う計画である。その一環として、改めて各学科の教育課程編成・実施方針（カリキュラムポリシー）、専門士称号授与方針（ディプロマポリシー）の見直しに、2015年度より着手している。

特に教育課程編成・実施方針については、設置されている20学科に対して、学校としての横断的な方針を示し、それを受けた形で各学科の方針を設定する運びとなっている。この学校としての方針には、今回の卒業生調査の結果等を踏まえて、次の5項目が示されている。

A 専門学校 教育課程編成・実施方針の柱

- ① 高い専門知識・技術力を養成すると共に、企業と連携した職業実践的な教育課程とする。
- ② 社会人としての基礎的・汎用的能力を養成し、人間性を高める（人格を形成する）教育課程とする。
- ③ 自らが学び成長する力を養成すると共に、持続的な学習効果が得られる教育課程とする。
- ④ 就職を意識した基礎学力養成科目（国語・数学・教養 など）を含む教育課程とする。
- ⑤ すべての学生が、学習に関連する目標資格（1つ以上）を取得できる教育課程とする。

これらを受けて、各学科では今後、教育課程編成・実施方針の改定を図って行く計画である。

7. 謝辞

今回の論文をまとめるにあたり、2012年 EQ 研の卒業生調査への参加時から多岐に渡りご指導・ご助言を頂いた九州大学吉本圭一教授、筑波大学稲永由紀先生に深く感謝申し上げます。また、同分野他校との比較を行うにあたり、自校のローデータの活用を快く了承して頂いた B 専門学校の前校長及び現校長に深く感謝申し上げます。

2012年の調査より既に4年が経過し、その間に本校の卒業生調査結果をどのようにまとめるかを色々と模索してきたが、その過程のなかで様々な形でご協力頂いた「専門学校コンソーシアム Tokyo 教育の会」の皆様や2014年10月日本産業教育学会大会専修学校部会での発表を促して頂いた第一平田学園平田眞一理事長、工業・デザイン分野以外の分野を含め2012年卒業生調査専門学校全体のまとめについて、ご教授頂いた九州大学志田秀史准教授など、ご尽力頂いた全ての方に感謝御礼申し上げます。

【注】

- 1) 卒業生調査にあたっては、九州大学「高等教育と学位・資格研究会」が開発・実施した web アンケート調査システムを利用した。調査参加機関の中から、相互 IR 分析に賛同した専門学校17校が参加する「専門学校 IR 研究会」が発足し、同一分野内での比較検討を行う共同 IR の合意が得られたデータをもとに分析を行った。その研究会において、参加者が各自の学園・専門学校の分析を行い、吉本圭一研究代表（九州大学）の指導助言を得た。

【参考文献】

- 岩木秀夫・耳塚寛明, 1986, 「専修・各種学校入学者増加メカニズムの高校階層別分析」『国立教育研究所紀要』112: 1-177.
- 小方直幸, 2009, 「専門学校教育と卒業生のキャリア」『高等教育研究叢書』103 広島大学高等教育研究開発センター: 1-75.
- 金子元久, 2014, 「大学教育のアウトカム」『IDE 現代の高等教育 大学教育のアウトカム』IDE 大学協会560: 6-8.
- 小林雅之, 2014, 『大学における IR（インスティテューショナル・リサーチ）の現状と在り方に関する調査研究』東京大学: 40.
- 生涯学習政策局, 2013, 『専修学校における学校評価ガイドライン』文部科学省: 14-5. (http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afiedfile/2014/05/26/1348103_01_1.pdf 2016.4.11)
- 生涯学習政策局, 2015, 『学校評価を活かした専修学校の質保証・向上に向けて ～専修学校における学校評

- 価値実践の手引き～』文部科学省.
- 実践的な職業教育を行う新たな教育機関の制度化に関する有識者会議, 2015, 『実践的な職業教育を行う高等教育機関の在り方について 審議のまとめ』文部科学省: 15.
- 中央教育審議会, 2005, 「我が国の高等教育の将来像 (答申)」文部科学省.
- 中央教育審議会, 2008, 「学士課程教育の構築に向けて (答申)」文部科学省: 16-7.
- 中央教育審議会, 2012, 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて (答申)」文部科学省.
- 塚原修一, 2005, 「専門学校の新たな展開と役割」『日本労働研究雑誌』542日本労働研究機構: 70-10.
- 独立行政法人 情報処理推進機構 IT 人材育成本部編, 2009, 『IT 人材白書2009』.
- 矢野真和・濱中淳子, 2006, 「なぜ, 大学に進学しないのか」日本教育社会学会編『教育社会学研究』79: 85-102.
- 山田礼子, 2011, 「学生調査と IR 教育の質の保証にむけてのデータの活用」『IDE 現代の高等教育 大学評価と IR』528 IDE 大学協会: 30-5.
- 吉本圭一, 2003, 「専門学校の発展と高等教育の多様化」日本高等教育学会編『高等教育研究』6: 83-102.
- 吉本圭一, 2007, 「卒業生を通じた「教育の成果」の点検・評価方法の研究」『大学評価・学位研究』5 独立行政法人大学評価・学位授与機構: 81-2.
- 吉本圭一, 2015, 「職業統合的学習と学習成果 短期大学・専門学校卒業生調査より」『短期大学コンソーシアム九州紀要』5: 5-9.
- 吉本圭一編, 2018, 『卒業生調査を通じた学修成果とコンピテンシー——短期大学・専門学校17分野55機関による IR モデルへの試み——』, 九州大学第三段階教育研究センター「高等教育と学位・資格研究会」ワーキングペーパーシリーズ No.4.

第6章 | 工業系・デザイン系分野専門学校卒業生調査に関する考察

金 森 吉 弘 (トライデントデザイン専門学校校長), 勝 田 雅 人 (トライデントコンピュータ専門学校校長),
小 林 福 寿 (中央工学校教務部課長), 古 賀 稔 邦 (日本電子専門学校校長),
杉 浦 敦 司 (日本電子専門学校教育部長), 田 口 一 子 (中国デザイン専門学校校長),
海 野 晴 博 (日本電子専門学校産学連携教育企画室)

2012年に九州大学「高等教育と学位・資格研究会」(研究代表・吉本圭一)が開発・実施したweb調査(調査名「卒業生のキャリアと学校評価に関する調査プロジェクト」)では、全国の短期大学21校及び専門学校34校が参加して実施された。その中から、工業系専門学校及びデザイン系専門学校の5校を抽出し、その傾向を分析するとともに、各専門学校が力を入れて行う学生指導を探り、それが結果として現れているかを検証した¹⁾。

1. はじめに

1-1. 研究目的

専門学校に於いては、設置されている学科の種別(工業・デザイン系等)によって入学してくる学生の属性が異なり、形成されるクラスや学科の教育指導の在り方が大きく異なる。今回は、各専門学校が力を入れて教育している項目と、学生が力を入れて学んだ項目・学習成果の獲得度を主項目として、調査分析を行う。分析対象を、工業系を中心とする学校(3校)とデザイン系を中心とする学校(2校)の工業系・デザイン系・ファッション系の3学科群の卒業生とし、共同分析することによりその差異を見出し、学校ごとの教育の改善ポイントの発見を目指す。

1-2. 調査対象

大都市圏工業系専門学校：3校

大都市圏デザイン系専門学校：2校

調査コーホート 卒業後：1年目，5年目，9年目の卒業生

1-3. 調査方法

郵送により調査の実施を告知，調査協力を依頼。Web上で回答。

1-4. 調査期間

2012年10月1日～2013年7月14日

2. 調査対象学校概要

A 校	分 野	主な教育分野	地域	男女比
	工業系専門学校	CG・映像分野 ゲーム分野 アニメーション分野 デザイン分野 情報処理・IT 分野 電気電子分野	大都市圏	8：2
			調査対象	
			工業系（グループ7） デザイン系（グループ14）	
B 校	分 野	主な教育分野	地域	男女比
	工業系専門学校	情報処理分野 ゲーム分野 CG 分野 WEB 分野 CAD 分野	地方大都市圏	8：2
			調査対象	
			工業系（グループ7） デザイン系（グループ14）	
C 校	分 野	主な教育分野	地域	男女比
	工業系専門学校	建築分野 デザイン分野 土木・測量・造園分野 機械・CAD 分野 スポーツ分野	大都市圏	8：2
			調査対象	
			工業系（グループ7）	
D 校	分 野	主な教育分野	地域	男女比
	デザイン系専門学校	ファッション分野 デザイン分野 マンガ・アニメーション分野 プロダクト分野 建築分野	政令指定都市	3：7
			調査対象	
			工業系（グループ7） ファッション系（グループ13） デザイン系（グループ14）	
E 校	分 野	主な教育分野	地域	男女比
	デザイン系専門学校	ビジュアルデザイン分野 スペースデザイン分野	地方大都市圏	4：6
			調査対象	
			デザイン系（グループ14）	

3. 調査結果

3-1. 回答状況

5校の回答状況は、全体で6,379通送付中752件の回答を得た（回収率11.8%）。全体の男女比は65：35であった。

工業・デザイン系のアンケートの回収状況は表3-1のとおりである。学校毎の回収率は6.8%～18.3%（平均11.8%）であった。各学校・分野別の回答者の男女比率は表3-2のとおりである。

表3-1. アンケート回答状況

分野	送付数	有効回収数	有効回収率
工業系専門学校 (工業系・デザイン系)	4,967	556	11.2%
デザイン系専門学校 (デザイン系・ファッション系)	1,412	196	13.9%
全体	6,379	752	11.8%

表3-2. 分野別学校別回答者男女比

	工業系		デザイン系		ファッション系	
	グループ7		グループ14		グループ13	
	男	女	男	女	男	女
A 校	87%	13%	73%	27%		
B 校	84%	16%	70%	30%		
C 校	75%	25%				
D 校	44%	56%	28%	72%	41%	59%
E 校			21%	79%		
計	83%	17%	54%	46%	41%	59%

工業系専門学校（学科）とデザイン系専門学校（学科）をそれぞれ集計・分析し、全体の大まかな傾向を探ってみる。これにより、後に述べる各校が「重点的に力を入れた教育」「学生が力を入れて学んできた点」などの特長を把握する。回答データの中に、1 専門学校内で異なる学科分野（工業系・ファッション系・デザイン系）が存在している学校もある。しかし、その学科群の回答が少ないために、各校の特徴分析に於いては類似する分野を同一分野とみなして集計している部分もある。

回答数を増やすための方策として学校ごとに次のような取り組みを行っている。

督促状の送付により、アンケートの回答を促すことにより回答数を増やす。アンケートの依頼状・督促状の送付先を工夫する方法などである。卒業生の住所は、卒業時に届け出た住所と異なる場合が相当数に上る。業務等の都合により転勤・転住などが避けられないのが実際である。最初に郵送するアンケート依頼は「宛先不明」で返却されるものが多い。そのため、督促状は保護者住所に、お盆・正月等のタイミングを狙って2回送付した。その時期であれば、帰省するなど連絡が取りやすくなることを期待したものである。これにより、督促状送付後に回答を寄せる卒業生の数は増加した。このため、アンケート期間は10月から翌年7月と比較的長期に渡った。

学校によってアンケートの依頼方法に工夫をして回収数を増やした事例もある。事例としては

- ・卒業時の担任が卒業生に電話をかけ、アンケートの協力を依頼する。
- ・卒業後に各種書類を取りに来校した卒業生に、書類が整うまでの待ち時間中にアンケートを依頼する。

などがある。

回答督促状を出すタイミングや、アンケート実施時期による回収数の変化を分析し、今後のアンケート実施時期策定の一助としたい。また、同窓会による卒業生の住所などの把握も、各種業務と相まって利用価値が高くなるものとして今後推進していく必要がある。

4. 専門学校教育の充実度と学生の取り組み度合

学校が重点的に力を入れて教育を行った点と、それに対して学生が力を入れて取り組んだ点について全体傾向を分析する。最初に、学校が行った教育が充実していたかを学生の立場で評価してもらい、それに対して自分はどれくらい熱心に取り組んだかを評価してもらった。

4-1 各学校が熱心に取り組んだ項目

[設問]

本校の教育・指導は充実していましたか。

[結果]

回答は「充実していた」を5,「充実していなかった」を1とし、段階的に評価してもらい、平均、標準偏差を集計した。ランクは平均値の高い順に順位をつけたもの。

・工業系卒業生回答

表4－1. A校教育内容充実度（工業系）

A校				
男女比 9:1				
工業系学科	平均	ランク	標準偏差	データ数
高校までの基礎学力を学び直す授業や指導の充実度	2.81	9	1.183	156
知識を広げ教養を身につける授業の充実度	3.59	4	0.98	156
専門の授業(講義や実習)の充実度	4.28	1	0.76	155
仕事現場や地域での実習や就業経験の充実度	2.71	11	1.26	154
資格取得に関わる準備・指導の充実度	4.02	2	0.96	154
卒業論文、卒業制作、卒業発表の充実度	3.33	7	1.02	153
海外研修や留学のための機会や指導の充実度	1.96	12	1.05	155
部活やサークル、学校の行事の充実度	2.75	10	1.01	154
図書室、情報機器、実験器具などの施設設備の充実度	3.38	6	1.00	153
学習支援(学習の仕方や理解度についての相談・支援)の充実度	3.49	5	0.94	154
就職支援(就職活動についての相談・支援)の充実度	3.86	3	0.98	154
生活についての相談の充実度	2.97	8	0.91	155

表4－2. B校教育内容充実度（工業系）

B校				
男女比 8:2				
工業系学科	平均	ランク	標準偏差	データ数
高校までの基礎学力を学び直す授業や指導の充実度	2.77	10	1.16	73
知識を広げ教養を身につける授業の充実度	3.47	4	0.99	73
専門の授業(講義や実習)の充実度	4.04	2	0.94	73
仕事現場や地域での実習や就業経験の充実度	2.41	11	1.12	73
資格取得に関わる準備・指導の充実度	4.10	1	0.97	73
卒業論文、卒業制作、卒業発表の充実度	2.99	7	1.12	72
海外研修や留学のための機会や指導の充実度	1.95	12	1.13	73
部活やサークル、学校の行事の充実度	2.79	9	1.26	73
図書室、情報機器、実験器具などの施設設備の充実度	3.11	6	1.21	73
学習支援(学習の仕方や理解度についての相談・支援)の充実度	3.37	5	1.19	73
就職支援(就職活動についての相談・支援)の充実度	3.90	3	1.05	73
生活についての相談の充実度	2.81	8	1.14	73

表4－3. C校教育内容充実度（工業系）

C校				
男女比 8:2				
工業系学科	平均	ランク	標準偏差	データ数
高校までの基礎学力を学び直す授業や指導の充実度	3.29	10	1.13	56
知識を広げ教養を身につける授業の充実度	3.75	4	0.96	55
専門の授業(講義や実習)の充実度	4.16	1	0.82	56
仕事現場や地域での実習や就業経験の充実度	3.33	8	1.15	54
資格取得に関わる準備・指導の充実度	3.68	5	0.97	56
卒業論文、卒業制作、卒業発表の充実度	3.65	6	0.99	55
海外研修や留学のための機会や指導の充実度	2.84	12	1.17	55
部活やサークル、学校の行事の充実度	3.16	11	1.04	55
図書室、情報機器、実験器具などの施設設備の充実度	3.84	3	0.95	55
学習支援(学習の仕方や理解度についての相談・支援)の充実度	3.62	7	1.02	55
就職支援(就職活動についての相談・支援)の充実度	3.98	2	0.90	55
生活についての相談の充実度	3.29	9	1.15	55

表4－4. D校教育内容充実度（工業系）

D校				
男女比 4:6				
工業系学科	平均	ランク	標準偏差	データ数
高校までの基礎学力を学び直す授業や指導の充実度	2.67	12	0.94	9
知識を広げ教養を身につける授業の充実度	4.11	2	0.74	9
専門の授業(講義や実習)の充実度	4.11	2	0.87	9
仕事現場や地域での実習や就業経験の充実度	3.11	10	1.20	9
資格取得に関わる準備・指導の充実度	3.44	5	0.68	9
卒業論文、卒業制作、卒業発表の充実度	4.56	1	0.96	9
海外研修や留学のための機会や指導の充実度	4.00	4	0.82	9
部活やサークル、学校の行事の充実度	3.33	7	1.15	9
図書室、情報機器、実験器具などの施設設備の充実度	2.78	11	1.13	9
学習支援(学習の仕方や理解度についての相談・支援)の充実度	3.44	5	1.50	9
就職支援(就職活動についての相談・支援)の充実度	3.33	7	1.25	9
生活についての相談の充実度	3.22	9	1.31	9

・デザイン系卒業生回答

表4-5. A校教育内容充実度（デザイン系）

A校				
男女比 7:3				
デザイン系学科	平均	ランク	標準偏差	データ数
高校までの基礎学力を学び直す授業や指導の充実度	2.54	11	1.234	138
知識を広げ教養を身につける授業の充実度	3.70	3	1.03	138
専門の授業(講義や実習)の充実度	4.21	1	0.91	136
仕事現場や地域での実習や就業経験の充実度	2.63	10	1.20	137
資格取得に関わる準備・指導の充実度	2.82	9	1.09	138
卒業論文、卒業制作、卒業発表の充実度	3.66	4	1.18	134
海外研修や留学のための機会や指導の充実度	2.13	12	1.09	137
部活やサークル、学校の行事の充実度	2.98	8	1.10	138
図書室、情報機器、実験器具などの施設設備の充実度	3.36	6	1.18	138
学習支援(学習の仕方や理解度についての相談・支援)の充実度	3.44	5	1.09	137
就職支援(就職活動についての相談・支援)の充実度	3.96	2	1.06	138
生活についての相談の充実度	3.05	7	1.10	138

表4-6. B校教育内容充実度（デザイン系）

B校				
男女比 7:3				
デザイン系学科	平均	ランク	標準偏差	データ数
高校までの基礎学力を学び直す授業や指導の充実度	2.67	11	1.06	102
知識を広げ教養を身につける授業の充実度	3.62	3	0.99	102
専門の授業(講義や実習)の充実度	4.30	1	0.76	102
仕事現場や地域での実習や就業経験の充実度	2.84	9	1.25	102
資格取得に関わる準備・指導の充実度	3.08	7	1.18	102
卒業論文、卒業制作、卒業発表の充実度	3.41	5	0.95	102
海外研修や留学のための機会や指導の充実度	2.20	12	1.06	102
部活やサークル、学校の行事の充実度	2.79	10	1.15	102
図書室、情報機器、実験器具などの施設設備の充実度	3.34	6	1.02	101
学習支援(学習の仕方や理解度についての相談・支援)の充実度	3.60	4	0.96	102
就職支援(就職活動についての相談・支援)の充実度	3.92	2	1.04	102
生活についての相談の充実度	3.02	8	1.05	102

表4-7. D校教育内容充実度（デザイン系）

D校				
男女比 3:7				
デザイン系学科	平均	ランク	標準偏差	データ数
高校までの基礎学力を学び直す授業や指導の充実度	2.64	12	1.23	55
知識を広げ教養を身につける授業の充実度	3.60	5	0.98	55
専門の授業(講義や実習)の充実度	3.98	1	1.08	54
仕事現場や地域での実習や就業経験の充実度	2.96	11	1.14	55
資格取得に関わる準備・指導の充実度	3.06	10	1.01	54
卒業論文、卒業制作、卒業発表の充実度	3.93	2	1.01	55
海外研修や留学のための機会や指導の充実度	3.83	3	1.08	53
部活やサークル、学校の行事の充実度	3.31	8	1.11	55
図書室、情報機器、実験器具などの施設設備の充実度	3.67	4	1.13	55
学習支援(学習の仕方や理解度についての相談・支援)の充実度	3.32	7	0.99	53
就職支援(就職活動についての相談・支援)の充実度	3.36	6	1.08	55
生活についての相談の充実度	3.22	9	0.99	55

表4-8. E校教育内容充実度（デザイン系）

E校				
男女比 2:8				
デザイン系学科	平均	ランク	標準偏差	データ数
高校までの基礎学力を学び直す授業や指導の充実度	2.51	12	1.02	92
知識を広げ教養を身につける授業の充実度	3.86	3	0.84	92
専門の授業(講義や実習)の充実度	4.33	1	0.85	92
仕事現場や地域での実習や就業経験の充実度	2.78	11	1.00	92
資格取得に関わる準備・指導の充実度	3.27	7	1.14	92
卒業論文、卒業制作、卒業発表の充実度	4.12	2	0.87	92
海外研修や留学のための機会や指導の充実度	3.14	9	1.24	92
部活やサークル、学校の行事の充実度	3.04	10	1.14	92
図書室、情報機器、実験器具などの施設設備の充実度	3.33	6	1.02	92
学習支援(学習の仕方や理解度についての相談・支援)の充実度	3.37	5	0.97	91
就職支援(就職活動についての相談・支援)の充実度	3.47	4	1.08	92
生活についての相談の充実度	3.21	8	0.95	92

・ファッション系卒業生回答

表4-9. D校教育内容充実度（ファッション系）

D校

男女比 4:6		平均	ランク	標準偏差	データ数
ファッション系学科					
高校までの基礎学力を学び直す授業や指導の充実度		2.45	12	0.74	20
知識を広げ教養を身につける授業の充実度		3.80	6	0.93	20
専門の授業(講義や実習)の充実度		4.45	1	0.80	20
仕事現場や地域での実習や就業経験の充実度		3.40	10	0.92	20
資格取得に関わる準備・指導の充実度		3.95	3	0.92	20
卒業論文、卒業制作、卒業発表の充実度		4.15	2	1.01	20
海外研修や留学のための機会や指導の充実度		3.45	8	0.86	20
部活やサークル、学校の行事の充実度		2.90	11	1.09	20
図書室、情報機器、実験器具などの施設設備の充実度		3.45	8	1.16	20
学習支援(学習の仕方や理解度についての相談・支援)の充実度		3.85	5	0.91	20
就職支援(就職活動についての相談・支援)の充実度		3.95	3	1.07	20
生活についての相談の充実度		3.58	7	0.99	19

【考察】

学校が学生に対して実施する各種施策について学生の受け取り方を訪ねた質問群である。多くの項目で微妙な差異を見出すことができる。

A校、B校の工業分野（グループ7：表4-1及び表4-2）とデザイン分野（グループ14：表4-5及び表4-6）は、同じ学校であるが、回答内容は微妙に異なる。「資格取得に関わる準備・指導の充実度」は工業分野では1・2位なのに対してデザイン分野では7・9位と低くなっている。また、「卒業論文、卒業制作、卒業発表指導の充実度」に関しては、A校では工業分野が7位なのに対してデザイン分野では4位と上位の結果を得ている。D校は工業分野（表4-4）、デザイン分野（表4-7）、ファッション分野（グループ13：表4-9）から回答を得ているが、工業分野は回答数が少ないため、ここでは比較から除外した。「資格取得に関わる準備・指導の充実度」は工業系・ファッション系とデザイン系で大きな差となって現れている。対応する資格の有無に加えて、「資格を持っていることが就職に直接繋がるか」がポイントになっている。デザイン系に関しては、本人の作品が評価されることが多いので、資格と就職とは直接結びつかないケースも多く、資格が重視されていない傾向がみられる。資格を取得していなければその仕事に就くことができない仕事もある。工業系学校などでは資格を持たなくても業務遂行（＝就職）が可能ではあるが、資格を持っていた方が就職に有利になることが多い。同一の学校であるのに、学科ごとの「就職先の資格に対する考え方」が異なることにより大きな差が出てくることに関しては、今後その実情を探ることが必要である。

全体的な傾向として「卒業論文、卒業制作、卒業発表」の項目では、A・B・C校の工業系を中心とする専門学校とD・E校のデザイン系を中心とする専門学校とでは大きな違いがあり、デザイン系専門学校では「卒業制作展」などのイベントにかなり力を入れて指導していることが伺える。

また、「海外研修、留学」などへの取り組みに関しても、デザイン系を中心とする専門学校では、ほ

ほぼ必須の海外視察と位置付けて実施している学校が多く、入学時から積立金を準備するなど制度面を含めた充実を図るなどしていることもあり高い数値となっている。

就職支援に関しては、その業界の就業形態の違いによる影響か、工業系専門学校では高く、デザイン系専門学校では低くなっている。

次に、専門学校が重点的に力を入れて教育を実践している点の中から「知識を広げ教養を身につける授業の充実度」、「卒業論文、卒業制作、卒業発表指導の充実度」、「部活やサークル、学校の行事の充実度」、「図書室、情報機器、実験器具などの施設設備の充実度」、「学習支援の充実度」、「就職支援の充実度」に関して分析をする。

[設問]

知識を広げ教養を身につける授業の充実度

[結果]

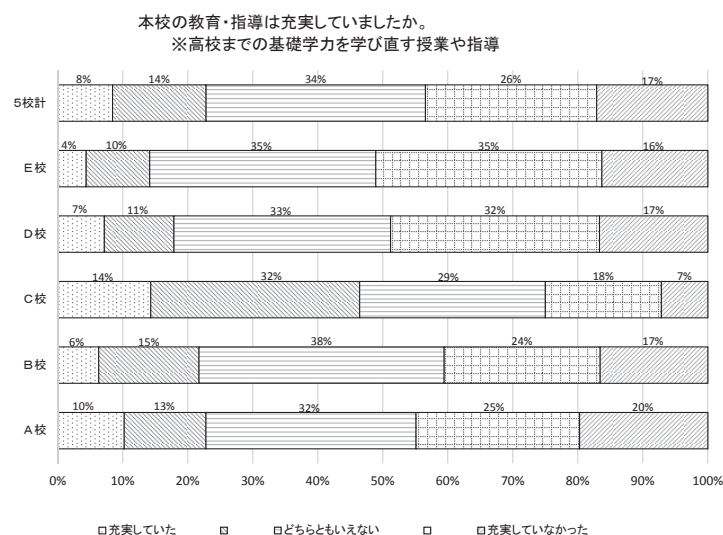


図4-1. 知識を広げ教養を身につける授業の充実度

各校とも「充実していた」「ある程度充実していた」を合わせると50%を超えている。5校全体では60%となり、高い数値を示している。反面「充実していなかった」は3%以下の数値となっており非常に低い。

専門学校に於いて「知識を広げ教養を身につける授業」が充実していることが伺える。

[考察]

一般的に専門学校の授業は、学校が定めた時間割に従い授業が展開される。その中で専門技術に関わる授業が殆どで、周辺科目の割合は少ない。しかし、専門科目の中で「専門技術を支える」内容としての知識・教養を解説するケースも多い。専門知識に関する説明をするとともに、現場の事例を紹介しながら講義を行う形式となることが多いため具体的実感を伴う話となる。それらの充実具合が評価されたと考えられる。

[設問]

卒業論文、卒業制作、卒業発表指導の充実度

[結果]

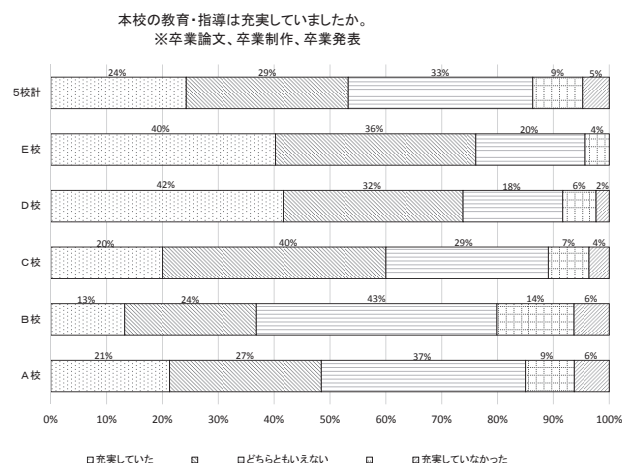


図4-2. 卒業論文，卒業制作，卒業発表指導の充実度

「充実していた」だけに絞ってみると、デザイン系専門学校のD，E校は40%を超えているのに、その他の工業系専門学校は20%程度となっている。A校，B校に関しては「ある程度充実していた」を加えても50%に達していない。

学校分野の違いが顕著に現れている。

[考察]

工業系専門学校（特にA，B校）とデザイン系専門学校では大きな差がある。デザイン系専門学校では卒業制作展などを実施するのに対して，工業系専門学校では卒業レポート（論文）を制作・提出するのみというケースがみられる。聴衆を前にした発表を行うための準備などを行うことにより，作品制作などで大きな時間・工数を学生のために費やしていることを，学生自身が理解しているものと考えられる。

[設問]

部活やサークル，学校の行事の充実度

[結果]

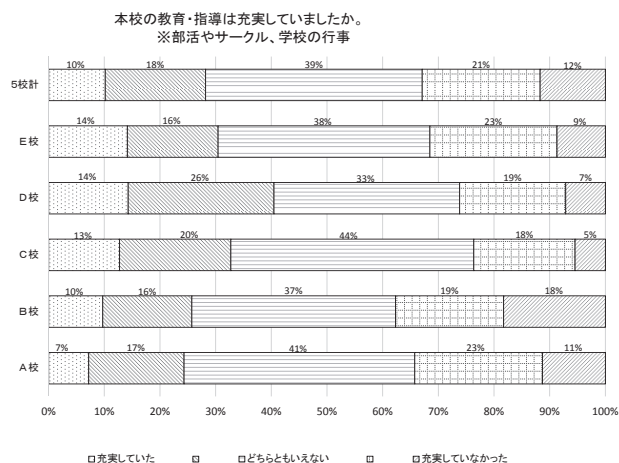


図4-3. 部活やサークル，学校の行事の充実度

「充実していた」との回答が7～14%とかなり少ない。「ある程度充実していた」を加えても最高40%である。「充実していなかった」「あまり充実してなかった」の回答者も同程度に近い比率で存在している。

[考察]

専門学校では、学校が主催するクラブやサークルで活動をしたり、学園祭・体育祭を主とした学生の為のイベントを開催したりしている。これらの活動にスタッフとして参加し熱心に取り組んでいる学生もいる。

しかし、専門学校教育の中心は専門科目の勉強や資格取得のための対策講座などであり、学校によっては「部活やサークル、学校の行事」などが充実していない場合もある。

[設問]

図書室、情報機器、実験器具などの施設設備の充実度

[結果]

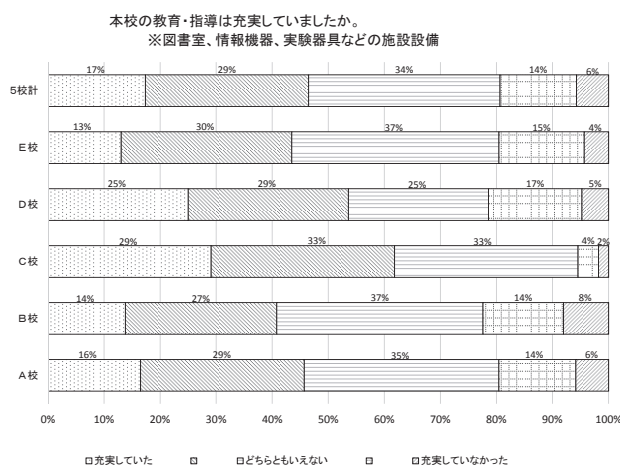


図4-4. 図書室、情報機器、実験器具などの施設設備の充実度

学校によるばらつきが大きく出ている。B校とE校が同じような回答比率を示している。また、「充実していた」と「ある程度充実していた」を加えた値を見てみるとC校、D校、A校、E校、B校の順となり、学校の分野の違いによる差が出ていないということが解る。

[考察]

高校までは「図書館」であったものが「図書室」となり、規模が大幅に縮小されている専門学校が多い。その分、専門技術書等の授業の参考になる書籍の在庫が増えている特徴があり、内容の充実度に差異が生まれている。専門の実習を行う「実習設備」に於いては、プロ用機材やソフトウェアなどに高額な投資がされている。一般の家庭では揃えることのできない機材等に対して、高い評価を得たものと言える。このあたりは、学生も学校の「専門知識に必要な機材の充実に対する投資」を理解している。

その学校毎の施設・設備への投資の違いによって回答が変わってくる項目である。

[設問]

学習支援の充実度

[結果]

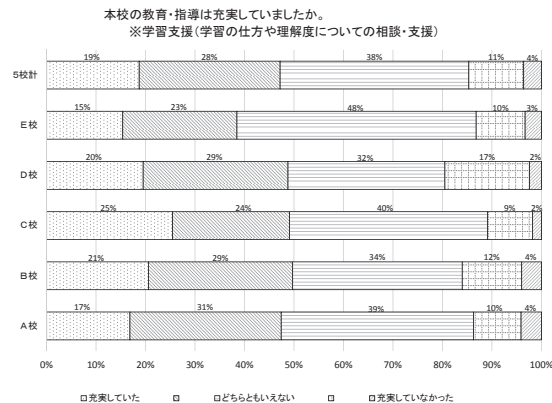


図4-5. 学習支援の充実度

「充実していた」「ある程度充実していた」を合わせると50%に近い回答となる。半面「あまり充実していなかった」「充実していなかった」を合わせた回答には多少のばらつきがみられる。

[考察]

専門学校に於いて学習支援は、通常授業の補習や資格取得のための補講が主となっている。

「部活やサークル、学校行事の充実」よりも「充実していた」「ある程度充実していた」の比率は高く、専門学校の教育の中心が「専門教育」「資格取得」であることが理解できる。

多くの専門学校では、担任制を取り入れている。高校までと同様な日頃の出席指導から、学習指導・就職指導など広範囲に及んで学生指導を行っている。その中で、学習指導は大きな時間をかけておこなわれる。放課後開いている実習室を開放し、補習や資格対策の授業を行ったりしている。それらを実施しているのは専任教員が主で、先生による「学習支援の充実」につながっている。

実習室開放などの場に於いて、クラスメイトや先輩などと「教え合い」をすることもあるが、その機会は稀で、空き時間等を利用した学習支援は教員によるところが大きい。

[設問]

就職支援（就職活動についての相談・支援）の充実度

[結果]

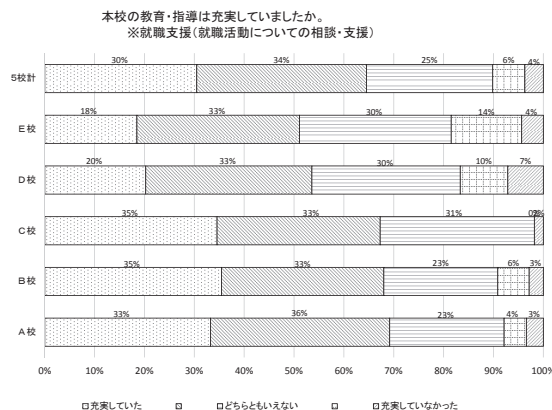


図4-6. 就職支援の充実度

「充実していた」だけでもそうであるが「ある程度充実していた」を加えた結果は、A校、B校、C校の工業系専門学校とD校、E校のデザイン系専門学校の間には明確な差がある。5校全体をみると全ての学校で50%を超える数値で、その充実度は高いが、業界（工業系・デザイン系）による就業形態の差が20%近い差となって現れている。

[考察]

専門学校の卒業後進路は、ほとんどが就職である。その目標を達成するために教員が、熱心に就職指導に取り組んでいることが伺える。その中で、産業界の就業形態の違いによる差が、工業系専門学校・デザイン系専門学校との間に現れている。

工業系専門学校では、従来型である4月一括入社 of 正規雇用が一般的であり、学生もそれに合わせて正規雇用を目指して就職活動を行う。デザイン系専門学校では、ある程度の実力を身に着けるまでは研修者のな扱いでアルバイト的な非正規雇用採用で就業するケースも多い。業界的に正規雇用の求人が少ない影響が現れ、それが非正規雇用を容認する指導方法に反映されているものとみられる。

4-2 各学校の卒業生が熱心に取り組んだ項目

[設問]

本校で経験した教育・指導にどの程度熱心に取り組みましたか。

[結果]

回答は「熱心に取り組んだ」を5、「熱心に取り組まなかった」を1とし、段階的に評価してもらい、平均、標準偏差を集計した。ランクは平均値の高い順に順位をつけた。

- ・工業系卒業生回答

表4-10. A校学生の取り組み状況（工業系）

工業系学科	男女比 9:1		標準偏差	データ数
	平均	ランク		
高校までの基礎学力を学び直す授業や指導への取組	2.49	9	1.63	154
知識を広げ教養を身につける授業への取組	3.54	4	1.25	155
専門の授業(講義や実習)への取組	4.00	1	1.11	155
仕事現場や地域での実習や就業経験への取組(93)	2.02	11	1.82	155
資格取得に関わる準備・指導への取組	3.72	2	1.26	155
卒業論文、卒業制作、卒業発表への取組	3.12	6	1.38	155
海外研修や留学のための機会や指導への取組(56)	1.05	12	1.54	154
部活やサークル、学校の行事への取組(124)	2.36	10	1.58	154
友達との交流への取組	3.68	3	1.23	155
授業外での教員との交流への取組	2.63	7	1.48	154
アルバイトへの取組	2.55	8	1.80	155
就職活動への取組	3.53	5	1.33	154

※()内:実参加者数

表4-11. B校学生の取り組み状況（工業系）

工業系学科	男女比 8:2		標準偏差	データ数
	平均	ランク		
高校までの基礎学力を学び直す授業や指導への取組	2.45	9	1.54	73
知識を広げ教養を身につける授業への取組	3.38	5	1.09	72
専門の授業(講義や実習)への取組	3.83	2	1.01	72
仕事現場や地域での実習や就業経験への取組(41)	1.71	11	1.68	73
資格取得に関わる準備・指導への取組	3.68	3	1.13	73
卒業論文、卒業制作、卒業発表への取組	2.88	7	1.65	73
海外研修や留学のための機会や指導への取組(13)	0.64	12	1.44	73
部活やサークル、学校の行事への取組(46)	2.14	10	1.87	73
友達との交流への取組	3.51	4	1.43	73
授業外での教員との交流への取組	2.55	8	1.68	73
アルバイトへの取組	3.29	6	1.81	72
就職活動への取組	3.99	1	1.13	73

※()内:実参加者数

表4-12. C校学生の取り組み状況（工業系）

C校

男女比 8:2					
工業系学科	平均	ランク	標準偏差	データ数	
高校までの基礎学力を学び直す授業や指導への取組	2.96	8	1.63	55	
知識を広げ教養を身につける授業への取組	3.51	4	1.26	55	
専門の授業(講義や実習)への取組	3.95	2	1.05	55	
仕事現場や地域での実習や就業経験への取組(49)	3.42	5	1.52	55	
資格取得に関わる準備・指導への取組	3.30	6	1.49	54	
卒業論文、卒業制作、卒業発表への取組	3.65	3	1.19	55	
海外研修や留学のための機会や指導への取組(22)	1.30	12	1.79	54	
部活やサークル、学校の行事への取組(41)	2.44	11	1.83	55	
友達との交流への取組	4.00	1	1.08	55	
授業外での教員との交流への取組	2.95	9	1.54	55	
アルバイトへの取組	2.50	10	1.82	54	
就職活動への取組	3.24	7	1.48	55	

※()内:実参加者数

表4-13. D校学生の取り組み状況（工業系）

D校

男女比 4:6					
工業系学科	平均	ランク	標準偏差	データ数	
高校までの基礎学力を学び直す授業や指導への取組	2.22	11	1.62	9	
知識を広げ教養を身につける授業への取組	3.89	6	0.99	9	
専門の授業(講義や実習)への取組	4.11	3	0.99	9	
仕事現場や地域での実習や就業経験への取組(7)	2.78	10	1.75	9	
資格取得に関わる準備・指導への取組	3.11	7	1.20	9	
卒業論文、卒業制作、卒業発表への取組	4.33	2	1.05	9	
海外研修や留学のための機会や指導への取組(7)	3.11	7	2.02	9	
部活やサークル、学校の行事への取組(8)	3.00	9	1.63	9	
友達との交流への取組	4.44	1	0.68	9	
授業外での教員との交流への取組	4.00	4	0.82	9	
アルバイトへの取組	4.00	4	1.15	9	
就職活動への取組	2.11	12	1.66	9	

※()内:実参加者数

・デザイン系卒業生回答

表4-14. A校学生の取り組み状況（デザイン系）

A校

男女比 7:3					
デザイン系学科	平均	ランク	標準偏差	データ数	
高校までの基礎学力を学び直す授業や指導への取組	2.17	11	1.57	137	
知識を広げ教養を身につける授業への取組	3.71	4	1.14	136	
専門の授業(講義や実習)への取組	4.27	1	0.85	136	
仕事現場や地域での実習や就業経験への取組(91)	2.20	10	1.82	137	
資格取得に関わる準備・指導への取組	2.54	8	1.62	136	
卒業論文、卒業制作、卒業発表への取組	3.87	3	1.27	135	
海外研修や留学のための機会や指導への取組(49)	0.89	12	1.40	136	
部活やサークル、学校の行事への取組(119)	2.72	7	1.52	136	
友達との交流への取組	4.14	2	0.98	137	
授業外での教員との交流への取組	3.04	6	1.47	137	
アルバイトへの取組	2.53	9	1.91	137	
就職活動への取組	3.63	5	1.23	137	

※()内:実参加者数

表4-15. B校学生の取り組み状況（デザイン系）

B校

男女比 7:3					
デザイン系学科	平均	ランク	標準偏差	データ数	
高校までの基礎学力を学び直す授業や指導への取組	2.42	9	1.44	102	
知識を広げ教養を身につける授業への取組	3.68	3	1.04	100	
専門の授業(講義や実習)への取組	4.27	1	0.91	101	
仕事現場や地域での実習や就業経験への取組(69)	2.34	11	1.83	102	
資格取得に関わる準備・指導への取組	2.55	8	1.56	102	
卒業論文、卒業制作、卒業発表への取組	3.40	5	1.42	102	
海外研修や留学のための機会や指導への取組(33)	0.86	12	1.40	101	
部活やサークル、学校の行事への取組(78)	2.56	7	1.76	102	
友達との交流への取組	3.88	2	1.22	102	
授業外での教員との交流への取組	3.06	6	1.29	102	
アルバイトへの取組	2.39	10	1.85	102	
就職活動への取組	3.51	4	1.31	102	

※()内:実参加者数

表4-16. D校学生の取り組み状況（デザイン系）

D校

男女比 3:7					
デザイン系学科	平均	ランク	標準偏差	データ数	
高校までの基礎学力を学び直す授業や指導への取組	2.08	12	1.56	53	
知識を広げ教養を身につける授業への取組	3.61	4	1.04	54	
専門の授業(講義や実習)への取組	4.13	3	0.72	54	
仕事現場や地域での実習や就業経験への取組(49)	3.37	6	1.47	54	
資格取得に関わる準備・指導への取組	3.02	9	1.15	54	
卒業論文、卒業制作、卒業発表への取組	4.23	2	0.84	53	
海外研修や留学のための機会や指導への取組(41)	3.02	8	1.98	53	
部活やサークル、学校の行事への取組(51)	3.33	7	1.37	54	
友達との交流への取組	4.31	1	0.88	54	
授業外での教員との交流への取組	3.44	5	1.21	54	
アルバイトへの取組	2.93	10	1.74	54	
就職活動への取組	2.93	10	1.40	54	

※()内:実参加者数

表4-17. E校学生の取り組み状況（デザイン系）

E校

男女比 2:8					
デザイン系学科	平均	ランク	標準偏差	データ数	
高校までの基礎学力を学び直す授業や指導への取組	2.05	11	1.45	92	
知識を広げ教養を身につける授業への取組	3.65	4	1.13	92	
専門の授業(講義や実習)への取組	4.14	2	0.95	92	
仕事現場や地域での実習や就業経験への取組(70)	2.43	10	1.69	91	
資格取得に関わる準備・指導への取組	2.96	8	1.59	90	
卒業論文、卒業制作、卒業発表への取組	4.28	1	0.98	92	
海外研修や留学のための機会や指導への取組(49)	1.47	12	1.72	92	
部活やサークル、学校の行事への取組(78)	2.71	9	1.65	92	
友達との交流への取組	4.04	3	1.01	92	
授業外での教員との交流への取組	3.21	6	1.19	92	
アルバイトへの取組	3.32	5	1.59	92	
就職活動への取組	3.20	7	1.34	92	

※()内:実参加者数

・ファッション系卒業生回答

表4-18. D校学生の取り組み状況（ファッション系）

D校

男女比 4:6					
ファッション系学科	平均	ランク	標準偏差	データ数	
高校までの基礎学力を学び直す授業や指導への取組	2.15	12	1.42	20	
知識を広げ教養を身につける授業への取組	3.70	4	0.84	20	
専門の授業(講義や実習)への取組	4.30	1	0.84	20	
仕事現場や地域での実習や就業経験への取組(20)	3.65	5	1.06	20	
資格取得に関わる準備・指導への取組	3.35	7	1.46	20	
卒業論文、卒業制作、卒業発表への取組	4.10	2	1.09	20	
海外研修や留学のための機会や指導への取組(16)	2.70	10	1.82	20	
部活やサークル、学校の行事への取組(19)	3.16	8	1.04	19	
友達との交流への取組	3.75	3	1.04	20	
授業外での教員との交流への取組	3.45	6	1.02	20	
アルバイトへの取組	2.60	11	1.69	20	
就職活動への取組	2.80	9	1.33	20	

※()内:実参加者数

[考察]

「学校が熱心に教育したか」という項目に対して、「自分は、熱心に取り組んだか」を問う質問群。A校、B校では学校の教育充実度と同様「資格取得に関わる準備・指導への取り組み」「卒業論文、卒業制作、卒業発表への取り組み」の質問に於いて工業系卒業生（グループ7：表4-10及び表4-11）とデザイン系卒業生（グループ14：表4-14及び表4-15）との間に大きな差異がみられた。

D校では、同一専門校内でも、教育の充実度に関してデザイン系とファッション系の間で、「資格取得に関わる準備・指導の充実度」が10位、3位、（表4-7及び表4-9）と差異がみられた。しかし学生が取り組む姿勢に於いては「資格取得に関わる準備・指導への取り組み」では9位と7位（表4-16及び表4-18）とあまり大きな差はみられなくなっていた。

全体傾向としては以下の点があげられる。

- 「知識を広げ教養を身につける授業」「専門の授業（講義や実習）」「資格取得・卒業論文・卒業制作」「友達との交流」「就職活動」が高い数値を示している。
- 「高校までの基礎学力を学び直す授業や指導」「知識を広げ教養を身につける授業」「専門の授業（講義や演習）」「仕事現場や地域での実習や就業経験」「資格取得に関わる準備・指導」「卒業論文、卒業制作、卒業発表」「海外研修や留学のための機会や指導」「部活やサークル、学校の行事」は学校の教育内容として充実していたかという問いと自分自身が熱心に取り組んだかという対比した質問であるが、ほぼ同傾向の回答が得られている。
- 「友だちとの交流」「授業外での教員との交流」「アルバイト」「就職活動」の質問に関しては、学校としての取り組みの充実度は問うていないが、学生たちは自主的に熱心に取り組んでいたことが伺える。近年続く不景気の影響を受け、できる限り自分の身の回りの必要物資の調達を自分の稼いだ給料で賄おうとしているものと考えられる。これは、平成28年度文部科学省予算で「専門学校生への効果的な経済的支援」が実証事業として計上されていることからもうかがい知ることができる結果である。
- 「仕事現場や地域での実習や就業経験」に関しても「充実度」「取り組み姿勢」とともに低い。C校、D校では制度的にインターンシップ等に取り組んでいるため学生の取り組み姿勢はやや上位に変化しているものの、全体傾向としては低い。職業実践専門課程に於いては、「企業との教育連携」がポイントとして上げられており、これの実現のためには必須の項目である。
- 「海外研修や留学のための機会や指導の充実度」も低い。D校のように積極的に力を入れているデザイン系専門学校では評価が高いが、工業系専門学校では「充実度」「取り組み姿勢」とともに最下位ランクの評価になっている。D校のデザイン系卒業生では学校の指導の「充実度」（表4-7）は3位評価なのに、自分の「取り組み姿勢」（表4-16）は8位に下がるなどの現象が起きている。グローバル化が大きな論点となっている今、その一歩として体系立てたスケジュール・内容で海外視察をすることは大きなステップとなる。今後の展開に関して検討が必要な項目である。

次に、学生が自分から見てどの程度熱心に取り組んだか、「高校までの基礎学力を学び直す授業への取り組み」、「海外研修や留学への取り組み」、「就職活動への取り組み」について分析する。

〔設問〕

高校までの基礎学力を学び直す授業にどの程度熱心に取り組みましたか。

〔結果〕

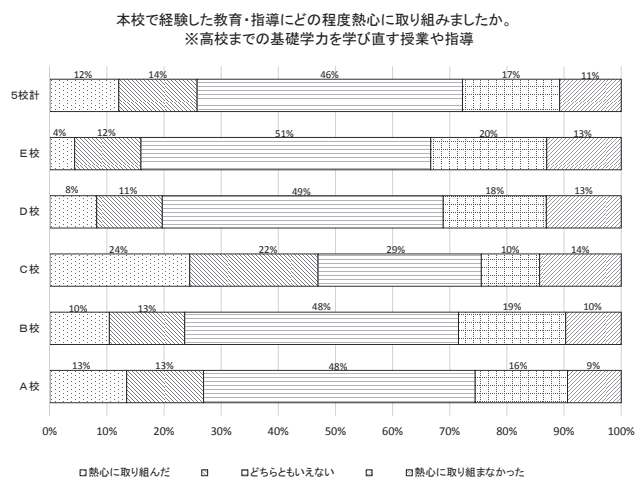


図4-7. 高校までの基礎学力を学び直す授業にどの程度熱心に取り組みましたか。

C校を除いて、「熱心に取り組んだ」と「ある程度熱心に取り組んだ」の合計が「あまり熱心に取り組まなかった」と「熱心に取り組まなかった」の合計より少ない割合となっている。C校の「あまり熱心に取り組まなかった」の回答も他校に比してやや少ない。評価が極端に分かれたものと推測される。

〔考察〕

高校までの基礎学力を学びなおす授業形態として、大学等で実施されている「学習支援センター」による個別指導とは違い、通常授業時間内に行う教育による知識習得が現れた結果と考えられる。通常の授業の中で、「専門知識を学ぶための基礎知識」として位置づけられて教育が実施されていると、高校までの基礎知識の学びなおしという意識が少ないのではないかと推測される。

〔設問〕

海外研修や留学のための機会にどの程度熱心に取り組みましたか。

〔結果〕

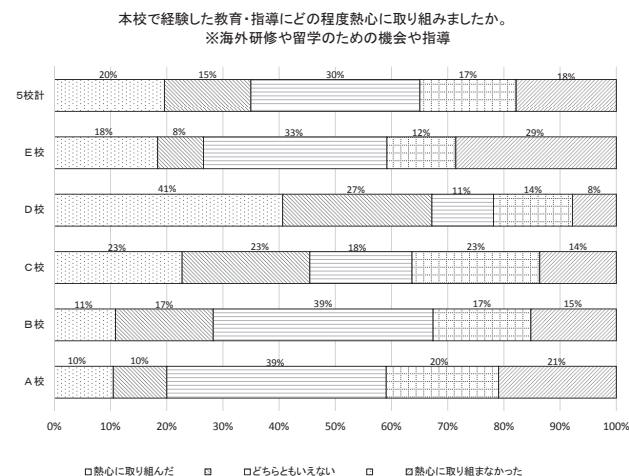


図4-8. 海外研修や留学のための機会にどの程度熱心に取り組みましたか。

海外研修を積極的に行っている D 校で高い数値を示している。同様に C 校でも数値が高くなっている。視察する対象は「デザイン・ファッション」と「建築物」という違いはあるが、数値的には現れていない。むしろ学校の取り組む姿勢によって学生がどう反応するかが顕著に現れている。

[考察]

学校の指導姿勢による影響が直接的に影響している項目である。積極的に海外研修の実施をしている D 校の場合、非常に高い数値となっている。D 校では入学時から積立預金をしたりして、海外研修に対する意識を高めている。あまり海外研修を実施していない A 校の場合には低い数値となっている。熱心に取り組もうにも「その場がない」状況の学校の学生は取り組むことができない。また、個人で海外に研修・旅行に行く学生の数も多くない。グローバル化には程遠い実態である。

[設問]

就職活動にどの程度熱心に取り組みましたか。

[結果]

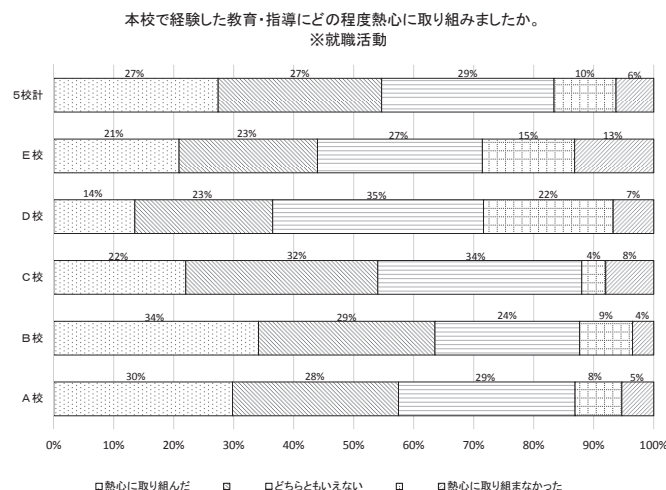


図4-9. 就職活動への取り組み状況

「熱心に取り組んだ」「ある程度熱心に取り組んだ」それぞれを見ても工業系専門学校とデザイン系専門学校とで違いが伺える。「あまり熱心に取り組まなかった」「熱心に取り組まなかった」の合計を見ても、工業系専門学校とデザイン系専門学校が大きく違いを見せている。

[考察]

専門学校の卒業生の進路としては就職が主であるため、それを目指した熱心な指導が行われている。しかし、その中で業界による就職形態の違いが反映されている回答結果である。

工業分野では、多くのマスコミが取り上げている就職活動スケジュールに従い、4月の一斉入社を目指して熱心に就職活動に取り組んでいる。デザイン系業界ではある程度アルバイト採用を行い、試用期間とした後、実力を見極めて採用する形態が残っている。そのため、就職活動的には「採用試験」を受けるといった感覚が低いため、就職活動への取り組み自体の形態が違ってくる。

5. 職業で必要な能力 学習成果と満足度

学校に対する全体的な満足度を問うとともに、いわゆる「出口」と言われる「就職活動」の充実度を問うた。更に、必要となる知識の必要性・習得度について確認し、それらに対してどの様に考えているかを分析した。

[設問]

総合的に振り返ってみて、本校に対する満足度はどうでしたか

[結果]

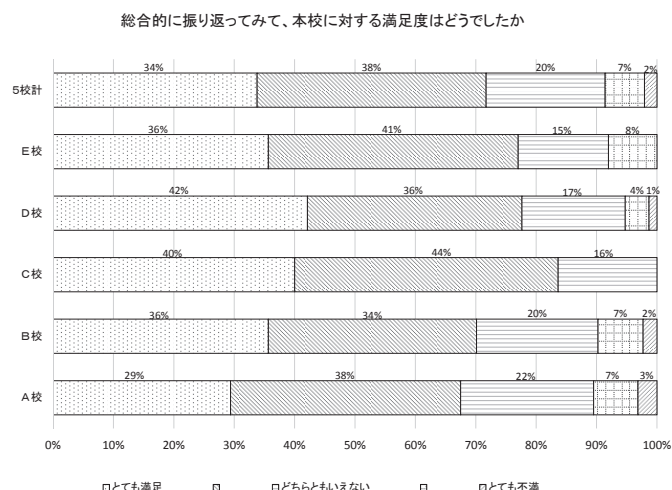


図5-1. 学校に対する総合的満足度

5校全体の結果では、「とても満足」「まあ満足」を合計すると60%を超えている。それぞれの学校に対しても高い満足度が伺える。

「技術取得」という目的を達成して卒業する学生が多く、それらの知識等が卒業後も生かされていることが伺える。

[考察]

本アンケートに対する回答者は学校に対して好意的に見ている卒業生が多いと考えられる。

特に回答者数が少なく、卒業時担任からの呼びかけにより回答する者にはその傾向が強いと考えられる。A校の場合、回答者数が多い分、好意的回答者でない一般的な回答者も含まれると考えられるため、回答分布が変わっていると考えられる。

[設問]

本学在学中の経験は重要でしたか。 ※就職先を見つける上で

[結果]

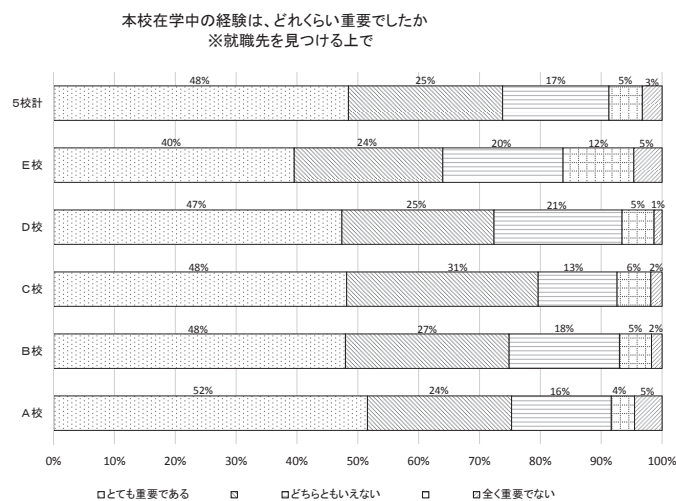


図5-2. 本学在学中の経験は重要でしたか。 ※就職先を見つける上で

E校の重要度に関する数値がやや低くなっているものの、5校全体でみると70%を超える回答者が「とても重要である」「重要である」と回答している。「重要でない」と回答している者は少ない。

[考察]

業界による正規・非正規雇用の差などの要因による差が微妙に現れたものと思われる。地域差による就職のし易さ等の要因はほとんど出ていない。各学校の「学生を就職させよう」という意欲と蓄積された就職指導ノウハウの現れとみることができる。

[設問]

本学在学中の経験は重要でしたか。 ※仕事に必要な基礎を身につける上で

[結果]

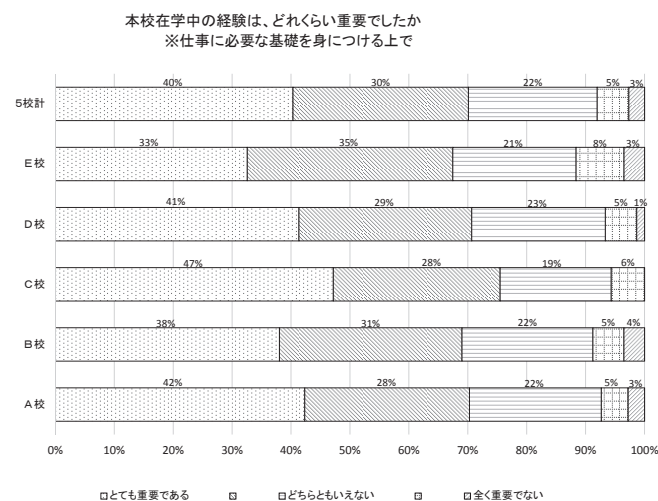


図5-3. 本学在学中の経験は重要でしたか。 ※仕事に必要な基礎を身につける上で

5校全体をみると「とても重要である」「重要である」を合計すると、70%に達する。各校とも高く重要性を認識している。「重要でない」という回答は少ない。

[考察]

すべての学校に於いて高い重要性を認識している。この間だけでは、学生時代のどんな経験であったかは特定できないが、「専門知識を習得するための学習」「資格を取得するための学習」「就職活動」など、専門学校であればこそできる内容が主であることは推測できる。「学校に対する総合的満足度」(図5-1)と似た分布を示している。

[設問]

本学在学中の経験は重要でしたか。 ※人格を形成する上で

[結果]

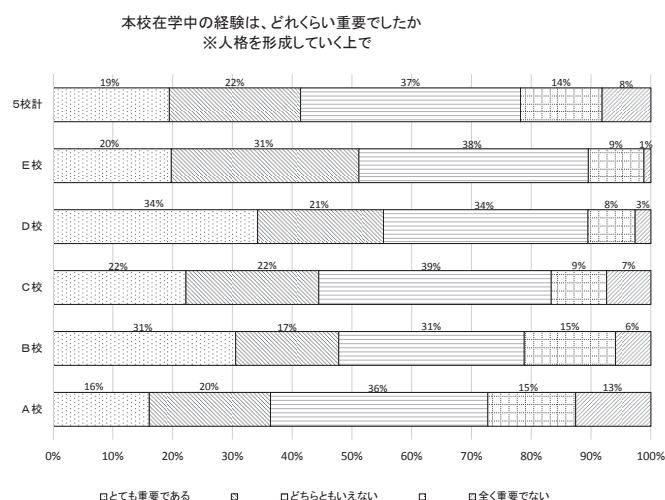


図5-4. 本学在学中の経験は重要でしたか。 ※人格を形成する上で

バラつきがある結果である。

「とても重要である」「重要である」が多く、「あまり重要でない」「全く重要でない」が少ないのはデザイン系専門学校の傾向である。

[考察]

「重要でない」という回答をみると、工業系専門学校の方がデザイン系専門学校に比べて高い数値を示している。「とても重要である」「重要である」という回答はデザイン系専門学校の方が高い。

デザイン系専門学校の方が前向きな回答（充実していた、熱心に取り組んだ、充分身についている）が多かった質問には

- ・「知識を広げ教養を身につける授業への取り組み」
- ・「友達との交流への取り組み」
- ・「組織やチームにおける自分の役割を認識し職場に貢献できる能力の獲得度」

などがある。これらの質問とは大きな関連性が見えてくる。

工業系専門学校の方が、デザイン系専門学校より高い就職率を示していることと「人格を形成」の関連性について今後調査が必要である。

6. 各校の特徴

アンケートの結果を各校で分析し、各校の特徴的な点を各校の取り組みと共に分析した。各校が力を入れて実施している教育の結果が、卒業生の印象に反映されているのが注目点である。

6-1 A 校

◆全体傾向

本校では表4-1・表4-5と表4-16・表4-20などから、「専門の授業」、「資格取得に関わる準備・指導」に関する「教育・指導の充実」、「取り組み」、「卒業論文指導」など全体に高い水準に位置している。しかし、何かに突出して高い項目はなく、他校との比較で最上位に位置することはできない。

全体として、特筆すべき指導項目は現れておらず、総合的指導力として高い評価が現れている。

◆個別質問に関する傾向

[設問]

就職支援（就職活動についての相談・支援）

[結果]

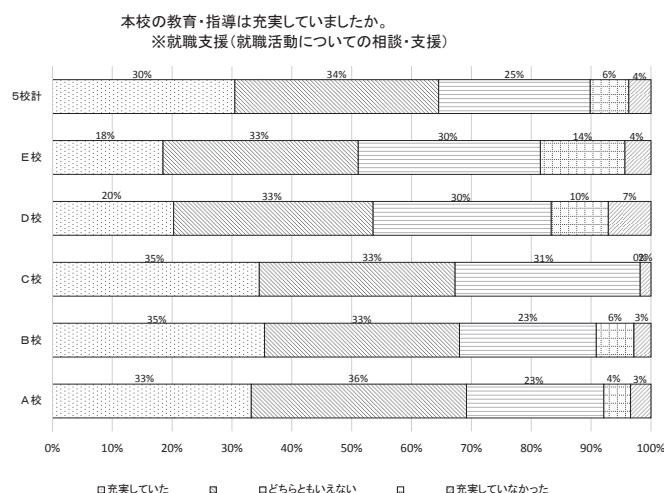


図6-1. 本校の教育・指導は充実していましたか

[考察]

就職指導等に関して、「充実していた」と「ある程度充実していた」の2項目を合計するとほぼ70%に達し、比較対象校間では僅差ながらトップの数値となる。

就職センター職員が、各クラスを担当し、ホームルームや共通科目「就職リテラシー」の時間等を利用して、クラス全体や個別に指導を行うなどの結果と思われる。

[設問]

就職活動への取り組み

[結果]

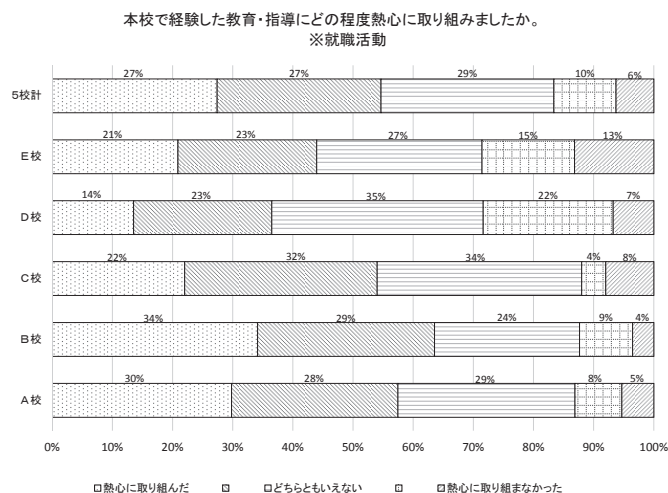


図6-2. 本校で就職活動にどの程度熱心に取り組みましたか

[考察]

就職支援に関する支援は充実していたと感じるものの、「自分自身が就職活動にどの程度取り組んだか」を問う設問では取り組みに関する熱心度が低くなっていく。総合的にみると「専門技術の習得」、「資格取得」などの項目に熱心に取り組んだものに隠れ、突出した項目がみられなくなっている。学生が普段の勉強の力を抜かずに就職活動を行っていることの現れと判断できる。

また、学校が大都市地域に存在していることから、比較的求人数に恵まれていることや、過去の就職実績から考えると「どこかには就職できるであろう」的な考えに陥り、熱心さが薄れる学生が現れてくる傾向も多少あるものとする。

[設問]

本校在学中の経験は、就職先を見つける上でどれくらい重要でしたか。

[結果]

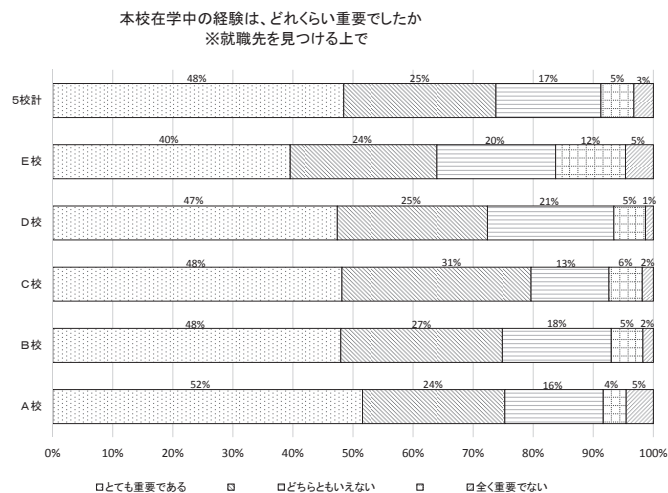


図6-3. 本校在学中の経験は、就職先を見つける上でどれくらい重要でしたか。

[考察]

「本校在学中の経験は、就職先を見つける上でどれくらい重要でしたか」という設問では、76%は「とても重要」・「重要」と回答しており、結果を振り返ると学校の指導が充実しており、結果として就職を勝ち取ったことに対する感謝の姿勢が伺える。

◆全体考察

全体の傾向として在学中の活動は、

- ・専門知識の習得
- ・資格取得
- ・就職活動

のどの分野に主な力を注ぐかが分散している傾向が伺える。

6-2 B 校

[設問]

本校の教育・指導は充実していましたか。 ※部活やサークル、学校の行事

[結果]

- ・充実していなかったとの回答が多い（18.3%：図6-4）

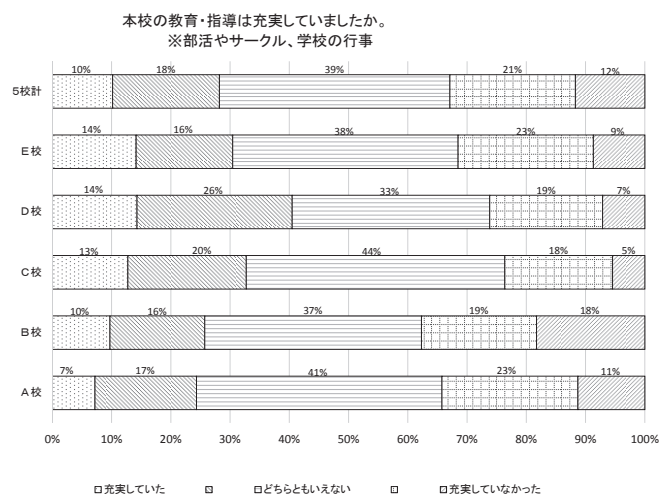


図6-4. 本校の教育・指導は充実していましたか。 ※部活やサークル、学校の行事

[考察]

充実していないと判断されたのが、「部活やサークル」なのか「学校行事」なのか、あるいは両方ともなのか詳細は不明だが、おそらく「学校行事」を頭においた回答と推測される。

本校の学校全体としての行事は、入学式や卒業式を除くと、スポーツ大会（年1回）と学園祭（年1回、1日のみの開催）だけであり、他校と比較して決して多いとは思われない。

高校からそのまま進学してきている学生が圧倒的多数のため、直近の高校生活との比較で充実していないとの回答に繋がったのではないかな。

[設問] ※二つの設問について合わせて考察

本校の教育・指導は充実していましたか。

- a. 図書室、情報機器、実験器具などの施設設備
- b. 就職支援（就職活動についての相談・支援）

[結果]

- a. 消極回答まで含むと充実していないとの回答が多い（22.4%：図6－5）
- b. 充実していたとの回答が多い（35.4%：図6－6）

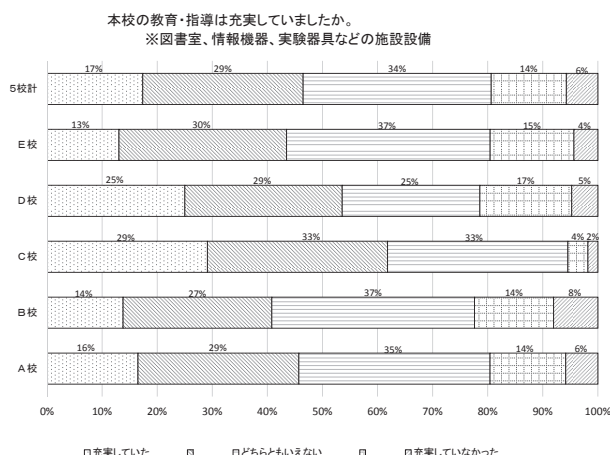


図6－5. 本校の教育・指導は充実していましたか。
※図書室、情報機器、実験器具などの施設設備の充実度

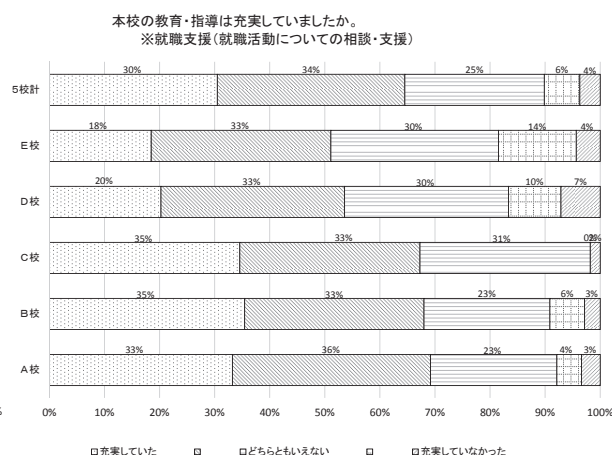


図6－6. 本校の教育・指導は充実していましたか。
※就職支援（就職活動についての相談・支援）

[考察]

本校は校地面積が狭く、校舎が小ぶりであることもあり、スペースが必要な施設・設備の充実よりも、人によるきめ細やかな各種指導に注力してきた。今回の結果は、その方針そのままの評価だと言える。特に、就職については、クラス担任制度を敷き、その担任を中心とした就職指導体制を作り上げ、高い就職実績をあげてきたことが評価されたのではないかな。

[設問]

現在の職場では、専門学校卒は四大卒や短大卒と同等に評価されていると思いますか

※専門学校卒は四大卒と比較して

[結果]

- ・同等以上との回答が少ない（8.7%）
- ・同等以下との回答が多い（20.5%）

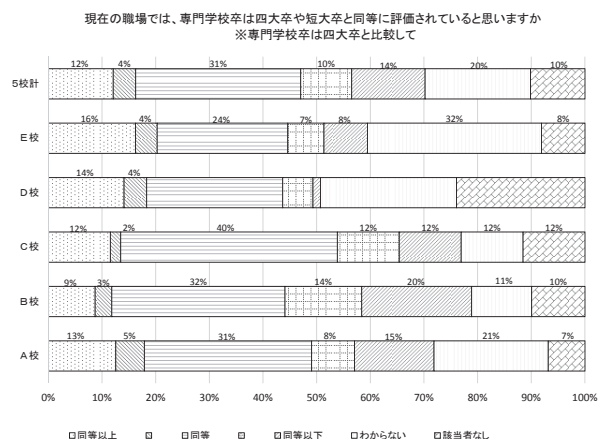


図6-7. 現在の職場では、専門学校卒は四大卒や短大卒と同等に評価されていると思いますか。
※専門学校卒は四大卒と比較して

[考察]

この設問の結果は、本校の最も顕著な特異点であり、年代別回答をみても、以前の卒業生ほど、この回答の傾向は強くなっている。つまり、本校の卒業生は、卒業後年数が経てばたつほど、四大卒と比較して評価されていないと感じていることになる。

この結果をしっかりと分析するには、もう少し詳細な調査が必要だと思われるが、現在あるデータから一つだけ興味ある結果を指摘したい。

それは、地域的特性の可能性である。例えば、他地域他校では卒業後年数が経てばたつほど、「四大卒と同等以下の評価」との回答が減っているのに対し、本校と同地域に所在する他校では、逆に「四大卒と同等以下の評価」との回答が増えている。であるならば、これは専門学校卒業生がキャリア形成していくうえでの地域的な特性とも考えられるのではないかと（ただし、回答者の現住所が判明しているわけではないので、あくまでも仮説である）。

[設問]

現在の獲得水準 ※機械、建築、コンピュータなどの専門知識

[結果]

- 身につけていないと回答する割合が多い（消極的・回答まで含めると27.1%）

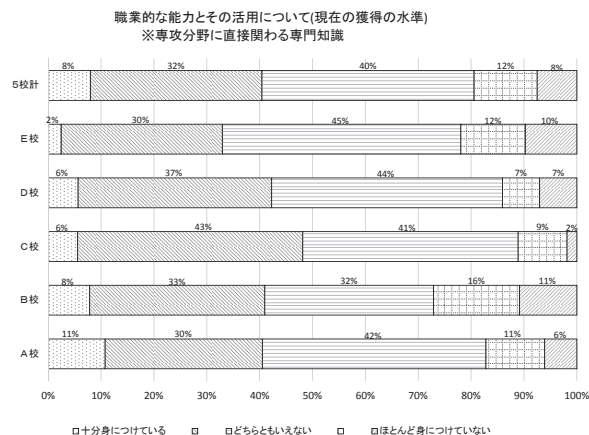


図6-8. 職業的な能力とその活用について現在の獲得の水準 ※専攻分野に直接関わる専門知識

[考察]

本校の卒業生の一つの姿として、専門学校を卒業したのに、現時点でその直接的な専門知識をあまり身につけていないと感じている層が残念ながら一定数ある。この結果についても分析にはもう少し詳細な調査がほしい。ただ、他の設問から推測するに、在学中には充実していたと感じている専門の授業に、熱心に取り組んだ様子が伺えることから、この回答結果は専門学校在学時の専門分野学習の問題というよりも、本校としては卒業後のいわゆる卒後教育について考えるべき問題ではないかと思われる。

6-3 C 校

◆全体傾向

[概要]

「本校の教育・指導に対する充実度」に対しては、全ての項目が高い評価であり、卒業生も熱心に取り組んでいた。

「現在までの企業や施設での仕事状況」では、8割の卒業生が2社以下で働いており、ほとんど転職していない。従業員数は7割の者が100名以下の企業で働いており、本校の求人状況と同じである。年収は比較的高い。

「現在の仕事における知識・技能の必要性」については全ての項目で必要と回答している。しかし、「獲得水準」については低かった。

「在学中の経験に対する重要度」については全ての項目で重要だったと回答している。

[設問]

高校までの基礎学力を学び直す授業や指導の充実度

[結果]

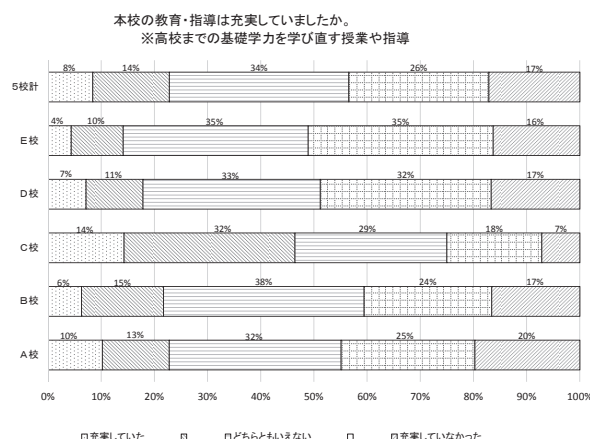


図6-9. 本校の教育・指導は充実していましたか。 高校までの基礎学力を学び直す授業や指導の充実度

[考察]

「充実していた」、「ある程度充実していた」の2項目を合計すると46%と高い値を得た。数学を中心とした指導ではあるが、平成15年度（2003年度）以降、基礎学力の向上を図るための指導に力を入れており、年々その内容も充実してきているためか、1年前の卒業生の評価が高く、5年前の卒業生も

比較的良好な評価であり、取り組みの成果を確認することができた。

[設問]

就職活動支援の充実度

[結果]

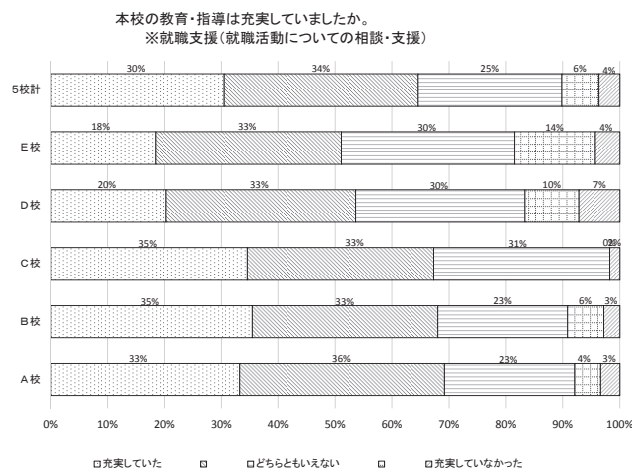


図6-10. 本校の教育・指導は充実していましたか。 就職活動支援の充実度

[考察]

就職活動支援では特別な結果は出ていないが、充実度に於いて「不満」と回答した者が1名と極めて少なかった。また、本校の卒業生は転職をしておらず、卒業後1社又は2社で仕事をしている者が約8割であった。これは、就職指導及びその活動が順調に進み、いわゆるミスマッチが少なかったことの現れと思われる。

[設問]

現在の仕事における知識・技能の必要性

[結果]

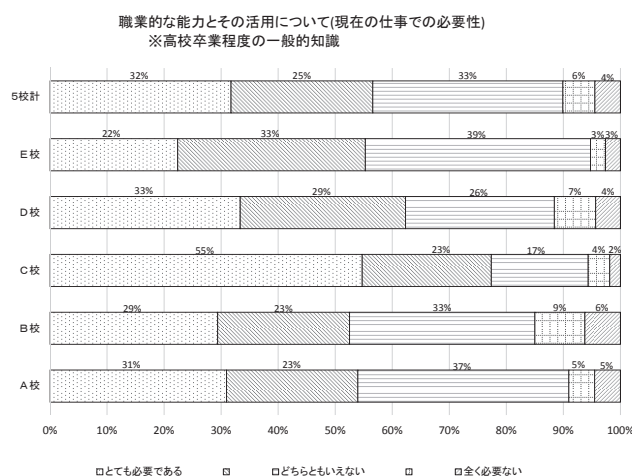


図6-11. 職業的な能力とその活用について現在の仕事での必要性 ※高校卒業程度の一般的知識

[考察]

「現在の仕事における知識・技能の必要性」の項目では、ほとんどの項目に於いて「必要」と回答している。しかし、「知識・技能がどの程度身についていますか」との問いについては、「身につけていない」との回答が多かった。必要性を強く感じている分だけ反対に身につけていないとの意識が強く、このような結果になったと考えられる。

[設問]

本校在学中の経験に対する重要度

[結果]

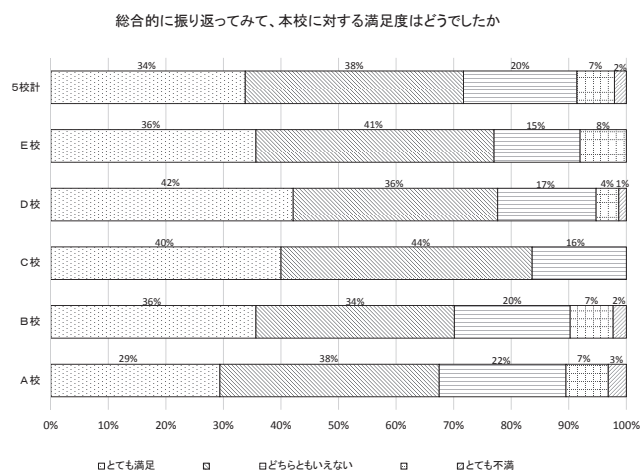


図6-12. 総合的に振り返ってみて、本校に対する満足度はどうでしたか

[考察]

この設問に対しては、「人格を形成して行くうえで」の項目がやや低かったものの、その他の項目では良い結果を示した。このことが、「総合的に振り返ってみて、本校に対する満足度はどうでしたか」の項目に於いて、「不満」とする回答が無かったことに繋がっていると考えられる。

◆全体考察

本調査の結果は、全体的に評価が高かった。中でも本校が力を入れている「基礎学力の向上」、「就職支援」に関する項目では評価が高く指導結果が現れた。

また、「本校に対する総合的にみた満足度」では、「とても満足」が40%、「満足」が44%と約8割の学生が「満足」と回答しており、「不満」と回答した者は一人もいなかった。回答率から見て、本校に対して好意的な回答が寄せられたと。「不満」との回答が無かったことが特徴だった。

6-4 D 校

[設問]

総合的に振り返ってみて、本校に対する満足度はどうでしたか。

[結果]

表6-1. 総合的に振り返ってみて、本校に対する満足度はどうでしたか

H4 総合的に振り返ってみて、本校に対する満足度はどうでしたか	A校	B校	C校	D校	E校	5校計
とても不満	0	0	0	0	0	14
どちらともいえない	21	13	0	3	7	44
どちらともいえない	63	35	9	13	13	133
とても満足	109	80	24	27	38	256
平均	3.13	3.22	3.43	3.76	3.59	3.31
標準偏差	1.22	1.15	1.15	1.09	0.94	1.17
データ件数	286	174	55	76	87	675
とても不満	3.1%	2.3%	0.0%	1.3%	0.0%	2.1%
どちらともいえない	7.3%	7.5%	0.0%	3.9%	8.0%	6.5%
どちらともいえない	22.0%	20.1%	16.4%	17.1%	14.9%	19.7%
とても満足	38.1%	34.5%	43.6%	35.5%	41.4%	37.9%
とても満足	29.4%	35.6%	40.0%	42.1%	35.6%	33.8%
	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

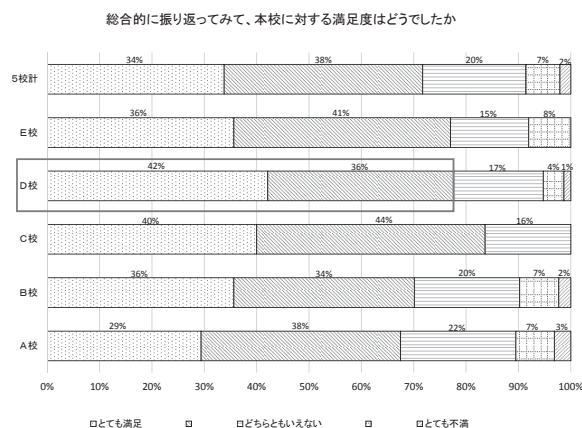


図6-13. 総合的に振り返ってみて、本校に対する満足度はどうでしたか

上記の表および図は、本校の卒業生が総合的に振り返った自校に対する満足度の集計で5「とても満足」から1「とても不満」で調査した結果である。本校の回答は5「とても満足」42%，4「満足」36%，4以上の割合が78%であった。5校平均値，5「とても満足」34%，4以上の割合が72%と比べると本校は5「とても満足」8ポイント，4以上の割合が6ポイント高い。C校の4以上の満足度割合に比べると若干劣るが，本校の卒業生が総合的に振り返った自校に対する満足度は5校の中では比較的高いと考えられる。

[考察]

本校卒業生の比較的高い満足度の要因はなにか，5校全体集計項目別を比べてみた。なかでも在学時の学習・学校生活について「在学期間中の教育に対する充実度と取り組み度合」の回答に，高い満足度に繋がる要因がみられた。

[設問]

a. 在学時の学習・学校生活について

本校の教育・指導は充実していましたか。(図6-14)

b. 在学時の学習・学校生活について

本校で教育・指導にどの程度熱心に取り組みましたか。(図6-15)

[結果]

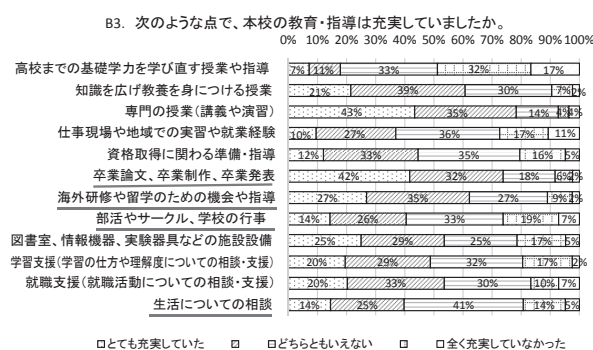


図6-14. 本校の教育・指導は充実していましたか。

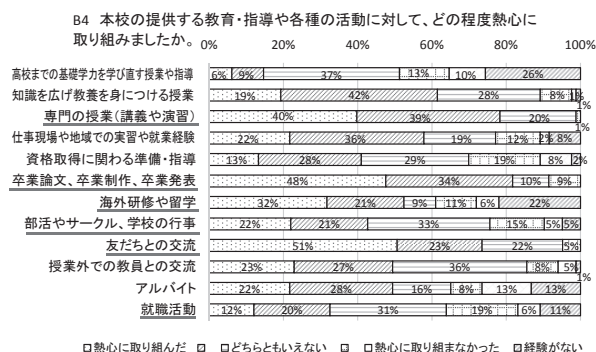


図6-15. 本校の教育・指導にどの程度熱心に取り組みましたか。

上記の「図6-14. 本校の教育・指導は充実していましたか。」「図6-15. 本校の教育・指導にどの程度熱心に取り組みましたか。」に於いて本校の特性が現れている。それぞれの充実度、取り組み度は「5」が高く、「1」は低い回答である。特に下線項目の「専門の授業（講義や演習）」「卒業論文、卒業制作、卒業発表」といった教育課程（カリキュラム）上の項目は、他分野に比べデザイン分野の専門学校は共通して、充実度、取り組み度ともに高い水準であるが、なかでも本校の特性が現れたのが「海外研修や留学のための機会や指導」「部活やサークル、学校の行事」の教育課程以外での項目であり、他校と比べ高い評価結果となった。本校の卒業生が在学期間を振り返り、学校側が提供した教育及び教員の指導充実項目と卒業生自身の取り組み項目が一致しているといえる。他に「図6-15. 本校の教育・指導にどの程度熱心に取り組みましたか。」の「友達との交流」「授業外での教員との交流」取り組み度も高く、本校では教育課程以外での項目（人間性の形成）が充実している。

[考察]

本校の卒業生が就業経験を経た上で、在学中の教育プロセスの中でも特に教育課程以外での項目（人間性の形成）が高い満足度に起因していると考えられる。本校は卒業生の在学期間中に提供した「海外研修や留学のための機会や指導」「部活やサークル、学校の行事」について、次のような結果となった。

[設問]

本校の教育・指導は充実していましたか。 ※海外研修や留学のための機会や指導

[結果]

表6-2. 海外研修や留学のための機会や指導は充実していましたか。

B3 本校の教育・指導は充実していましたか。

B3-7 海外研修や留学のための機会や指導

	A校	B校	C校	D校	E校	5校計
充実していなかった	124	69	9	2	10	214
	62	43	11	7	17	140
どちらともいえない	84	48	20	22	33	207
	14	8	10	29	14	76
充実していた	8	7	5	22	18	60
平均	2.04	2.11	2.84	3.76	3.14	2.47
標準偏差	1.07	1.10	1.17	1.02	1.24	1.26
データ件数	292	175	55	82	92	697
	A校	B校	C校	D校	E校	5校計
充実していなかった	42.5%	39.4%	16.4%	2.4%	10.9%	30.7%
	21.2%	24.6%	20.0%	8.5%	18.5%	20.1%
どちらともいえない	28.8%	27.4%	36.4%	26.8%	35.9%	29.7%
	4.8%	4.6%	18.2%	35.4%	15.2%	10.9%
充実していた	2.7%	4.0%	9.1%	26.8%	19.6%	8.6%
	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

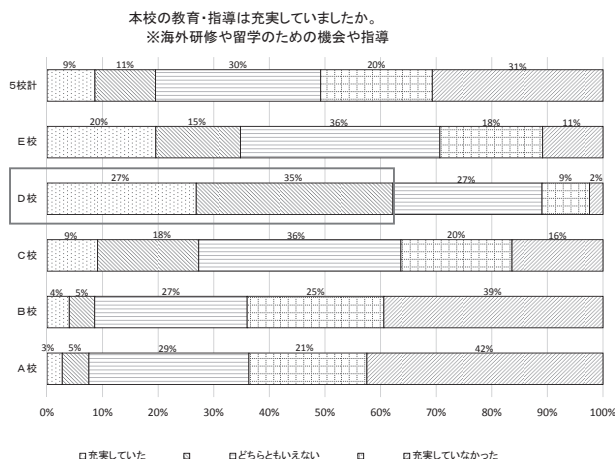


図6-16. 海外研修や留学のための機会や指導は充実していましたか。

「海外研修」について上記結果となった。他校に比べ6割の高い充実度は、在学中の海外研修への機会や指導が充実・熱心度共に高評価をつけたと思われる。

[考察]

「海外研修」についてだが、次のようなプログラムや取り組みを行っている。本校は全員、入学時学納金納入時から海外研修費用を積立制としている。海外研修は最終学年（3年次）夏期休暇中に実施し、参加有無は任意だが毎年約7割の学生が参加している。研修は自由行動型のスタイルでヨーロッパ2都市に約2週間滞在する。参加学生は前期に海外研修事前学習科目を履修し、滞在期間中のスケジュールを各自及び同行グループで自主的に組み立てる行動計画には時間をかけ計画表を制作している。また、同時にトラベル英会話科目も履修し、基本的な会話をスピーチ中心に授業進行を行っている。参加学生は海外研修終了後にアンケート回答及びレポートを2種作成し、下級生にむけた海外研修報告会を前期終了時に行っている。報告会は参加学生全員で役割分担を決め、司会進行・都市別テーマ別スケジュール感想発表・海外研修で何を学んだか・下級生へのアドバイスなどの内容で参加学生が主催した報告会を行っている。卒業生の6割を超える高い充実度は、海外研修に参加した卒業生のほとんどが充実・熱心度共に高評価をつけたと考えられる。30年以上自由行動型スタイルの海外研修

を毎年実施している本校だが、自由行動型スタイルの海外研修こそ能動的学習（アクティブラーニング）だと考え、長年に渡り継続してきた。

[設問]

本校の教育・指導は充実していましたか。

※部活やサークル、学校の行事

[結果]

表6-3. 本校の教育・指導は充実していましたか。 ※部活やサークル、学校の行事

B3 本校の教育・指導は充実していましたか。 B3-8 部活やサークル、学校の行事						
	A校	B校	C校	D校	E校	5校計
充実していなかった	33	32	9	6	8	82
どちらともいえない	67	34	10	16	21	148
充実していた	121	64	24	28	35	272
平均	50	28	11	22	15	126
標準偏差	21	17	7	12	13	71
データ件数	292	175	55	84	92	699
	A校	B校	C校	D校	E校	5校計
充実していなかった	11.3%	18.3%	5.5%	7.1%	8.7%	11.7%
どちらともいえない	22.9%	19.4%	18.2%	19.0%	22.8%	21.2%
充実していた	41.4%	36.6%	43.6%	33.3%	38.0%	38.9%
平均	17.1%	16.0%	20.0%	26.2%	16.3%	18.0%
標準偏差	7.2%	9.7%	12.7%	14.3%	14.1%	10.2%
	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

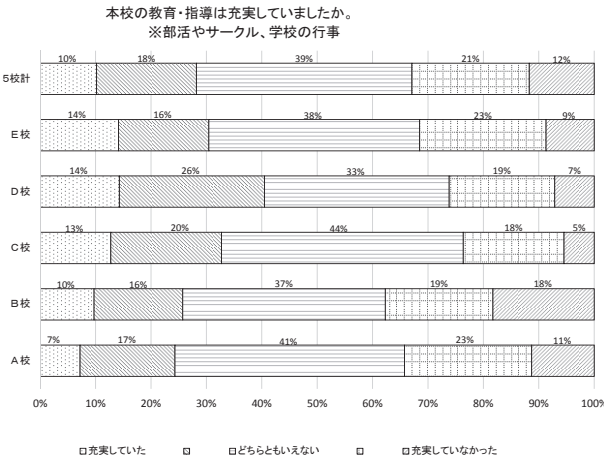


図6-17. 本校の教育・指導は充実していましたか。 ※部活やサークル、学校の行事

「学校行事」について上記結果となった。他校に比べ4割の高い充実度は、在学中の学校行事への取り組みが充実・熱心度共に高評価をつけたと思われる。

[考察]

本校はキャリア発展を促すための基礎的・汎用的能力を学校行事への参加やボランティア活動を通じて身に付ける事が効果的と考え、積極的に取り組んでいる。学生代表の学友会組織が年間学校行事を運営している。学友会組織とは学科学年課程を超えた学生組織であり、学生全体数約8～10%が学友会メンバーとなっており、学校行事には毎回8～9割の学生が参加している。本校は3年制なので、在学中の学校行事回数が他校より多く体験が印象深いと思われる。

6-5 E 校

[設問]

本校の教育・指導は充実していましたか ※知識を広げ教養を身につける授業

[結果]

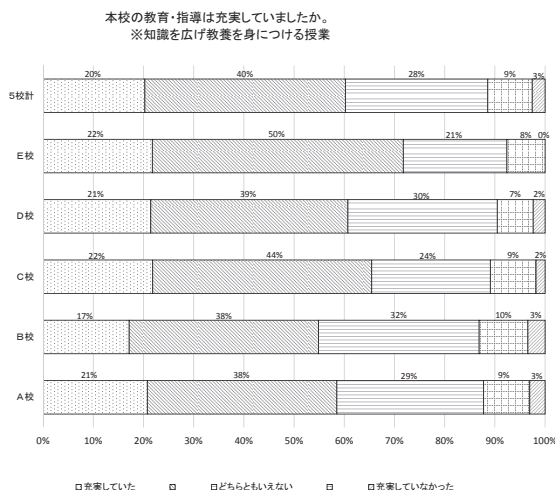


図6-18. 本校の教育・指導は充実していましたか。 ※知識を広げ教養を身につける授業

本校卒業生の回答は、「充実していた」21.4%、「どちらかといえば充実していた」50.0%と比較的高い評価と読み取ることができる。

[考察]

デザイン分野の専門的スキル習得型のカリキュラムに加え、知的バックグラウンドを補強する目的で設置した「デザイン史」「色彩概論」、またオリジナルカリキュラム「感性教育」等が評価された結果と読み取れる。成熟社会となった今、多様な価値観やニーズに対応する為には専門技術・技能だけでなく、それらを下支えするようなカリキュラムの重要性を再認識する必要がある。

[設問]

本校の教育・指導は充実していましたか ※卒業論文、卒業制作、卒業発表

[結果]

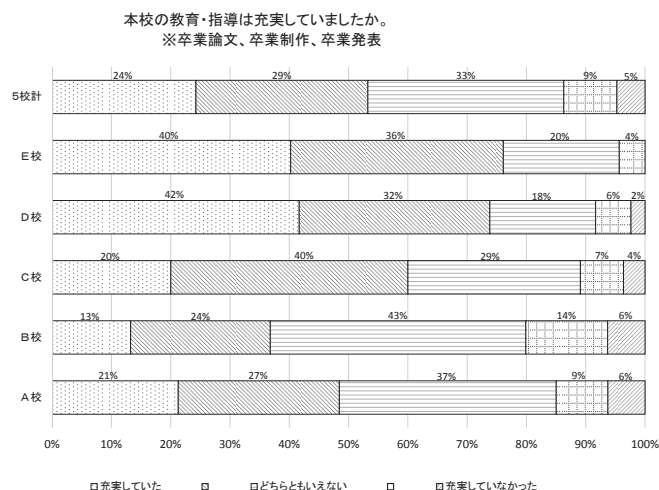


図6-19. 本校の教育・指導は充実していましたか。 ※卒業論文、卒業制作、卒業発表

本校卒業生の回答は、「充実していた」40.2%、「どちらかといえば充実していた」35.9%と、調査校5校の中で高い数値となっている。

[考察]

本校カリキュラムは卒業年次生に対して「卒業制作作品展」を、学習成果の集大成として位置づけている。学生自身もデザインを学んだ証として多くの労力を投入して取り組んでおり、その記憶が強く刻まれていることが回答結果に繋がっていると推測される。

[設問]

本校の教育・指導は充実していましたか ※就職支援（就職活動についての相談・支援）

[結果]

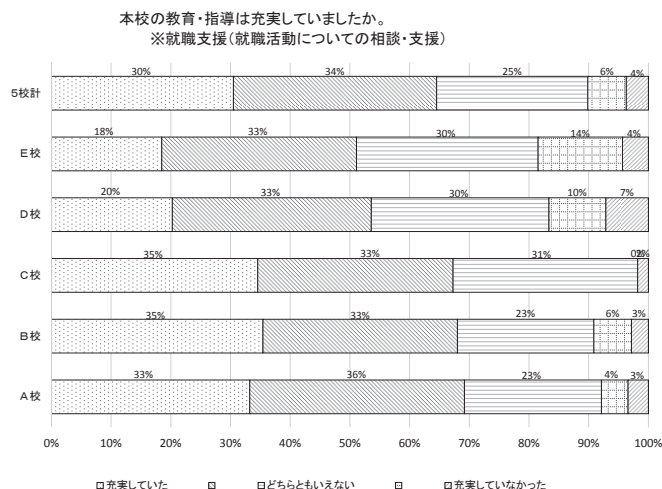


図6-20. 本校の教育・指導は充実していましたか。 ※就職支援（就職活動についての相談・支援）

本校卒業生の回答は、「充実していた」18.5%、「どちらかといえば充実していた」32.6%と、調査校5校の中で一番低い数値となっている。

[考察]

本校は学科主任とクラスチューターの複数担任制のもとに学生の指導を行ってきており、ある程度の満足度を得られているものと自負していたが、想定していた回答と異なる結果となった。就職支援の最終着地点となる進路決定（内定）状況に関する思いが回答に繋がったと推測される。学生指導の課題として真摯に受け止めたい。

6-6 各校ごとの分析とまとめ今後の取り組みについて

アンケートを実施して、その結果の活用方法と今後の展開・アンケートの継続実施に関して各校の方針をまとめてみた。メインとなる項目は以下の2点である。

- ・今回の結果をどのように活用していくか
- ・今後卒業生調査をどのように実施するか

A 校

本内容に関しては、校内で情報公開され情報共有されているが、その結果の活用に関しては統一的な活用・学内での制度・教育指導の変更には至っていない。大きな問題点として認識すべき事項が表出しなかったために、緊急対応が必要と認識されなかった。例えば海外研修などに関しては、労力の割に希望者が少ないなどの事情により大きな改革が進まなかった。

今後の取り組みとしては、同様の調査を2015年度に実施し継続調査を行っている。ポイントとしては

- ・2012年調査と同内容の質問を問うことにより継続した比較分析を可能とする。2012年調査と2015年調査の結果を統合し、より多くのデータを用いたより信頼性の高い総合的な多変量解析を実施する。
- ・同内容の質問を、工業系専門学校3校で実施することにより同分野校での比較分析評価を行う。
- ・基本的質問項目を専門学校コンソーシアム Tokyo 加盟校で調査し、異分野間での専門学校の基本的な情報の比較分析を実施する。

卒業生調査を定期的に継続して実施することにより、蓄積されたデータを分析することを期待し、調査の継続を計画している。

B 校

本調査結果については、校内ではまだ広く公開、検討していないため、まずは学校内での共有と検討を進めていく。次に、既に見え始めている問題点をより明確に分析するための追加調査等を実施し、そのうえで、外部要因として扱うものは別として、本校としての改善点を整理し、対応を実行していく体制を整えていきたい。

C 校

- ・今回の結果をどのように活用して行くか

このような卒業生調査を実施したのは本調査が初めてである。結果は回収率が低く、データ不足であることは否めない。現在後述する方法で卒業生調査を実施しており、その結果と合わせて比較検討した上で活用を考えて行く。

- ・今後卒業生調査をどのように実施するか

本調査の結果を受け、本校では Web を利用したアンケートではその回収率に限界があると判断し、2度目の調査ではデータ回収を第一義として窓口に来校した卒業生や同窓会等の集まりに参加した卒業生に対して、その場でアンケートに回答してもらう方法を取り、1年間実施した。その結果、設問自体は減らしたものの多くのデータを回収することができた。結果の集計は既に終了しており、今後分析を行った上で検討する。

D 校

[今回の結果をどのように活用していくのか]

今回の本校の卒業生調査回答は平成20年度～23年度卒業生が過半数を占めている。ゆえに今回の卒業生調査から見えてきたものは、その時期に本校が取り組んでいた教育事業の状況とその結果・評価といえる。このたび卒業生調査 IR（点検活動）を行ったことで、卒業生の初期キャリア状況のある程度把握できた。また同分野の学校と比べることで、本校の教育事業の特異点や改善点、今後の教育事業計画に有効だが、同分野の標準的な評価指標（ベンチマーク）として比較するには数多くのデータが必要である。

教育事業改善に向けて

- ・キャリア教育の充実を図るため、各科目における「アクティブラーニング」授業スタイルを推進する。
- ・本校の教育・指導で不十分だった「仕事現場や地域での実習や就業経験（インターンシップ）」の強化、「高校までの基礎学力を学び直す授業や指導」「資格取得に関わる準備・指導」「就職支援」教育事業内容の再考。
- ・現状学生の性質把握と、それに基づいた教育事業計画・実行・評価・修正（PDCA）の取り組み。

[今後卒業生調査をどのように実施するか]

今後の取り組みとして、アンケート項目を精査し、本校独自の卒業生調査項目を作成する。即効性のある教育改善に取り組むために、当面は卒業3年目を追跡・調査し IR（点検活動）の指標と考えている。

E 校

今回の結果については、定期的開催される教職員会議での報告を通して情報の共有を図った。定点点観測の必要性もみとめられる為、調査内容や設問の見直し等を含め今後の調査について学内で検討する予定。直近では、学期ごと実施する授業アンケートに加え、卒業時に学校に対する満足度調査（「学校生活」「授業」「進路指導」「目標達成度」）を実施するようにした。

7. 全体分析と今後の課題

調査結果の考察

1) 回答数と結果の反比例

「学校に対する総合的な満足度」に関する質問などに於いては、回答数が増えると満足度が下がるなどの傾向がみられる。学校に対して好意的・批判的等回答者の割合による回答内容の変化が大きく現れた項目と推測される。今後は、回答者数（データ数）を増やすなどの対策を講じることが必要と考える。

2) 就職率と人格形成

就職率が高い（良い）と、人格形成の充実度などの項目に対する評価が低くなる傾向がみられる。地域・学校・分野による違いか、その他の要因による違いかの分析が必要である。

3) 分野による回答の差異

専門学校と言えば「専門技術の修得」と「資格取得」というように考えられていたが、分野によってはその考えが異なってくることが分かった。分野の違う学校との比較だけでなく、同一校内に設置された異分野の学科間に於いても明確な差として現れた。分野の違いによる業務形態の違いや就業形態の違いが影響しているものと考えられる。学校全体として資格取得を推進するような場合には工夫が必要である。

4) 海外研修への対応

海外研修への対応は、学校の取り組み方（姿勢・方針）によって大きく異なる。デザイン系専門学校では、海外のデザインを目の当たりにすることが勉強の役に立つ。工業系専門学校に於いても海外の先端技術の開発現場を視察するなど役に立つ場面が多い筈である。しかしながら、近年景気低迷の影響を受け参加者が低迷しており、企画自体が消滅している学校が出てきている。継続実施している学校の「しかけ」は学ぶ価値ありである。

今回の調査の結果は、各学校間での比較が可能となった。異なる分野の学校、同一分野の学校間で結果の情報を知ることにより、互いのメリットを共有することができる。今後の学校の活動で使うことができる調査であった。

調査方法等に関する考察

職業実践専門課程の認定要件である「学校関係者評価」「教育課程編成委員会」を実施するにあたり、卒業生調査は重要な項目となってくる。調査の信頼性を上げるために、回答数を増やし信頼性を向上させることが必須である。

今回の調査で、回答数によって回答傾向が変化してくることが解った。回答者が少ないため、その数を増やそうとした場合、連絡の取りやすい卒業生（旧担任と今でもつながりがあるとか、学校に必要書類を取りに来るなど）に連絡してしまう傾向がある。これらの被験者はどちらかという学校にとって好意的な回答者に属するため、「良い答え」をしてくれる傾向が出てしまう。回答者の標本自体に偏りが生まれてしまうことをなおし、抽出した標本の平準化を図る必要がある。その対策として、回答数を増やすことが必須である。

専門学校の特徴としては、学科の在籍者数が大学等の教育機関と比して少ないことがあげられる。その時代背景に合わせて学科設置するなどの経営施策による影響であるが、1クラスの学科が複数設置されていることが多い。学校全体の規模をみても大学等の教育機関とはケタ違いに少ない卒業生数となる。

更に、就職時やその後の転職・転勤などにより住所が移動して連絡が取れないケースも多い。これは大学等でも同じ問題を抱えていることではあるが、母数の少ない集団にとっては一人でも連絡の取れない卒業生が増えることは痛手である。

現段階では、卒業時担任が電話して調査参加を依頼するとか、たまたま学校に来た卒業生に調査を依頼するとかして回答数を増やす人海戦術をとっているが、これには限界がある。これらの状況を打破し、専門学校の抱える独自の状況を踏まえたうえで、同窓会組織を完備するなどして卒業生の動向（住所・職業等）把握をすることが必要である。

【謝 辞】

本論文作成に於いては、分析対象とした5校の先生方に、「各校の特徴」「各校ごとの分析とまとめ」の部分の執筆をお願いするとともに、「学校概要」「アンケート回収状況」等の基本情報及び分析のための回答素データの提供を頂いた。それらを活用することにより、5校間での比較を多方面から行うことができた。各校の先生方に多大なる感謝を申し上げる次第である。

また、論文作成に際しては多岐にわたりご指導・ご助言を頂いた九州大学吉本圭一教授、同大学志田秀史准教授をはじめとする多くの方に深謝申し上げます。

【注】

- 1) 卒業生調査にあたっては、九州大学「高等教育と学位・資格研究会」が開発・実施したweb アンケート調査システムを利用した。調査参加機関の中から、相互 IR 分析に賛同した専門学校17校が参加する「専門学校 IR 研究会」が発足し、同一分野内での比較検討を行う共同 IR の合意が得られたデータをもとに分析を行った。その研究会において、参加者が各自の学園・専門学校の分析を行い、吉本圭一研究代表（九州大学）の指導・助言を得た。

〈参考文献〉

- J.Douglas Carroll, 1976, 『Mathematical Tools for Applied Multivariate Analysis』 Academic Press.
- 安部恵美子他, 2007, 『短期大学卒業生のキャリア形成に関するファースト・ステージ論的研究』平成16年度～平成18年度科学研究費補助金（基盤研究（B）(1)）研究成果報告書.
- 池田 央, 1982, 『行動科学の方法』東京大学出版会.
- 小方直幸・関口正雄, 2009, 『専門学校教育と卒業生のキャリア』広島大学高等教育研究開発センター.
- 小方直幸, 2009, 『卒業生調査の狙いと概要』広島大学高等教育研究開発センター.
- 坂田一郎, 2014, 『専修学校における生徒・学生支援等に対する基礎調査』平成25年度文部科学省委託事業報告書.
- 塩野康徳・加藤千恵子, 2011, 『人文科学・社会科学における基礎統計および多変量解析』インデックス出版.
- 清水功次, 2015, 『実務に役立つ多変量解析の理論と実践』日科技連出版社.
- 関口正雄, 2013, 『卒業生調査の活用——専門学校のケース——』『専修学校の学校評価・教育改善の在り方に関する研究調査』平成24年度文部科学省委託事業最終成果報告書.
- 吉本圭一編, 2018, 『卒業生調査を通じた学修成果とコンピテンシー——短期大学・専門学校17分野55機関による IR モデルへの試み——』, 九州大学第三段階教育研究センター「高等教育と学位・資格研究会」ワーキングペーパーシリーズ No4.

(資 料)

卒業生のキャリアと学校評価に関する調査（専門学校）

基本設問

A 出身学部・学科・専攻とあなた自身について

B 在学時の学習・学生生活について

C 卒業後の進路・職業経歴について

D 現在の仕事について

E 資格取得と卒業後の学習経験について

F 仕事や生活に必要な能力について

G これまでの生活や家族について

H これまでの経験を総合的に振り返って

省略可能設問群

(1) 高等教育における学習の量と質（学習モード）

(2) インターンシップや実習とその効果

(3) 就職指導や、職業・キャリア意識の形成

(4) 労働市場や職業訓練

○ = 単数回答 □ = 複数回答

A. 出身学科・専攻とあなた自身について

A1. 本校の入学年月と卒業年月を記入してください。（卒業年は本科の卒業年を記入してください。）

入学年（西暦）：

年

月

卒業年（西暦）：

年

月

A2. 卒業した学科・専攻・コース等の名称を教えてください。 ←※学校毎に対象学科のみがプルダウンリスト表示

(各校ごとの学科・専攻のプルダウンリストから選択)

A3. あなたご自身についてうかがいます。

A3-1. あなたの性別を教えてください。

○男性 51.8 ○女性 48.2

(N=1667)

A3-2. あなたの生まれた年と月を教えてください。

西暦：

年

月

B. 在学時の学習・学生生活について

B1. 本校での学生生活について伺います。あてはまるものを1つ選んでください。

ほとんど出席

欠席は1/5以下

欠席は1/4くらい

欠席は1/3以上

B1-1. 授業への出席

4

3

2

1

78.6

13.1

6.2

1.8

(N=1573)

授業以外でもほぼ毎日勉強していた

授業以外ほとんど勉強しなかった

B1-2. 授業以外での学習時間（授業期間中）

5

4

3

2

1

13.1

18.4

31.9

20.8

15.9

(N=1563)

(1) 高等教育における学習の量と質（学習モード）に関する設問群（省略可）

B1-3. 一週間あたりの学習時間（授業と授業以外での学習を含む）は何時間くらいでしたか。

時間

B1-3. 一週間あたりの学習時間（授業と授業以外での学習を含む）は何時間くらいでしたか。

出席時間	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41-5	41-6	41-7	41-8	41-9	41-10	41-11	41-12	41-13	41-14	41-15	41-16	41-17	41-18	41-19	41-20	41-21	41-22	41-23	41-24	41-25	41-26	41-27	41-28	41-29	41-30	41-31	41-32	41-33	41-34	41-35	41-36	41-37	41-38	41-39	41-40	41-41	41-42	41-43	41-44	41-45	41-46	41-47	41-48	41-49	41-50	41-51	41-52	41-53	41-54	41-55	41-56	41-57	41-58	41-59	41-60	41-61	41-62	41-63	41-64	41-65	41-66	41-67	41-68	41-69	41-70	41-71	41-72	41-73	41-74	41-75	41-76	41-77	41-78	41-79	41-80	41-81	41-82	41-83	41-84	41-85	41-86	41-87	41-88	41-89	41-90	41-91	41-92	41-93	41-94	41-95	41-96	41-97	41-98	41-99	41-100	41-101	41-102	41-103	41-104	41-105	41-106	41-107	41-108	41-109	41-110	41-111	41-112	41-113	41-114	41-115	41-116	41-117	41-118	41-119	41-120	41-121	41-122	41-123	41-124	41-125	41-126	41-127	41-128	41-129	41-130	41-131	41-132	41-133	41-134	41-135	41-136	41-137	41-138	41-139	41-140	41-141	41-142	41-143	41-144	41-145	41-146	41-147	41-148	41-149	41-150	41-151	41-152	41-153	41-154	41-155	41-156	41-157	41-158	41-159	41-160	41-161	41-162	41-163	41-164	41-165	41-166	41-167	41-168	41-169	41-170	41-171	41-172	41-173	41-174	41-175	41-176	41-177	41-178	41-179	41-180	41-181	41-182	41-183	41-184	41-185	41-186	41-187	41-188	41-189	41-190	41-191	41-192	41-193	41-194	41-195	41-196	41-197	41-198	41-199	41-200	41-201	41-202	41-203	41-204	41-205	41-206	41-207	41-208	41-209	41-210	41-211	41-212	41-213	41-214	41-215	41-216	41-217	41-218	41-219	41-220	41-221	41-222	41-223	41-224	41-225	41-226	41-227	41-228	41-229	41-230	41-231	41-232	41-233	41-234	41-235	41-236	41-237	41-238	41-239	41-240	41-241	41-242	41-243	41-244	41-245	41-246	41-247	41-248	41-249	41-250	41-251	41-252	41-253	41-254	41-255	41-256	41-257	41-258	41-259	41-260	41-261	41-262	41-263	41-264	41-265	41-266	41-267	41-268	41-269	41-270	41-271	41-272	41-273	41-274	41-275	41-276	41-277	41-278	41-279	41-280	41-281	41-282	41-283	41-284	41-285	41-286	41-287	41-288	41-289	41-290	41-291	41-292	41-293	41-294	41-295	41-296	41-297	41-298	41-299	41-300	41-301	41-302	41-303	41-304	41-305	41-306	41-307	41-308	41-309	41-310	41-311	41-312	41-313	41-314	41-315	41-316	41-317	41-318	41-319	41-320	41-321	41-322	41-323	41-324	41-325	41-326	41-327	41-328	41-329	41-330	41-331	41-332	41-333	41-334	41-335	41-336	41-337	41-338	41-339	41-340	41-341	41-342	41-343	41-344	41-345	41-346	41-347	41-348	41-349	41-350	41-351	41-352	41-353	41-354	41-355	41-356	41-357	41-358	41-359	41-360	41-361	41-362	41-363	41-364	41-365	41-366	41-367	41-368	41-369	41-370	41-371	41-372	41-373	41-374	41-375	41-376	41-377	41-378	41-379	41-380	41-381	41-382	41-383	41-384	41-385	41-386	41-387	41-388	41-389	41-390	41-391	41-392	41-393	41-394	41-395	41-396	41-397	41-398	41-399	41-400	41-401	41-402	41-403	41-404	41-405	41-406	41-407	41-408	41-409	41-410	41-411	41-412	41-413	41-414	41-415	41-416	41-417	41-418	41-419	41-420	41-421	41-422	41-423	41-424	41-425	41-426	41-427	41-428	41-429	41-430	41-431	41-432	41-433	41-434	41-435	41-436	41-437	41-438	41-439	41-440	41-441	41-442	41-443	41-444	41-445	41-446	41-447	41-448	41-449	41-450	41-451	41-452	41-453	41-454	41-455	41-456	41-457	41-458	41-459	41-460	41-461	41-462	41-463	41-464	41-465	41-466	41-467	41-468	41-469	41-470	41-471	41-472	41-473	41-474	41-475	41-476	41-477	41-478	41-479	41-480	41-481	41-482	41-483	41-484	41-485	41-486	41-487	41-488	41-489	41-490	41-491	41-492	41-493	41-494	41-495	41-496	41-497	41-498	41-499	41-500	41-501	41-502	41-503	41-504	41-505	41-506	41-507	41-508	41-509	41-510	41-511	41-512	41-513	41-514	41-515	41-516	41-517	41-518	41-519	41-520	41-521	41-522	41-523	41-524	41-525	41-526	41-527	41-528	41-529	41-530	41-531	41-532	41-533	41-534	41-535	41-536	41-537	41-538	41-539	41-540	41-541	41-542	41-543	41-544	41-545	41-546	41-547	41-548	41-549	41-550	41-551	41-552	41-553	41-554	41-555	41-556	41-557	41-558	41-559	41-560	41-561	41-562	41-563	41-564	41-565	41-566	41-567	41-568	41-569	41-570	41-571	41-572	41-573	41-574	41-575	41-576	41-577	41-578	41-579	41-580	41-581	41-582	41-583	41-584	41-585	41-586	41-587	41-588	41-589	41-590	41-591	41-592	41-593	41-594	41-595	41-596	41-597	41-598	41-599	41-600	41-601	41-602	41-603	41-604	41-605	41-606	41-607	41-608	41-609	41-610	41-611	41-612	41-613	41-614	41-615	41-616	41-617	41-618	41-619	41-620	41-621	41-622	41-623	41-624	41-625	41-626	41-627	41-628	41-629	41-630	41-631	41-632	41-633	41-634	41-635	41-636	41-637	41-638	41-639	41-640	41-641	41-642	41-643	41-644	41-645	41-646	41-647	41-648	41-649	41-650	41-651	41-652	41-653	41-654	41-655	41-656	41-657	41-658	41-659	41-660	41-661	41-662	41-663	41-664	41-665	41-666	41-667	41-668	41-669	41-670	41-671	41-672	41-673	41-674	41-675	41-676	41-677	41-678	41-679	41-680	41-681	41-682	41-683	41-684	41-685	41-686	41-687	41-688	41-689	41-690	41-691	41-692	41-693	41-694	41-695	41-696	41-697	41-698	41-699	41-700	41-701	41-702	41-703	41-704	41-705	41-706	41-707	41-708	41-709	41-710	41-711	41-712	41-713	41-714	41-715	41-716	41-717	41-718	41-719	41-720	41-721	41-722	41-723	41-724	41-725	41-726	41-727	41-728	41-729	41-730	41-731	41-732	41-733	41-734	41-735	41-736	41-737	41-738	41-739	41-740	41-741	41-742	41-743	41-744	41-745	41-746	41-747	41-748	41-749	41-750	41-751	41-752	41-753	41-754	41-755	41-756	41-757	41-758	41-759	41-760	41-761	41-762	41-763	41-764	41-765	41-766	41-767	41-768	41-769	41-770	41-771	41-772	41-773	41-774	41-775	41-776	41-777	41-778	41-779	41-780	41-781	41-782	41-783	41-784	41-785	41-786	41-787	41-788	41-789	41-790	41-791	41-792	41-793	41-794	41-795	41-796	41-797	41-798	41-799	41-800	41-801	41-802	41-803	41-804	41-805	41-806	41-807	41-808	41-809	41-810	41-811	41-812	41-813	41-814	41-815	41-816	41-817	41-818	41-819	41-820	41-821	41-822	41-823	41-824	41-825	41-826	41-827	41-828	41-829	41-830	41-831	41-832	41-833	41-834	41-835	41-836	41-837	41-838	41-839	41-840	41-841	41-842	41-843	41-844	41-845	41-846	41-847	41-848	41-849	41-850	41-851	41-852	41-853	41-854	41-855	41-856	41-857	41-858	41-859	41-860	41-861	41-862	41-863	41-864	41-865	41-866	41-867	41-868	41-869	41-870	41-871	41-872	41-873	41-874	41-875	41-876	41-877	41-878	41-879	41-880	41-881	41-882	41-883	41-884	41-885	41-886	41-887	41-888	41-889	41-890	41-891	41-892	41-893	41-894	41-895	41-896	41-897	41-898	41-899	41-900	41-901	41-902	41-903	41-904	41-905	41-906	41-907	41-908	41-909	41-910	41-911	41-912	41-913	41-914	41-915	41-916	41-917	41-918	41-919	41-920	41-921	41-922	41-923	41-924	41-925	41-926	41-927	41-928	41-929	41-930	41-931	41-932	41-933	41-934	41-935	41-936	41-937	41-938	41-939	41-940	41-941	41-942	41-943	41-944	41-945	41-946	41-947	41-948	41-949	41-950	41-951	41-952	41-953	41-954	41-955	41-956	41-957	41-958	41-959	41-960	41-961	41-962	41-963	41-964	41-965	41-966	41-967	41-968	41-969	41-970	41-971	41-972	41-973	41-974	41-975	41-976	41-977	41-978	41-979	41-980	41-981	41-982	41-983	41-984	41-985	41-986	41-987	41-988	41-989	41-990	41-991	41-992</
------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	------	------	------	------	------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	----------

のを1つ選んでください。

		とても充実していた						全く充実していなかった				
a	高校までの基礎学力を学び直す授業や指導	5	6.4	4	13.4	3	38.3	2	24.6	1	17.2	(N=1536)
b	知識を広げ教養を身につける授業	5	18.6	4	38.2	3	30.6	2	9.5	1	3.1	(N=1539)
c	専門の授業（講義や演習）	5	41.2	4	41.2	3	13.8	2	2.9	1	0.9	(N=1530)
d	仕事現場や地域での実習や就業経験	5	20.5	4	28.3	3	27.6	2	14.2	1	9.4	(N=1539)
e	資格取得に関わる準備・指導	5	31.3	4	33.2	3	23.1	2	8.5	1	3.8	(N=1535)
f	卒業論文、卒業制作、卒業発表	5	17.1	4	27.8	3	32.2	2	11.7	1	11	(N=1524)
g	海外研修や留学のための機会や指導	5	11	4	13.2	3	23.3	2	15.8	1	36.7	(N=1527)
h	部活やサークル、学校の行事	5	8.8	4	17.1	3	37.4	2	22.6	1	14.1	(N=1530)
i	図書室、情報機器、実験器具などの施設設備	5	14	4	28.3	3	34.9	2	15.5	1	7.3	(N=1525)
j	学習支援（学習の仕方や理解度についての相談・支援の体制）	5	16.2	4	28.4	3	37.5	2	13.6	1	4.3	(N=1533)
k	就職支援（就職活動についての相談・支援の体制）	5	27.3	4	33.9	3	26.4	2	8.2	1	4.2	(N=1532)
g	生活についての相談	5	19.1	4	15.9	3	48.1	2	16.3	1	9.6	(N=1531)

B4. 本校の提供する教育・指導や各種の活動に対して、どの程度熱心に取り組みましたか。

以下の以下の各設問について次の6段階の中であてはまるものを1つ選んでください。

		熱心に取り組んだ							熱心に取り組まなかった				経験がない		
a	高校までの基礎学力を学び直す授業や指導	5	8.1	4	11.6	3	36.4	2	12.9	1	9	0	22	(N=1522)	
b	知識を広げ教養を身につける授業	5	23.8	4	31.8	3	31.8	2	6.9	1	2.7	0	3	(N=1520)	
c	専門の授業（講義や演習）	5	42.1	4	34.8	3	19.7	2	2.3	1	0.7	0	0.4	(N=1519)	
d	仕事現場や地域での実習や就業経験	5	30.0	4	24.8	3	23	2	6.4	1	1.6	0	14.2	(N=1523)	
e	資格取得に関わる準備・指導	5	33.5	4	29.5	3	21.2	2	7.9	1	3.5	0	4.5	(N=1521)	
f	卒業論文、卒業制作、卒業発表	5	23.5	4	24.9	3	26	2	8.5	1	3.3	0	13.9	(N=1521)	
g	海外研修や留学のための機会や指導	5	9.6	4	8.3	3	14.5	2	6.9	1	6.3	0	54.4	(N=1519)	
h	部活やサークル、学校の行事	5	12.9	4	15.6	3	27.9	2	14.1	1	9.5	0	20	(N=1522)	
i	友だちとの交流	5	37.3	4	29.3	3	24.4	2	5.5	1	2.7	0	0.9	(N=1527)	
j	授業外での教員との交流	5	13.2	4	22.4	3	34.1	2	13.7	1	9.6	0	7	(N=1524)	
k	アルバイト	5	20.2	4	18.5	3	21.7	2	7	1	8.3	0	24.4	(N=1523)	
(省略可) g	就職活動	5	24.0	4	28.3	3	30.2	2	8.3	1	5.2	0	4.1	(N=1524)	

(1) 高等教育における学習の量と質（学習モード）に関する設問群（省略可能）

B4-2. 本校で経験した授業では、次のことがどの程度ありましたか。以下の以下の各設問について次の5段階の中であてはまるものを1つ選んでください。

		よくあった									ほとんどなかった		
a	学生の関心や理解度に配慮した授業	5	15.9	4	38.5	3	35.9	2	7.4	1	2.3	(N=1417)	
b	私語や携帯電話の禁止など学習環境作りに配慮した授業	5	10.6	4	26.5	3	42.6	2	14	1	6.4	(N=1412)	
c	グループワークなど学生が参加する授業	5	24.0	4	36.1	3	30.9	2	7	1	2	(N=1414)	
d	自分の意見や考えを求められる授業	5	17.6	4	32.5	3	35.8	2	11	1	3.2	(N=1411)	
e	最終試験以外に小テストなど到達度をチェックする授業	5	18.0	4	32	3	32.6	2	12.5	1	4.9	(N=1416)	
f	教員が親身に指導してくれる授業	5	26.3	4	35.7	3	29.9	2	6.2	1	1.9	(N=1406)	

(2) インターンシップや実習とその効果に関する設問群（省略可能）

B4-3. あなたは次のようなインターンシップや実習などの就業体験を経験しましたか。あてはまるものをすべて選んでください。（複数回答）

(N=1883)

☐	インターンシップを経験した	→ B4-3-SQ1へ	8.0
☐	資格取得のための実習を経験した	→ B5（あるいはC）へ	25.5
☐	専門分野に関連するアルバイトをした	→ B5（あるいはC）へ	10.8
☐	学外での就業体験はしなかった	→ B5（あるいはC）へ	21.8

B4-3-SQ1. インターンシップ先の業種・職種について、もっともあてはまるものを1つ選択してください

業種：（プルダウンリストから選択）
職種：（プルダウンリストから選択）

B4-3-SQ1. インターンシップ先の業種・職種 (N=1883)	%
インターネット附随サービス業	0.1
スポーツ・健康に関する教授業	0.1
スポーツチームなどスポーツ等興行業	0.6
その他	0.4
その他の医療、福祉	0.2
その他の医療機関	0.1
その他の教育、学習支援業	0.1
その他の製造業	0.1
ソフトウェアなどの情報サービス業	0.7
フィットネスクラブなどスポーツ施設提供業	0.3
マッサージなどスポーツ療術業	0.1
印刷・印刷関連業	0.4
印刷業以外の製造業	0.2
映像・音声・文字情報制作業	0.8
卸売・小売業	0.1
介護老人福祉・保健施設	0.1
学術研究、専門・技術サービス業	0.1
建築、工事業	0.3
娯楽業（ゲームセンター、パチンコホール等）	0.1
広告業	0.3
広告業以外の学術研究、専門・技術サービス業	0.2
社会福祉・介護（運動機能訓練等）業	0.1
情報通信業	0.5
織物・衣服・身の回り小売業	0.2
生活関連サービス業	0.1
繊維・衣服等卸売業	0.1
繊維工業	0.4
電気・ガス・熱供給・水道業	0.1
病院	1.2
放送業	0.1
老人福祉・介護事業	0.1
	92.2
計	100

B4-3-SQ1. インターンシップ先の業種・職種 (N=1883)	%
ゲームソフトウェア業	0.9
その他	0.3
その他のソフトウェア業	0.1
メーカー系ソフトウェア業	0.1
建設業	0.2
公務	0.1
情報処理・提供サービス業	0.3
農業、林業、漁業	0.1
	98
計	100

B4-3-SQ1. インターンシップ先の業種・職種 (N=1883)	%
CG エンジニア、プログラマー	0.4
CG デザイナー、アーティスト	0.8
Web デザイナー	0.1
アニメーター、CG アニメーター	0.2
イラストレーター	0.1
エディトリアルデザイナー	0.1

B4-3-SQ1. インターンシップ先の業種・職種 (N=1883)	%
写真	0.1
手塚建築研究所	0.1
東淀川高等学校の陸上競技部	0.1
病院内の各部署の体験	0.1
漫画家アシスタント	0.1
	99.7
計	100

B4-3-SQ1. インターンシップ先の業種・職種 (N=1883)	%
DTP オペレーター	0.1
サービスの職業	0.1
スポーツインストラクター	0.1
スポーツトレーナー（個人指導を含む）	0.8
その他	0.3
その他のサービスの職業	0.1
その他の生産工程の職業	0.1
その他の専門的・技術的職業	0.5
デザインの職業	2
パタンナー	0.1
ファッションアドバイザー	0.1
ファッションデザイナー	0.1
マンガなどの美術、写真、映像撮影専門の職業	0.4
メディカルトレーナー	0.2
医療事務	0.4
管理的な職業	0.1
作業療法士	0.2
種目別スポーツ指導員（コーチ）	0.1
柔道整復師（助手は除く）	0.1
情報処理技術者	0.3
診療情報管理事務	0.1
生産工程の職業	0.1
専門的・技術的職業	0.7
病棟クラーク	0.1
縫製製品等製造の職業	0.4
訪問介護員、ヘルパー	0.1
理学療法士	0.3
臨床検査技師	0.2
	92
計	100

B4-3-SQ1. インターンシップ先の業種・職種 (N=1883)	%
その中でも特に力を入れていたのは病棟クラーク業務	0.1
プランナー	0.1
リハビリテーション、軽い怪我（擦り傷）などの治療、フォームチェック、スポーツマッサージ、補強メニュー作成・実施、マシントレーニングの指導・監視	0.1
建築設計事務所	0.1
高校	0.1
雑誌の編集局	0.1
設計事務所	0.1
店舗設計	0.1
	99.6
計	100

グラフィックデザイナー	0.6
ゲーム設計、デザイナー	0.1
その他	0.2
その他の専門的・技術的職業	0.2
プロダクトデザイナー	0.1
モデラー	0.1
建築・土木・測量技術者	0.1
建築設計デザイン	0.4
研究者	0.1
情報処理技術者、システム運行管理者	0.4
生産設備や製品の組立製造、機械修理などの職業	0.1
漫画家	0.1
	96.1
計	100

B4-3-SQ2. インターンシップを振り返って、次の5段階の中であてはまるものを1つ選んでください。

		専門と密接に関連付けられていた					専門とは関連がなかった				
a	インターンシップの内容は、在籍していた学科・専攻・コースと関連していましたか	5	68.9	4	15.9	3	9.3	2	4.6	1	1.3

(N=151)

		大いに役に立った					全く役立たなかった				
b	インターンシップは卒業後の進路を選択する上で役に立ちましたか	5	59.6	4	21.2	3	12.6	2	3.3	1	3.3

(N=151)

B4-3-SQ3. インターンシップに行ったことは、その後のあなたの学生生活や職業生活への移行などにどのような影響がありましたか。以下の各設問について次の5段階の中であてはまるものを1つ選んでください。

		よくあてはまる					全くあてはまらない				
a	自信をもって積極的に行動できるようになった	5	26.7	4	32.2	3	32.9	2	4.7	1	3.4
b	働くことの楽しさ、厳しさがわかった	5	59.6	4	21.2	3	12.6	2	3.3	1	3.3
c	就職したい業界が明確になった	5	38.3	4	32.2	3	21.5	2	6	1	2
d	自分の適性に気づくことができた	5	29.7	4	29.1	3	32.4	2	6.8	1	2
e	卒業時の職業選択の参考になった	5	46.6	4	24.3	3	21.6	2	4.1	1	3.4

(N=149)

(N=151)

(N=149)

(N=148)

(N=148)

(3) 就職指導や、職業・キャリア意識の形成に関する設問群（省略可能）

B5. あなたは本校の在学経験を通じて、学科・専攻・コースの目標としている職業に対し、どのように考えるようになりましたか。各設問について次の5段階の中であてはまるものを1つ選んでください。

		よくあてはまる					全くあてはまらない				
a	働くことの意義を理解することができた	5	17.5	4	32.4	3	32.9	2	10.7	1	6.4
b	職業の周辺にある仕事について視野が広がり、理解が深まった	5	25.7	4	41.2	3	23.5	2	6.9	1	2.8
c	職業に必要な知識・技能を身につけることができた	5	29.5	4	40.0	3	22.4	2	5.8	1	2.3
d	仕事をするものの厳しさやつらさを知った	5	26.5	4	27.2	3	28.2	2	10.8	1	7.4
e	職業への希望が揺らいだことがあった	5	17.9	4	19.4	3	28.9	2	14	1	19.8

(N=1135)

(N=1134)

(N=1134)

(N=1133)

(N=1137)

C. 卒業後の進路・職業経歴について

C1. 本校の卒業直後（卒業6ヶ月以内）の進路についてもあてはまるものを1つ選んでください。

○	就職	87.5	(N=1554)
○	進学（研究科・専攻科への内部進学も含む）	→ C1-SQ へ	2.9
○	進学も就職もしていない	→ C2-0へ	5.3
○	その他（具体的に）	→ C2-0へ	4.3

⇒	アルバイト	0.5	(N=1883)
	アルバイトや個人の仕事（イラスト関係）	0.1	
	アルバイトをしながら制作活動をしています。	0.1	
	アルバイトを続けました	0.1	
	これまでやっていた仕事に加えて、資格を活かした仕事を加えた。	0.1	
	したくても、まともな職業につけなかった。言語が出来なかった	0.1	

C1SQ. 本校卒業直後の進学・編入学について【進学者のみ】

卒業後進学・編入学した方にうかがいます。

C1-SQ1. 進学・編入学先の学校はどこですか。あてはまるものを1つ選んでください。

☐ 四年制大学に編入学	29.5	(N=44)		
☐ 短期大学 専攻科に進学	2.3			
☐ 専門学校 研究科など（上級の専攻）に進学	34.1			
☐ 四年制大学1年次に入学	0.0			
☐ 短期大学1年次に入学	0.0			
☐ 専門学校1年次に入学	25.0			
☐ その他（具体的に ）	9.1		⇒	
			イタリアに留学	0.1 (N=1883)
			海外留学	0.1
			本校の精神保健福祉士養成通信制課程に進学した。	0.1
			鍼灸科3年 ダブルスクールのため残り1年間修学	0.1
				99.8

C1-SQ2. 進学・編入学した学校の専門分野は何ですか。あてはまるものを1つ選んでください。

専門分野：（プルダウンリストから選択）	⇒	サービス	0.1 (N=1883)
		その他	0.2
		医療・保健	1.3
		教育・社会福祉	0.4
		工学，建築，環境	0.2
		人文学，芸術，デザイン	0.2
			97.7
		スポーツ	0.1 (N=1883)
		スポーツ学部	0.1
		マンガの研究科	0.1
			99.8

C1-SQ3. C1-SQ2の専門分野は，卒業した本校で学んだ専門分野と関連する分野ですか。あてはまるものを1つ選んでください。

☐ 本校の専攻分野と同じ分野	27.9 (N=1883)
☐ 本校の専攻分野と関連する分野	60.5
☐ 本校の専攻分野と違う分野	11.6

C1-SQ4. 進学・編入学した理由は何ですか。あてはまるものをすべて選んでください。（複数回答）

☐ 専攻分野についてさらに勉強したかったから	1.3 (N=1883)		
☐ 別の分野について勉強したかったから	0.8		
☐ 教養を身につけたかったから	0.5		
☐ 将来の仕事に必要なから	1.4		
☐ 大学卒の学歴がほしかったから	0.3		
☐ 資格取得のため	1.4		
☐ もっと学生の身分でいたかったから	0.2		
☐ 就職活動がうまくいかなかったから	0.2		
☐ その他（具体的に ）	0.2	⇒	
		過去の自分を振り返って海外へ行くことについて経験や判断をしきれなかったから	0.1 (N=1883)
		外国に行きたかったから。	0.1
		研究がやりたかった	0.1
		人脈作り，個人で貰うデザインの仕事を行う時間が欲しかった為。	0.1
			99.8

C1-SQ5. 進学・編入学先での学習や学生生活について次のように感じることはありましたか。次の5段階の中ではまるものを1つ選んでください。

	とても そう思った					全くそう 思わなかった					
進学・編入学先では本校で勉強したことへの配慮がなされていた	5	39.5	4	25.6	3	16.3	2	7	1	11.6	(N=43)
進学・編入学先では他の学生に比べて授業などの負担が大きかった	5	20.9	4	11.6	3	11.6	2	16.3	1	39.5	(N=43)
進学・編入学先では新しい学科や、クラスにうまくなじめた	5	37.2	4	34.9	3	14.0	2	2.3	1	11.6	(N=43)

C1-SQ6. その進学・編入学先の学校を卒業しましたか。あてはまるものを1つ選んでください。

☐ 卒業した	70.5	(N=44)
☐ 中退した	6.8	
☐ 在学中	22.7	
☐ その他（具体的に)	0	

C2. 本校を卒業後、初めて就いた仕事（初職）についてうかがいます。

C2-0. 卒業後に仕事をした経験がありますか。

☐ 仕事をした経験がある	96.9	(N=1553)	→ C2-1へ
☐ 仕事をした経験がない	3.1		→ E へ

C2-1. 仕事の就業形態について、もっともあてはまるものを1つ選んでください。

就業形態：(プルダウンリストから選択)	正規の社員・職員として勤務	64.8	(N=1883)
	契約・派遣などの非正規の社員・職員として勤務	0.8	
	自営業・家業の仕事に就いている	8.8	
	パートタイム・臨時などの仕事に就いている	4.5	
	その他（具体的に)	0.7	
		20.7	

その他（具体的に） →	1. 知り合いの制作事務所から Web デザインなどデザインのお仕事を度々頂く（在宅） 2. 知り合いの飲食店さんから Web 制作のお仕事を頂く（在宅） 3. また知り合った方から臨時で声がかかる時、テキ屋、交通量調査などお手伝いをする	0.1	(N=1883)
	アニメーター	0.1	
	フリーランスデザイナー兼プロデューサー見習い	0.1	
	使用期間	0.1	
	就職応援プロジェクト	0.1	
	臨時的任用教員	0.1	
		99.7	

CAD オペレータなど生産関連作業	0.1	(N=1883)	インターネット附随サービス業	0.7	(N=1883)
CG エンジニア、プログラマー	2		スポーツ・健康に関する教授業	0.1	
CG デザイナー、アーティスト	1.7		スポーツチームなどスポーツ等興行業	0.2	
OA 機器操作の事務	0.4		スポーツに関するプロダクション業	0.1	
Web デザイナー	0.7		その他	6	
アニメーター、CG アニメーター	0.3		その他の医療、福祉	1.4	
インダストリアルデザイナー	0.1		その他の医療機関	1.4	
エディトリアルデザイナー	0.3		その他の教育、学習支援業	0.3	
グラフィックデザイナー	2.2		その他の社会保険・社会福祉・介護事業	0.1	
ゲーム設計、デザイナー	0.2		その他の生活関連サービス業、娯楽業	0.1	
サービスの職業	0.1		その他の製造業	0.1	
セールスエンジニア、カスタマーエンジニア	0.3		その他の老人福祉・介護事業	0.8	
その他	0.8		ソフトウェアなどの情報サービス業	5.2	
その他のデザイナー	0.6		フィットネスクラブなどスポーツ施設提供業	0.9	
その他の建設の職業	0.4		マッサージなどスポーツ療術業	0.7	
その他の事務の職業	0.7		印刷・印刷関連業	2.4	

その他の情報処理技術者	0.7
その他の生産工程の職業	0.1
その他の専門的・技術的職業	1.5
その他の販売の職業	1.2
その他の美術、写真家、映像撮影専門の職業	0.2
パッケージデザイナー	0.2
プランナー、企画事務	0.1
プロダクトデザイナー	0.1
モデラー	0.1
運搬・清掃・包装等	0.1
家具デザイナー・製作	0.1
開発に関わる製造技術者	1.7
開発を除く製造技術者	0.2
管理的な職業	0.4
建築・土木・測量技術者	0.8
建築・土木工事監督	0.5
建築設計デザイン	0.1
研究者	0.6
情報処理技術者、システム運行管理者	4.6
生産工程の職業	0.1
生産設備や製品の組立製造、機械修理などの職業	0.3
製品の品質検査管理の仕事	0.1
製品検査従事者	0.1
専門的・技術的職業	0.1
通信・システム営業職	0.1
電気工事の職業	0.1
販売の職業	0.1
美術家、デザイナー、写真家、映像撮影者	0.2
漫画家	0.1
	75

CAD モデラー	0.1
SE・PG	0.1
アニメ	0.1
インストラクター	0.1
クリニック リハビリスタッフ	0.1
ショップ	0.1
スーパーのレジ打ち、品出し	0.1
ステンドグラスの工房	0.1
プログラマ	0.1
メールでの顧客サービス	0.1
医療ソーシャルワーカー	0.1
飲食業	0.1
営業	0.1
営業技術職 (CAD/CAM を使用し技術支援、社内教育等)	0.1
家具職人	0.1
介護員	0.1
介護職	0.1
看護助手	0.1
企画職	0.1
教職員	0.1
契約社員として一時的にバソナに就職していました。研修生の立場が一番近いです。	0.1
建築設計事務所	0.1
公務員 (小学校教職員)	0.1

(N=1883)

印刷業以外の製造業	1.3
運輸業、郵便業	0.3
映像・音声・文字情報制作業	1.8
卸売・小売業	2.3
介護老人福祉・保健施設	7
学術研究、専門・技術サービス業	1.4
教育、学習支援事業	0.1
建築、工事業	2
娯楽業 (ゲームセンター、パチンコホール等)	0.6
公務 (一般行政や警察、自衛隊など)	0.1
公務 (一般行政や警察、自衛隊など)	0.3
広告業	1.3
広告業以外の学術研究、専門・技術サービス業	0.6
児童福祉事業	0.2
自動車整備	0.1
自立支援施設 (知的・身体・精神)	3.3
社会福祉・介護 (運動機能訓練等) 業	0.3
社会保険事業団体・福祉事務所	0.1
宿泊業、飲食サービス業	0.1
障害者福祉事業	0.2
情報通信業	6.8
織物・衣服・身の回り小売業	0.1
診療所	2.9
生活関連サービス業	0.5
専門学校・短期大学・大学	0.1
繊維・衣服等卸売業	0.2
繊維工業	0.6
通信業	0.1
電気・ガス・熱供給・水道業	1.2
土木工事などその他の建設業	0.7
病院	17.6
病院などの医療施設	2.5
保健所など保健衛生	0.1
訪問介護・ディサービスなど居宅サービス関連	1.4
老人福祉・介護事業	0.7
	21

インターネット附随サービス業	0.3
ゲームソフトウェア業	3
その他	3
その他のソフトウェア業	2.2
その他の卸売・小売業	0.1
メーカー系ソフトウェア業	1.4
医療、福祉	0.4
運輸業、郵便業	0.2
卸売・小売業	0.1
学術研究、専門・技術サービス業	0.1
教育、学習支援業	0.3
金融業・保険業	0.1
建設業	0.5
公務	0.2
宿泊業、飲食サービス業	0.3
情報処理・提供サービス業	4.3
情報通信業	0.1

(N=1883)

事務職	0.1
自衛隊（航空自衛隊、総務特技）	0.1
自動車用ランプ設計	0.1
助手	0.1
情報システム部	0.1
食料品製造職	0.1
神主	0.1
整形外科 アシスタント	0.1
生活相談員	0.1
製造業	0.1
設計事務所	0.1
造園施工員	0.1
測量士、事務所所長	0.1
通訳関係	0.1
非常勤講師	0.1
病院のリハビリ科 リハビリ助手	0.1
	97.9

生活関連サービス業、娯楽業	0.5
製造業	0.1
製薬会社	0.1
通信業	0.7
電気・ガス・熱供給・水道業	0.1
農業、林業、漁業	0.2
不動産業、物品賃貸業	0.2
郵便局、協同組合	0.1
	81.8

IT	0.1
おもちゃの3D 原型制作スタッフ	0.1
ゲーム会社	0.1
サービス業	0.1
システム開発	0.1
ディズニーリゾートキャスト	0.1
デザイナー	0.1
デザイン事務所	0.1
ノートパソコンの製造関連	0.1
パソナの未就職者支援に参加していました。	0.1
ブライダル	0.1
マンションの清掃	0.1
レセコン、電子カルテメーカー	0.1
菓子製造業	0.1
海洋構造物の設計	0.1
金型成型	0.1
建設コンサルタント	0.1
自動車、生活製品関連	0.1
自動車部品製造業	0.1
写真	0.1
社会福祉士会	0.1
食料品製造・包装	0.1
神社	0.1
進物用菓子の製造販売	0.1
人材派遣サービス業	0.1
製造業	0.3
請負で自動車部品メーカーに勤めていた	0.1
造園業	0.1
測量業	0.1
中規模の総合病院	0.1
農業機械の製造業。	0.1
販売業	0.1
舞台演劇制作会社	0.1
保守	0.1
漫画家アシスタント	0.1
民間施設での生活指導員	0.1

(N=1883)

DTP オペレーター	1.3
あん摩マッサージ指圧師、はり師、きゅう師（それぞれ助手は除く）	0.1
サービスの職業	2.3
スポーツインストラクター	0.5
スポーツトレーナー（個人指導を含む）	1
その他	3.2
その他サービス職業	0.4
その他のサービスの職業	0.5
その他の医療技術者	0.2
その他の介護・福祉指導の専門的職業	5
その他の事務の職業	0.4
その他の生産工程の職業	0.3
その他の専門的・技術的職業	4.7
その他の販売の職業	0.1
デザインの職業	6.3
パタンナー	0.2
ファッションデザイナー	0.1
マンガなどの美術、写真、映像撮影専門の職業	0.7
メディカルトレーナー	0.7
リラクゼーション療法施術人（セラピスト・カイロプラクター）	0.2
医療事務	1
運搬・清掃・包装等	0.2
介護、医療に関わる一般事務	0.3
介護福祉士として福祉施設指導専門員	2.8
看護師	1.1
管理的な職業	1.1
建設・採掘	0.2
建設・採掘の職業	0.4
言語聴覚士	2.8
作業療法士	2.2
視能訓練士	2.4
歯科衛生士	0.4
歯科助手	0.1
事務の職業	1.2
種目別スポーツ指導員（コーチ）	0.1
柔道整復師（助手は除く）	0.3

(N=1883)

木製食器等の製造業	0.1
	97.8

情報処理技術者	2.8
診療情報管理事務	0.2
生産工程の職業	0.6
接客・給仕	0.4
専門的・技術的職業	10.1
農林漁業の職業	0.1
販売の職業	1.5
病院・調剤受付・案内	0.1
病棟クレーン	0.2
福祉に関わる営業販売関連の相談事務	0.1
福祉施設機能訓練指導員	0.1
保安の職業	0.2
縫製製品等製造の職業	0.3
訪問介護員、ヘルパー	3.8
輸送・機械の運転	0.1
理学療法士	5.2
臨床検査技師	3.5
臨床工学技士	3.2
	23.2

C2-2. 業種、職種、企業・施設等の規模について、もっともあてはまるものを1つ選んでください。

a 業種：	(プルダウンリストから選択)	5人以下	4.1	(N=1448)
b 職種：	(プルダウンリストから選択)	6~20人	10.8	
c 企業等全体の従業員数：	(プルダウンリストから選択)	21~99人	17.7	
		100~299人	23.1	
		300~499人	8.8	
		500~999人	6.4	
		1000人以上	8.3	
		不明	3.6	

C2-3. その仕事（初職）はいつから始めましたか。

西暦：	年	月から																		
1962	1976	1983	1988	1993	1995	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	(N=1455)
0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.2	0.1	0.2	0.3	0.9	4.8	13.8	6.2	6.1	9.1	13	7.4	8	9.9	19.7	

※月は除く

C2-4. その仕事（初職）は本校で、専攻した分野と関連がありますか。

○ 関連分野である	87.4	(N=1482)	＜ C1-SQ6で、卒業したと回答した人以外＞
○ 関連分野でない	12.6		＜ C1-SQ-6で「卒業した」と回答した人は「その仕事（初職）は最終学歴で専攻した分野と関連がありますか」＞

C2-5. その仕事（初職）を現在も続けていますか。あてはまるものを1つ選んでください。

○ その仕事（初職）を続けている	62.4	(N=1487)	→ D2-1へ
○ その仕事（初職）は辞めている	37.6		

C2-6. その仕事（初職）はいつ辞めましたか。

西暦：	年	月に										
1997	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	(N=536)
0.2	0.4	1.9	5.6	5.6	8	11.4	13.2	9.5	13.2	11.8	19.2	

※月は除く

(4) 労働市場や職業訓練に関する設問群（省略可能）

C2-7. その仕事（初職）を辞めた理由は何ですか。もっともあてはまるものを1つ選んでください。

○	新たなステップアップを図りたかったから	26.1	(N=545)
○	自分の専門と合っていなかったから	4.2	
○	仕事にやりがいを感じられなかったから	7.0	
○	労働条件（収入、労働時間、福利厚生等）に不満があったから	15.6	
○	職場の人間関係に問題があったから	10.5	
○	解雇や倒産などの勤務先の事情で	9.7	
○	結婚したから	4.2	
○	出産・育児・介護のため	3.9	
○	その他（具体的に： ）	18.9	

⇒

4月から9月の6ヶ月間のみの契約と始めから決まってきました。	0.1
体調不良のため	0.1
スミ100%のブラックだったから	0.1
その他にしましたが労働条件・人間関係の両方です。	0.1
パワハラ	0.1
ユニットケアがしてみたかったから。	0.1
ユニットリーダーから嫌がらせを受けたため	0.1
以前から続けている仕事との時間調整に無理が出てきたため	0.1
異なる職種の仕事をしたくなったから	0.1
異動し、医療事務以外の職種に就くよう会社より辞令が出たため。	0.1
引き抜きがあり、声をかけられたので	0.1
院長の急逝により閉院の運びとなったため	0.1
家業を継ぐため	0.1
家庭環境	0.1
家庭内の事情	0.1
会社（& ゲーム業界）の先行き不安で。かつ、やっていた仕事（作曲 & スクリプト）事態の需要が無くなった。	0.1
会社の考えている物と自分のキャリアが一致していないと感じたため。また方向性にも違いがあったと思う	0.1
感染症と鬱病にかり職場の忙しさの現状もあるため、入院等の理由で休みが取れないため。体の健康を考え退職。	0.1
環境が悪かった（オフィス内喫煙）	0.1
期間限定のアルバイトだったため。	0.1
帰国	0.1
技術・スキルに問題あり	0.1
給料不払や経営不振などの勤務先の事情で	0.1
勤務時間外労働が多く、子育てとの両立が困難だったため。	0.1
勤務先の雇用体制の都合により、配属部署が変わり仕事内容も変わった為。	0.1
契約期間が終了したから。	0.1
契約期間満了のため	0.1
契約満期だったので	0.1
経営者の家族の頭がおかしく、自身にあっていない職場だったので大きな怪我をする前に退職した。	0.1
激務で体調を崩したから	0.1
結婚して帰省した。	0.1
結婚準備の為に引っ越した	0.1
限界を感じた	0.1
雇用契約時の業務及び職種条件と実際の内容が異なふ事を強要された為。	0.1
行くのが嫌になったから。	0.1
国家試験に不合格でパートとして務めた一年後、合格し正社員として再雇用となった。	0.1
国家試験受験準備の為	0.1
国試勉強のため	0.1
腰を痛めたから	0.1
腰を痛めたため移乗などの介護業務が辛くなったため	0.1
採用時や女性4.50代が多く（4人）雰囲気的に駄目だった	0.1
仕事自体は楽しくやりがいがあったが、睡眠時間が少なく自律神経失調症からの鬱病になってしまった。	0.1
仕様期間で解雇になりました。	0.1
子供の教育のため	0.1

施設が閉鎖したため。	0.1
視力障害で介護は難しく他のリハビリの分野を薦められ、進学したから。	0.1
資格を活かす仕事が見つかったから	0.1
自衛隊には任期制で入隊したので、満期により除隊。	0.1
自分の体調不良のため	0.1
実家に戻るようになったため	0.1
実家に戻る為	0.1
実家戻りのため	0.1
社会福祉士受験資格が得られるという、就職前の約束が破られたため	0.1
社長からのパワハラを受け、先輩ともども体調をくずし退社した。	0.1
将来性のなさ	0.1
上司からのパワーハラスメント、先輩社員からのセクシャルハラスメント	0.1
上司が元犯罪者で信用出来なかった為	0.1
親が自営する会社へ戻る為退職	0.1
世界一周旅行に行くため	0.1
正規雇用試験に合格したため。	0.1
正社員として働くため	0.1
精神的な病気になったから	0.1
精神的に辛くなり体調不良になった為	0.1
精神病のため離職	0.1
精神保健福祉士取得後の人事異動の為	0.1
窓が無かつ空調設備に難のある職場。不完全な引き継ぎに加え身内に相談相手も居らずクライアントテリトリー内での一人作業等のプレッシャーに体調を崩した。 直属上司と本社とのトラブルで居ずらくなった。	0.1
他施設から誘いがあったから	0.1
多忙の為、体調を崩したから	0.1
体がついていかなかったから	0.1
体を壊した	0.1
体調を壊したため	0.1
体調を崩した	0.1
体調不良	0.2
体調不良のため	0.1
体調不良の為	0.1
短期契約だったため。	0.1
地元に戻ったため	0.1
椎間板ヘルニアの為、続ける事に不安が出てきたため	0.1
転居したため	0.1
転職	0.1
当時の自分には、まだ社会で働く意識が全く足りていなかった。	0.1
肉体的、精神的疲れなどが原因で体調を崩してしまった。	0.1
入職時から当たり前のようにパワハラ・モラハラがあり、改善が見られなかった為。	0.1
派遣契約終了	0.1
病気にかかり自宅療養にならざるをえなかった為。	0.1
病気の為	0.1
夫の転勤による転居で通勤できなくなったから	0.1
負傷したため。	0.1
母の看病	0.1
訪問介護事業所を自分で開設した	0.1
臨時的任用職員のため	0.1
労働条件の不満、求人していた仕事内容との不一致、経営方針が合わなかった、会社への不信任	0.1
鬱	0.1
頸部ヘルニアのため	0.1
	94.8

C2-8. 現在までにいくつの企業や施設等で仕事をしましたか。

(プルダウンリストから選択)	←	1	4.6	(N=1883)
		2	13.3	
		3	6.5	
		4	2.8	
		5以上	2.1	

D. 現在の仕事について

あなたの現在の仕事（現職）についてうかがいます。

D1. あなたは現在（この1ヶ月）、主に何をしていますか。あてはまるものを1つ選んでください。

○	主に仕事をしている	88.5	(N=1467)	→ D2-1
○	主に学生として教育機関に在籍している	0.7		→ D1-SQ
○	主に家事、育児、介護などを行っている	5.6		→ D1-SQ
○	主に求職活動をしている	3.3		→ D1-SQ
○	その他（具体的に ）	1.9	⇒	アルバイト 0.1 (N=1883)
				アルバイトとフリーランスによる活動 0.1
				およそ半分は仕事、後は地域活動など 0.1
				この1か月に限り海外の文化を学ぶを名目としてアジア・中南米に渡航。 0.1
				シフトに従い勤務しています。 0.1
				育児と仕事の両立 0.1
				栄養専門学校に入学 0.1
				家事の手伝いをしながら求職活動をしている 0.1
				過労で倒れ、現在仕事を辞め自宅療養中。 0.1
				休職中 0.1
				海外留学の準備 0.1
				公務員（中学校教職員） 0.1
				作業所 0.1
				仕事と家事 0.1
				仕事と複業 0.1
				職場でけがをした為、休業補償を受けて、療養休暇中。そのことで、職場の上司とトラブルがあり、怪我が治ったら辞めようと思っている。 0.1
				生命保険会社に内定中 平成24年1月から勤務予定 0.1
				精神科通院と作業所での軽作業 0.1
				卒業後入った会社で病気を治しつつアルバイト 0.1
				特に何も行っていない 0.1
				病院から出張扱いで、認定看護師教育課程の研修に出ている 0.1
				無職 0.1
				療養中 0.1
				鬱病を発症し、休職中 0.1
				98.7

D1-SQ. あなたは直近の1年以内に職業に就いていましたか。あてはまるものを1つ選んでください。

○	就業の経験がある	64.7	(N=167)	
○	就業の経験がない	35.3	→	《主に家事、育児、介護などを行っているに回答した人は D1-SQ-SQ へ、それ以外は E へ》

D1-SQ-SQ. 今後職業に就くつもりがありますか。あてはまるものを1つ選んでください。

○	すぐにでも仕事に就きたい	20.6	(N=34)
○	落ち着いたら仕事に就きたい	67.6	
○	仕事に就きたいと思わない	11.8	

D2-1. 現在の仕事（直近の1年以内を含む）の就業形態について、もっともあてはまるものを1つ選んでください。

就業形態：(プルダウンリストから選択)	←	正規の社員・職員として勤務	58.6	(N=1883)	⇒
		契約・派遣などの非正規の社員・職員として勤務	8.3		
		自営業・家業の仕事に就いている	2.2		
		パートタイム・臨時などの仕事に就いている	4.6		
		その他（具体的に	0.4		
⇒					
		会社経営	0.1	(N=1883)	
		自営とともに非常勤で働いている。今回答えているのは非常勤での仕事に関して。	0.1		
		写真	0.1		
		常駐外注契約	0.1		
		正規社員、フリーランス	0.1		
		前の項目に記載。	0.1		
		日常ボランティアとしてレクリエーション活動や傾聴、お茶配りなど介護職員のサポートの仕事をしている。	0.1		
		臨時的任用職員	0.1		
			99.6		
インターネット附随サービス業	1.0	(N=1883)	インターネット附随サービス業	0.3	(N=1883)
エステティックなどの美容業	0.1		ゲームソフトウェア業	2.4	
スポーツ・健康に関する教授業	0.2		その他	2.7	
スポーツチームなどスポーツ等興行業	0.3		その他のソフトウェア業	1.9	
スポーツに関するプロダクション業	0.1		メーカー系ソフトウェア業	1.2	
スポーツ用品卸売・小売業	0.1		医療、福祉	0.5	
その他	6.6		運輸業、郵便業	0.2	
その他の医療、福祉	0.9		卸売・小売業	0.1	
その他の医療機関	1.4		学術研究、専門・技術サービス業	0.3	
その他の卸売・小売業	0.1		教育、学習支援業	0.2	
その他の教育、学習支援業	0.2		金融業・保険業	0.2	
その他の社会保険・社会福祉・介護事業	0.1		建設業	0.6	
その他の製造業	0.1		公務	0.2	
その他の老人福祉・介護事業	0.9		宿泊業、飲食サービス業	0.5	
ソフトウェアなどの情報サービス業	4.4		情報処理・提供サービス業	4.2	
フィットネスクラブなどスポーツ施設提供業	1.0		情報通信業	0.1	
マッサージなどスポーツ療術業	0.5		生活関連サービス業、娯楽業	0.2	
印刷・印刷関連業	1.8		製造業	0.1	
印刷業以外の製造業	1.5		通信業	0.6	
運輸業、郵便業	0.4		電気・ガス・熱供給・水道業	0.1	
映像・音声・文字情報制作業	1.9		特別支援学校	0.1	
卸売・小売業	2.5		農業、林業、漁業	0.4	
介護老人福祉・保健施設	5.2		不動産業、物品賃貸業	0.3	
学術研究、専門・技術サービス業	1.4		郵便局、協同組合	0.2	
教育、学習支援事業	0.3			82.6	
建築、工事業	1.6				
娯楽業（ゲームセンター、パチンコホール等）	0.4		IT	0.1	(N=1883)
公務（一般行政や警察、自衛隊など）	0.1		SMO	0.1	
公務（一般行政や警察、自衛隊など）	0.3		イベント会社	0.1	
広告業	0.8		カウンセリングルーム	0.1	
広告業以外の学術研究、専門・技術サービス業	0.6		ゲーム会社	0.1	
児童福祉事業	0.2		コンピュータ関連	0.1	
自動車整備	0.4		スクールソーシャルワーカー	0.1	
自立支援施設（知的・身体・精神）	2.8		ディズニーストリートキャスト	0.1	
社会福祉・介護（運動機能訓練等）業	0.3		デザイナー	0.1	
社会保健・社会福祉・介護事業	0.1		デザイン事務所	0.1	
社会保険事業団体・福祉事務所	0.2		ブライダル	0.1	

小学校・中学校・高等学校・特別支援学校等	0.1
障害者福祉事業	0.1
上記以外の教育、学習支援業	0.1
情報通信業	6.3
繊維・衣服・身の回り小売業	0.1
診療所	2.7
生活関連サービス業	0.7
専門学校・短期大学・大学	0.3
繊維・衣服等卸売業	0.1
繊維工業	0.5
通信業	0.2
電気・ガス・熱供給・水道業	1.1
土木工事などその他の建設業	0.5
病院	15.2
病院などの医療施設	2.3
保健所など保健衛生	0.1
訪問介護・ディサービスなど居宅サービス関連	1.8
老人福祉・介護事業	1.5
	25.9

マスコミ	0.1
ヨガやピラティスのスタジオにて事務作業	0.1
レセコン、電子カルテメーカー	0.1
一般労働者派遣事業	0.1
飲食関連企業の本社事務	0.1
画像診断を扱う仕事	0.1
海洋構造物の設計	0.1
財団法人 団体職員	0.1
札幌市介護予防センター	0.1
歯科医院	0.1
治験コーディネーター	0.1
自動車、生活製品関連	0.1
自動車部品製造業	0.1
写真	0.1
商業施設の会計監査	0.1
食料品製造・包装	0.1
神社	0.1
進物用菓子の製造販売	0.1
人材派遣サービス業	0.1
製造業	0.2
専門職団体	0.1
測量業	0.1
電子関係の設計	0.1
販売業	0.1
漫画家アシスタント	0.1
木製食器等の製造業	0.1
	97.9

DTP オペレーター	0.8	(N=1883)
あん摩マッサージ指圧師、はり師、きゅう師（それぞれ助手は除く）	0.3	
サービスの職業	2.7	
スポーツインストラクター	0.3	
スポーツトレーナー（個人指導を含む）	1.3	
スポーツ用品販売員	0.1	
その他	3.7	
その他サービス職業	0.5	
その他のサービスの職業	0.3	
その他の医療技術者	0.1	
その他の介護・福祉指導の専門的職業	4.5	
その他の事務の職業	0.6	
その他の生産工程の職業	0.6	
その他の専門的・技術的職業	4.8	
その他の販売の職業	0.2	
デザインの職業	5.4	
パタンナー	0.2	
ファッションデザイナー	0.1	
マンガなどの美術、写真、映像撮影専門の職業	0.3	
メディカルトレーナー	0.2	
リラクゼーション療法施術人（セラピスト・カイロプラクター）	0.1	
医療事務	0.8	
医療秘書	0.1	
運搬・清掃・包装等	0.1	
介護、医療に関わる一般事務	0.4	
介護福祉士として福祉施設指導専門員	2.3	

CG エンジニア、プログラマー	1.9	(N=1883)
CG デザイナー、アーティスト	1.9	
OA インストラクター	0.1	
OA 機器操作の事務	0.5	
Web デザイナー	0.5	
アニメーター、CG アニメーター	0.1	
インダストリアルデザイナー	0.1	
エディトリアルデザイナー	0.1	
グラフィックデザイナー	1.8	
ゲーム設計、デザイナー	0.1	
セールスエンジニア、カスタマーエンジニア	0.4	
その他	1	
その他のデザイナー	0.6	
その他の教員	0.1	
その他の建設の職業	0.2	
その他の事務の職業	1	
その他の情報処理技術者	0.7	
その他の専門的・技術的職業	1.8	
その他の販売の職業	1.1	
その他の美術、写真家、映像撮影専門の職業	0.2	
パッケージデザイナー	0.1	
プランナー、企画事務	0.2	
プロダクトデザイナー	0.1	
モデラー	0.1	
運搬・清掃・包装等	0.1	
開発に関わる製造技術者	1.6	

学校の介護教員	0.1
看護師	0.9
管理的な職業	1.2
教員	0.1
建設・採掘	0.1
建設・採掘の職業	0.2
言語聴覚士	2.8
作業療法士	2.2
視能訓練士	2.2
歯科衛生士	0.4
事務の職業	1.6
種目別スポーツ指導員（コーチ）	0.2
柔道整復師（助手は除く）	0.2
情報処理技術者	2.7
診療情報管理事務	0.2
生産工程の職業	0.3
接客・給仕	0.3
専修学校などの教員	0.1
専門的・技術的職業	9.2
農林漁業の職業	0.1
販売の職業	1.5
病院・調剤受付・案内	0.1
病棟クラーク	0.1
福祉に関わる営業販売関連の相談事務	0.1
福祉施設機能訓練指導員	0.1
保安の職業	0.2
保健師・助産師	0.1
縫製製品等製造の職業	0.2
訪問介護員，ヘルパー	3.3
輸送・機械の運転	0.2
理学療法士	5.2
臨床検査技師	3.3
臨床工学技士	2.9
	27.2

開発を除く製造技術者	0.3
管理的な職業	0.5
建築・土木・測量技術者	0.6
建築・土木工事監督	0.4
建築設計デザイン	0.1
研究者	0.5
事務の職業	0.2
情報処理技術者，システム運行管理者	3.9
生産設備や製品の組立製造，機械修理などの職業	0.2
製品の品質検査管理の仕事	0.1
専門的・技術的職業	0.1
電気工事の職業	0.1
農林漁業の職業	0.1
美術家，デザイナー，写真家，映像撮影者	0.1
輸送・機械の運転	0.1
	77

CAD オペレーター	0.1	(N=1883)
MSW	0.1	
SE・PG	0.1	
アニメ	0.1	
インストラクター	0.1	
クリニック リハビリスタッフ	0.1	
スーパーのレジ打ち，品出し	0.1	
モデラー	0.1	
ヤフオクで出品するバイクのパーツの解体，洗い，磨き，取引ナビの管理，商品の梱包など	0.1	
ランプ設計	0.1	
医師事務作業補助者	0.1	
営業職	0.1	
介護員	0.1	
会社経営	0.1	
企画職	0.1	
教職員	0.1	
建築設計事務所	0.1	
検査センター（営業及び集配）	0.1	
古物商	0.1	

公務員（中学校教職員）	0.1
公立学校教員	0.1
歯科助手	0.1
治験コーディネーター	0.1
小学校教員	0.1
食料品製造職	0.1
神主	0.1
製造	0.1
接客業務	0.1
設備設計	0.1
宣伝	0.1
相談員	0.1
電子カルテ取り込み	0.1
売上入力等の事務職	0.1
非常勤講師	0.1
物品賃貸，イベント企画，運営	0.1
物流倉庫管理	0.1
弁当屋さん	0.1
遊園地職員	0.1
鍼灸師	0.1
	97.8

97.9

D2-2. 業種，職種，企業・施設等の規模，職場での地位（役職等）について，もっともあてはまるものを1つ選択してください。

a 業種：

（ブルダウニリストから選択）

b 職種：

（ブルダウニリストから選択）

c 企業等全体の従業員数：

（ブルダウニリストから選択）

← 5人以下	4.2	(N=1883)
6~20人	10.3	
21~99人	16.7	
100~299人	15.7	
300~499人	8	
500~999人	6.5	
1000人以上	8.1	
不明	2.9	

(N=136)

d 職場での地位 :1. 役職についている 14.3 2. 役職についていない 85.7

D2-3. 現在の仕事（直近1年以内を含む）は最終学歴で専攻した分野と関連がありますか。

- 関連分野である 83.7 (N=1389)
- 関連分野でない 16.3

D2-4. 現在の仕事（直近1年以内を含む）の年収はどれくらいですか。もっとも近いものを1つ選んでください。

- 100万円未満 4.7 (N=1394)
- 100万円以上150万円未満 8.8
- 150万円以上200万円未満 11.7
- 200万円以上300万円未満 33.1
- 300万円以上400万円未満 25.8
- 400万円以上500万円未満 11.4
- 500万円以上700万円未満 3.4
- 700万円以上1000万円未満 0.9
- 1000万円以上 0.3

(4) 労働市場や職業訓練に関する設問群（省略可能）

D2-5. 現在の仕事（直近1年以内を含む）の職場で、あなたは、自分の学歴にふさわしい評価をされている（されていた）と思いますか。以下の各設問について次の6段階の中であてはまるものを1つ選んでください。

		学歴にふさわしい 評価をされている						学歴にふさわしい 評価をされていない						
		5	4	3	2	1	0	5	4	3	2	1	0	
a	昇進や昇格について	16.3	15.7	34.9	7	6.7	19.5	13.9	13.4	35.8	12.7	8.5	12.4	(N=1395)
b	賃金水準	13	16.7	35.8	12.7	8.5	12.4	13.9	13.4	35.8	12.7	8.5	12.4	(N=1395)
c	責任の重さ	20.1	24.2	33.4	5.8	3.7	12.8	13.9	13.4	35.8	12.7	8.5	12.4	(N=1394)

D2-6. 現在の仕事（直近1年以内を含む）の職場では、短大卒は四大卒や、専門学校卒と同等の評価をされている（されていた）と思いますか。次の7段階の中であてはまるものを1つ選んでください。

		同等以上に評価 をされている		同等に評価をされ ている		同等以下の評価 をされている				わからない		該当学歴の社員 ・職員がいない				
a	大卒と比較して	5	10.8	4	4.1	3	35.7	2	9.7	1	13.1	0	17.6	-1	9	(N=1383)
b	短大卒と比較して	5	12.2	4	5.5	3	39	2	4.9	1	4.2	0	19.4	-1	14.8	(N=1375)

D2-7. あなたは、現在の仕事（直近1年以内を含む）に対して満足していますか。以下の各設問について、次の5段階の中であてはまるものを1つ選んでください。

		とても満足している					とても不満である					
		5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	
a	本校で得た知識・技能の活用	22.7	36	28.4	8.4	4.5	22.7	36	28.4	8.4	4.5	(N=1387)
b	自分の適性を活かす機会	27.1	36	28	6.5	2.5	27.1	36	28	6.5	2.5	(N=1386)
c	新たなことを学ぶ機会（能力開発）	30.8	32.6	24.2	8.7	3.8	30.8	32.6	24.2	8.7	3.8	(N=1385)
d	仕事をする上での自律性	29.3	38.4	26.3	4	2	29.3	38.4	26.3	4	2	(N=1384)
e	社会に役立つ機会	29.7	36.2	28	4.6	1.4	29.7	36.2	28	4.6	1.4	(N=1385)
f	職場の雰囲気のよさ	33.6	32.1	23.3	7.3	3.7	33.6	32.1	23.3	7.3	3.7	(N=1388)
g	男女差別のなさ	37.6	30.3	25.8	4.1	2.3	37.6	30.3	25.8	4.1	2.3	(N=1381)
h	収入や福利厚生	12.7	24.9	34.1	19	9.3	12.7	24.9	34.1	19	9.3	(N=1386)

E. 資格・検定と卒業後の学習経験について

E1. 現在までに取得・合格した資格・検定の中で、現在の仕事に役立っているものがあれば、主なものを3つまでお答えください。仕事をしていない方は、生活に役立っている資格・検定をお答えください。

			入学前	卒業時	卒業後5年未満	卒業後5年以上	
1) 資格・検定の名称	(分野によってプルダウン)	→	取得・合格の時期	○ 13.0	○ 63.1	○ 18.8	○ 5.2 (N=810)
2) 資格・検定の名称	(分野によってプルダウン)	→	取得・合格の時期	○ 20.8	○ 40.4	○ 27	○ 11.8 (N=322)
3) 資格・検定の名称	(分野によってプルダウン)	→	取得・合格の時期	○ 27.6	○ 37.8	○ 23.6	○ 11 (N=127)

※北海道千歳のみ

1) 資格・検定の名称（分野によってプルダウン）	%	2) 資格・検定の名称（分野によってプルダウン）	%	3) 資格・検定の名称（分野によってプルダウン）	%
高等学校卒業程度認定試験	0.1	Microsoft Office Specialist Excel 2003 Expert	0.1	Microsoft Office Specialist PowerPoint 2003	0.1
Microsoft Office Specialist Word 2003 Expert	0.1	(財) 日本コアカンディショニング協会マスタートレーナー	0.1	(財) 日本トレーニング指導者協会トレーニング指導者	0.1
(財) 日本体育協会アスレティックトレーナー	0.1	2次元 CAD 利用技術者	0.1	3学会合同呼吸療法認定士	0.1
2級建築士	0.1	ADEC 色彩師検定三級	0.1	CG クリエイター検定 1級	0.1
3	0.1	AFP	0.1	cpr	0.1
3学会合同呼吸療法認定士	0.1	AMPS	0.1	CSP トレーナー	0.1
A・F・T 色彩コーディネーター三級	0.1	B 検	0.1	ICLS インストラクター	0.1
ACLS プロバイダー	0.1	CAD 検定 1級	0.1	IT パスポート	0.1
AEA 認定エステティシャン	0.1	cad 利用技術者	0.1	JATI-ATI	0.1
AT	0.1	CG エンジニア検定 2級	0.1	J 検	0.1
CAD 技術者2級	0.1	cisco CCNP	0.1	LPILinux 技術者認定 (LPIC) レベル2	0.1
CAD 検定 2級	0.1	cpt	0.1	MCP	0.1
CAD 利用技術者1級	0.1	CPT	0.1	MCPWindows2000Server	0.1
CAD 利用技術者1級	0.1	CPT (NSCA 認定パーソナルトレーナー)	0.2	Microsoft Office Specialist Word	0.1
CAD 利用技術者2級	0.1	CSCS (認定ストレングス&コンディショニングスペシャリスト)	0.1	NSCA 公認パーソナルトレーナー	0.1
CAD 利用技術者検定	0.1	DTP エキスパート	0.1	エクセル	0.1

CAD 利用技術者検定2級	0.1	IT パスポート	0.2	エクセル3級	0.1
CAD 利用技術者試験	0.1	JASMO 認定 CRC	0.1	オラクル認定資格 (Oracle Java Certification) OCI-P	0.1
CAD 利用技術者試験2級	0.1	JATI-ATI	0.1	ガイドヘルパー	0.1
CG エンジニア検定 3級	0.1	JESC 認定カウンセラー	0.1	キータッチ2000	0.1
CG クリエイター検定 1級	0.1	J 検	0.1	サービス接遇マナー検定	0.1
CG クリエイター検定 2級	0.1	J 検	0.1	サービス接遇検定	0.1
CG 検定	0.1	LPILinux 技術者認定 (LPIC) レベル1	0.1	シスコ技術者認定 (CCNA)	0.1
cisco CCNA	0.1	LPILinux 技術者認定 (LPIC) レベル3	0.1	シスコ技術者認定 (CCNP)	0.1
CPT	0.1	MCAS excel	0.1	データベーススペシャリスト	0.1
CPT (NSCA 認定パーソナルトレーナー)	0.1	MCPWindows2000Professional	0.1	ネットワークスペシャリスト	0.1
CSCS	0.1	MDIC	0.1	ヘルパー2級	0.1
DTP 検定	0.1	ME2種	0.1	ホームヘルパー2級	0.1
Excel	0.1	ME 二種	0.1	ヨガインストラクター	0.1
HP2	0.1	NSCA	0.1	ワープロ検定	0.1
IT パスポート	0.1	NSCA-CPT	0.1	暗算検定一級	0.1
IT パスポート	0.2	NSCA 公認ストレンクス&コンディショニングスペシャリスト	0.1	医療事務	0.1
jati	0.1	ORACLE MASTER Silver	0.1	医療事務・PC 検定・ニチイ学館	0.1
JATI	0.1	SAQ レベル1インストラクター	0.1	医療事務検定	0.1
JATI-ATI	0.1	SJC-P	0.1	医療秘書技能検定	0.1
J 検	0.1	Web クリエイター検定	0.1	医療秘書検定	0.1
LPILinux 技術者認定 (LPIC) レベル1	0.1	アスレティックトレーナー	0.1	運転免許	0.1
MCAS word	0.1	アロマセラピー検定	0.1	応用情報技術者	0.1
ME2種	0.1	エクセル技能検定1級	0.1	下水道第3種技術検定	0.1
MOS	0.1	オラクル	0.1	加圧	0.1
MOS スペシャリスト	0.1	オラクルマスター シルバー	0.1	介護支援専門員	0.1
MOS ワード	0.1	オラクルマスター ブロンズ	0.1	介護食アドバイザー	0.1
MOS2007	0.1	オラクルマスターゴールド	0.1	介護福祉士	0.3
Oracle マスター GOLD	0.1	オラクル認定資格 (Oracle Java Certification) OCI-P	0.1	漢字検定	0.1
TOEIC	0.1	ガイドヘルパー	0.1	漢字検定2級	0.1
VBA エキスパート	0.1	サービス接遇検定	0.1	危険物取扱者 乙類	0.1
アクティビティ・ワーカー	0.1	サービス接遇実務検定3級	0.1	危険物取扱者乙4種	0.1
アスレティックトレーナー	0.4	サービス接遇実務検定試験	0.1	基礎製図検定	0.1
インテリアコーディネーター	0.1	シスコ技術者認定 (CCNA)	0.1	基本情報技術者	0.1
ウェブデザイン技能検定	0.1	シスコ技術者認定 (CCNP)	0.1	機能訓練指導員	0.1
オラクルマスター	0.1	トレース技能検定	0.1	玉掛け 天井クレーン	0.1
オラクルマスター ゴールド	0.1	ネットワークスペシャリスト	0.1	健康運動実践指導者	0.2
オラクルマスター シルバー	0.1	パターン技術検定	0.1	自動車運転免許	0.1
オラクルマスター ブロンズ	0.1	はり師・灸師	0.1	実用英語技能検定準2級	0.1
カラーコーディネーター検定	0.1	ビジネスマナー	0.1	社会福祉主事	0.1
サービス接遇技能検定	0.1	ビジネス検定	0.1	社会福祉主事任用資格	0.1
サービス接遇検定	0.2	ビジネス文書技能検定	0.1	住環境福祉コーディネーター	0.1
サービス接遇検定準1級	0.1	ファッションビジネス検定3級	0.1	柔道整復師	0.1
サービス接遇実務検定	0.1	フォークリフト	0.1	情報検定 システム試験 (J 検) プログラミングスキル	0.1
シスアド	0.1	ヘルパー2級	0.1	情報処理検定 2級	0.1
シスコ技術者認定 (CCIE)	0.2	ヘルパー二級	0.1	色彩検定	0.1
シスコ技術者認定 (CCNA)	0.5	ホームヘルパー2級	0.1	色彩検定 3級	0.1
シスコ技術者認定 (CCNP)	0.2	ホームヘルパー2級	0.2	色彩検定3級	0.1
データベーススペシャリスト	0.2	レクリエーションインストラクター	0.2	食品衛生責任者	0.1
パソコン検定4級	0.1	レタリング検定	0.1	診療報酬請求事務能力認定試験 (医科)	0.1
パソコン整備士	0.1	ワード2級	0.1	数学検定4級	0.1
パターンメイキング2級	0.1	ワープロ検定	0.1	整体	0.1
パターンメイキング技術検定試験3級	0.1	ワープロ検定2級	0.1	精神保健福祉士	0.1
パターン検定3級	0.1	ワープロ検定2級	0.1	全商簿記1級	0.1
はり・きゅう	0.1	医師事務作業補助 (認定資格)	0.1	大型自動車2種免許	0.1

ビジネスマナー2級	0.1	医療事務	0.1	第2級陸上特殊無線技士	0.1
ビジネス能力検定（B 検） 2級	0.1	医療事務・ニチイ学館	0.1	第一種電気工事士	0.1
ビジネス能力検定（B 検） 3級	0.2	医療秘書検定	0.1	第二種電気工事士	0.1
ビジネス文書検定	0.1	医療秘書実務検定	0.1	中型自動車免許	0.1
フェルデンクライス・ボーンズフォーライフ	0.1	運転免許	0.1	透析技術認定士資格	0.1
フォークリフト運転技能	0.1	英検準2級	0.1	特定化学物質・四アルキル鉛等作業主任者	0.1
フォークリフト	0.1	衛生工学衛生責任者	0.1	日本ライフセービング協会 CPR	0.1
フットケアトレーナー c ライセンス	0.1	応用情報	0.1	日本ラグビー協会認定セーフティーアシスタント	0.1
ヘルパー2級	0.1	応用情報技術者	0.3	日本臨床薬理学会認定 CRC	0.1
ヘルパー2級	0.1	応用情報技術者試験	0.1	認知症ライフパートナー応用検定	0.1
マイクロソフトオフィス関連	0.1	家事検定	0.1	認定心電検査技師	0.1
マルチメディア検定	0.1	家族相談士	0.1	認定心理士	0.1
メディカルクラーク2級	0.1	介護ヘルパー	0.1	秘書検定	0.1
ラッピング	0.1	介護支援専門員	0.3	秘書検定2級	0.1
ワープロ検定	0.1	介護福祉士	0.3	普通自動車	0.1
ワープロ検定1級	0.1	介護福祉士実習指導者研修	0.1	普通自動車運転免許	0.1
ワープロ実務検定	0.1	介護福祉士免許	0.1	普通自動車第一種免許許	0.1
ワープロ実務検定2級	0.1	回復期セラピストマネージャー	0.1	普通自動車第一種免許（AT）	0.1
移動式クレーン	0.1	漢字能力検定準2級	0.1	普通自動車免許	0.2
医事コンピュータ	0.1	看護師	0.1	福祉事務管理技能検定2級	0.1
医事コンピューター	0.1	危険物取扱者 乙類	0.1	福祉住環境コーディネーター	0.2
医事コンピュータ技能検定	0.1	基本情報技術者	0.4	福祉住環境コーディネーター2級	0.1
医療事務1級（認定資格）	0.1	機械プラント製図2級	0.1	文書デザイン検定	0.1
医療情報技師	0.1	機械製図検定	0.1	訪問ヘルパー1級	0.1
医療秘書技能検定	0.1	緊急検査士	0.1	養護学校教員免許 他福祉系	0.1
医療秘書検定	0.1	健康運動指導士	0.2	養護教諭免許	0.1
英語検定3級	0.1	健康運動実践指導者	0.2	理学療法士	0.1
応用情報技術者	0.4	健実	0.1	鍼灸	0.1
応用情報技術者試験	0.2	個人情報保護士	0.1	鍼灸師	0.1
介護支援専門員	0.5	呼吸療法認定士	0.2		93.6
介護職員基礎研修	0.1	呼吸療法認定士資格	0.1		
介護福祉士	6.5	工事担任者 DD 第1種	0.1		
介護福祉士,	0.1	細胞検査技師	0.1		
介護福祉士国家資格	0.2	細胞検査士	0.1		
介護福祉士卒業認定試験	0.1	作業療法士	0.1		
会議福祉士	0.1	作業療法士免許	0.1		
漢字検定	0.1	産業カウンセラー	0.1		
漢字検定準2級	0.1	歯科助手	0.1		
漢字能力検定	0.1	自家用車運転	0.1		
看護師	0.2	自動車運転免許	0.2		
看護師国家試験	0.1	自動車免許	0.1		
看護師国家資格	0.1	社会福祉士	0.8		
看護師免許	0.3	社会福祉主事	0.5		
管理栄養士	0.1	社会福祉主事任用	0.1		
眼鏡士	0.1	社会福祉主事任用資格	0.2		
危険物取扱者	0.1	社会保険労務士	0.1		
危険物取扱者 丙類	0.1	手話検定	0.1		
危険物取扱者乙種第四類	0.1	手話奉仕員	0.1		
基本情報	0.2	珠算検定二級	0.1		
基本情報技術者	2.8	習字3級	0.1		
基本情報技術者試験	0.2	住環境コーディネイター2級	0.1		
基本情報処理技術者	0.2	住環境コーディネイター2級	0.1		
教員免許	0.1	住環境コーディネイター3	0.1		
教員免許（神社関係）	0.1	住環境福祉コーディネイター	0.1		

教員免許状	0.1	住環境福祉コーディネーター2級	0.1
血液検査認定技師	0.1	柔道整復師	0.1
健康運動指導士	0.2	消化器内視鏡技師	0.1
健康運動実践指導者	1.1	消防整備士 乙類	0.1
剣道二段	0.1	消防整備士 甲類	0.1
言語聴覚士	0.8	障害者スポーツ指導員	0.1
言語聴覚士国家試験	0.1	障害者スポーツ指導員 初級	0.1
言語聴覚士国家資格	0.1	情報セキュリティスペシャリスト	0.1
言語聴覚士免許	0.4	情報技術検定2級	0.1
呼吸療法認定士	0.3	情報検定 システム試験 (J 検) 基本スキル	0.1
工事担任者 DD 第3種	0.2	情報検定 情報デザイン試験 (J 検)	0.1
国家試験	0.1	情報検定 情報活用試験 (J 検) 2級	0.1
作業療法士	0.6	情報検定 情報活用試験 (J 検) 3級	0.1
作業療法士免許	0.1	情報処理検定	0.1
産業カウンセラー	0.1	情報処理試験	0.1
視能訓練士	0.8	色彩検定	0.2
視能訓練士国家資格	0.1	色彩検定 3級	0.1
視能訓練士免許	0.1	色彩検定3級	0.1
歯科衛生士	0.1	色彩士検定	0.1
歯科衛生士国家試験	0.1	色彩能力検定	0.1
自動車運転免許	0.3	食品衛生責任者	0.1
自動車免許	0.1	診療報酬事務能力認定試験	0.1
実務マナー検定	0.1	診療報酬請求事務能力認定試験 (医科)	0.1
実用英語技能検定	0.1	水質関係公害防止管理者	0.1
実用英語検定準2級	0.1	精神保健福祉士	0.2
社会福祉士	1.5	全商 情報処理検定試験	0.1
社会福祉主事任用資格	0.1	体外循環技術認定士	0.1
社旗福祉士	0.1	第1種大型自動車免許	0.1
主事任用	0.1	第2級陸上特殊無線技士	0.2
修士 (人間科学)	0.1	第2種 ME	0.1
住環境コーディネーター2級	0.1	第一種自動車免許 (AT 限定)	0.1
住環境コーディネーター	0.1	第一種電気工事士	0.2
住環境コーディネーター2級	0.1	第一種普通自動車免許	0.1
住環境福祉コーディネーター2級	0.1	第三種電気主任技術者	0.1
住環境福祉コーディネーター	0.1	第二種電気工事士	0.1
住環境福祉コーディネーター2級	0.1	中型自動車免許	0.1
柔道整復師	0.4	電卓検定	0.1
准看護師	0.1	透析技術認定士	0.2
書道	0.1	二級臨床検査士	0.1
商業施設士	0.1	日商簿記検定3級	0.1
小学校教員免許一種	0.1	日本レクリエーション協会認定レクリエーションインストラクター資格	0.1
消化器内視鏡技師	0.1	日本習字師範免許	0.1
情報セキュリティスペシャリスト	0.1	日本体育協会公認アスレティックトレーナー	0.1
情報デザイン検定	0.1	認知症ケア専門員	0.1
情報技術者検定	0.1	認定電気工事従事者	0.2
情報検定 システム試験 (J 検) 基本スキル	0.1	販売士	0.1
情報検定 情報活用試験 (J 検) 2級	0.1	秘書	0.1
情報検定 情報活用試験 (J 検) 3級	0.1	秘書技能検定	0.1
情報処理活用能力検定	0.1	秘書検定	0.2
情報処理検定	0.1	品質管理検定	0.1
情報処理検定1級	0.1	普通運転免許	0.1
色彩検定	0.4	普通自動車免許	0.1
色彩検定 1級	0.1	普通自動車	0.1
色彩検定 2級	0.1	普通自動車 MT	0.1

色彩検定 3級	0.4	普通自動車運転免許	0.1
色彩検定2級	0.1	普通自動車免許	0.4
色彩検定3級	0.1	福祉事務管理技能検定	0.1
色彩検定3級	0.1	福祉住環境コーディネーター	0.1
色彩士検定	0.1	福祉住環境コーディネーター2級	0.2
色彩士検定3級	0.1	福祉住環境コーディネーター2級	0.1
色彩師検定	0.1	福祉用具プランナー	0.1
色彩氏検定3級	0.1	福祉用具専門員	0.1
色彩能力検定	0.1	福祉用具専門相談員	0.2
診療情報管理士	0.2	文書デザイン検定 2級	0.1
診療情報管理士認定試験	0.1	簿記2級	0.1
診療報酬請求事務能力検定	0.1	訪問介護員2級	0.1
診療報酬請求事務能力認定	0.1	幼稚園教諭免許	0.1
精神保健福祉士	2.1	理学療法士	0.1
精神保健福祉士受験資格	0.1	臨床 ME 専門認定士	0.1
精神保険福祉士	0.1	臨床検査技師	0.1
全商 ワープロ実務検定試験	0.1	臨床検査技師免許	0.1
体外循環技術認定士	0.1	臨床工学技士免許	0.1
体外循環技術認定士資格	0.1	臨床心理士	0.1
大学入学資格検定	0.1	胚培養士	0.1
大型自動車第2種免許	0.1	鍼灸	0.1
大型二輪免許	0.1	鍼灸師	0.2
第1種 ME 技術実力検定	0.2		83
第2級陸上特殊無線技士	0.1		
第2種 ME	0.1		
第2種 ME	0.1		
第2種情報処理技術者	0.1		
第2種電気工事士	0.1		
第一種 ME 技術実力検定試験	0.1		
第一種 ME 検定	0.1		
第一種中型自動車	0.1		
第一種電気工事士	0.1		
第三種電気主任技術者	0.1		
第二種電気工事士	1.0		
調剤薬局事務・ニチイ学館	0.1		
調理師	0.1		
調理師免許	0.1		
電気工事士	0.1		
糖尿病療養指導士	0.1		
透析技術認定士	0.5		
透析療法技術認定士	0.1		
透析療法認定	0.1		
特にありません	0.1		
特定高圧ガス取扱主任者	0.1		
二級建築士	0.1		
日商簿記	0.1		
日商簿記検定3級	0.1		
日照簿記検定	0.1		
日本漢字能力検定	0.1		
日本漢字能力検定3級	0.1		
日本救急医学会認定 ICLS インストラクター	0.1		
日本語ワープロ検定3級	0.1		
日本体育協会アスレティックトレーナー	0.2		
日本体育協会公認アスレティックトレーナー	0.1		

日本体育協会公認アスレティックトレーナー	0.1
日本体育協会公認アスレティックトレーナー	0.1
認知症ケア専門士	0.1
認知症介護実践者研修	0.1
認知症専門士	0.1
秘書技能検定試験	0.1
秘書検定	0.2
秘書検定 2級	0.1
品質管理検定2級	0.1
普通運転免許	0.1
普通自動車一種免許	0.1
普通自動車運転免許	0.2
普通自動車第一種免許	0.1
普通自動車免許	0.6
普通自動車免許 AT 限定	0.1
普通自動車免許一種	0.1
普通車免許	0.1
福祉英語	0.1
福祉住環境コーディネーター	0.1
福祉住環境コーディネーター	0.2
福祉住環境コーディネーター2級	0.2
福祉住環境コーディネーター2級	0.2
福祉用具コーディネーター	0.1
福祉用具プランナー	0.1
文部科学省認定日本漢字能力検定2級	0.1
保育士	0.1
保育士免許	0.1
有機溶剤作業取り扱い責任者	0.1
理学療法士	1.2
理学療法士免許	0.2
臨床検査技師	1.4
臨床検査技師国家資格	0.2
臨床検査技師免許	0.2
臨床工学技士	0.1
臨床工学技士国家資格	0.1
臨床工学技士免許	0.1
鍼灸按摩マッサージ指圧師	0.1
鍼灸師	0.2
	56.8

E2. 本校を卒業後、しばらく期間をおいて、改めて教育・職業訓練を受けたことがありますか。

5~10, 10以上に分離あり

☐	受けたことがある	7.9	(N=1151)	＜卒後1年目の対象者には聞かない＞
☐	受けたことがない	92.1		

E2-SQ. E2で「受けたことがある」と答えた方にうかがいます。

複数の経験があれば、主な教育・職業訓練のプログラムについてお答えください。

E2-SQ-1. そのプログラムを卒業・修了しましたか。

☐	卒業、あるいは学習を修了した	68.6	(N=86)
☐	中退、あるいは途中で断念した	5.8	
☐	学習継続中（通学中）	25.6	

E2-SQ-2. そのプログラムの学習期間をお答えください（西暦：年～ 西暦 年）

開始	(ブルダウン)	⇒	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	(N=89)
			1.1	2.2	1.1	2.2	3.4	7.9	5.6	18	18	22.5	18	

終了 (予定) (ブルダウン)	⇒	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	(N=89)
		1.1	1.1	1.1	5.6	4.5	5.6	18	15.7	23.6	13.5	4.5	3.4	2.2	

E2-SQ-3. そのプログラムをどこで受けましたか。

	%	
○ 大学院	4.6	(N=87)
○ 大学	11.5	
○ 短期大学	0.0	
○ 専門学校	25.3	
○ 公的な教育・職業訓練機関	24.1	
○ 上記の学校以外での通信教育	14.9	
○ その他 (具体的に)	19.5	

E2-SA-4. 専門分野

(ブルダウンリストから選択) ← EQ 分類

パソコン教室	0.1	(N=1883)	サービス	0.3	(N=1883)	2級土木施工管理技士取得講習	0.1	(N=1883)
パソナでの新卒未就職者支援	0.1		その他	0.4		インテリアリフォーム	0.1	
ハローワークが斡旋する専門学校	0.1		医療・保健	1.4		パソコンインストラクター	0.1	
ヒューマアカデミー	0.1		家政学・服飾	0.1		公務員試験対策の学校	0.1	
社内	0.1		教育・社会福祉	0.8		心理学	0.1	
会社の研修	0.1		工学、建築、環境	0.2		理学療法科	0.1	
視覚特別支援学校の高等部専攻科	0.1		社会科学、ビジネス、法律	0.3			99.7	
資格の学校	0.1		人文学、芸術、デザイン	0.3				
大学院の科目履修生	0.1		生命科学、理学、コンピュータ	0.4				
担任の先生、就職センターの方との面談	0.1		農業、農学、食品加工・製造、獣医・畜産	0.1				
短期教育セミナー	0.1		普通・一般教育プログラム	0.4				
店が出来る前他の大型店舗で研修を受けた。	0.1			95.5				
日建学院	0.1							
北大病院循環器内科心臓エコー室	0.1							
民間の職業訓練機関	0.1							
留学	0.1							
	99.2							

(4) 労働市場や職業訓練に関する設問群 (省略可能)

E3-1. 教育・職業訓練や学習の際にどのような困難がありましたか。あてはまるものすべて選んでください。(複数回答)

☐ 職場の理解やサポートを得られなかった	0.2	(N=1883)		
☐ 家族等の理解やサポートを得られなかった	0.1			
☐ 時間的制約	2.2			
☐ 学費などの経済面	1.9			
☐ 困難はなかった	1.5			
☐ その他 (具体的に)	0.3			

はじめに思っていた分野の仕事内容よりも困難な内容だったため。	0.1	(N=1883)
一か月で心エコーを覚えてほしいと医者からの要望で覚えに行ったが、自分の病院にはエコー経験者がなく、大変でした。	0.1	
会社から給料を貰ってるのに、仕事をしてないジレンマで。。。。	0.1	
金銭面	0.1	
就職の斡旋について、強いサポートが無かったこと。	0.1	
	99.7	

E3-2. 教育・職業訓練や学習を終えた後、就業状況はどのように変わったと思いますか。

以下の各設問について、次の5段階の中であてはまるものを1つ選んでください。

(就業経験者のみ)		高くなった			変わらない			低くなった			※就業経験の有無 =C2-0		
a	職場内での評価	5	14.3	4	27.3	3	57.1	2	0.0	1		1.3	(N=77)
b	能力を獲得した自信	5	22.8	4	40.5	3	36.7	2	0.0	1		0.0	(N=79)
c	昇進・昇給などの客観条件	5	10.3	4	14.1	3	71.8	2	2.6	1		1.3	(N=78)
d	その他(具体的に)	5	16.1	4	12.9	3	67.7	2	0.0	1		3.2	⇒

パソコンをある程度使えるようになった	0.1	(N=1883)
医者や看護師との会話が增えた。	0.1	
求人が多い	0.1	
現在講習中の為わからない	0.1	
国家資格の資格手当	0.1	
自信、仕事へのモチベーション	0.1	
就職活動にとっても役立った	0.1	
人脈が広がり、仲間ができた	0.1	
他職種にて現職とは無関係	0.1	
通学中のため結果はわかりません。	0.1	
転職時に役立った	0.1	
履歴書の書き方	0.1	
	99.4	

F. 仕事や生活に必要な能力について

F1. 仕事で必要とされ、また生活で活用する能力についてうかがいます。

F1-1. あなたの現在の仕事では、次のような知識・技能・能力をどの程度必要とされていますか。

以下の各設問について次の5段階の中であてはまるものを1つ選んでください。

F1-2. また、あなたは現在そのような知識・技能・能力をどの程度身につけていますか。

以下の各設問について次の5段階の中であてはまるものを1つ選んでください。

		(A) 現在の仕事での必要性										
		とても必要である					まったく必要でない					
基礎知識	a 高校卒業程度の基礎的な知識	5	32.9	4	24.8	3	32.2	2	6.3	1	3.7	N=1372
	b 高校卒業までの教科・科目別の基礎知識	5	21.1	4	26.7	3	35.2	2	11.4	1	5.6	N=1368
専門的な知識	c 職業に直接に関わる専門知識	5	55.5	4	23.6	3	11.3	2	4.2	1	5.4	N=1367
	d 職業の周辺領域の専門知識	5	45.5	4	26.1	3	15.4	2	6.1	1	6.9	N=1371
	e 専門分野以外の知識	5	24.2	4	26	3	33.2	2	10.4	1	6.3	N=1369
専門的な技能	f 職業に直接に関わる技能	5	40.2	4	24.4	3	20	2	7	1	8.4	N=1367
	g 専門分野で課題を発見し問題解決する能力	5	51.1	4	25.4	3	16.8	2	3.9	1	2.9	N=1367
基礎的、社会的な技能	h 仕事の段取りをデザインする技能	5	69.6	4	21.8	3	7	2	1.1	1	0.4	N=1367
	i 時間を管理する技能	5	62.9	4	23.3	3	11	2	1.7	1	1	N=1367
	j 職場の中でのチームワークやリーダーシップ	5	58.9	4	26.3	3	12.7	2	1.4	1	0.8	N=1367
	k 顧客や外部とのコミュニケーション	5	65	4	26.2	3	12.7	2	1.4	1	2.2	N=1369
	l マナー、倫理	5	50	4	19.2	3	16	2	5.5	1	4.3	N=1371
	m 生涯学び続ける力	5	55	4	26.7	3	14.6	2	2.9	1	1.3	N=1365

※就業経験の有無 C2-0= 有 ※就業経験の有無 C2-0= 無

		(B) 現在の獲得水準										
		十分 身についている					ほとんど身についていない					
基礎知識	a 高校卒業程度の基礎的な知識	5	15.6	4	28.8	3	43	2	9.5	1	3	N=1414
	b 高校卒業までの教科・科目別の基礎知識	5	7.1	4	27.3	3	47.4	2	14.1	1	4.1	N=1408
専門的な知識	c 職業に直接に関わる専門知識	5	8.3	4	39.9	3	39	2	8.8	1	4	N=1414
	d 職業の周辺領域の専門知識	5	5.7	4	31	3	43.2	2	14.6	1	5.5	N=1414
	e 専門分野以外の知識	5	4.1	4	20.5	3	43.3	2	22.3	1	9.9	N=1415
専門的な技能	f 職業に直接に関わる技能	5	8.2	4	30.3	3	41.6	2	12.7	1	7.2	N=1414
	g 専門分野で課題を発見し問題解決する能力	5	9.7	4	32.9	3	43.8	2	10	1	3.6	N=1412

基礎的，社会的な技能	h 仕事の段取りをデザインする技能	5	20.3	4	40.5	3	32	2	6.1	1	1.1	N=1415
	i 時間を管理する技能	5	20.4	4	36.5	3	33.2	2	8.5	1	1.5	N=1410
	j 職場の中でのチームワークやリーダーシップ	5	16.4	4	37.2	3	37.3	2	7.3	1	1.8	N=1408
	k 顧客や外部とのコミュニケーション	5	18.9	4	36	3	32.2	2	9	1	3.9	N=1413
	l マナー，倫理	5	15.3	4	36.3	3	36.6	2	8.7	1	3.1	N=1414
	m 生涯学び続ける力	5	16.8	4	31.8	3	39.2	2	8.6	1	3.4	N=1411

※就業経験の有無 C2-0= 有 ※就業経験の有無 C2-0= 無

		(B) 現在の生活での活用度										
		よく使っている					まったく使っていない					
基礎知識	a 高校卒業程度の基礎的な知識	5	9.5	4	26.2	3	33.3	2	19	1	11.9	N=42
	b 高校卒業までの教科・科目別の基礎知識	5	19.5	4	4.9	3	36.6	2	22	1	17.1	N=41
専門的な知識	c 職業に直接に関わる専門知識	5	16.7	4	9.5	3	33.3	2	21.4	1	19	N=42
	d 職業の周辺領域の専門知識	5	16.7	4	4.8	3	31	2	21.4	1	26.2	N=42
	e 専門分野以外の知識	5	7.1	4	4.8	3	28.6	2	33.3	1	26.2	N=42
専門的な技能	f 職業に直接に関わる技能	5	11.9	4	9.5	3	35.7	2	19	1	23.8	N=42
	g 専門分野で課題を発見し問題解決する能力	5	9.5	4	9.5	3	26.2	2	23.8	1	31	N=42
基礎的、社会的な技能	h 仕事の段取りをデザインする技能	5	16.7	4	16.7	3	33.3	2	14.3	1	19	N=42
	i 時間を管理する技能	5	23.8	4	9.5	3	28.6	2	14.3	1	23.8	N=42
	j 職場の中でのチームワークやリーダーシップ	5	14.3	4	19	3	28.6	2	19	1	19	N=42
	k 顧客や外部とのコミュニケーション	5	11.9	4	14.3	3	33.3	2	16.7	1	23.8	N=42
	l マナー、倫理	5	19	4	21.4	3	31	2	11.9	1	16.7	N=42
	m 生涯学び続ける力	5	23.8	4	11.9	3	33.3	2	9.5	1	21.4	N=42
※就業経験の有無 C2-0= 有 ※就業経験の有無 C2-0= 無												

※就業経験の有無 C2-0= 有 ※就業経験の有無 C2-0= 無

F2. F1で回答した能力をあなたはどの場面で身につけましたか。それぞれあてはまるものをすべて選んでください。
(複数回答)

		家庭や 小中高 (本校入学前)	本校在学中					本校卒業後		
			座学や理論 的な授業	実習・演習 などの授業	部活・ サークル活動	インターン シップなどの 学外実習	学外での アルバイト	職場での 経験や訓練	自主学習、 自己啓発	その他の 社会的な経験
a	基礎的な知識	56.3	24.1	18.5	3.2	2.7	9.5	24.7	14.1	12.5
b	専門的な知識	6.4	47.1	46.3	2.3	8.6	5	50.7	28.7	12.3
c	専門的な技能	5.7	27.4	47.1	2.5	8.3	4.6	54.6	24.7	11.7
d	基礎的・社会的な技能	30.7	16.3	22.9	6.8	7	22	53.1	53.1	29.5

F3. 全体として、あなたはいろいろな能力を、どこでどのくらい身につけたと思いますか。現在の能力を100%とした場合、次の3つの段階で、それぞれもっとも近いと思う数値を選んでください。

a 家庭や小中高校までに

(プルダウン :10% 単位)

b 本校の在学中に

(プルダウン :10% 単位)

c 本校を卒業後

(プルダウン :10% 単位)

→

“ 次のシートの表を入れてください (F3a, b, c のプルダウン表) ”

	a 家庭や小中高校までに	b 本校の在学中に	c 本校を卒業後
10%	13.3	11.4	11
20%	22	24.6	15.4
30%	23.5	36.2	19.8
40%	12.3	17.1	21.4
50%	14.3	7.5	18.9
60%	8	2	7.6
70%	4.6	0.9	4.4
80%	1.6	0.2	1.1
90%	0.4	0	0.1
100%		0.1	0.3
合計	100	100	100
n	1883	1883	1883

G. これまでの生活や家族について

G1. 入学前の経験についてうかがいます。

G1-1. 中学3年生の時のあなたの成績はどうでしたか。次の5段階の中であてはまるものを1つ選んでください。

	上の方					下の方					
あなたの成績	5	18.2	4	29.0	3	36.9	2	10.0	1	6.0	N=1443

G1-2-1. 高校で在籍した学科はどこですか。あてはまるものを1つ選んでください。

☐ 普通科	72.3	N=1448
☐ 専門学科	18.4	
☐ 総合学科	4.1	
☐ その他（具体的に）	4.8	
☐ 高校に在籍したことはない	0.3	

G1-2-2 あなたは高校卒業時までに高校卒業程度の学習内容を十分理解していましたか。次の5段階の中でもっとも近いものを1つ選んでください。

学習内容を十分理解 していた					学習内容はよく分 からないままだった					
5	9.7	4	31.4	3	43.5	2	11.9	1	3.5	N=1437

G1-3. 本校の入学前に他の機関等での高等教育での学習の経験がありますか。あてはまるものを1つ選んでください。
複数の機関で学習経験がある方は、主なもの1つについてお答えください。

☐ 短期大学	2.3	N=1431
☐ 専門学校	3.4	
☐ 高等専門学校	3.6	
☐ 大学	21.0	
☐ 大学院	0.6	
☐ その他（具体的に： ）	2.5	→ G1-4へ
☐ なし	67.0	

G1-3-SQ 専門分野は何ですか。もっともあてはまるものを1つ選んでください。

専門分野：	(ブルダウン リストから選択)	N=1883 ← EQ 分類	サービス	医療・ 保健	家政学 ・服飾	教育・社 会福祉	工学・ 建築・ 環境	社会科学 ・ビジネス ・法律	人文学・ 芸術・ デザイン	生命科学 ・理学・ コンピュータ	農業、 農学、 食品加工・ 製造、 獣医・ 畜産	普通・ 一般教育 プログラム	その他
			0.3	1.9	0.3	2.3	2.3	4.4	3.6	2.9	0.3	3.2	3.1

G1-4. 本校の入学前に仕事に就いた経験がありますか。

☐ 1. ある	→ G1-4-SQ へ	20.3	N=1438
☐ 2. なし		79.7	

G1-4-SQ. 就業していた期間の合計： (ブルダウンリストから選択) →

6ヶ月未満	0.5	N=1592
6ヶ月～1年未満	1.0	
1年	1.0	
2年	2.8	
3年	1.5	
4年	1.7	
5年	1.6	
6～10年未満	1.3	
10年以上	4.1	

G1-5. 本校への志願時に、他にも進学を希望していた学校がありましたか。あてはまるものをすべて選んでください。

☐ 本校が第一志望	57.1	N=1536
☐ 他の専門学校	13.8	
☐ 短期大学	1.8	
☐ 四年制大学	9.0	
☐ その他（具体的に： ）	1.0	

(3) 就職指導や、職業・キャリア意識の形成に関する設問群

G1-6. 本校への志願時に、他にも進学を希望していた学科・分野がありましたか。あてはまるものを1つ選んでください。

☐ 本校で卒業した学科・分野が第一志望	86.5	N=1424
☐ 他の学科・分野が第一志望	6.5	
☐ 学科・分野に特別なこだわりはなかった	7.0	

G1-7. 現在のような職業・経歴は、本校に入学した頃の目標と同じでしたか。あてはまるものを1つ選んでください。

☐ 入学の頃からの目標と同じである	43.8	N=1437
☐ 目標と同じではないが、かなり近い経験してきた	27.1	
☐ 目標とはだいぶ違う経験をしてきた	15.5	
☐ いろいろ考えていたが、目標は決められずにいた	8.4	
☐ 特に将来については考えていなかった	5.2	

G2. 本校在学中から現在までの生活についてうかがいます。

G2-1. 本校入学にあたって、ご家族の経済的な状況はどうでしたか。以下の選択肢の中からもっともあてはまるものを1つ選んでください。

☐ 経済的に好きな進学先を選ぶ状況だった	41.4	N=1436
☐ なるべく学費などがかからない進路を選ぶ必要があった	32.7	
☐ 経済的には進学は厳しかった	14.9	
☐ 家族の経済状況はよく知らなかった	11.0	

G2-2. 本校在学中の学費等はどのように支払いましたか。以下の選択肢の中からあてはまるものをすべて選んでください。
(複数回答)

☐ 主に保護者の負担で	53.7	N=1776
☐ 主にアルバイトで	9.5	
☐ 公的な奨学金や教育ローンで	16.7	
☐ 本校の学費支援や奨学金で	7.1	
☐ その他（具体的に： ）	7.3	

G2-3. あなたは、これまでどこにお住まいでしたか。本校入学前と現在の状況について、それぞれあてはまるものを1つ選んでください。

入学前は本校から公共交通機関で

☐ 30分以内のところ（同じ都道府県内）	20.0	N=284
☐ 30分以内のところ（別の都道府県）	0.0	N=0
☐ 1時間程度のところ（同じ都道府県内）	0.0	N=0
☐ 1時間程度のところ（別の都道府県）	24.6	N=353
☐ 2時間以上のところ（同じ都道府県内）	41.8	N=601
☐ 2時間以上のところ（別の都道府県）	13.8	N=199

現在は本校から公共交通機関で

☐ 30分以内のところ（同じ都道府県内）	20.0	N=276
☐ 30分以内のところ（別の都道府県）	0.0	N=0
☐ 1時間程度のところ（同じ都道府県内）	0.0	N=0
☐ 1時間程度のところ（別の都道府県）	23.0	N=323
☐ 2時間以上のところ（同じ都道府県内）	41.4	N=581
☐ 2時間以上のところ（別の都道府県）	15.9	N=223

G2-4. あなたは、これまで誰と生活していましたか。本校在学中と現在の状況について、それぞれあてはまるものをすべて選んでください。(複数回答)

本校在学中

☐ 配偶者・パートナー	4.6	N=86
☐ 親	53.7	N=1011
☐ 子ども	1.6	N=31
☐ 一人で	16.9	N=319
☐ その他（具体的に： ）	4.7	N=88

現在

☐ 配偶者・パートナー	21.6	N=416
☐ 親	36.1	N=679
☐ 子ども	8.1	N=152
☐ 一人で	19.4	N=365
☐ その他（具体的に： ）	2.6	N=49

G2-5. あなたは現在、普段の生活で、次のような行動を積極的にしていますか。

次の各設問の活動について、次の5段階の中でもっともあてはまるものを1つ選んでください。

		積極的にしている										全くしていない	
a	ニュースの視聴(テレビ、ラジオ、インターネット等)	5	36.0	4	29.1	3	25.0	2	8.0	1	1.9		N=1442
b	新聞を読む	5	10.9	4	12.6	3	18.7	2	18.5	1	39.3		N=1441
c	ボランティア活動	5	3.2	4	3.6	3	11.0	2	14.6	1	67.6		N=1438
d	選挙の投票	5	36.6	4	15.8	3	17.9	2	11.5	1	18.2		N=1438
e	友人との交流	5	33.4	4	28.4	3	26.3	2	8.9	1	3.0		N=1444
f	趣味やスポーツの活動	5	31.8	4	26.0	3	25.3	2	11.0	1	5.9		N=1433
g	地域活動(自治会・町内会・PTA 活動を含む)	5	3.8	4	5.0	3	12.2	2	14.0	1	65.0		N=1439

H. これまでの経験を総合的にふりかえって

H1. 本校での在学中の経験は、次の各設問についてどれくらい重要でしたか。次の5段階の中であてはまるものを1つ選んでください。

		とても重要である										全く重要でない	
a	就職先を見つける上で	5	38.0	4	19.6	3	13.0	2	3.3	1	2.8		N=1451
b	仕事に必要な基礎を身につける上で	5	37.0	4	22.0	3	14.0	2	2.5	1	1.4		N=1449
c	仕事で一人前になる上で	5	26.3	4	29.4	3	30.9	2	9.7	1	3.7		N=1450
d	仕事に必要な学習を続けていく上で	5	25.0	4	26.7	3	35.0	2	9.7	1	4.1		N=1445
e	人格を形成していく上で	5	35.8	4	32.7	3	24.4	2	5.0	1	2.1		N=1449

H2. もし仮に高校卒業後の進路選択をやり直せるとすれば、どのような進路を選びますか。以下の選択肢の中からあてはまるものをすべて選んでください。(複数回答)

☐	同じように本校を選びたい	36.6	→	H2-SQ	N=1883
☐	他の専門学校に進学したい	12.2	→	H2-SQ	N=1883
☐	短期大学に進学したい	1.8	→	H2-SQ	N=1883
☐	四年制大学に進学したい	34.9	→	H2-SQ	N=1883
☐	就職、自営など仕事をしたい	4.7			N=1883
☐	その他()	3.3			

H2-SQ. どのような専門分野を選びますか。

☐	本校で学んだのと同じ専門分野がよい	54.9	N=1323
☐	本校で学んだこととは違うが、現在の仕事に合うような専門分野がよい	16.2	
☐	本校で学んだことや今の仕事とは関係しない、別の専門分野がよい	24.1	
☐	よくわからない	4.8	

H3. 現在でも本校の同窓生と交流がありますか。次の5段階の中であてはまるものを1つ選んでください。

頻繁にある		月に1回程度		年に1回程度		ごくまれに		全くない		N=1455
5	14.0	4	24.4	3	28.1	2	19.2	1	14.3	

H4. 総合的に振り返ってみて、本校に対する満足度はどうでしたか。

次の5段階の中であてはまるものを1つ選んでください。

とても満足している								とても不満である		N=1457
5	31.2	4	41.0	3	20.0	2	6.3	1	1.5	

以上でアンケート調査は終わりです。ご協力ありがとうございました。

今後、本校から様々な情報提供をしたいと思っています。

連絡先を教えてください。入力をお願いします。

お教えいただいた連絡先は、本校に関するお知らせ等以外で使用することはございません。

お名前	
都道府県	(47都道府県プルダウンリスト)
住所	
電話番号	
メールアドレス	
郵便番号	

平成 29 年度

専修学校による地域産業中核的人材養成事業
成果報告書 Vol.16

専門学校の学修成果と IR
—高等職業教育タスクフォースによる卒業生調査再分析—

国立大学法人 九州大学（事業責任者 吉本 圭一）

発行年月日 2018 年 2 月 26 日

発行・編集 吉 本 圭 一
〒 812-8581 福岡市東区箱崎 6-19-1
九州大学大学院人間環境学研究院教育学部門
電話・FAX 092-642-4165

印刷・製本 城島印刷株式会社
〒 810-0012 福岡市中央区白金 2-9-6
電話 092-531-7102 FAX 092-524-4411
